
ケロロ軍曹&銀魂 新訳 世界を超えた大騒動 であります！

白黒仮面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケロロ軍曹&銀魂 新訳 世界を超えた大騒動 であります！

【Nコード】

N5804R

【作者名】

白黒仮面

【あらすじ】

いつもの日向家に落ちてきた謎の物体！ 謎の物体は突然ケロン人に似た生命体に……。

その謎の生命体の脅威の力で日向家に居たみんなは銀魂の世界に！！『ケロロ軍曹』と『銀魂』の登場キャラクターでお送りするなんでもありのどたばたコメディ！！

タイトルでだいたい分かると思いますが『ケロロ軍曹&銀魂 世界を超えた大騒動！！』を元にしたリメイク版です。

リメイク版ですがかなり変更点が多いので新作だと思って楽しんで

下さい。

基本不定期更新。

プロローグ

遠方には一面黒の絵の具で全て塗り潰したような真っ黒な空間の中に、幾千、幾万もの小さな星が瞬くのが上下左右、三百六十度に渡って観察できる。

近くには石ころなど一つも浮いておらず、現地での天体観測にこれほど向いている場所は存在しないだろうとさえ思える。

ここはそんな宇宙の何処か。

そこで丸いバリアに身を護られた謎の宇宙人が宇宙空間で静止しながら、そのバリアの中であるものを眺めていた。

『今までの経験と事前の調査で該当するポイントはこここのこれだけなんだけど……以前変化無し、か……』

何かを観察しながら謎の宇宙人が残念そうに呟いていると何の前触れも無しに、すぐ近くの宇宙空間で物凄く強い光源が発生した。

まるで幾重もの光を凝縮したような光を放つその光源は、太陽など相手にもならないくらいに強過ぎて直視出来ず、謎の宇宙人は手で眼を覆って光を遮った。

『直で見るのは初めてだけど、なんて凄まじい光……!!』

謎の宇宙人がまた呟くと、先程突然発生した強い光源の放つ光が突然弱くなって強い光の光源である小さな光の玉が直視できるようになった。

『よし、捕まえるわよー!』

謎の宇宙人はそれを捕まえようとするがその前に、その小さな光の玉は逃げるように何処かに行ってしまった。

『あっ!』

謎の宇宙人が言葉を漏らしたその時にはすでに光の玉は、流れ星の如く、もう見えなくなってしまった。

『……どうしよう』

謎の宇宙人がこれから起こる何かを心配し、ポツリと呟いた言葉
が広い広い宇宙空間に無常に響いた。

プロローグ（後書き）

ども、白黒仮面です。

はい、これがさっき言ってたリメイク版です。今日はお詫びも兼ねてあと二話投稿させて頂きます。

いつもの風景

桜の木々にはぶつくりと膨らんだ蕾がいくつもぶら下がっていて、花開く時を今か今かと待っている。

空高く昇る太陽が優しい日差しを降り注ぐが、それでもまだまだ冬の寒さが残るある春の日の事。

奥東京市某所（おくとくしやまところ）にある、『日向』と書かれた表札のある一見ごく普通の一軒家。その家の一室。

そこには人間よりも遥かに小さく、丸い頭に小さな体の明らかに人間の姿じゃない姿をした、緑色と黒色の何かが二匹居てくつろいでいた。

明るい緑色の方は鼻歌交じりでニッパーでガンプラのパーツを切り取っていて、黒色の方は寝転がって漫画を読みながらポテチを食べている。

緑色の何か、何を隠そう彼こそはガマ星雲第五十八番惑星 宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊隊長、ケロロ軍曹である。

地球人と比べるととても小さな体をしたケロン人と言う蛙激似の宇宙人で、赤い星マークの付いた耳（？）付きの黄色い帽子を赤い星マークが額に来るように被り、大きな真ん丸おめめと小さな口が特徴の頭部、白いお腹には隊長の証、ケロンスターと言う黄色い星マークを付けた胴体。

地球侵略の前準備として日向家に侵入したところ、なんやかんやあって捕らえられ、以来捕虜兼家族として家事・手伝いをして、地球侵略を目標にしたまま、ガンプラやインターネット、アニメなどの地球の遊びに更けちゃってます。

黒色の何かはケロロが隊長のケロロ小隊に属するタママ二等兵。

体の色は黒色でケロロと同じ帽子に左右逆色の若葉マークを付け、大きなおめめと可愛らしい顔が特徴。

ケロン人の幼年体で顔の白い部分が多く、まだ尻尾が生えている。甘い物が大好きな二重人格。非常に嫉妬深い性格で愛する軍曹さんに好意を持つ輩は誰であれ嫉妬するのだ。

そんな宇宙人達がくつろいでいるところにボタンと、それはもうドアが壊れそうなくらい凄惨な音がするくらいの強さでドアをこじ開け、部屋に侵入してきたのは赤い髪をツインテールにした気の強そうな女の子。

彼女はこの家、日向家の長女、日向ひなた 夏美なつみ。

前述の通り赤い髪をツインテールにしており、瞳の色は茶色。

吉祥学園中等部の二年生で成績優秀でスポーツ万能、母親の影響がおまけに容姿も good!!

仕事で忙しい母親に代わり、家事を切盛りするしつかりもののお姉さんです。

「コラア、ボケガエル!!」

夏美が眉間にしわを寄せたまま第一声でそんな言葉を叫ぶと

「ゲ、ゲロ? こりは、こりは夏美殿。ど、どうしたんですか?」

ケロロはちよつとだけ動揺しながらも夏美に用件を伺ってみた。

本当は何故彼女がここに来たのか、大方予想は付いているのだが。

「アンタ、私が取っておいたプリン食べたでしょ!!」

やはりそれだったか。そうじゃないかと思っただよね。

冷蔵庫の奥に、大事そうに冷やしてあったプリン。

美味しそうだったからうっかり食べちゃったけど、夏美殿のプリンでありましたか……。

「プ、プリン? 何の事やら?」

しかしケロロは白を切る。

「惚けないで！ 冬樹は食べてないって言ってるんだから！」

そうなれば必然的にケロロが食べた事になる、それが夏美の思考回路のようです。

「すぐそうやって我輩のせいにするー！」

食べた自分が悪いのは分かっているのだが、夏美の考えには不満だらけのようで必死になって反論するケロロ。

「じゃあ誰が食べたって言うの?!」

「クルルとか有り得るではありませんよう!？」

疑わしい眼でケロロを見つめ続ける夏美に対し、怯む事無くケロロは若干困惑しながらもつとも有り得る人物の名前を出したりして、二人は顔を寄せてうゝ、といがみ合う。

「あゝ、また始まったですうゝ」とタママは面倒な事になる前にその場を立ち去ろうとする。

そこで突然、

ドゴオオオオオオオン!!!

と下手したら『オ』と『!』があと数百個付くかも知れないくらいに物凄い音がすると同時に途轍とつもない大きな揺れが日向家を襲った。

ケロロの部屋にもその揺れはしっかり届いていて、そのあまりに大きな揺れに三人は体勢を崩し倒れてしまった。

「な、何、今の揺れ!？」

流石の夏美も慌てながら呟いたところに

「おじさま、大変です！」

そう言いながら黄色いショートの髪の子高生が入ってきた。

この少女はアングル・モアと言うヒト型の宇宙人。

今は黄色いショートの髪で黄土色の瞳の何処にでも居そうな可愛い女子高生の姿だが、本来の姿になると白い髪に紫と白を基調とした衣装に身を包み、穴の開いたマントを装着し、片方の端には無数

のクレーターの開いた小惑星のようなおもり、もう一方の端には三日月のような装飾がされた細長い棒状の武器、ルシファースピアで星をも砕くと言う、物凄い人物なのだ。

「おお、モア殿！ 先程の物凄い音と揺れはいったい何だったんでありますか？」

「日向家の庭に正体不明の何かが落ちて来たみたいなんです！！ てゆーか、緊急事態？」

焦りながらも落ち着いて状況を簡単に説明した後、四字熟語を付け足すモアちゃん。

「我輩達も早速現場に急行するであります！！」

「了解ですう！！」

「あ、ちよつと待ちなさいよ！！」

場所は日向家のリビング。パツと見ごく普通のリビングだが、先程の衝撃で多少ものが落ちてしまっている。

割れ物が一つも落ちなかったのが不幸中の幸いだろう。

「凄い衝撃でしたね……」

「うん、流石に家が壊れちゃうかなと思ったよ」

リビングでは水色の髪の一見可愛い女の子と紺色の髪の男子の二人がソファに座ったまま先程の衝撃について話をしていた。

二人とも口でそう言っている割にはそこまで驚いてないようである。

水色の髪の可愛い女の子は西澤 桃華。

二重人格で普段はおしとやかな優しい『表』の人格だが、もう一つの『裏』の人格は相当の乱暴者。

前述の通り水色の髪で瞳は紫色。

髪形は側頭部に尖って伸びている左右二つずつ生えた髪の毛が特徴的で人格が『裏』になるとこの髪の毛がシャキーン！と尖ります。

世界経済の半分を占めると言う西澤グループの令嬢で超が何個も付くほどの大金持ち。

家である西澤邸にはタママが居候して御世話になっている。

そして紺色の髪の毛の子は日向 冬樹^{ふゆき}。

この日向家の長男で夏美の弟。夏美と同じ吉祥学園に通う一年生。姉の夏美とは打って変わって運動が苦手で成績もまあ良くないんですが、興味対象におけるもの。冬樹君の場合はオカルトに対する観察力、洞察力はもうかなり凄いです。

紺色の瞳と髪をしていて髪にはピョンと立って際立つアホ毛があります。

桃華が一方的に（？）想いを寄せる相手であり、ケロロの良き理解者です。

冬樹と桃華が驚いていたところに夏美とケロロ、タママ、モアがドタドタと顔を出すと

「夏美さ〜ん！」

「皆、御無事でござるか？」

天井裏から黒色の忍び装束の女の子と青いケロン人が降りて来て、みんなに声を掛ける。

忍び装束の女の子は東谷 小雪^{こゆき}。

青緑色の髪と瞳をしていて、髪を一本結びにして大きなえんじ色のリボンで結んでいる。

吉祥学園に通い、夏美とは同じクラスです。

前は忍野村^{しののへ}と言う忍者の村で暮らしていたくの一です。

青い宇宙人はケロロ小隊に属するドロロ兵長。

体の色は青色で、目が水色。頭巾と口当てを装着し、頭巾には赤色の、お腹には黄色の手裏剣マークがある。小刀を常備している。

ケロロ小隊の中で一番しっかりしていて心優しい性格で、ケロン軍のアサシンのトップに立ったほどの凄い実力を持つ。

が、とても影が薄く、幼少期に様々なトラウマ（そのほとんどにケロロが関係している）を多く持つ悲しき戦士である。

「ところで軍曹、さっきの凄い衝撃は何だったの？」

「モア殿が言うには庭に正体不明の何かが落ちて来たそうで、我輩達はそれを確認しに来たんですよ」

「基地のコンピュータでも、落ちて来たものがなんだったのかよく分からなかったんです……」

「へえ……」

呑気にこんな会話をしてから、そこに居た皆はリビングの窓を開けて庭に顔を出す。

土煙が舞う庭のある場所から黒煙が空に向かってもうもうと立ち昇っているのが見つかった。

『落ちて来たもの』が何なのか分からない以上、迂闊には動けないのでまずは慎重に『落ちて来たもの』を観察しようとする。

……あれ？ 確か、煙が昇っているあの場所って……。

その煙が昇る位置にあるものがあつたのを思い出した夏美が注意深くそこを観察すると、上からの物凄い力で潰されてぐしゃぐしゃになった無残な姿を晒す赤いテントらしきものを見つけ「ギロロのテントがぺっちゃんこ……」と声を漏らす。

ギロロとはケロロ小隊に属するギロロ伍長の事である。

体の色は赤でケロロと帽子と似た形の茶色の帽子にはドクロマークが付いていて目付きが鋭く、顔の左側に目の上を通る古傷がある。

左肩からベルトを纏掛けにしている、この中にはこっそり想いを

寄せる夏美さんの写真が……

「そ、それ以上は……言う、な……」

あ、あれ、何処かからか声が聞こえませんでしたか？ ……気のせいかな。

お固く真面目な性格で融通が利きませんがケロロ小隊の中で一番軍人らしい男です。

砂埃が大量に舞う庭を引き続き冬樹達が落ちて来たものを確認しようとしているとちらと何かが光るのを冬樹が発見して「何だろう、あれ……？」と口にする。「え？」「なににな？」と口々に皆は拳つて冬樹が見つけた何か見ようとする。

土煙がだいぶ晴れてきたので他の皆にも冬樹が見つけた何かが見えたりと見えた。

それは、光の玉だった。

光り輝く球状のそれは野球ボールとサッカーボールの中間ぐらいの大きさで、自然に少しずつ赤、橙……と虹色に変化させるそれは、不思議な魔力でもあるかのように皆の視線が吸い寄せられた。

今まで不可思議な事をいろいろと体験した冬樹達も、見た事が無い不思議な物体。

「何でありましょうか、あれ？」

「さあ……？」

宇宙人であるケロロ達ですら、知らないものようだった。

そこで潰されたテントから小さな赤い腕が苦しそうにピクピク震えながら真っ直ぐ上に伸びてくるとパタリと倒れて、静かに佇む光の玉に触れる。

それに反応するかのように光の玉から一際強い光が溢れ出した。凄まじい光が溢れ出る光の玉は少しだけ宙に浮くと、あつと言った間に変形して生き物のような形になる。

そして生き物のような形をした光に輪郭が生まれ、目や口、角やトゲトゲのある頭、小さな指が五本あるそれぞれ二本の腕と足を持

った生き物のような姿になると力無くパタリと地面に倒れてしまっ
た。

ケロロ達は全員、その現象に息を呑んだ。

謎の赤子

パソコンのキーボードのキーをカタカタと叩くぐるぐる眼鏡を掛けた黄色いケロン人と前回のあれが原因で満身創痍になり、包帯でぐるぐる巻きのミイラにされた赤いケロン人、ギロロの二人を加えたみんなが日向家のリビングに集まる。

二つあるソファの片方の上にはついさっきまで光の玉だった何かが一すーと安らかな寝息を立てて眠っていた。

「でクルル曹長、なにか分かったでありますか？」

ケロロはパソコンを操作するぐるぐる眼鏡を掛けた黄色いケロン人に声を掛ける。

この黄色い体でぐるぐる眼鏡を掛けるケロン人がクルル曹長。

一時期はケロン軍本部にも所属していた頃もあったと言う程の超一流のハッカーであり、用途の分からない妙なものから高度な技術を要する兵器までほとんど何でも作れる発明家でもあります。

体の色は黄色で渦巻きマークが付いたスカルキャップのような帽子に耳と思われる部分ヘッドフォンのようなものを付けてぐるぐる眼鏡を掛けていて、お腹には額の渦巻きマークと同じマークが付いている。

ケロロ小隊作戦通信参謀にしてかなりの切れ者なのだが、陰気・陰湿・陰性・陰険・陰鬱な性格のいや々な奴。

「急かすなよ、隊長。まだソイツが生き物だって事くらいしか分かってねーんだからな……」

クルルは自身のパソコンのディスプレイを見て、キーボードのキーを高速で叩きながらケロロに言葉を返す。

「へえ、そうなんだ……」

クルルの言葉を聞いて謎の生き物を見つめながら冬樹が感心しな

がらそんな相槌を打つ。

先程まで光の玉だった何かが、赤いケロン人の、ギロ口の手が触れた途端に変化を起こしてこんな姿になったのだ。

それが生き物である事だけでもこの短時間で判明させる辺り、流石はクルル曹長と言ったところである。

あれは明らかに伍長が触れた事で変化が起きたみたいだったけど……どうなんだろう？

この子もやっぱり軍曹達と同じ宇宙人だよな？

もしそうだとしたら、軍曹と同じように親しくなれるかな？

……でも、あのクルルにも分からない事ってどう言う事だろう？などと冬樹はこの子に関するいろいろな疑問が湧き、それと同時に期待も膨らませる。

ちなみに、その子の容姿はと言うと体の色は白色とギロ口よりも若干暗い赤色で構成されていて、垂れ下がる耳(?)のようなものと大きなおめめに小さな口が可愛らしく付いた大きな丸い頭部、その頭部に何故か上手く釣り合う小さい指が生えた手足のある小さな胴体。

体格はケロ口達ケロン人に似てなくも無いが、サイを思わせる大きな角に加えて左右対称に二本ずつトゲトゲが頭部に生えているなどケロ口達よりも全体的にトゲトゲした印象が強く、体の大きさはケロ口達と同じである。

そして額にはこの世のものとは思えないくらいに透き通っていて形の整った美しい六角形の水晶が付いていた。

その場に居たまんながじっくりそれを観察していると、すーすーと安らかな寝息を立てていたそれがゆっくりとくりくりのおめめを開けて綺麗な青い瞳で周りを見渡しケロ口達の顔を見てから

「あゝ!!!」

と無邪気な笑顔で赤ん坊のような第一声を放った。

「あゝ!! うゝ!!」

その後も変わらず赤ん坊のような声を発するので

「ど、どうやら赤子のようでござるな……」

ドロロが戸惑いながらそう呟いた。

光の玉が突然、変化を起こしたモノだけあって、人間やケロン人のように高い知能を有する生き物なのか、大人か子どもかどうかも全く謎だった訳で、この子どもの反応に戸惑いを覚えるのも無理は無い。

「ちよつとトゲトゲしてるけど、これはこれで可愛いじゃない!」

「そうですねー!」

夏美と小雪がこの謎の赤ん坊の事について素直な感想を口にして
いると

「だゝ!」

謎の赤ん坊は手を伸ばして何かを要求するような素振りを見せる
ので

「かまつて欲しいのかな?」

と冬樹は推測すると

「俺に任せろ!」

自分がなんとかしてやる、とギロロが名乗りを上げた。

(ここで赤ん坊を上手くあやせるところを見せれば、夏美の好感度
も上がる筈……!)

こんな本音は勿論言える訳無いので胸の奥の奥の奥にこっそり仕
舞い込み

「いないいない……、ばあっ!!」

そう言うつと凄い表情で、近いたとえで言うなら自分の顔で福笑い
をするような感じでこの子どもをあやそうとする。

しかし、その時のギロロの表情は赤ん坊をあやせるような顔では
なく、それは他のみんなが「あゝあ、やっちゃったよ……」とか「
こりゃ泣くな……」と心の中で呟き、泣かれた時の為に耳を塞いで
おくぐらい、普通の赤ちゃんにとっては怖い表情だった。

……のだが、聞こえてきたのは

「キヤハハハハハハ！」

謎の赤ん坊の無邪気な笑い声。

完璧に予想を反する赤子の満面の笑みに、ギロロと赤子以外のみんなに氷河期の如く凍て付く寒さが襲い掛かった。

「ど、どうだ、夏美!？」

少しだけ嬉しそうに、ギロロが夏美に声を掛ける。

「す、すごいわねー」

夏美は凍ったまま、固い口調で感想を口にする。

その夏美の言葉があつたギロロの凄い顔で笑った謎の赤ん坊に向けて発したのか、それとも本当にギロロに発したのかは定かではないが……。

「たかいたかーい！」と言って謎の赤ん坊の体を高く持ち上げたり、いないいない、ばあっ！」とか言ってさっきのギロロのように変な顔を作ったりして、しばらく謎の赤ん坊をあやす一行。

その度に謎の赤ん坊は純粹な満面の笑みを見せて場を和ませる。

そんな中、急に謎の赤ん坊が不快な表情を露にして

「う、うええええええん!!」

と大きな声を出して泣き始めた。

「どうしたんでしょうか？」

「お腹が空いたんじゃないのかな？」

桃華の言葉に小雪が予想を口にすると

「では早速、ミルクを作るであります！」

ケロロが意気揚々と宣言した。

謎の赤ん坊が泣き続ける中、沸騰させたお湯に幼児用のミルクの粉を溶かし、白くなった液体を哺乳瓶に入れて、氷水の入った桶で

冷まして、自分の肌に付けて人肌の温度くらいまで冷えたのを確認して

「完成でありまーす!!!」

出来上がったミルクの入った哺乳瓶を高く掲げるケロロ。

早速ケロロはその哺乳瓶の乳首に見立てた飲み口をミルクを作る間にもらされた時の為のオムツを付けた謎の赤ん坊の口に持っていく。

と、謎の赤ん坊は泣き止んで哺乳瓶の飲み口に口を当て、「ごくごく」とミルクを飲み始めた。

そして、謎の赤ん坊が哺乳瓶に入ったミルクを全て飲み干すと

「で、飲み終えた後は……」

ケロロが謎の赤ん坊を抱いたまま、謎の赤ん坊の背中を摩って「ゲブ……」と謎の赤ん坊にゲップをさせた。

「あゝ!!! うゝ!!!」

「おーおー、まだ欲しいんでありまぢゆか？ まだたくさんあるからたつぷりお飲み」

謎の赤ん坊はまだ欲しいと言うように哺乳瓶に手を伸ばすので、

ケロロはそう言って謎の赤ん坊をあやすと

「ああ、ちよつと、私にもやらせなさいよ!!」

と夏美がやりたいと名乗りを上げるので「僕も僕も!」「せ、拙者も……」と他の皆さんもやりたいと言いだした。

「ああ、はいはい。順番でありますよ、順番」

そうしてみんなで謎の赤ん坊にミルクをやって

「ゲブ」

最後に謎の赤ん坊にゲップをさせる。

「ゲ、ゲロ」

「凄いね」……」

思わず声を漏らすケロロと冬樹。

何がそんなに凄いのかと言うと、基地から取って来た粉で作ったミルクを謎の赤ん坊が全て飲み干してしまったのだ。

店の倉庫で何個も高積みされるくらい残っていた大量のミルクを全て、である。

「かなり大食らいのようですねー、てゆーか暴飲暴食？」

モアがその様について能天気一言告げる。

謎の赤ん坊はと言うと空腹が満たされて満足したのか、くあくとか伸をするとすやすやと眠り始めた。

それから皆がそれぞれリビングで寛いでいると、テレビでは何かのアニメが始まった。

「ゲロ……？ こりは……」

「何のアニメですかあ？」

ケロロとタママが初めて見るアニメに興味津津の様子で、声を揃える。

謎の赤ん坊も興味があるみたいでもっと見ようとハイハイしながらテレビに近づく。

「げっ、『銀魂』！ 冬樹！ 早くチャンネル変えて！」

「う、うん……」

相変わらず嫌いだな、姉ちゃん……。なんて事を心の中で呟きながら、テレビのリモコンを手に持つ冬樹。

「ああ、ちよつと冬樹殿！ 我輩ちよつとだけコレ見たいであります！」

冬樹にケロロが懇願するも

「どうしても見たいんならDVDとか借りてくれれば？」

「みんなで見たいんですありますよっ！」

「駄々をこねても駄目！！」

「ゲロオ〜……」

夏美にケロ口の願い事が受理される事はやっぱり無かった。

「ホラ冬樹、早くチャンネル変えてよ。その子に変な影響が出るかも知れないじゃない」

そんなケロ口は放って置いてリモコンの近くに居る冬樹に夏美は命令する。

あんな小さな子がじっと見続ける番組を急に変えるのはどうかな……。

と正直に疑問に思いつつも姉の言い分も十分に理解できるので、苦笑しながらテレビに向けてリモコンのボタンを押してチャンネルを変える冬樹。

テレビに映る画面は冬樹が押したチャンネルの番組に変わ……らなかつた。

確かにリモコンのボタンを押した筈。なのにそのままだったのだ。変わらないテレビの画面を見て「あれっ？」と冬樹が素っ頓狂な声を上げるのを聞いて「どうしたんですか？」と桃華が問うと

「それが、リモコンが効かないんだよ……」

と冬樹は返答する。勿論、その間もリモコンのボタンを何度も押してチャンネルが変わらないのを確認している。

「故障かしら？」

「よく分かんない……」

夏美の疑問に冬樹も首を傾げる。

「あの〜……夏美殿お〜……このまま見るっつー選択肢は〜……」
「無いわよ」

この流れに乗じてケロ口は揉み手をしながらこのままテレビを見ようとせがんでみたものの、夏美にあっさり拒否されてしまった。

肩を落とすケロ口は「ゲロゲロリンチョ……」と小さい声で呟く。
「もう、夏美殿のケチー！ つつーかそんなに見せたくないのなら

あの子動かせばいいじゃんっー!!」

「あ、それもそっか」

ケロロが口を尖らせて吐いた愚痴を聞いて素直にその通りだと感じた夏美は謎の赤ん坊に近付き、別の場所に移すべく謎の赤ん坊の体を持ち上げようとする。

が、夏美が謎の赤ん坊の体を持ち上げようとしても何故か謎の赤ん坊の体は持ち上がらなかった。

「んー！ んー！」

思い切り力を入れて持ち上げようとしても謎の赤ん坊の体は少しも浮かない。

なら引き摺ってでも動かすまで！ と必死で謎の赤ん坊の体を動かそうとするが謎の赤ん坊の体はうんともすんとも言わない。まるで体重が数十倍にまで重くなったかのように。

さっきみんなでミルク飲ませた時はなんとも無かったのになんてよー！

「夏美殿……それ、ギャグ？」

「違うわよ！」

ケロロの発言にいらつと来た夏美が怒声を放つと

「手を貸しましょうかー？」

夏美の様子を見て助けが必要かと思った小雪が問う。

「良いの小雪ちゃん？」

「はい！ 夏美さんの為ならばお安い御用です！」

こんな小さな子どもを動かすのにわざわざ力を貸しても良いの？ と気になった夏美だったが力を貸すと当の本人の小雪が言うので

小雪の好意に甘える事にした。

「じゃあお願いね！ 行くわよ、せーのっ！！！」

夏美と小雪が二人で一緒に謎の赤子を持ち上げようとするが、やはり謎の赤子の体は少しも浮かなかった。

今度は二人で謎の赤子の体を動かそうとするが、予想通りと言つか案の定と言つか、謎の赤子の体はうんともすんとも言わなかった。

「ハア、本当に重たいですねー……」

「でしよ？ でもなんでかしら……」

それになんだかさつき一人で持ち上げようとした時よりも重くなってるような……。

少しだけ気にはなったものの、それよりもこうなった以上どうしてもテレビを消さないといけないわね……と考えた夏美は

「私と小雪ちゃんはこの子動かすから、ボケガエルはテレビの電源を切って頂戴」

「え〜!？」

「当番増やされない？」

「そ、それだけは勘弁していただきたい!!」

得意の当番増やす攻撃でケロロにテレビの電源を消させる事にした。

慌てたケロロがピコピコと変わった足音を立てながらテレビに近付くとテレビの電源ボタンを押す。

普通ならテレビの画面は消える筈のだがやっぱりどう言う訳かテレビの画面は消えない。

「あり〜？」

「ちよつと、ちゃんと電源切ったの!？」

「確かに電源のスイッチは押した筈なんですありますが……」

「本当に切ったんでしょうね？」

さつきからこのアニメを見たいとケロロが言っていたのもあって、夏美は本当に彼がテレビの電源を切ったのかと疑念を抱いた。

「そんなに我輩を疑うのなら自分でやれば良かったんでありましょうが!」

ケロロ軍曹はと言うと辛い家事手伝いを増やすと脅され、真面目にテレビの電源のスイッチを押した筈なのになんで消えないのかと文句を言われ、踏んだり蹴ったり、泣きっ面に蜂ともう散々。

彼がプンスカプンスカ怒りながら夏美に反論するのは当然だろう。「はいはい、分かった分かった」

夏美はそんなケロロの反論を適当にあしらいながら、テレビから伸びるコードの先端にあるコンセントに刺さったままのプラグに近

付きそれを引き抜く。

動力源を失ったテレビは普通なら画面が消える筈。がしかしそれでも今まで通りテレビの画面は消えなかった。

あれ？

……抜いたよね私？

うん。

ちゃんと抜けてるよね？

うん。

じゃあなんで消えないの？

あまりに不可解な現象に思わず一切言葉に出さないうでジェスチャーだけでやりとりする皆さん。

「え、ちよつと、なんでええええ?!」

「クルル、何か分かった？」

何故テレビが映り続けるのか、何故あの子の体が動かせなくなるくらい重くなったのか。

みんなが慌てふためく中、この二つの謎を解明できるであろうクルルに冬樹が訊いてみたのだが

「ん、まだ何も……」

パソコンに向かい合ったままキーボードのキーをひたすら叩くクルルから帰って来たのは期待外れな返答。

「そうかあ………ん？」

原因解明にはならずハアと溜め息を吐いてちよつぴり落胆する冬樹の目にふと留まったのはあの謎の赤子の額の水晶。

あれ……光ってる？

パツと見どうかはよく分からなかったのだが、ぼんやりと、それでも確かに額の水晶が光っているように冬樹には見えた。

『銀時イイイイ!!!!!!』

『させるかアアアア!!!!!!』

刀を手に持つゴリラのような男と何故かナース姿をした髪の長い綺麗な女性が天然パーマがかかった銀色の髪の男に向かって行く。

『見つけたアアアア!!!!!!』

続けて木陰に身を潜めていた可愛らしい朱色の髪のチャイナ服の女の子と薙刀を手に持って着物を着てパツと見綺麗な美女が向かってゆく。

鬼のような物凄い形相をする四人に囲まれた銀髪天然パーマの男は慌てて足がふらつく。

すると何の前触れも無く突然銀髪天然パーマの男の体が沈んだ。

ふらついた男の足が普通の地面に見せかけた地面を踏んで底の深い穴に、簡単に言えば落とし穴に落ちたのだ。

しかしその落とし穴、ただの落とし穴ではなく穴の底に竹槍が敷き詰められていて落ちればまさに読んだ文字通りの蜂の巣になってしまうと言う悪戯のレベルを遥かに超えた恐ろしいものだったのだ。穴の途中で咄嗟に手足を伸ばして穴の壁に掴まりなんとか蜂の巣になるだけは回避した銀髪天然パーマの男。

その銀髪天然パーマの男が居る落とし穴の上では先程銀髪天然パーマの男に襲い掛かった四人が刀、薙刀、蹴りでそれぞれを攻撃しあっていた。

それぞれを攻撃しあった四人の体はバランスを崩し、万有引力の法則に従って下へと落ちて行く。

……底に竹槍を敷き詰められた落とし穴の、落ちまいと頑張っていた銀髪天然パーマの男の真上に。

後は言わずもがな。

『ぎゃああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!』

落とし穴からは苦痛の叫びが響き渡った……。

と言うアニメのシーンが日向家リビングにあるテレビの画面に映っていた。

「ブアツハハハハハハハ！！！！！！！！！！」

テレビの前で腹を抱えて笑う緑と黒の宇宙人二名。

「は、腹痛え〜！！　ハハハハハハ！！！！！！」

「さ、最高ですう〜！！！！」

ケロロ達が腹を抱えて大笑いする様子を見てなんだかんだ言っておいて結局見てしまった夏美がハアと溜め息を吐く。

そうしてアニメが終わると誰も何もしてないのにブツンとテレビの電源が切れてしまった。

「あ、切れた」

夏美はリモコンでテレビの電源のオンオフを繰り返したり、チャンネルを変更してみたりして異常が続いているかどうか一通り確認する。

けれどもどこにも異常は無く、テレビの電源を消したらちゃんとテレビの画面も消え、チャンネルを変更すれば映っているテレビの番組は変わった。

「結局……あれはなんだったのかしら？」

「「「さあ〜？」」「」」

先程までの異常の原因を考えてみるがケロロ達の小さな頭では分かる訳も無く、それよりもさつき見たアニメの事で彼等の頭はいっぱいだった為特に気にしない事にした。

「あ、そ〜だ！　クルル曹長、あの世界へ行けるようにして欲しいであります！」

「遊びに行くつもりか貴様ア！！！！！！」

ケロロが突然そんなアイデアを思い付くとギロロから注意を受け「いやでもさあ〜、ひよつとしたら向こうの世界で侵略に役立つ事あるかも知れないっしょ？」

「侵略は許しません！！！！」

「ゲロ……」

地球侵略に関係してきたら夏美に怒られ。

このような、いつもと変わらない日向家でのやりとりをバツクに、テレビの前で座ったまま『銀魂』に感動したのかピクリとも動かない謎の赤ん坊。

突如、その赤ん坊の額の水晶が光り出した。

「ゲ、ゲロオオオオ！！！！？ ま、マブシー！！！！！」
「な、なんだ！？」

謎の赤ん坊の額の水晶から溢れ出した光は瞬く間に日向家のリビングを全て飲み込む。

もはや何処に誰が居るのか分からないくらい激しい光に満ちたりビング。

すぐにその光は消えたのだが光が消えたりビングにケロロ小隊、冬樹達、謎の赤ん坊の姿は何処にも無かった。

謎の赤子（後書き）

はい、これで三話分です。

ここまででも結構変わっている部分が多いですね。

ちなみにこれの元となった『ケロロ軍曹&銀魂 世界を超えた大騒動！』は削除しませんので好きに楽しんで下さい。

最後に付け加えるなら今回、出て来た銀魂のシーンは分かる方がほとんどだと思いますがザキさんが酷い目にあつたアレです。アニメ『銀魂』の紅桜編の後のあのお話です。

ファーストコンタクト（前書き）

ここからほとんど変わって予想外の展開になる可能性大です。ご注意下さい。

……ここから、ってほとんど全部になるんじゃない？

ファーストコンタクト

ここは『銀魂』世界のかぶき町。今日も空飛ぶ船が忙しく青い空を進む。

「ん〜!! 今日も平和だなー」

眼鏡の青年がうんと伸びをする。

この眼鏡の青年は志村 新八。容姿は地味で普通、取り得の無い眼鏡……あ、いえ青年です。

「……あの天パ、まだ寝てんのかな？」

でかでかと『万事屋銀ちゃん』と書かれた大きな看板のある建物の二階を見上げてそう呟く新八。

彼がゆっくりと万事屋に通ずる階段を上がっていると

「うわああああ……………」

といくつもの悲鳴が聞こえてきた後にドゴオオオオオオン!!

と屋根が壊れる音と何かが床に被弾し爆発したような大きな音と衝撃がした。

「な、何、今の!?!」

先程の衝撃で少しだけずれた眼鏡を元の位置に戻して、新八は慌てて万事屋の中に入り、黒いブーツがきちつと揃えてある玄関で草履を脱ぎ捨てリビングに移動する。

そのリビングの中は砂埃が大量に舞っていて、天井にはぽっかりと大きな穴まで空いている。

「銀さ ん! 大丈夫ですかー!?!」

心配しなくともそう簡単にくたばるたまではないのだが、一応念の為にここ万事屋の家主の名を呼ぶ。

「あいたたたた……………」

「みんな、無事か?」

「なんとか……」

「全く、酷い目に遭ったであります！」

「でもさっきのはいったい何だったんですかねえ？」

「……？」

だが帰って来たのは家主の面倒臭そうな声ではなく複数の人の声。

「ところでここは……？ あ……」

目が合ったのは銀髪天然パーマの死んだ魚のような眼ではなくぴよんと立ったアホ毛が特徴の紺色の髪の子だった。

しばらく黙って見詰め合った後

「……どうも」

「い、いえ……」

無言は嫌だったのか、とりあえず一言挨拶した。

万事屋に落ちて来た少年少女達と蛙のような生き物達を床に正座で座らせ、彼等と向かい合うようにソファに座る新八と若干傷だらけになっている銀髪天然パーマの男。

何を隠そう銀髪天然パーマの彼こそは『銀魂』の主人公、万事屋銀ちゃんこと坂田さかた銀時ぎんときその人である！

白髪にも見える銀髪の天然パーマ、死んだ魚のような眼、柄に洞爺湖と彫られた木刀がトレードのマークの侍。

普段はダメな大人そのものだが、いざと言う時は頼りになる人です。

黒の上下に青い波のような模様が少しだけ入った白い着流しを身に纏い、右腕は袖に通さないので着流しの右袖はだらしなくぶらりとぶら下がっている。

「ったくなんだってんだ。空から人が降って来た？」

少女だけじゃ飽き足らず少年、果ては蛙の宇宙人って何、お前、ふざけてんの？

降って来るのはシートだけで充分だっつーの。
それもゆっくりふわふわじゃなくてひゅーどかんで、銀さん殺す気？

何処から落ちて来たんだテメー等？　ゴリアテか、それともラユタかコノヤロー」

くりんくりんの天然パーマを手で掻きながらここに居合わせる相手の事など微塵も気に留めずに愚痴を零す銀さんに

「銀さん、少し黙ってください。滅びの呪文唱えますよ」

冷静な新八は一言注意して銀さんの話を断ち切る。

(いや、まさかあれからすぐに我輩の言葉通りになるとは、まったく思いも寄らなかったであります！)

(これはこれで結果オーライですなぁー！！)

(ちょっとアンタ達！！　どうしてくれるのよ、こんな事に巻き込んで！！)

(はいはい。文句は我輩じゃなくてあの子に言ってね)

(ムカつくー！！)

(まあまあ姉ちゃん……)

床に正座で座らせられる少年少女と愉快な蛙達……そう『ケロ口軍曹』の面子は銀さん達に聞かれないよう小さな声で会話する。

「いろいろ訊きたい事はあるんですけど……まずは自己紹介でもしましょうか。僕は志村　新八です、よろしく」

「万事屋銀ちゃんこと坂田　銀時です。よろしくー」

ケロ口達はアニメで一度見ているとは言っても、銀さん達から見ればケロ口達は初対面。なので新八と銀さんが自己紹介すると

「初めまして、日向　冬樹です」

「冬樹の姉の日向　夏美です」

「西澤　桃華と言います」

「東谷　小雪ですー！」

「アングル・モアです！ てゆーか、一期一会？」

「ケロロ小隊隊長、ケロロ軍曹であります！」

「タママ二等兵ですう！」

「ギロロ伍長だ」

「クルル曹長だ、よろしくなあ。くつくつく！」

「ドロロ兵長でござる」

自分達もそれぞれ簡潔に自己紹介して

「あと、何処から来たのかは分からないんですけど、私達が世話している赤ん坊です」

最後にモアがこっちの世界に来てからずっとすーすーと安らかな寝息を立てて眠ったまま謎の赤ん坊を抱っこしながら紹介する。

「見た事無い天人あまんとばかりですね……」

一通り自己紹介が終わったところで新八がみんなの第一印象を口に出すと

「……『あまんと』？」

ケロロが初めて耳にする言葉に興味を示した。

「え？」

「オイオイ、冗談キツイぜ。オメー自体がまさしく天人あまんとみたいな形なりしてるくせによ」

ケロロ達が別の世界から来た事を知らない銀さん達『この世界に住む者』にとつては『天人あまんと』は誰もが知ってる当然の言葉。

その為その言葉を知らない事が信じられないようだ。

「いや、だからその『あまんと』って」

銀さんの言葉を聞いてもケロロはピンと来なかったみたいだが、冬樹はどうやらすぐに理解できたようで

(軍曹！)

(何でありますか冬樹殿？)

(ひよっとしたら、この世界では宇宙人の事を『あまんと』って呼ぶのかも知れないよ)

(え、そうなの？)

(たぶんだけど……)

ケロロにこっそり天人あまんとの意味を教えると

「ああ、そうそうそう！ 『あまんと』でありましたなあ、我輩も、アッハッハ！」

何故かケロロは勿論知ってました、みたいな態度をとり始めた。その何処か余所余所しい態度に「変な奴……」と言葉を漏らす銀さん。

「で、皆さんはなんでまた空から……」

これから新八が本題に入ろうとしたその時

「ただいまヨー」

「ワンッ！」

「あ、神楽ちゃん帰って来た」

誰かが万事屋に帰って来たのか、ガラガラと玄関の引き戸を開ける音の後、玄関からこんな声が聞こえてきた為本題は後回しに。

「……『ワンッ！』って、犬か何か飼ってるんですか？」

誰かが帰って来た時に聞こえた鳴き声になった桃華が質問すると銀さんが面倒臭そうに「まあな」と返答すると新八が「普通の犬じゃないですけどね」と苦笑しながら付け足した。

『普通の』……？ じゃあどんな犬なんだろう……。とケロロ達ケロロメンバー全員が想像していると玄関から

「……誰アルかお前等？」

やたら無礼な態度を取る、一見可愛らしい赤いチャイナ服の女の子と

「ワンッ！」

白い巨大犬、それも犬なんて呼べるほどのサイズではなく子ども象と同じくらいのも、明らかに大き過ぎる犬が万事屋のリビングの中に入ってきた。

チャイナ服の女の子とは、『銀魂』のヒロインである神楽ちゃんかくらその人です。

ジャンプ史上初のゲロを吐いたヒロインとして有名です。
朱色の髪を両サイドで纏めてぼんぼりで団子状にした髪型に、青くて大きな瞳が実に可愛らしいのですがかなりストリートにモノを言う毒舌家。

実は夜兎族と言う絶滅寸前の戦闘種族の一人で戦闘能力は本当凄いです。

ちなみに白い巨大犬はペットの定春さだはる（ ）です。

「神楽ちゃん、初対面の人にそう言う口の利き方はダメだよ」

初対面でもいきなり毒舌を吐く神楽に注意する新八。

「……お、大きい……」

「てゅーか突然変異？」

「確かに普通の犬じゃないでござるな……」

それに対するケロロ達は白い巨大犬、定春にもう夢中。

ケロロ達が見ていたアニメのお話には出て来なかったから驚くのは無理も無いだろう。

「何を食ったらこんなデカくなるんだ……？」

「一食ドッグフード七袋ネ」

ギロロの疑問に神楽は定春の餌と量を正直に教えたと夏美が驚きのあまり「な、七袋……」と言葉を漏らした。

普通の犬ならドッグフード一袋で最低でも一週間くらいは持ちそうなのにそれを一食でしかも七袋とは。

「何処にそんなお金があるんですかあ？」

「何処にもそんな金無エよ。それにあのデカ犬に加えて胃拡張娘まで居るおかげでウチはいつつもジリ貧だっつーの」

万事屋の内部を見る限り金目のものなんて見当たらない。何処を見てもふつーの家具、ふつーの家のリビングである。

そんな家で飼われている定春の食費は何処から来てるのか、タママが訊いてみると銀さんからはそのような回答が帰って来た。

定春君がデカ犬だとして、胃拡張娘って……神楽ちゃんの事……
だよな？ 実際どれくらい食べるのかな……？

「ところでそろそろ自己紹介した方が良いアルか？」

定春の事で会話が弾んだが、自分の自己紹介をまだしてない事が
気になった神楽がそう言う、「そう言えば神楽ちゃんだけまだして
ませんでしたね」「好きにしな」と他の万事屋の面々は言うので

「『銀魂』のヒロイン、かぶき町の女王神楽様とは私の事ネ！

で、こっちがペットの定春！ 定春ー、みんなに挨拶するヨロシ
「アンツ！」

神楽が胸を張って自分とペットの定春の紹介をすると冬樹達も銀
さん達同様神楽に自己紹介する。

「ところで何かあったアルか？ 天井に穴空いてるし、やけに散ら
かっているし」

「それはな、コイツ等がな、昼寝していた俺のところ落ちて来た
んだよ。それもピンポイントだよ」

「それは運が悪かったアルナ」

冬樹達の自己紹介後、銀さんが神楽に愚痴に近い説明をして、こ
の場に居る全員が何が起きた把握したところで

「それじゃあそろそろ答えてもらいましょうか。君達は何処から、
何しにここに来たんですか？」

新八がまるで警察の取調べみたいな言葉を告げて本題に入った。

「……え、えーつと……」「……」

どう答えるか戸惑う『ケロロ軍曹』メンバー。

この世界の、『銀魂』のアニメをこことは違う別の世界で見た後、
あの子どもの額の水晶が強く光り、光が収まった頃にはこの世界の
空に居て万事屋に落ちたなんて夢みたい話をして、彼等が信じて
くれるとは到底思えなかった。

かと言って嘘は吐きたくないし、かなり特殊なこの状況下、一人
でも自分達の事を理解してくれる味方が居た方があとと有利。

なので

「あ、あの、じ、実は僕達、別の世界から来たんです」

自分達が何処から来たのか、ケロ口達の中から代表して冬樹が本当の事を打ち明けた。

「……は？」

冬樹が何を言っているのか分からない万事屋トリオ、目を点にする。

「僕達、別の世界で皆さんの、『銀魂』のアニメを見た後、突然あの子の額の水晶が強く光って、光が収まったと思ったらこの世界の万事屋の上空に居たんです」

耳を疑うようなとんでもない話に銀さん達は少しの間絶句して

「……あゝあゝあゝ。ナルホドナルホド。君達は夢を見てるんだよ。きつとそうだ、そうに違いない」

銀さんが自分に言い聞かせるようにそう言うので

「本当なんです！ 私達もなんでこんな事になってるのかよく分かんなくて……！」

「はいはい、落ち着いて君。寝言は寝てから言いなさい。神楽ア、この人達精神科に連れて行ってやりなさい」

「寝言じゃないんです！！」

「ああ、分かってる分かってる。要はアレでしょ？ 頑張ればかめはめ波とかほんかい正解とか死ぬ気の炎とか本気で出せると思っていただけのと同じでしょ？

若気の至りって奴でしょ？ 俺もよくやったよ……ウンウン。

いい加減大人になりなさい」

「そんな幼稚な事と同じじゃないわよ！」

「てめっ、ジャンプの漫画は幼稚じゃねエ！ 小さなお子様から大人の大人まで魅了する凄いもんだよ！」

第一、お兄さん魅了されてるからね！？ 良い歳こいてまだ少年ジャンプ読んでるからね！？」

聞く耳を持たない銀さんに桃華、小雪、夏美の順に反論するがいつの間にか銀さんの論点がすっかり変わっているので、なんつか話

がずれてるような……とケロ口達は心の中で呟いていた。

「でも銀さん。もし冬樹君の話が本当なら天人あまんとの事を知らなかったのも説明が付きますよ」

「何処か人里離れた山奥にでも住んでたんだろ。未だに人力で火を起こすくらいのだ田舎とか……」

新八の予想も銀さんは屁理屈を並べて抵抗するので「今時そんな場所無えよ」と新八がツツコミを入れた。

……でも、銀さんの態度はある程度当然なんだよな……。

銀さんの態度を見て冬樹は考える。

向こうもいつも通り過ごしてきて、それでも信じられないような話を聞かされたのだ。

そもそも別の世界から来たなんて自分達も信じられないような絵空事をいつたい誰が信じろと言うのか。

クルルならちゃんと説明できそうだけど、一向に分からないの一点張りだし……。

……あ、そうだ。

そこである事を思い付いた冬樹は

「軍曹、アンチバリア使える？」

「ゲロ？ そんなもん使つてどうするつもりでありますか？」

「良いから使つてよ！」

ケロ口にアンチバリアを使うよう指示。

「なんですか、『アンチバリア』って？」

「口で言うより実際に見てもらった方が早いです」

「てゆーか一目瞭然？」

新八が初めて聞く言葉に興味を持つと冬樹はそう返答しモアが一言。

そう、『銀魂』の世界にはまだ無いであろう技術を見せれば銀さん達も信頼するのでは、と彼は考えたのだ。

「……じゃ、いくでありますよ」

そんな彼の魂胆など理解してないケロ口が合図して耳(?)の付

いた帽子の額にある星の形をした階級章を手でクルリと回しカチツとスイッチが入った音がする。

すると銀さん、新八、神楽の視界から一瞬にしてケロロの姿が消えて見えなくなった。

「「えっ!?!」」

「ケロロさんの姿が消えた!?!」

「何処行ったアルカ!?!」

初めて見る現象に驚きを隠せない新八と神楽。

「ずっとそこに居ますよ。軍曹、アンチバリア切って!」

冬樹の言葉に合わせてアンチバリアを切ったのか、ケロロの姿が銀さん達にもまた見えるようになった。

「す、凄いですね!」

「これが我輩達の世界の宇宙の技術であります!」

新八に褒められエツヘンと胸を張って自分の事のように自分達の世界の宇宙の技術を誇るケロロだが

「源外のジジイがまたなんか作って、コイツ等実験体にもしたんじゃないね?」

「あ、その可能性があったか」

けれども銀さんが吐いた言葉を聞いて神楽は実にあっさりと平静を取り戻した。

この面倒くさがり屋、かなりの強敵である。

(本当、なんでこんな事になっちゃったんだろう……)

確かこつちに来る前はみんなで『銀魂』のアニメを見た軍曹が『銀魂』の世界に行きたいって言い出したら伍長や姉ちゃんに怒られて、いつもとそれほど違いは無かったような……)

銀さん達の反応を見てハアと溜め息を吐いた冬樹が徐おそにこちらに来る前の出来事を思い出しているとある不可解な現象を思い出す。

(……: そう言えば姉ちゃんがあの子に『銀魂』のアニメを見させないようにする度に起きたあの異変……)。

チャンネルを変えても番組が変わらなかつたり、電源を消しても、

テレビのプラグを抜いても画面が消えなかったり、あの子の体が動かせなかったのはひょっとして……

あの子が『銀魂』のアニメを見たいと『強く想った』から……？
あの時の気になった現象にそのような予想をすると冬樹は視線をゆつくりとモアの腕の中で眠り続ける謎の赤ん坊に移す。

（あの時は特に気にしてなかったけど、確かあの時もあの子の額の水晶は光っていた……）。

そしてその後、軍曹の言葉、いや『想い』通りにこの世界に来た事と言い、あの子の額の水晶の力って想いを、願いを叶えるような力なのかも……）

謎の赤ん坊の額の水晶の力について自分なりの仮説を立て

「モアちゃん、その子貸して！」

「え、は、はいっ！」

その仮説が真か否かを確認すべく、モアが抱く謎の赤ん坊を自分の下に寄せその額の水晶の上に手をかざす。

揺れでも感じ取ったのか眠っていた謎の赤ん坊が眼を覚まし、じつと動かずに目の前に居る冬樹を見つめる。

「冬樹殿……？」

「何するつもりアルカ？」

ケロ口と神楽が冬樹の行動に興味を記し声を掛けると

「ちよつと試してみたいんだ、この子の額の水晶の力を。」

これから僕はこの水晶の力でこの部屋を元の状態に戻そうと思う「冬樹は真剣な表情でこれからやる試みの内容を告げた。

もし実際に冬樹の言葉通りになれば一瞬で天井の穴は塞がり、壊れたソファやテーブル、木片などがまだ若干散らかっているりピングも元通り綺麗になるであろう。

「何バカげた事言ってるアルかお前。そんな夢みたいなさ出来る訳無えだろ」

そんな事出来っこない、と神楽は容赦無く正論を口にし

「……面白え。やってもらおうじゃねーの？」

銀さんはやれるものならやってみると挑発する。

だが冬樹は神楽や銀さんの言葉など気にも留めず、先程言った事を止めるような姿勢は決して見せなかった。

前例はあるものの、あくまでそれは冬樹の推測に過ぎない為、確実に来ると言う保障は何処にも無い。

出来なかったからと言って失うものなど特に何も無いのだが、一度公言した以上笑いにされるのは勘弁したい。

それに折角『銀魂』の世界に来たのだ。主人公である彼等の信頼はぜひとも欲しいところ。

深呼吸して呼吸を整え、眼を閉じ精神を集中する。

万事屋のリビングを元の状態に戻したい、と心の中で何度も何度も強く強く念じる。

「元に戻れっ！！！！」

声に出してその想いを叫ぶ冬樹。

がしかし、何も起きませんでした。

謎の赤ん坊の額の水晶は全く反応を示さず、万事屋のリビングは無音の状態が続く。

「……くくっ」

「『元に戻れっ！！！！』って、冬樹君、恥つずかしいー」

何故か本来冬樹の仲間である筈のクルルが最初に笑い出し、つられて銀さんが冬樹をからかう。

あれだけ自信に満ち溢れた様子で堂々と口にしたただけあって、クルルと銀さんの態度は精神的に相当効いた冬樹君。

無限に湧いて来る羞恥心が顔を真っ赤に染め頭からは湯気を出す。

そんな冬樹君を慕う桃華ちゃんはと言うと冬樹君をからかう二人の態度にちよっぴりイラツと来たのか、側頭部の角みたいに左右二本ずつ計四本生えている髪の毛のうち一本がシャキーンと尖っちゃって、少しだけ『裏』が出て来てます。

（でも、なんで何も起きないんだろ？ 他にも何か条件みたいな

のがあるのかな……？)

頭をぶんぶんと勢い良く振って羞恥心を振り払い、今の失敗の原因を冷静に考える冬樹。

そうだとしても、ここで退く訳にもいかない。退けない。

「戻れエエエエエエ！……！！！」

信じて欲しい。ただそれだけを胸に強く抱いて叫ぶ冬樹。

直後、謎の赤ん坊の額の水晶がパーと物凄い光を放つとその光は瞬く間に万事屋のリビングを飲み込んだ。

凄まじい光に眼が眩み、全員眼を閉じ、腕や手を前に出し光を遮る。そして光が収まった頃合を見計らってゆつくりと眼を開ける。

皆、自分の眼に飛び込んで来た景色に己の眼を疑い絶句する。

天井に空いていた大きな穴が見事に塞がり、木片が四散し散らかっていたリビングは掃除した後のように綺麗になり、テーブルやソファは壊れたと言うのが嘘のように修復され、そのテーブルとソファの配置までもが元通りになっていた。

彼等が眼を閉じた時間はほんの数秒。

天井、テーブル、ソファの壊れた箇所を修復し元の配置に戻すにはあまりに短過ぎる。

これは夢だと疑った神楽は何故か自分のではなく隣に居た新八の頬を思い切りつねる。

「痛い痛い痛い痛い！ ちょっと神楽ちゃん、痛いつてば！！ なんて僕の頬！？」

新八の口からは神楽につねられ、痛覚で感じた素直な痛みを口に
する。

まだ銀さん達は何が起きたのか理解できなかったのか、少しだけ
間を空けて

「スツゲエエエエエエエ！！！！！！！！ 何アルか今の、一瞬
で全部元通りネ！！！！！」

「……嘘」

神楽や銀さんは抑え切れない想いを声にして露にした。

ファーストコンタクト（後書き）

やっぱり、白黒仮面です。いつも『どうも』じゃあ飽きられると思
ってちょっとだけ変更してみました。

やっぱり結構変わるもんだな。

お話の内容も結構変わってますよね。

結構つついかもつりメイク前の面影まったく残ってないですけど。
次回は今回の続きになります。

住む場所とお金と名前（前書き）

一週間ごとの更新が続いてますが、別に一週間の意識してる訳じゃないからね？

偶然作業ペースが一週間とカブってるだけだからね！？

住む場所とお金と名前

「あの、とりあえず座ってください」

ある程度気持ちが落ち着いた新八が冬樹達にソファに座らせる。

先程謎の赤ん坊の水晶の力により元に戻ったこのソファにはサイズ、人数の関係上全員座る事は少し無理があるので冬樹達がソファに座り、ケロロ達はソファの周りに集合する。

「さつきは疑ってスイマセンでした」

冬樹達がソファに座つたのを確認するや否や開口一番謝罪の言葉を告げて深々と頭を下げる新八。

「銀ちゃんも謝れヨ、疑ってゴメンなさいって」

「テメーは何最初から信じてましたみたいな態度とってんだ」

「私は最初っから冬樹達の事信じてたアル！」

「嘔吐くなお前。オメーもコイツ等の事疑ってただろーが!!」

「銀ちゃんよりも私は信じてたネ!!」

神楽が最初から信じていたみたいなき感じにしようとするのを銀さんは見逃さずにツツコミを入れる。

「オメー等二人ともさっさと謝れや!!」

新八が一番謝るべき二人に謝れと声を荒げて怒鳴ると

「まあまあ、新八さん……」

疑うのも仕方ないと心得ていた冬樹が新八を宥める。

「目の前であんなもん見せられちまったからな……。テメー等の事は信じてやるよ」

面倒臭がりな銀さんがしぶしぶながらもようやく折れて冬樹達の言う事を信じると告げると

「……となると、さつきコイツがやってみせた姿を消したのってやっぱりテメー等の世界の技術なのか？」

「正しくは僕達の世界の『宇宙の』技術ですけどね。軍曹も言っていましたけど」

ケロロが少し前に実演してくれた『アンチバリア』の事について銀さんが質問するので冬樹が詳しく説明する。

「それより皆さんは『銀魂』のアニメを見たんですよね？ いったいどのくらいこの世界の事について詳しいんですか？」

「僕は前にママから話は聞いていたんですけど、アニメは今日一回見ただけでほとんど何も分からないんです……」

新八が興味本位で質問して話題を変えると冬樹はその質問に申し訳無さそうに回答する。

「私も」「我輩も」「右に同じです」「俺も」「拙者も」などなどケロロ達も同じような返事するので「そ、そうですか……」と新八はちよっぴり残念そうに相槌を打つ。

「でっ!?!? でっ!?!? あの子の水晶の力ってどんな力アルカ!?!?」
そんな事より! と謎の赤ん坊の額の水晶の力について興味津々の神楽が具体的にどのような力なのかと尋ねると

「実は僕達も詳しい事はまだ……」。
ただ、僕達が元居た世界で放送されていた『銀魂』のアニメをこの子に見せないようにする度にチャンネルが変わらなくなったり画面が消えなくなったりとテレビがおかしくなっただんです。

その時、額の水晶も微妙に光ってたし、この子が『銀魂』のアニメを見たいって思ったからおかしくなっただんじゃないかなー、って……。

その後、軍曹がこっちに行きたいと言い出した後に実際にここに来ちゃった事と言い、ひよっとしたらあの額の水晶の力は願いを叶えるような力なのかなって思っただんです」

最後に「あくまで僕の予想ですけど……」と重要な点を付け加えて冬樹は立て続けに来た質問に考えていた事を元居た世界で起きた事とそれから推測できた事を包み隠さず全部教える事で答えた。

「なんだあ? ザックリ言つと、このガキの額の水晶はブーチの崩玉へちまみてーなもんなのか?」

「た、たぶん……」

いろんな意味でザックリとした銀さんの例え話に冬樹が戸惑いながら返答すると「そう言うたとは止めて下さい」と新八はツッコミを入れて

「でも仮に冬樹君の言う通りだとして、悪用された時マズインじゃないんですか？」

と真面目な表情で重要な問題点を上げて問う。

この謎の赤ん坊の額の水晶の力は世界を超えてしまうほど凄い。そんな力を悪用なんてされたらただでは済まないのは眼に見えている。

「だからこの事は出来るだけ秘密にして欲しいんです。

僕達も皆さんに迷惑を掛けるのはできるだけ避けたいですから…

…。

ややこしくなるから軍曹達も僕達の世界と同じようにバレないようになしてね」

冬樹はお互いの為にそのような願いをするのだが

「イチゴ牛乳とコーヒ―牛乳とチョコレートパフェ十年分んんんん！！！！！！」

「じゃあ私は酢昆布と定春の餌と食事を一生分、あとおつきな胸が欲しいアルうううう！！！！！！」

「一生分ってマジかお前！？ だったら俺は千年分だ！！！！！！」

「それなら私は一万年分ネ！！！！！！」

冬樹の願い事などお構いなしに謎の赤ん坊の額の水晶の力を使って己の願いを叶えようと躍起になる銀さんと神楽が謎の赤ん坊を奪い合う。

「話聞いてたのかオメー等！？ 何奪い合ってたアアアア！！！！！！」

新八が奪い合いをする二人を叱り付けていると

「我輩はまだ発売されてないガンプリアアア！！！！！！」

謎の赤ん坊の奪い合いにケロロが地球侵略と言う大きな目標も忘れて参戦し二人が三人になった。

万事屋銀ちゃんの下にある『スナックお登勢』^{とせ}。
銀さん達は冬樹達の事と謎の赤ん坊の額の水晶の力によって別世界から来た事をスナックお登勢のママと従業員二名に教えて、冬樹達にその三人の事を紹介する。

スナックお登勢のママ、お登勢さん。

先程怒声で叫びながら万事屋に入ってきたしわくちやの老婆の正体です。

お登勢と言う名前は源氏名で本名は寺田^{てらだ}綾乃^{あやの}と言います。

スナックお登勢の従業員二名。うち一人はキャサリン。

カタコトで喋る猫耳の付いた団地妻です。

元々は泥棒だったんですが今は改心した模様。容姿同様に性格も最悪。

もう一人がたまさん。

見た目は綺麗な女性の人間そっくりに作られた機械人形^{からくり}で人間で耳に当たる部分に耳あてにアンテナが付いたような機械のパーツが付いている。

機械ゆえに整った綺麗な顔、結った緑色の髪にネジの簪を挿す姿は元より献身的な態度は店に来るお客さんに大好評です。

「この赤ん坊の額の水晶の力で別の世界からこの世界へ来た、ねえ

……」

お登勢さんが冬樹達の自己紹介及び銀さん達の詳しい状況説明を聞いて疑わしく言葉にすると

「ソナナ夢ミタイナ話ガ信ジラレル訳ネーダロ！！ 嘔吐キ八泥棒ノ始マリッテ母チャンニ教ワラナカタノカオマエ等！！」

「お前が言うかヨ元泥棒」

「『元』ダカライイダロ小娘！」

「ほとんど同じアル」

全く信じようとしなないキヤサリンが言いたい事好きに言ってくれるので神楽が毒舌で突っ込んだ。

「申し訳ありませんが、いくら銀時様達と言えどその話は信じられません」

銀さん達に信頼を寄せるたまさんでさえもどうやら信じられないようだ。

「まあそうでしょうね……」

ついさっきまで自分達も信じられなかっただけあって信じられないキヤサリンとたまさんに同情する気持ちが沸く新八。

彼等の会話を煙草を吸いながら見ていたお登勢さんがうんざりしたのか、ハアと溜め息と一緒に煙草の煙を吐き出すと

「ゴチャゴチャ言い合っても埒が明かないね。」

この際その子達の言う事が嘘か本当かなんてどうだって良いじゃないのさ。

それよりアンタ達、これからどうするつもりだい？」

そう言って今の話を終わらせて話題を変える。

「……あ」「……」

突然の話題変更に加えてお登勢さんが口にした事を全く考慮してなかった冬樹達は素っ頓狂な声を漏らす。

「泊まる家とかお金とか、ちゃんとあるのかい？」

「そ、それは……その……」

こちらの世界には来たばかりで泊まる家などこっちの世界にある筈もないしお金も勿論無い。

かと言って銀さん達に迷惑を掛けたくないのもあってお登勢さんの質問の返答に困る冬樹達。

だがその様が答えを言っているようでその事を察したお登勢さんが「……無いみたいだね」と呟くと「は、はい……」と冬樹達は恥ずかしながらも素直に返答する。

「家ならあのガキの水晶の力で作れば良いじゃねーか」

「お金も同じようにすれば問題無いネ」

「アンタ等秘密って言葉の意味分かってるんですか？ そんな事したら秘密が簡単にバレるだろーが」

銀さんと神楽の発言に呆れて新八は注意する。

「ここで働くかい？」

困り果てる冬樹達にフーツと溜め息を吐いて救いの手を差し伸べるお登勢さん。

「い、良いんですか？」

「なーに、厄介者の世話ならもうすっかり慣れっこだよ。とは言っても大した金は出せないけどねえ」

桃華がご迷惑をお掛けするんじゃ……と心配して発した言葉にお登勢さんは迷惑など全く気にも留めてない体で答える。

なんと器の大きな人なのだろう。お登勢さんの人柄に酷く心打たれた冬樹達は

「……ありがとうございますっ！！」「」

頭を深く下げてお礼の言葉を告げた。

「銀時、アンタはこの子等に住む場所提供してやりな。一ヶ月分の家賃はチャラにしてやるから」

お登勢さんは一か月分の家賃を餌にして銀さんに住む場所を用意させようとする。

家賃をチャラにすると言う条件に銀さんは「しゃーなーなー」と愚痴を吐きつつ新八の肩をポンと叩いて

「じゃあ新八。コイツ等オメーんちに泊めてやれ」

とお願いする。

「ええええええええ！？ 僕んちですか！？」

「当たり前だろ。万事屋にこんなに可愛い女の子泊めてみる。銀さん、変な方向に目覚めちゃうかも知れねーじゃん？」

「銀ちゃんはどうなるうと構わないけど、私は万事屋に泊まってもらっても大いに結構アル。むしろ大歓迎ネ」

「それに万事屋に泊めるには人数が些か多過ぎるだろ？ オメーの

ウチなら無駄に広いから全員楽々住めるじゃねーか」

「それ言う順番逆だよ、絶対先に言うべきだよ。っつーか『無駄』ってどう言う事だ、『無駄』って!!」

自分の家に泊める事に戸惑いを覚える新八、どうしても万事屋に泊めたくない銀さん、もしも万事屋に冬樹達が泊まる事になれば女の子が増えると言う事で悪い気がしない神楽。

「大丈夫だって新八くん。オメーの姉貴ならすんなり許可してくれるって」

「まあ姉上なら許可してくれるとは思いますが……。……。姉上ですよ、銀さん？」

「……あ」

志村邸に泊めさせたい銀さんはそう言うが、新八としては泊めさせたくない理由がその為警告するとある事を思い出した銀さんと神楽が

「……そうだったな」

「アレはやバイアルな」

と顔色を真っ青にして口から意味深な言葉を漏らす。

アレ……？

神楽が口にするアレの正体を想像する冬樹達『ケロ口軍曹』メンバーの脳内にふとこちらに来る前に見た『銀魂』のアニメのあるシーンが流れた。

そのシーンとは容姿端麗な美女が茶碗に真っ黒い何かを盛って「卵粥を作ったんだけどどうぞ」と言っているシーン。

神楽ちゃんが言っているアレってあの卵粥の事を、あの真っ黒に焦げた何かを指しているのかな……？

そう考えると冬樹達は少しだけ背筋が寒くなった。

「テメー等の中で誰か料理できる奴居るか？」

そこで銀さんがこんな質問を冬樹達にすると冬樹は若干自信無さそうに、夏美、桃華、モアはしっかりと拳手して返答。

「……大丈夫そうだな。と言う事で新八君、よろしくね」

ケロ口も謎の赤ん坊の泣き声を聞こえにくくするべく耳……に当たる部分を手で押さえつつ以前のこの子の食事風景を思い出しながら予想を口にする。

「たま、粉ミルク買ってきな」

「了解しました、お登勢様」

その予想を聞いたお登勢さんの指示に従い粉ミルクを買いに出掛けるたまさん。

「よし、たまが帰って来るまで私がなんとかするネ！ 今ならなんか出る気がするアル！！」

チャイナ服の上着を外すような動作をしながら張り切ってこんな事を言う神楽に

「小娘ノ貧相ナ胸カラ出ル訳ネーダロ！！ ココハ私ガ出シテヤルヨー！！」

とキヤサリンまでがそのような言葉を口走るので

「健全な男の子がこの場に居るってのに何つー事言ってたんだテメー等アアアア！！！！！！！！」

少しは冬樹君達の事を考えろ、と新八が泣き続ける謎の赤ん坊に負けないくらい大きな声で怒りながら注意する。

しかしその注意された二人は「んだとゴラアア！！」「事実ヲ言ツタマデダローガ！！」と悪口を言い合い大して気にしてないようだった。

粉ミルクを買いに出掛けていたたまさんが帰って来て、ミルクを作り謎の赤ん坊に飲ませるケロ口。

「うわゝ、飲んでるアルゝ！！」

ミルクを飲む謎の赤ん坊を見て神楽が嬉しそうにそう言う

「オイオメー等、コイツにはこのガキ近付けんよ」

銀さんが神楽には謎の赤ん坊を近付けないようにと警告する。

「なんでですか？」

「なんでも良いから、とにかく近付けんじゃねーぞ」

「は、はあ……」

詳しい説明が欲しい夏美だったが説明を面倒臭がる銀さんとはとにかく近付けるなと繰り返し返す警告。

「へえ、結構手馴れてるじゃないかい。アンタ」

「いやあ、それほどでも……あるでありますっ!!」

赤ん坊にミルクを上げるのが上手いとお登勢さんに褒められ、調子に乗るケロロは

「あ、でもできればもっとミルク用意して頂けたらありがたいんでありますっ……」

なんて本当に申し訳無さそうにおねだりすると

「仕方ないねえ、たまー!」

「はい、お登勢様」

たまにもう一度粉ミルクを買って来させる事にする。

「ああ、それと……この子達の草履も頼むよ」

「了解しました」

「スイマセン……」

ケロロ達とはかく、冬樹、夏美、桃華、小雪、モアの五人は実はまだスリッパ。

リビングでくつろいでいたら突然飛ばされたのだ、当然ちゃあ当然である。

住む場所はおろかお金、さらには外で履くものまで用意してくれただお登勢さんとたまさんに冬樹達は頭を下げた。

「ところでこの子の名前、どうしましょうか?」

謎の赤ん坊の世話をしながら小雪が前々から疑問に思っていた事を告げると

「確かにいつまでも名無しのごんべえじゃあ、不便ですよ。ちょうど良い機会ですし、ここで決めちゃいましょうか!」

と新八が言うのでみんなで謎の赤ん坊の名前を決める事に。

「はい! 『定春七十二号』!!!!」

一番最初に元気良く挙手して名前のアイデアを言うのは神楽。

「定春はデカ犬だけで充分だろ。付けるならシゲオかタツノリにしなさい」

神楽のアイデアに銀さんがそんな反対意見を申し立てて却下するとしぶりながらも自分の非を素直に認めた神楽は「は〜い」と返事した。

「はいはい！　じゃあギロロよりも若干色が暗いけど、赤いからレツドの『レーちゃん』で！！！！」

次に夏美が元気良く挙手して名前のアイデアを言うがあまりにも夏美のアイデアが酷過ぎたので「それは無いな……」と銀さんとケロロが声を揃えて却下する。

「ペットの名前みたいだよ二人とも……」
「宇宙人の名前ですよ？」

まるで神楽と夏美がペットの名前を考えてるみたいで冬樹と桃華が呆れながらそのような指摘をする。

「ソナガキンチョノ名前ナント『クソガキ』デイイダロ」

「それただの悪口じゃねーか」

「赤ん坊だから『アカカ』とか『ベビビ』とか良くない？」

「それはあまりにもストレート過ぎ……。っつーか何処かで聞いたような……」

「そ、それじゃあ『バブブ』は！？」

「あ、それ先客が居るであります」

「『寿限無』なんてどうだい？」

「悪くはないですけど……」

「『カグーラ』ジャスアント』ジュニア『……！！！！』」

「ふざけてんのお前！？　そんな厨二みてーなクソ恥ずかしい名前付けるくらいなら、名無しの方がまだマシだわ！！」

「さつきから文句ばっかり言うけど、そう言う銀ちゃんはなんか思いついてんのかヨ？」

「思い付いてねーけど、少なくともオメーが考えているのよりも数

倍良いのが思い付くのは確実だな」

銀さん、新八、ケロロの三人が審査員で神楽、夏美を中心とした各々が次々にアイデアを出すのが、どれも今一つ。

そんな混沌とした銀さん達の会議を見て

「カオスだ……」

冬樹が思った事をボソツと呟いた。

『カオス』と言う言葉を聞いてピンと来た銀さん、新八、ケロロが一斉に冬樹の顔を見る。

「え、え、……え？」

「それにしよう、『カオス』で」

「ええええええええ！？　しょ、正気ですか！？」

「正気も正気。なんかこうピーンって来たんだよ。」

それに元はと言えばこう言う事になったのはそのガキのせいだろ？　だからさー……」

「我輩も銀時殿と同意見であります。それにこれ以上待つて、それ以上の案が出るとも思えないし……」

「決定ですね……」

銀さん、新八、ケロロの審査員三名の意見もまとまり

「つつー訳でこの子の名前は『カオス』であります……」

謎の赤子の名前が決定した。

名前決め会議により名前が決定した『カオス』はと言うと

「ゲブ」

銀さん達に己の恐ろしい食欲を見せ付けていた。

店から粉ミルク全部買い占めるほど大量に用意した粉ミルクを全て空っぽにしたカオスに絶句した後

「たくさん飲んだアルな！　カオスは絶対大きくなるアルよ！」

「いやいやいやいや、飲み過ぎだつて。どう見ても飲み過ぎだつて、正直な気持ちをお口にする神楽と銀さん。

「これじゃあアンタ達の生活費なんてあつて無いようなもんだねえ

……」

ちよつと前のやりとりでお金を出すと言っていたお登勢さんだったが、これでは生活費がカオスの食費で消えてしまう。

「しばらくはカオス君の食事は額の水晶の力で済ませようか？」

「こればかりはしょうがないわよね……」

やむを得ず最終手段として残しておいたカオスの額の水晶の力を使う事でこの問題は解決させた。

「それじゃあそろそろ姉上のところに行きましようか」

新八の姉に泊めてもらう為の交渉をしに行こうとスナックお登勢から出ようとする冬樹達に

「あ、そうだアンタ達。明日、仕事の説明をするから明日の朝、全員店に顔を出してくれ」

明日の事をお登勢さんが告げるので、冬樹達は「はいっ！」と元気良く返事するとスナックお登勢を出て行った。

住む場所とお金と名前（後書き）

神楽ちゃんのネーミングセンスの領域に踏み込めない……と悩む白黒仮面です。

いやあ、前々作と違いながら面白くなっていると云う感想を多数頂き、作者感激の極みであります！

地震だ原発だ何だいろいろと物騒な世の中ですが、こんなくだらな
い小説を読んでその世の中に立ち向かっていけるだけの力を得られ
ればまことに光栄でございます。

志村家の問題（前書き）

『教えて銀八先生！』

銀八「つつー訳で今作もさせて頂きます。ではmega12さんからの質問。

『次の話では真選組が登場するんですか？ あと、この話は劇ケロ4の後という設定は変わりませんか？』

今回のお話の事は言えませんが、その後の事なら説明しまし
よう。

この作品は劇場版ケロロ軍曹4の後で変わりません。

そもそもこの小説のケロロ軍曹はアニメをモチーフにしており、ケロロ軍曹のアニメ282話Aパートでシオンとテララが映っている写真が少しだけ出てるのでそれを元にさせてもらっただけです。

と言つ訳でmega12さん、DVDでケロロ軍曹のアニメ282話Aパートを見て確認してきなさい！」

志村家の問題

かぶき町の街を歩く銀さん達。

「うわあ〜……」

初めて自分の眼で見る景色に心打たれる冬樹達。

万事屋からスナックお登勢への移動はただ下の階に移動するだけだったので『銀魂』世界の風景など楽しむ余裕が無かったが、今なら思う存分堪能できる。

『アンチバリア』を使用して周りからは姿が見えないケロ口達にケロ口が偶然持つて来ていたスピアの階級章を付けたカオスも興味深げに辺りを見渡す。

江戸時代に現代を足したような独特の町並みに地上から天高く聳える大きな塔は特に際立つ。そして青い空を飛ぶは鳥と雲と大きな船。

道行く人のほとんどは男性は丁髷、女性は髪を結び簪を挿し、男女共に和服を着る者達ばかりで中には人間とは到底思えないような姿形をした者まで歩いていた。

人間達の中には冬樹達の世界とさほど変わらないような髪型の者も居れば、現代の洋服のような部分を混ぜた和服を着る者、中には完全に洋服を着る者さえ居た。

「新八さん、この世界に忍しのは存在するんですか？」

「そ、存在って、大袈裟だな……。居ますよ、知り合いにも居るくらいですし」

「し、知り合いに忍しのの者が居るのでござるか!？」

「ええ、まあ……」

若干興奮状態の小雪とドロ口の問いに新八が丁寧に答えると、その度に「へえ〜!」と小雪とドロ口は眼を輝かせながら感嘆の声を漏らした。

「どう言う想像してるのか知らねーが、俺達の知り合いってても

碌な連中じゃないからね？ 実態はただのDMストーカーに痔持ちのジャンプ好きだからね？」

一応念の為に新八の話にこんな情報を付け足す銀さんだが、肝心のドロロの耳には届いてないようだ。

「ゲロオ〜！」

そんな中、店先で足を止めてショウウインドウのガラスにくっ付きながら、その向こうにあるものを小雪とドロロ同様に眼を輝かせる人物が居た。

ケロロ軍曹である。

「今度はどしたー？」

急に立ち止まったケロロを見て銀さんはどうかしたのかと彼に声を掛けて歩み寄り、彼が眺めているものに視線を移すとそこには組み立てられたガンダムのプラモデルとそのプラモの箱が置いてあった。

「こつちの世界でもガンプラが売られてるうう！ ハッ！ そうなると、こつちの世界でだけ売られているお宝もあるかも！？」

「買う暇なんて無いわよ」

ケロロがマニア魂に火を付けて一人テンションを上げている最中、夏美が冷たく言い放つ。

「買って買って買って買って〜！」

小さな子どものように地面に寝そべりじたばた手足を動かして駄々をこねるケロロだが

「そんなお金何処にあるんですかあ？」

「言つとくが俺達のところにはそんな金ねーぞ。あっても甘いモノとジャンプ、食費に回すかな」

「チエ〜」

タママが正論を告げて、銀さんは自分達の収入で得たお金の使い道をケロロより先に答える事でケロロがするであろう要求を遮った。「それに家賃も付け足してください。お登勢さん怒りますよ」と新八が銀さんの言葉を補足する。

「それに、あたし達の世界でママも心配してるだろうしこんな世界に長居なんてできないわ」

「ええ、もつとこつちに居ようよ！ 折角『銀魂』の世界に来たんだからさ！」

続け様に夏美がそう告げるのでケロロが子どものような声を出して反撃すると

「夏美殿、『こんな世界』なんて酷過ぎるでござる！」

夏美の発言にあのドロロまでもが異議を申し立てた。

「ああ、ゴメンゴメン。悪かった、悪かったわ」

予想外の方向からの攻撃に夏美は苦笑しながらドロロを落ち着かせる。

「でも姉ちゃん。すぐに帰れるかどうかはまだ分からないよ？」

「え、なんで？ カオス君の水晶の力を使えば簡単に帰れるじゃない」

「確かにそうかもしれないけど、カオス君の水晶の力ってまだ謎が多いじゃない。

さっきみたいにちゃんと力が発動するかどうかさえ分かってないんだよ？」

……それに軍曹も言ってるじゃない、折角別の世界に、『銀魂』の世界に来たんだからもつとこつちに居ようよ？

帰るのはカオス君の水晶の力の事が詳しく分かってからでも遅くは無いよ、きつと」

夏美が先程発した内容に冬樹が指摘する。

冬樹の言うように、今回は事を急ぐよりは確実な情報をしっかりと得て、安全に帰れるようにしてからの方が得策だろう。

弟の言葉を聞いた夏美はハアと溜め息を一つ吐いて

「……確かにそうかもね。分かったわ」

しぶしぶと冬樹の言う事に従う事にした。

そうこうしているうちに『恒道館道場』と書かれた看板のある大

きな屋敷に到着した一行。

「広いですね」

「まあ昔はここも立派に剣術道場としてやってた時代がありますしね」

小雪が志村邸について一言告げると新八は偉そうに過去の栄光をさらっと口にする

「そんなの昔の話アル。今はただの廃れた町道場ネ」

神楽が容赦無い毒舌を振るうので新八は若干落ち込んだのか、無言になってしまった。

その新八の様子を見て「容赦ないな……」とギロロが感じた事を呟いた。

恒道館道場の屋敷に上がりうるつく一行。

「姉上ー！！ 何処ですか姉上ー！！ ……あれ、居ないのかな？」

新八が大きな声でここに来た目的である姉を探すが一向に返事は無い。

出掛けているのかな？ と思いながら恒道館道場の屋敷を歩き回っている。と彼等の近くにあった障子がスツと開き次の瞬間

「うおおおおおおお！！！！」

と物凄い声を上げて茶髪をポニーテールにした美女と黒髪をポニーテールにし黒の眼帯を左目に付けた青年が新八達に襲い掛かった。茶髪をポニーテールにした美女は薙刀を、黒髪をポニーテールにし黒の眼帯を左目に付けた青年は刀を真っ直ぐ突き出す。

「だああああああああ！！！！」

銀さん達はそれぞれの攻撃を動いて避ける。

特に新八は茶髪をポニーテールにした美女に、銀さんは黒髪をポニーテールにし黒の眼帯を左目に付けた青年にそれぞれ狙われてしまい、あとほんの数センチで薙刀や刀が体に当たるところだった。

「な、なななな何するんですか姉上ええええええ！！！！！！！！！！」

「な、なななな何すんだお前ええええええ！！！！！！！！！！」

狙われた男二人は激しくうるたえながら声を揃えた。

新八が言う姉上こと茶髪をポニーテールにした美女、志村 妙^{たえ}。
通称お妙さん。

新八の実の姉で外見は申し分無い美女なのですが、性格がかなり凶暴でその上料理の腕は壊滅的ともう内面はほとんど最悪です。

銀さんに襲い掛かった黒髪をポニーテールにし黒の眼帯を左目に付ける青年とは柳生^{やぎゅう} 九兵衛^{きゅうべえ}。

お妙さんの幼馴染で格好は男性のようですが実際は女性です。名門である柳生家の次期当主で『神速の剣の使い手』と謳われるほどの強さを持っています。

ただ剣一筋で生きてきたあつて世間に疎く、結構天然。

「何だ、新八か。こんな忙しい時にお友達なんて連れて来るんじゃないよ」

お妙さんは実の弟を見下しながらそんな辛辣な言葉を吐くとペツと唾をそこら辺に吐き捨て、九兵衛さんは刀を鞘に納めた。

「ど、どどどどうしたんですか姉上！！ それに九兵衛さん！？なんで二人ともそんな殺気立ってるんですか！？」

「 下着泥棒？」

事情を聞いた銀さんが悪びれる様子も無く声に出すと

「あの、声に出さないでもらえますか？」

冬樹達健全な少年少女が居る事を気遣い、新八が冷静に指摘する。簡単にお妙さん達の事情を説明すると下着泥棒にお妙さんの下着を盗られてしまったから盗った犯人に返しをしようとお妙さんと九兵衛さんの気が立っていると言う訳です。

ちなみに今現在銀さん達が居る場所は恒道館道場ではなく近くのファミレスで、席はお妙さんと九兵衛さんが一緒に座り向かい合うように銀さん等万事屋の三人が座り、その銀さん達と背中合わせに隣に冬樹達とアンチバリアを起動させているケロ口達が座っていて、銀さんの前にはチョコレートパフェ、神楽の前にはいろんな料理が並んでいてそれらを食べている。

ケロ口等は今もアンチバリアを使用中でお妙さんと九兵衛さんにも姿を見せてません。

「どうやらこの流れは原作パロのようだな。

原作にあつたお話と同じような始まり方で始まって、台詞回しとか最後のオチとかも結局原作同様に終わるこの一連の流れ！

いくら登場人物が原作と違うつつつてもな、展開が眼に見えてるから一部の読者には飽き飽きなんだよ！！

もっと気張れよ作者！ 原作とは違う、それでいて人を引き付けるようなお話を考えやがれ作者！！」

「いや、そんなお話考えられたらたぶんもっと凄いとこで別の作品書いてますよ作者」

「まあ良い。どうせ今回も最後は新八んちが爆発して終わるんだ、そくに決まってる」

「何がどうなって僕んちが爆発するんだア！！」

銀さんの無駄に長い台詞を使ったボケに的確に新八がツツコミを添える。

そこで銀さんの長つたらしい話に我慢の限界を超えたのか、お妙さんがテーブルに足を乗せて向かい合わせに座っていた銀さんの顔をガシツと手で掴み

「長々とうるせーんだよこのクサレ天パ！ こっちはなあ、お気に入りの下着いくつも盗られてんだよ！

テーマに今の私の気持ちがかんのか！？ 得体の知れない下品な男に下着盗られる乙女の気持ちが！！」

と凄まじい怒りを露にする。

般若のような恐ろしい顔で人の顔を手で掴む人を乙女と呼べるのが気にはなるが、下着、下着と連呼されるのを聞いていられない冬樹達は呆れてハアと溜め息一つ吐く。

新八の家である恒道館道場に泊めてもらうにはこのおっかない女性から許可を得る必要がある為仕方なくこの場に同席し続けるしかないのだ。

「本当にこの人、新八さんのお姉さんなんですか？」

とても女性とは思えない言葉遣い、荒々しい態度。

腸が煮えくり返るほど怒っている事を差し引いても、弟の新八とは似ても似付かないので本当に新八の姉なのかと小さな声で確認する冬樹。

新八にとってはいつもの事、冬樹の質問に「ええ、まあ……」と呆れながら返答する。

「しかし、新八殿の姉上殿の声って何処かで聞いた事があるような……。」

あ！ お妙殿の声、プルルちゃんの声とそっくりであります！！

「そう言えばそうでござるな」

「……中身は全く別物だがな」

お妙さんの声がケロ口達の知り合いの声とそっくりな件でケロ口等の会話が盛り上がる。

「……会った事も無い得体の知れない男に下着を盗られる女の気持ち……。」

一方の桃華ちゃん、お妙さんの言葉に興味を持ったのか小さな声で呟く。

まず冬樹君以外の男の人に下着を盗られるなんて………そんなの………そんなの………！！

側頭部の角みために左右二本ずつ計四本生えている髪の毛全てをシャキーンと尖がらせて

「その気持ち、分かるぜ姐御オオオオ！！！！！！！！」

ちょうど後ろ隣に居た銀さんの頭を踏ん付けながら席の上に立ち

上がりお妙さんの顔を見て彼女に同情する『裏』桃華。

『裏』桃華の足と机に挟まれてサンドイッチにされる銀さんは

「痛い痛い痛い痛い！！！！ 何が起きてるの？ ねえ、何が起きてるの！？ 今銀さんの身に何が起きてるの！？」

と言つて冗談ではなく本当に痛がり、新八と神楽はさつきまであんなにおとなしくしておしとやかだった桃華と今の別人のような桃華に愕然、眼をパチクリさせて絶句。

「ほう……話が分かる奴がテメー等の中にも居るとはな……。テメーとは気が合いそうだ、来な！ 兄弟の盃さかづきを交わすぞ……」

「ヨツシヤア！！」

冬樹達の中で話が分かる人が居るを知ったお妙さんは桃華と意気投合。なにやら妙な事をしようとするので

「なんか組んだらマズイ二人が手え組んだように見えるんですけど……。」

「つて言うか桃華ちゃんいつたいたいどうしちゃったんですか！？ さつきまであんなにおとなしかったよね！？」

桃華の凄まじい豹変ぶりに驚愕する新八。

冬樹にとつてはいつもの事、新八の質問に「ええ、まあ……。」と呆れながら返答する。

「僕の家にも下着泥棒が出たんだがそんな事はどうだって良い。

肝心なのは素性の知れぬ下品な男が、妙ちゃんの下着を盗ったと言つ事だ！」

「その気持ち、なんだか分かるような気がします！」

「そうか、君とは話が合うような気がするな……名は？」

「東谷 小雪です！」

「僕は柳生 九兵衛。よろしく小雪ちゃん」

「よろしくお願ひします、九兵衛さん！」

お妙さんが桃華を何処かに連れて行く一方でこんな具合に九兵衛さんと小雪は意気投合。

「こつちはこつちでなんか意気投合しちゃってるし……」

「小雪ちゃん……」

新八と夏美は九兵衛さんと小雪ちゃんの会話を見て溜め息に似た言葉をポツリと呟く。

「……最初はてつきり冬樹君ハーレム状態だと思って羨ましいって思ってたんだが訂正するわ。」

オメーの周りにもまともな女居ねーんだな」

銀さんが冬樹にパフェを食べながら皮肉るような言葉を吐くと実際その通りで否定する事もできないので冬樹は「ハハハ……」と苦笑するしかなかった。

未だに甘そうなパフェを美味しそうに食べる銀さんを見て自分も食べたくなったのかタママは「銀時さん銀時さん」と声を掛ける。

「何？」

「僕もチョコレートパフェ食べたいですう」

「頼めば良いじゃねーか……って、そうか。よくよく考えてみればオメー等姿消してるんだったな……。」

しょうがねえなあ、オイ姉ちゃん！ チョコレートパフェ二つ！」

「わーいですう！」

タママの願いを聞き入れた銀さんは面倒臭がりながらもチョコレートパフェを自分が食べる分とタママが食べる分を店員に頼む。

しかし、この食事のお金を出しているのは実はお妙さんと九兵衛さんなのである。

自分のお金でもないのに全く遠慮しないで頼む銀さんに「オメーは自重しろ」と新八は注意する。

「さつきから食べてばかりだがちゃんと話を聞いているのか？」

九兵衛さんが銀さんに話を聞いているのかと注意すると

「ちゃんと聞いているって。下着泥棒でしょ、どうせ盗ったのは変態白黒仮面だつて」

「作者が変態で犯人にしか聞こえないんですけどそれ」

「あ、間違えた。怪盗ふんどし仮面だつたわ」

「どう言う間違え方だアア!!」

新八に間違いをツッコまれつつ銀さんは今回の騒動の犯人は誰なのか予想する。

「何故そんな事が分かる？」

「奴は若い娘の下着を盗み、モテない男に分け与える。簡単に言うなら鼠小僧のパンツバージョンだ。」

そう言う変態だからお妙の下着を盗つても何もおかしくねエ」

九兵衛さんの真剣な質問に銀さんはふんどし仮面の特徴を語り「それに……」と付け足すように言っ懐に手を突っ込み、女物の下着と紙を取り出す。

「……なんですか、コレ？」

「朝起きたらこれが俺の枕元に置いてあった」

それらを見て新八が問うと銀さんは素直に答える。

九兵衛さんは銀さんが懐から取り出した紙を手に取り

「『私を捕まえた素晴らしい好敵手達に告ぐ！

若い娘達のパンツを盗むのを繰り返し成長した私から今一度盗まれるパンツを護ってみるが良い！ 怪盗ふんどし仮面』……。

完全な挑戦状だな、これは……」

紙に書かれている内容を読むと紙の内容について口にする……

……つつーかそう言うのがあるなら最初に出せよ」と新八は指摘した。

こっちはしばらく恒道館道場に泊めてもらえるように交渉するだけだったのに、なんでこんなくだらない事に巻き込まれてるのかしら……と思っただ夏美はただただ呆れ返り

「……帰りたい」

溜め息を吐きながら切なる願いを呟いた。

恒道館道場内部。

「『第三十六回、チキチキ、ふんどし仮面を捕まえろだ』いさゝく

「モテない銀さんの気を引こうとパンツを施すなんて……良い度胸じゃない!!」

何処の女よ!? 突き止めて二度と施しパンツを送れないようにしてやるわ!!」

さっちゃんも何処で聞いたのかは甚だ疑問だが、なんでか何処かの女が銀さんの気を引く為にパンツを恵んだと思い込んでいるようだ。

「一人だけおもっくそ勘違いしているバカが居るんですけど」
事情を誤認しているさっちゃんの言葉を聞いて銀さんが呆れてツッコむ。

「近藤さん、猿飛さん。今はとにかく人手が欲しいから文句は言わないわ、手伝って頂戴」

いろいろと突っ込みたいものの、人手が欲しい一心からお妙さんが協力を要請すると

「よし来た!」

近藤さんからは快い返事が帰ってきて

「さては貴方ねお妙さん! 銀さんの気を引こうと施しパンツを送ったのは!」

さっちゃんはこんな誤解をするので

「やっぱり猿飛さんは帰ってもらえます?」

手伝つてとは言ったものの居るだけ邪魔のような気がするさっちゃんには帰れとお妙さんは丁寧な口調で言っただけだ。

「ところで万事屋! この見慣れない天人あまんとや子ども達はどうしたんだ?」

「僕もさっきから気にはなっていたんだが……」

今ヶ口達は銀さん達の許可により『アンチバリア』を切って近藤さん達にも見えるようになっていた。

見慣れない生き物達の姿に疑問を覚えた近藤さんや九兵衛さんは銀さん達に事情を尋ねるが、この状況で冬樹達が異世界から来たな

んで事を足すともう何が何やら分からなくなりそうなので

「詳しい説明は後にしてくれや。面倒だし、何よりややこしくなるから」

「あと、ここでケロロさん達を見た事も内緒にしてもらえますか？」

銀さんは話を後回しにし、新八が秘密の漏洩を防ぐ為にそう願
いし「あ、ああ……」と近藤さんと九兵衛さんも同意する事で丸く
収まったようだ。

「まーそう言う訳で、それでは今回の作戦に囿役として協力しても
らう志村 妙さんに話を伺います」

再び銀さんが気を取り直してマイクを持ってそう告げると

「勝負下着を提供するわ！」

お妙さんはそう言っで自分の勝負下着を手に持って高く上げる。

凄く可愛いパンツを見せられ、お妙さんが好きな近藤さんは強い
衝撃を受けて「ぐほお！」と吐き捨て、顔の穴と言う穴から血を
吹き出して倒れてしまった。

「てゆうか一撃必殺？」

倒れた近藤さんを見たモアの一言。

未恐ろしいものの出現に冬樹、夏美の日向姉弟はあまりの恥ずか
しさに居た堪れなくなった。

「ああ、そうそう。俺も誰のかは知らねーんだけど……」

ここで銀さんが忘れていた事を思い出しそう言いながら誰かのパ
ンツを見せつける。

あのパンツ、何処かで見た事あるような……。いや、て言うかあ
れ……！

「あああああああああ！！ それ私の……！」

夏美が大きな声で騒ぐので「夏美さんの!?」と小雪は過敏に反
応し「あ、夏美ちゃんのだった？」と銀さんは平然と呟く。

(な、なつ、なつ、夏美の、ぱ、ぱん、パン……ッ……)

夏美が好きなギロロは強い衝撃を受けて赤い顔をさらに赤くしな

がら「ぐはあー！」と吐き捨て、顔の穴と言つ穴から血を吹き出して倒れてしまった。

「あゝあ、やつちやつたなー……オイ」

その様を見て呆れて呟くケロロ。

「なつ、なんでここにあるのよ!? ちょっと、返してよ!!」

私物は自分達の世界に置いて来た筈なのに何故自分の下着が別世界であるこの場にあるのかと問い、返してもらつようお願いする。

「俺も『これ提供してやるから上手く使え』って言われただけで何も知らねえよ。そう言つ細かい事は『黄色い宇宙人』に訊いてください」

銀さんも詳しい事を聞かされず渡されたようのでこのように答えながら、『黄色い宇宙人』であるクルルを見つめる。

「クルル〜ル〜?」

夏美はクルルを凄じ目付きで睨み付けるがクルルは悪気など感じてない様子で「くつくつく〜!」と笑う。

「よし、お妙と夏美のパンツ、なんとしても護り通すぞオオ!!」

「「オオー!!」「」

「ふんどし仮面を捕まえるぞオオオオ!!」

「「オオー!!」「」

「わ、私のも困なの!?!」

「当たり前だろーが。協力しろや」

夏美だけは不満のようだが、この場に集まつたみんなの士気を高める。

「冬樹殿達や我輩達が住む場所を確保する為にも、ケロロ小隊、頑張るであります!!」

「「了解っ!!」「」

ケロロ達も自分達の目的の為士気を高める。

「「……はあ」「」

姉の下着を見た弟二名、どうしてもこの人達みたいにする気には

なれないので深い溜め息を吐いた。

志村家の問題（後書き）

ちよこつと銀魂のアニメの展開を拝借して楽をした白黒仮面です。

銀さんが途中で俺の事変態と言ってますが否定はしません。

好きに蔑みやがれコノヤロー！！

気が付けばもう四月。早いなあ……。

この一年もダラダラ執筆していきたくのでダラダラ楽しんで下さいませ。

パンツ争奪戦！（前書き）

ハッピーバースデー、トゥーユー　　ハッピーバースデー、トゥー
ミー

ハッピーバースデーディア……マザー&……俺
ハッピーバースデー、トゥーユー

……自分で自分の事ディアって、言ってる吐き気がするよ……おえっ
……。

ちなみに歌詞の通り俺と母さんの誕生日は同じです。
どうでも良いですよね。

ましい笑い声が割り込んできた。

恒道館道場の屋根の上。

「光あるところに影があり！ 若い娘のパンツあるところに我があり！」

怪盗、ふんどし仮面！ 推参！！！！」

月明かりに照らされながら、赤いふんどしで顔を隠し白のブリーフ一丁と言う容姿からして変態のふんどし仮面がヒーローっぽいポーズを決める。

「ハツハツハ！ 私の挑戦を受けてくれてありがとう、我が好敵手達よ！！」

なんだか妙な天人あまんと共も居るみたいだが、今宵この勝負に勝ち、全国の変態、電波男、チェリーボーイ、スケベエロビッチ妄想スキー達にパンツを届けるのはこの私だ！！」

腰に手を当てて偉そうにふんどし仮面がそう告げてお妙さんと夏美のパンツに向かおうとすると屋根の上にさっちゃん、小雪、ドロロが現れてふんどし仮面の行く手を阻む。

「夏美さんの下着には指一本触れさせません！！」

「これも銀さんの為、頑張れさっちゃん！！」

「些か不本意でござるが、これも皆の為！！」

それぞれの目的の為、小刀やクナイを手に持って構える三人。

「小雪殿〜！ ドロロくん！ 頑張つて〜！！」

ケロロは下で小雪とドロロの応援をする。

「……参る！！」

小雪のこの言葉を合図に、三人がふんどし仮面に向かって突き進み、瞬く間にすれ違う。

「フッフッフ……、この私が何の策も無しにリベンジなどと口にするものか。」

全国の変態、電波男、チェリーボーイ、スケベエロビッチ妄想スキー達にさらなる幸福を与え、貴様等若い娘達にはさらなる絶望に

陥れるべく身に付けたこの技術……」

ふんどし仮面がそう呟きながらすれ違った三人や下で待機するみんなに自分の手に持つものを見せる。

それは一つの、結構際どいパンツだった。

「そ、それは……私のパンツ!? しかもさっきまで履いてたもの
だわ!」

さっちゃんが自分のパンツであると告げると

「まさか、さっきの一瞬で!」

眼にも留まらぬ早業に驚く小雪。

挑戦状を送ってきた自信はこれだったのかと銀さん達は納得する。

「そう、その技術とは他人が今履いているパンツを盗むと言う常識
外れの代物なのだ!

あまりの早業にパンツを盗まれた相手は今、ノーパンである事す
ら気付かない!

勿論、その可愛いお嬢さんのパンツもあ……!」

ふんどし仮面が自信に満ち溢れながら小雪から奪ったパンツを見
せようとしますが、ある事に気付き言葉を失う。

「ふ、ふんどし……だと!」

バカな!! 普通年頃の女の子と言えばパンツだろ!? 何故こ

の娘はふんどしをしているんだ!?

ええい、これでは私の帰りを待っている全国の変態、電波男、チ

エリーボーイ、スケベエロピッチ妄想スキー達が納得する訳がない
!!

あくまで自分が盗むものは女性の『パンツ』である。自分が奪つ
たものがパンツではなくふんどしだった事に驚愕の表情を見せるふ
んどし仮面。

「つつーか小雪ちゃんってふんどしだったんだ……」

銀さんも驚いたみたいでボソツと呟く。

驚きのあまり動けないふんどし仮面のその隙を狙って誰かが砲弾
を放つ。

「む!? トウッ!」

直撃する寸前、その砲弾を避けるふんどし仮面。放たれた砲弾は屋根に命中しドカーン! と爆発する。

「ギロロ君! ここ新八殿の家でござるよ!」

ドロロが砲弾を放った主、ギロロにここが何処なのかと言つ注意をすると

「先手必勝だ!」

血走った眼でギロロはそう告げるので「ギロロ君、眼が真剣……」
とケロロがツツコミを入れる。

「新ちゃん!」

敵の出現を確認したお妙さんはここで新八の名前を呼んである合図を送る。

屋内で待機中の新八は冬樹達と一緒に持つて来たお茶を飲んでとお菓子であるせんべいを食べていた。

お妙さんの新八の名前を呼ぶ声が聞こえると

「はいはい」

と面倒臭そうに返事する。

その新八の声に反応してテーブルの中から赤いボタンが、ちょうど新八の位置から押し易い位置に出現する。

見た目はごく普通のテーブルの為予想外の出来事に「え?」と咳く冬樹と夏美。

新八は二人のリアクションなど他所にその赤いボタンをポチツと躊躇い無く押す。

「チツ、しょうがない! 小娘!! 貴様のふんどしは返してやる
!」

ふんどし仮面はそう言つて小雪のふんどしを思いっきり投げて返すとすぐさまお妙さんと夏美のパンツに向かう。

「させるか!」

「お妙さんのパンツは誰にも渡さねエ!!」

ふんどし仮面の前に立ち塞がるは自分の刀を手に持つ九兵衛さんと近藤さんの二人。

「はああああああ!!」

「うおおおおお!!」

二人が刀を構えたままふんどし仮面に向かって走り出すと突然二人の体が地面に沈んだ。

運悪く底に竹槍が敷き詰められた落とし穴に引っ掛かってしまったのだ。

「何やってんだテメー等アアア!!」

この事態に落とし穴に見事に引っ掛かり落ちてしまった二人に銀さんが叫び声を上げてツッコむ。

「俺達だつて引っ掛かりたくて引っ掛かった訳じゃねーんだよ!」

近藤さんが穴の中で串刺しにならないよう両手を伸ばして頑張りながら銀さんに反論すると「その通り!」と九兵衛さんも同意見。

……… だつたのだが

「……… だがそもそもこうなつた原因は貴様が妙ちゃんをストーカーにしたからではないのか?」

九兵衛さんがこんな疑問を声に出して言うと

「なにおう! ストーカーとは聞き捨てならないなメス猿! 俺は

ストーカーじゃありません! 追跡者です!」

「誰がメス猿だ! ストーカーであれ追跡者であれ、貴様が妙ちゃんを追い掛け回すから妙ちゃんが防犯対策にこんな罠を用意したんじゃないのか、と言っただんだ!」

「これくらいの障害乗り越えていけないと恋つて言うのは成就しねーんだよ! こう言つた障害を乗り越えてこそ二人の愛は強くなるんだ!」

「障害に苦しんでいるのは貴様一人だろう!」

と落とし穴の中で頑張る二人の間で口論勃発。

「なんでまたそんなところで口論するんですか!」

そんなバカ二人に今度はケロロがツッコミを入れる。

その隙にふんどし仮面はお妙さんと夏美のパンツの下に辿り着いていて

「ハ　　ッハッハッハ！！　パンツ、盗ったどおおお！！」

腕を伸ばし、手に掴んだパンツを高々とかざしていた。

「マズイ！」

それに気付いた銀さんとケロロが落とす穴に落ちたままの二人を放置しふんどし仮面の下に向かう。

「あ、万事屋！　緑の宇宙人！　ちょっと待って！！　助けて下さいー！！」

「僕達を引き上げてくれー！」

なんとなく銀さんとケロロが離れていく事に勘付いた近藤さんと九兵衛さんが叫んで救援要請するも、彼等が居る穴の周囲には生憎誰も居なかった。

近藤　勲、柳生　九兵衛、脱落。

「当初の目的は達したが……少し心許無いな」

「姐御のパンツ、」

「返しやがれエエエエエ！！」

ぶつぶつと独り言を言うふんどし仮面に神楽と桃華が接近する。

「甘い！」

そう言ってもたしても凄まじいスピードで接近する神楽と桃華のパンツを奪うと

「ハッハッハ！　もはや私に敵など居やしない！！」

かつての敵をあざ笑うふんどし仮面は

「では諸君、これでお別れだ！」

自分のパンツが全国の変態、電波男、チエリーボーイ、スケベロビッチ妄想スキー達の手渡るのを指をくわえて見てるが良い！！
フハハハハ！　と豪快に笑い天高く飛び上がり恒道館道場の外へと逃げ出す。

逃げられる……銀さん達がそう思った矢先、空中に居るふんどし

仮面に突如バリバリバリッ！！ と強力な電撃が襲い掛かった。

よく漫画やアニメで電撃とかで骨が見えるような絵があるがまさに今のふんどし仮面はそのような状態だ。

電撃が止むとふんどし仮面はヒュー、ドスンと地に落ちる。

「フハハハハハ！！」

逃げられると思うたか！！ この屋敷はな、未だ止まぬストーリーカ
ー行為に対抗すべくさらなる改造を重ね、今や鼠一匹、蟻一匹とて
逃げられぬ最強の要塞、陸の孤島と化しているんだよ！！

私のパンツを狙った以上、反省して土下座で地面に頭を付けて謝
り、慈悲を請うまで痛めつけてやるわ！！」

悪人のような高笑いをしてとても女、いや人間とは思えないよう
な恐ろしい目付きでお妙さんが恒道館道場の現状を語る。

「……………つかいい加減道場復興してよ」

「てゆーか、正当防衛？」

道場の一室でくつろぐ新八とモアが偶然聞こえたお妙さんの発言
に一言。

「ふ、ふふふ……………。燃えて来たぜ……………。

困難な障害があつてこそ、天下の義賊ふんどし仮面も俄然やる気
になると言つものよ……………」

先程の電撃を受けてもまだ意識があつたふんどし仮面はこの屋敷
から逃げる事が難しいと知ると俄然やる気を出して起き上がる。

「あ！ まだ生きてたアル！」

「退けエエエエ！！！」

起き上がったふんどし仮面に神楽が一言告げるとギロロが両手に
装備した、なんだか某有名なロボットアニメに出て来るライフルに
似た銃を乱射。

「僕も行くですう！！ タママインパクトオ ……！！！」

ギロロに負けじとタママも口からエネルギー弾を発射し

「夏美さんや皆さんのパンツを返してください!!」
さらに小雪が宙から大量のクナイを投げ付けて攻撃する。
対するふんどし仮面は怪盗と言うだけあって華麗な身のこなしで
それらの攻撃を全て避けていく。

屋内組。

タタタタ、ドカーンドカーン!!

人が走り回る音や機関銃のような銃器を乱射する音に加えてさらに
爆音までが家の中にまで鳴り響く。

「アイツ等……ここが何処だか分かってて騒いでるのかしら?」

「夏美ちゃん、大丈夫ですよ。心配しなくて」

「いや新八さんももつと心配した方が良いんじゃない……」

一方その頃屋外では。

「だああああ!!」

銀さんが防犯用の罾と見られる空から降って来たナイフや包丁と
言った鋭利な刃物を間一髪で回避。

「ゲロオオオオ!!」

ケロロが何処からか飛んで来た巨大な丸太のハンマーを紙一重で
回避。

「なんの!!」

ドロロが地面から突き出てきた竹槍を華麗に回避。しかしその後
ドロロの真上に降って来た金ドライが頭にガンツ! と直撃し「
酷いよ……」と言って気絶する。

ドロロ兵長、脱落。

「これじゃあアイツよりも先に俺達がオダブツだぞ!」

「一刻も早く奴を捕らえねばア!!」

銀さんとケロロがドロロを置いて急いで奴、ふんどし仮面を追っ
た。

「……パンツ返せやコラアアアア!!」「」

血眼になってふんどし仮面を追うお妙さん、さっちゃん、神楽、桃華、小雪、タママ、ギロロ。

彼等は必死になって追いかけるも天下の義賊と自称するだけあって逃げ足が速いふんどし仮面。

「ぜ、全然追いつかないですう〜!」

立ち止まり膝に手を付けてせえせえと息を上げるタママ。

「こうなったら奥の手ね。新ちゃん、^{ソル}SOLよ! ^{ソル}SOLの順番よ!」

疲れるタママを見てお妙さんが新八に指令を送る。

指令を受けた新八はと言うと寝転んで漫画を読んでいた。

「はいはい……」

指令に面倒臭がりながらも返事するとまたしても新八の近くに赤いボタンが現れ、新八はそのボタンを押す。

「どうやら撒いたようだな……」

ふんどし仮面が後ろから誰も追って来ない事を確認して安堵の息を吐くと

「今のうちに出口を……」

探そうと言う前に自分の体を白い光の粒子のようなものが包み込んでいる事に気付く。

何だこれは……? そう思った次の瞬間には光の粒子は光の帯となり直後ドカアーン! とふんどし仮面が居た場所が爆発した。

「な、何事だ!?!」

謎の攻撃を辛うじて回避したふんどし仮面は声を漏らす。

ふんどし仮面の位置をお妙さん達に報せる黒煙が立ち昇る。

言い忘れていましたがお妙さんの言う^{ソル}SOLとはストーカーおしおきレーザーの略で衛星兵器の事です。

「新ちゃん、あそこに集中砲火アア！！！！」
お妙さんは女とは思えない声で新八にさらなる指示を送る。

「はい」
相変わらず道場の一室で寝転んで漫画を読んでいた新八はSOLのボタンを連打する。

流星群の如く降り注ぐ光線を器用に避けて逃げまくるふんどし仮面。

そんな彼の前に現れたのは銀髪天然パーマと緑の宇宙人だった。

「見つけたアアアアア！！」

ケロロがふんどし仮面の姿を確認すると危険を省みず猛スピードで接近し

「つかまえたアアアアア！！」

ふんどし仮面の毛むくじやらの足を小さな体でがっちり掴んだ。

「掴まるなこの蛙みたいな天人あまんとめ！ ええい気持ち悪い、離せ！！」

「これ以上みんなを困らせる真似は許さんであります！」

ふんどし仮面は空から降り注ぐ光線を避けつつケロロを振り解こうとし、ケロロは何が何でもふんどし仮面の足に掴まったまま離れようとはしなかった。

「銀時殿オオオオ！！」

「ちよつとだけ見直したぜ、緑君よお。あとは俺に任せな！！」

この隙にとケロロが銀さんに合図を送ると銀さんは腰に差していた木刀を抜いてふんどし仮面に向かって行った。

「せえええええええい！！」

ケロロが掴まり気を引く間に一直線にふんどし仮面に近付く銀さん。

このまま主人公らしくかつこよくふんどし仮面を成敗するかと思いきやドオオオオン！！ と空から飛来してきた光線に直撃、銀さんが爆発する。坂田 銀時、脱落。

「ノオオオオオオ！！！」

ケロ口軍曹悲痛の叫び。

しかしふんどし仮面が胸を撫で下ろす暇は無くすぐさまその場所にギロ口伍長がやって来て

「死ねええええええ！！！」

ふんどし仮面に向けて銃を乱射してきた。

ふんどし仮面はケロ口を振り解こうとしつつギロ口の銃撃を避ける。

「ちょ、ちよつとおお！ 我輩も死にそうなんですけどオオオオ！！！」

ふんどし仮面の足にくっ付いているケロ口も当然命の危険に晒されているのでギロ口の発言にケロ口が一言物申していると

「うだるつぞぬしゃああああ！！！」

ギロ口の後続に居たタママのタママインパクトが飛んで来た。

「あ」

ふんどし仮面がひたすら振り解こうとしていたおかげでふんどし仮面の足に掴まる力が弱まりケロ口はうっかりふんどし仮面の足から手を離してしまった。

ふんどし仮面は即座にその場を離れ、タママの放ったエネルギーの先に居るのはケロ口オンリー。

この状況で起こり得る事、それ即ち……

ドカアアアアン！！

「ぎゃああああああ！！！」

ケロ口軍曹、脱落。

「おじ様！？」

道場の一室に居たモアがケロ口の身に何かが起きたような気がして外に出ようとする。

「あっ！ モアちゃん！！！」

「外は危ないですよ！！！」

夏美と新八が外は危険だと注意するがそれでもモアはその注意を振り切り外に出た。

「僕が連れ戻します!!!」

そう言つて冬樹がモアの後を追う。

「待てやこの下着泥棒!!!」

「パンツ返しやがれえええええ!!!」

みんながふんどし仮面を捕まえる事に躍起になり、銃声と爆音が響き渡る道場の敷地内。

そこを走り回り愛するケロロを搜索するモアちゃん。

そんな彼女の眼に映ったのは緑色の蛙がアフロになってズタボロになった姿だった。

「おじ様　　!!!」

モアが声を掛けてケロロに駆け寄りケロロの小さな体を優しく抱え込む。

「……あ、モアど……の……」

モアの存在に気付いたケロロは僅かに眼を開けてモアの名前を弱弱しく口にする。とガクツと力尽きてしまった。

「おじ様アアアアアアア　　!!!」

モアの悲痛な叫びが恒道館道場内に木霊する。爆音や銃器の音が響く戦場の最中、しばらく悲しみに暮れるモアだったが

「……おじ様に……おじ様に酷い事をする人は誰であろうと許しません!!!」

一念発起してしまったモアが「擬態解除!」と告げるとモアの体が光り出した。

瞬く間にモアの黄色い髪は白くなり、服装も紫と白を基調にした露出の多いものに変わって、背中には穴の空いたマント、手には片方の先端には三日月、もう片方の先端には隕石のようなものが付いた武器『ルシファースピア』を持ったアンゴル族の姿に変化する。

「え、何? この光……。っつーか誰、あの娘!??」

気を失っていた銀さんが眼を覚まし、今のモアの姿を見てそんな言葉を漏らす。

「マズイ！ 待ってモアちゃ」

「アンゴル族究極奥義『ハルマゲドン』！！ 百万分の一
！！」

冬樹の制止も間に合わず、モアはルシファースピアの隕石のような先端部を地面に叩き付ける。

直後、恒道館道場の敷地内にある全てのものを飲み込む程の大規模な爆発が生じた。

パンツ争奪戦！（後書き）

この後、ふんどし仮面は逮捕されました。

ども、白黒仮面です。

ふんどし仮面のパンツ泥棒の技術についてはにじファンで前に呼んだ作品のネタをモチーフにしました。

いやね、当初は普通に出してやろうと思ったんですが普通じゃ面白くないな、って事で少しアレンジを加えようといういろいろ画策したのですが結局良い案が思い浮かばなくて……。

あまりにも前に呼んだ作品なんで作品名とか作者名とかよく覚えてませんが、とりあえずこの場をもってその作品を作った作者様に謝りたいと思います。ごめんなさい。

今後もひよつとしたらそう言う事があるかも知れないんで知っている人、もしいらっちゃんいましたらどんな作品だったとか教えて頂けたらありがたいな〜と思います。

銀魂世界での一日 part 1 (前書き)

前日のあらすじ。

志村家がハルマゲドンでドカーンー!!

何かが空から庭に降って来て、その何かにギロ口が偶然触れたらカオスになつて、カオスに『銀魂』のアニメを見せまいとしたけど不思議な力で結局見ちゃつて、今度はその不思議な力で自分達が『銀魂』の世界に連れて行かれちゃつて、『銀魂』の世界ではよりもよつてパンツをめぐつて変態と争うなんてくだらない争いに巻き込まれて。

ここで私は眼が覚める。くああと大きな欠伸を隠そうともせず堂々としてうんと体を伸ばしてほぐす。

周りには小雪ちゃんにモアちゃんに桃華ちゃんがまだぐっすり眠っている。

小雪ちゃんは蒲団の上で横にならずに体を起こしたままと変わった寝方だけど、いつもの事なので特に変化は無い。

ただ、着ているのはいつもの寝間着ではなく浴衣だと言うところと、今居る場所が自分の部屋ではなく和室だと言うところは全く違う。

パンツ争奪戦の翌朝、恒道館道場にて。

あれ、恒道館道場って昨日爆発しなかったっけ？ と言う方、そこはギャグ小説なんですから大目に見てください。

……と言うのはほんの冗談で、実際はカオスの水晶の力を用いて爆発にて跡形も無くぶっ壊された恒道館道場を元通りにしたと言うのが真相です。

「あ、おはようございます新八さん」

廊下で出くわした新八に夏美は朝の挨拶をする。

「おはようございます。起きるの早いですね夏美ちゃん」

「そう言う新八さんも早起きですね」

「これから朝御飯を作らないといけませんから。ところで他の皆さま

んは？」

「まだぐっすり寝てます」

「昨日いろいろあり過ぎたから疲れたんでしょうね……」

「朝御飯作るんですよね？ 私も手伝います！」

「と言っ事で彼等が台所に向かう二人。」

「夏美ちゃん達の親も心配してるんでしょうね……。カオス君の力で早いうちに連絡だけでもとれるようにしましょうか」

「そうですね……。」

あ、親って言えば、この家には新八さんとお妙さんしか居ませんが、新八さんの親はどうしてるんですか？」

「親は二人とも僕達が小さい頃に亡くなって今は居ないんですよ」

「そ、そうなんですか……：すいません、変な事訊いちゃって……」

「大丈夫ですよ、もう慣れてますから。そう言う夏美ちゃんの親はどうしてるんですか？」

「パパはどうかは分かりませんが、ママは元気です。」

……とは言っても仕事で忙しいから、なかなか帰って来れないんですけど」

「へえ……。お母さんはお仕事何をされてるんですか？」

「漫画の編集です」

「ああ、確かに忙しいですよ」

二人が親の事でのんびり雑談しながら台所に向かっているとジューとジューと何かを焼く音が聞こえてきた。

「誰か先に起きてたのかしら？」

「冬樹君やケロロさんが先に朝御飯を作ってくれてたりして……」

新八がそんな予想をすると普段一緒に居て二人をよく知る夏美は苦笑しながら「それは無いわ」と即答するので

「そ、そうなんですか？ だとしたら誰が……」

新八がいったい誰が起きて台所で料理を作っているのか考えるとある一人の人物が思い浮かび、ハツとなって「ま、まさか……」と呟き慌てて台所に向かった。

「新八さん？」

慌てる新八の後を追って台所に向かう夏美。

「や、やっぱり……」

「あ、お妙さん」

台所には一足早く起きてすでに着物に着替えたお妙さんが立っていた。

新八がガツカリした様子で声に出すが、夏美には新八がなんで落ち込むのかイマイチよく分からず普通にお妙さんの名前を呼ぶ。

「あら新ちゃんに夏美ちゃん、おはよう。よく眠れた？」

「はい、おかげさまでよく眠れました！」

「昨日は本当にごめんなさいね。怒りで我を忘れていたとは言え、貴方達をあんなくだらしない事に巻き込んで……」。

貴方達の方が大変な目にあっているって言うのに……」

「い、いいえ！ 気にしてないですよ！」

夏美とお妙さんがのんびり会話していると

「あ、そうだね。お詫びと言っちゃあなんだけど、朝御飯に卵焼きを作ったの」

お妙さんはそう言って『卵焼き』が乗っているお皿を夏美に渡す。え、何これ。卵焼きって言ったよね、卵焼きってこんな色してたっけ？

声に出さずに疑問に思う夏美。

まあそう思うのも無理はない。お妙さんから卵焼きと言って渡されたお皿の上にあるのは何処からどう見ても卵焼きとは言えない真っ黒に焼け焦げた何かなのだから。

「みんなの分も作ったから、みんなで食べてね」

それを作ったらしいお妙さんとはとても素敵な笑顔で食べるよう勧めてくる。

その笑顔からは彼女なりの善意だと言う事がひしひしと伝わってくる。

……お妙さんが作った焼け焦げた何かからは悪意しか伝わってこ

ないけど。

「あ、ありがとうございます……」

夏美は顔を引き攣らせながらもとりあえず一言作ってもらったお礼を告げた。

起こされた『ケロ口軍曹』メンバーが朝食をとるべく座ったテーブルの席の前に置かれたものを見て黙り込む。

「あの……これ、何？」

「卵焼きよ。ほら、昨日みんなには迷惑を掛けたじゃない？ そのお詫びと朝食を兼ねて、ね」

再び沈黙する一行。

ケロ口達はテレビで一度見ているとは言えここまで凄いものだとは思いつきもなかったのだろう。

しかもそんな凄いものにお詫びと朝食を兼ね備えさせているのだ、お妙さんの神経も普通じゃない。

「お〜、お〜！」

「あら、カオス君も欲しいの？ それじゃあ……」

カオスの小雪の腕の中で焼け焦げた何かを欲しがるような素振りを見てお妙さんは素直に食べさせようとする。

こんな小さな赤ん坊までこの焼け焦げた何かの被害に巻き込む訳にはいかないと

「それだけは止めてください姉上」

「あら、そう……」

新八は姉に一言お願いするとお妙さんは残念そうに呟いた。

さてさて、いったいこれをどうするべきか。

作ったお妙さんには申し訳無いけど、こんな食べ物かどうかすらも怪しいものを食べる事など到底不可能。なので

「あのー、作ってもらってなんですが……。我輩、お腹空いてないから大丈夫であります！」

「あ、ぼっ、僕も……」

ケロロと冬樹はそのような言い訳を言って食べないとはつきり告げて席を立つが

「朝はしっかり食べないとダメよ？ 一日の最初の食事なんだからお妙さんはこんな正論を口にするので「は、はあ……」と納得いかないもののしぶしぶ席に戻る二人。

そう言うのならもっとしつかりしたものを用意してください。お妙さん以外の全員がそう思った。

「あ、お、俺はさっきテントの中にあつた非常食を食べたからいらんぞー！」

咄嗟にギロロが食べない為に嘘を告げると

「良いから黙って食べやボケエエエー！」

とうとうお妙さんが怒って豹変、有無を言わずギロロの口に焼け焦げた何かを押し付けた。

口の中に焼け焦げた何かを押し込まれたギロロはよほど不味かつたのか白目を向いて倒れてしまった。

「さあ、冷めないうちに召し上げれ！」

ますます気まぎれになって黙り込む一行。

暖かいとか冷たいとかこれに関係あるのか、とか食べるしかないのかな……、とか彼等が考えていると

「よしよし、可愛いなあ、君達は！！ どれ、おじさんが食べてあげるからこのタッパーに入れなさい！！」

さっきまで影も形も無かった近藤さんがタッパーを持って笑顔でこう言うので少しだけ間を空けた後に

「だからなんでデメーは当たり前前みてーにこの場に居るんだアアアア……！」

何故ここに居るのかと怒って近藤さんを思い切り蹴りながらツッコむお妙さん。

冬樹達から見れば見事なタイミングで来てくれてありがたいのだが。

「……あら、タママさんとクルルさんはもう食べたの？」

お妙さんはタママとクルルの分の焼け焦げた何かが消えているのを見てさっきまでの怒りを一瞬にして忘れてこんな言葉を漏らすと「お、美味しかったですう！」とタママが戸惑いながらも返答する。冬樹達は一斉に二人の皿の上を見て確かに無くなっているのを確認した後二人を見る。

あれを食べたギロ口の様子を考慮すると二人があんな食べ物かどうかも定かではないものを食べたあとでは無いのは明らか。なら何故二人の分の焼け焦げた何かが消滅したのか。

そして彼等はふと近藤さんが吹っ飛ばされた時、そこら辺に落ちてしまったタツパーに視線を移すと焼け焦げた何かが二つ、いつの間にか入っていた。

（ま、まさか、お妙殿がツツコミに夢中になっっているあの一瞬間の間に入れたと言うのか！？）

（軍曹さん、ごめんなさいですう。でもあんなもの食べるくらいなら裏切った方がマシなんだよ！！）

（ク~~~~ツクツク！ ミートウー）

（貴様等ア~~~~！！）

ケロ口、タママ、クルルが心の中で会話する。

「嬉しいわ〜！ たくさん作ったのでまだおかわりありますよ。もっと食べてくださいな」

そうとは知らずお妙さんはタママとクルルにおかわりを持って来てくれたので

「い、いや僕もうお腹いっぱいなんで入らないですう〜！！」

タママとクルルは逃げるようにこの場から立ち去ろうとするが

「美味しいのなら入るでしょう？ 朝御飯ですし」

お妙さんの素敵な笑顔での訴える。

この女、自分達が口に入れるその瞬間を見ないと気が済まない性質ちなのか？

その瞬間、皆は悟った。どうあってもこの焼け焦げた何かの魔の手から逃れる術は無いのだと。

衣服はお妙さんと新八の古着を貸してもらった冬樹達がかぶき町万事屋及びスナックお登勢に向かうまでの道中。

「……気持ち悪い」

「うえ〜……」

彼等の体調は最悪だった。ケロ口達の顔の色もいつもの色より凄
い事になっている。

結局、あの後お妙さんの焼け焦げた何かを強引に口の中に押し込
めんでから、逃げるように恒道館道場を後にしたのだ。

お妙さんの卵焼きこと暗黒物質ダークマターを食べて無事で居られた人など今
まで誰一人として存在しない。

そんな最凶最悪の兵器を口に押し込められたケロ口達が無事で居
られる筈がないのだ。

「……新八さんが泊めるのを嫌がった理由がよく分かりましたわ……」

桃華が口をハンカチなどの小さい布で押さえながら呟く。

彼等の心情を満たすのはお妙さんに対する不満よりも、あの焼け
焦げた何かを食べた後の脅威的な気持ち悪さだけ。

そんな状態のまま向かったスナックお登勢。

「……顔が悪いように見えますが、大丈夫ですか皆さん？」

「大丈夫です……」

たまさんに心配される冬樹、夏美、桃華、小雪、モア。

初日に無断欠勤は避けたかったので無理にでもここへ来たが流石
に精神的にキツイ。

「……本当に大丈夫かい？」

「……本当の事を言うと全然大丈夫じゃないです……」

一度は大丈夫と言ったものの、気持ち悪くてしょうがない冬樹は正直に本心を打ち明ける。

「初日カラ体調不良トハ、タルンデル証拠ダ！！ 働ク気アルノカ才前等！？」

「お前が言うか」

ここぞとばかりに偉そうに注意するキャサリンにお登勢さんが呆れた様子で一言突っ込んで

「何かあつたのですか？」

「いろいろあつて、今朝ちよつと凄いものを食べさせられたんです……。てゆーか、四苦八苦？」

たまさんの質問にモアが簡潔に答えるとお登勢さんがハアと溜め息を吐いてから

「今日は実際に仕事をさせながら仕事の説明をするつもりだったんだけど、その様子じゃあ今は無理だね……。」

「じゃあ夜にもう一度ここに来てくれないかい？」

と予定を変更する。

「夜……？」

「ウチは夜が本業なんだよ。昼はもっぱらその準備なのさ」

小雪の疑問にお登勢さんは店の事を少しだけ教える事で答えると夏美が代表して申し訳無さそうに「わ、分かりました……。」と謝った。

と言う事で万事屋。

「そりゃあ災難だったな」

冬樹達の朝御飯を聞いた銀さんがリビングの奥にある社長椅子のような椅子に座って、近くに置かれた机に足を乗せて小指で鼻糞をほじりながら呟く。

「体調が良くなるまでここでのんびりするアル。良くなったら私達
がいろんなどころ案内してやるからネ！」

神楽がエツヘンと胸を張ってこんな言葉を口にすると

「え、俺も案内するの？」

「当たり前アル」

「嫌だよ、面倒臭え。オメー等ガキ共だけで行けば良いだろーが」

「やる事なんて無いんだからやれヨ天パー。年がら年中ジャンプ読
むか寝てるかテレビでお天気お姉さん見てるかの三択だけだろーが
ヨ」

「オメーも年がら年中遊ぶか定春の散歩か寝てるかの三択だけだろ
ーが!!!」

「銀ちゃんは大入、私は子ども、つつー事で問題無いアル」

銀さん、神楽の漫才のようなやりとりに冬樹達は気持ち悪いのも
忘れてつい口元を緩めてしまった。

「そう言えば、昨日居たあの女の人は誰なんですか？」

小雪が昨日の事で話を切り出す。

結局その後、冬樹達の状況をちゃんと説明できたのは新八の姉で
あるお妙さんと九兵衛さんだけで、さつちゃん、近藤さんの二人は
まだ冬樹達が置かれている状況など一切把握してないし、自己紹介
すらまともにしてないので彼等は冬樹達の名前も知らないのだ。

……まああの二人の事だから何処かで彼等の名前を聞いて何時の
間にか覚えていそうだが。

「身のこなしと言い、用いる武器と言い、ただの女子おなには到底思え
ぬのでござるがひよっとして……」

小雪も気になったであろうさつちゃんの事で気になる点を挙げる
ドロロ。

「あの女の事は忘れる。それがオメー等の為だ。」

まあどうしても知りたいのなら……ホラ、作者が原作知らない読
者に教える為の特別コーナーみたいなものがあるだろ、そこ読んどけ。

アイツ、そこそこ重要なキャラクターだからある程度ちゃんと説明してるし、オメー等の事情も何処かでこつそり聞いているだろーし」
「小雪ちゃん達は読者じゃねーんだよ!!! 無理言うな!!!」

銀さんが説明を面倒臭がって妙な事を言い出すので新八が怒声で銀さんに注意を促すと

「あれはさっちゃんアルヨ。なんでか万年チャランポランの銀ちゃんに寄って来る物好きなメス豚ストーリーカール」

その一方で神楽がさっちゃんの事を自分の言葉の知っている言葉で簡単に説明する。

「あれとはまた随分とぞんざいな……。ところで『さっちゃん』と言うのはやはり源氏名でござるか?」

「まあそうですね。本名、猿飛 あやめ。通称さっちゃん。元は幕府を護っていたお庭番衆の一人だったんですがリストラされて今は始末屋を営んでいます」

「始末屋ってどんな仕事なんですか?」

「やたらと物騒な名前でごさるが……」

「あー……それは小雪ちゃん達はまだ知らなくて良い商売ですよ」

ドロロや小雪の質問に新八が答えられるものだけはきつちりと答え説明する。

「昨日って言えばちょっと気になった事があんだがー……、オイ、

そこの四字熟語娘!」

「私ですか?」

「そうだよ。お前以外に四字熟語頻繁に使う奴居ねーだろ。昨日のあれ、えーっとはげませどん……だっけ?」

「ハルマゲドンです。てゆーか、究極奥義?」

「そうそう、それなんだけど、あれ普通の人間には出来ねーぞ。姿も変わってたし、オメーいったい何なんだ?」

昨日の出来事で気になったモアの事について本人に尋ねる。

「モアはアンゴル族と言う宇宙人なんです」

普通の人ならあつと驚くようなモアの衝撃告白でも特に動じる事

無く「あ、そうだったんだ」と意外に呆気無く受け入れる銀さん。

「えらくフツーな反応ですねえ……」

銀さんの反応を見てタママが呆れながら率直な感想を吐くと

「ここは宇宙人が珍しいところじゃねーからな……。現に家に居るし」

宇宙人が居る事はもはや当たり前前の事だと銀さんは告げる。

「……家に居るって？」

「私がそうアル!!」

「か、神楽ちゃんが宇宙人!？」

「その通りネ」

「へえ〜! そうなんだ〜! へえ〜!」

銀さんが言った最後の詞書になった神楽が宇宙人だと知るや否や純粋な好奇心に駆られて神楽を観察しては普通の地球人と差異が無いのを確認する冬樹。

彼に体のあちこちを観察される神楽は顔を赤くしていた。大方、同世代の異性、それも顔は悪くない冬樹にあちこち見られるのが恥ずかしくて仕方ないのだろう。なんだかんだ言って女の子である。

もっとも、神楽を観察する冬樹はと言うと『異性』とかそんな一ミリたりとも意識してないのだが。

銀魂世界での一日 part 1 (後書き)

ちーっす、白黒仮面ツス。

前回のお話でいろんな人が笑って頂けたようで嬉しいツス！
今後あんなハチャメチャなお話があるかもよ！？

ああ、そうそう、partは3まであります。

次回はあの男達登場！ 期待して待て！

銀魂世界での一日 part 2 (前書き)

『ちよこつと銀八先生!』

銀八先生「夜叉龍さんからの質問。』ところで銀八先生はやるんでしょうか?』

今回はね、やりません。

なんでつて? 面倒臭いからに決まってんでしょーが。

ケロ銀の方は先の展開をある程度は考えて書いているので問題無いのですが、銀八先生の方は本当に何も考えてません。

それに作者はね、一つの事に集中すると周りが見えなくなる性質だから一つの事にしか集中できないんですよ。

だからできません。前作とか良い例でしょ?

つっー訳で夜叉龍さん。廊下に立ってなさい!」

冬樹達の体調がだいぶ良くなったので町を歩きながら何処を案内しようか計画を練る銀さん達。

「案内なんて面倒臭えよ。適当にその辺のコンビニとかスーパー案内してとつと帰ろうぜ?」

「どんだけ面倒臭がつてんだア!!」

新八は銀さんの発言に注意すると

「……とりあえず真選組の皆さんのところには事情を説明しに行きましようか?」

特に親密な連中に事情を説明するべく当初の目的地を告げる。

「えー、嫌アル。なんであんな連中のとこに行く必要があるアルか?

バカ共紹介するくらいならあの、えーつと、『丁か半か』つて言うあそこ紹介した方が良いネ」

「……神楽ちゃん、そこ子どもが入りするような場所じゃないよ。ホラ、こう言う状況ですから味方は多い方が何かと得かと思つて」

神楽の変な発言に新八が呆れながら突っ込んでから口に出した新八のある疑問に

「バカが味方になつても変わんねーつて」

「もつとまともな奴に説明した方が良いアル」

「それもそうかもしれないけど、僕達の周りにまともな人つて居ましたっけ?」

「……居ねーな」

銀さんと神楽はしばらく黙つて考えた後、声を揃えて新八の質問に返答する。

昨日みたいな事もあつたし、僕達、無事に向こうに帰れるのかな……。冬樹は銀さん達のトークを聞いて少し心配になった。

「あの一、新八さん。さつき言つてた『しんせんぐみ』つていった

い何なんですか？ てゆーか、意味不明？」

先程の新八の台詞の中にあつた聞き慣れない言葉にモアが質問する。

「確か、そのような名の組織が冬樹殿達の世界の史実にもあつたよ
うな気がするのでござるが……」

「この世界の『真選組』は攘夷志士とかのテロに対抗するべく組織
された武装警察だ」

ドロロはその言葉がどのようなものだったのかを思い出そうとし
ながら聞き覚えがあるとだけ告げると銀さんが『銀魂』世界の『真
選組』の事を簡単に説明する。

「『じょういしし』？」

「ザックリ言うとテロリストの集まりアル」

またしても聞き慣れない言葉の出現に桃華が声に出すと神楽が物
凄く簡単に説明するので

「違うぞリーダー」。

攘夷志士とはこの国を汚す害虫あまんこ天人を討ち払い、もう一度侍の国
を立て直すべく行動する者達の集まりだ。

テロリストなどが見境無く人を襲う卑劣な連中と一緒にされては
困る。

攘夷志士には大きく分けて、武力を用いて倒幕を成そうとする『
過激派』と俺のように平和的な革命を望む『穏健派』の二つがあり、
攘夷志士が集うグループである攘夷党がここ江戸には多数存在する
のだ。

……まあ『過激派』であれ『穏健派』であれ政府である幕府に叛
く反乱因子に変わりには無い以上、真選組の連中に狙われるのは仕方
ない事なんだがな」

と見慣れない黒い長髪の男が『攘夷志士』について詳しく説明す
ると「へえ〜」と冬樹達は感嘆の声を漏らし

「……で、どちら様ですか？」

「どちら様じゃない、桂だ」

桃華の質問に男はこう返答した。

この黒い長髪の男が桂 かつら 小太郎 こたろう。

攘夷志士の生き残りで銀さんとは子どもの頃からの幼馴染。身体能力はかなり高い。

人の話を聞かずに淡々と自分の立場で話すので周りを怒らせる事もしばしば。

「なんで会話に入ってたんだ、ツラ？ つつーか何処から沸いて出たの？」

「ツラじゃないサブロー……あ、間違えた、桂だ。

何、町を散歩しておったらお前の顔が見えたんでな、声を掛けようとしたらちよどこの子等に攘夷志士の事について説明しているではないか。

そこで攘夷志士のこの俺が攘夷志士がなんたるものかを説いておこうかと思っただ。

……ところで銀時。この子達はいったいどうしたんだ？」

桂さんは銀さんの問い掛けに対する返答をしてから、気になった事を質問すると

「あー、場所悪いわ。また今度な」

誰かに聞かれる可能性があるのでまたの機会にと銀さんが返す。

「まさか貴様、また隠し子か？ 何処かで隠れてニヤンニヤンとは、まったく隅に置けん奴だな。

君達は銀時のような大人になつてはいけないぞ？」

「なんで隠れてニヤンニヤン！？ 仮にそうだとしてもコイツ等成長早過ぎだろーが！」

「おお、そつだ、困った事があつたら何時でも頼ると良い。銀時の同志として歓迎するぞ」

「オイ、何さり気に俺を同志にしてんだ」

「何を言ってる銀時。俺達はまなかではないか、当然だろつ」

い。

ととととと、とりあえずおおおおお、落ち着いてたたたた、タイムマシンをさささささ、探せ」

いくらムカつく相手とは言え自分の目の前に居た人物が何の前触れも無く消えて動揺しているのだから、近くの自動販売機の取り出し口に頭を突っ込んでガタガタと音を立てる銀さん。

「アンタが落ち着けエエエ！」と新八がツッコむと

「こ、こう言う時のカオス君であります!!」

「お、おお、そうだったな。よ、よし、タイムマシン出ますように……」

ケロロの発案を聞いた銀さんは手を合わせて何故かタイムマシンが出るようお願いする。

「なんでだアアア!!」

「直接時間が戻るよう頼んだ方が早いぞ……」

銀さんの言葉のおかしい点を指摘する新八とギロロ。

「ってそれより、こんな場所でそう言う会話はマズイよ!!」

突然の出来事、妙な会話で周囲の目が自分達に集中している。このままではカオス君の事がバレているとマズイ。

そう考えた冬樹はこれ以上の情報の漏洩を防ぐ為に注意すると

「ったくしょうがねえ連中だな……」

クルルが面倒臭そうな声を上げると地面の上に置いたノートパソコンを操作し始め

「これから今の現象を見ていた連中の記憶の操作してやつから、ちよつとばっかし待つてろ」

桂さんの姿が消える現象を目の当たりにした人達の記憶を消去すると告げる。

「そ、そんな事ができるアルか!？」

「もちコース」

眼を輝かせる神楽の質問に使い慣れた言葉で返事するクルル。

これなら人目を気にせず出歩けるので「いよっ! 流石はクルル

曹長！」「へえ、スゲーな黄色」とケロ口と銀さんはクルルを褒め称えた。

再び人目を気にせず道の真ん中を堂々と歩く銀さん達一行。

「ところで消えた桂さんはいつたいたいどうなっただんでしょう？ てゆーか消息不明？」

「何処か遠くにでも飛ばされたんじゃないかね？」

「もし僕達みたいにな事になってたらどうするんですかあ？」

「野郎の顔見なくて済むから良いじゃねーか」

「最悪、死の可能性もあるでござるよ？」

「あのバカはそう簡単にや死なねーよ。仮に死んだのならそれはそれでラッキーじゃねーか」

モア、タママ、ドロ口の質問に対して銀さんは態度を全く変える事無く平然と返答する。

ひょっとしてこれから会う人達も桂さんみたいな感じなのかな…。

そう考えるとこれから先の事がちょっと心配になってきた冬樹達。

「ツラの事は一旦忘れろお前等。バカだったが、今思えば良い奴だったじゃねーか」

「ツラ、安らかに眠るアル。化けて出ないようつとと成仏するヨロシ」

「桂さんならきつと何処かで生きてますって、勝手に殺さないでくださいよ」

桂さんが死んだと勝手に思い込むバカ二人にツツコミを添えてから「それじゃあ真選組の屯所に着くまでちょっとだけこの世界の歴史でも勉強しましょうか？」

いろいろと知ってた方が良いでしょうし、こちらとしてもいちいち教えるのは骨が折れますし」

そう言う理由で新八がこの世界の事について説明しても良いかと問うので「お願いします」と冬樹が返事する。

「侍の国、僕等の国がそう呼ばれていたのは今は昔の話。かつて侍達が仰ぎ夢を馳せた江戸の空には今は異郷の船が飛び交う。」

かつて侍達が肩で風を切り歩いた町には今は異人がふんぞり返り歩く……」

冬樹の返事を聞いた新八は『銀魂』の世界の歴史について語り始めるが

「なんでわざわざ原作一巻の冒頭説明まるまる持って来てんだよ。」

そう言う話は原作かアニメのDVDの最初の方を見てもらえば良いじゃねーか。そうすれば原作は読んでもらえるし、DVDは売れるし、一石二鳥だろ作者？」

「今更それやられるとマジウザイアル。そして空知に謝るネ作者」

「ちよ、『銀魂』の原作やアニメを知らない読者に説明する訳じゃないんだからね！？ 冬樹君達に説明しているんだからね！？ そんなとこ分かっているのアンタ等！？」

新八の説明に難癖付ける銀さんに当然の如く新八は反論するとコホンと咳払いして気持ちを落ち着かせて

「二十年前に宇宙から江戸に舞い降りた異人、この異人が『天人』あまんとでその二十年前の天人襲来の時に生まれた外来人を排そうとする思想、これが『攘夷』だよ。」

高圧的に開国を迫ってきた天人あまんとに危機感を感じた侍は彼等を江戸から追い払おうと一斉蜂起ほっせきして戦ったけれど、天人あまんとの強大な力を見て弱腰になっていた幕府は侍達を置き去りに勝手に天人あまんとと不平等な条約を締結。

幕府の中枢を握った天人あまんとは侍達から刀を奪い、彼等を無力化したんだ。

その後、主だった攘夷志士は大量に粛清されたんだけど、今でも天人あまんとを排そうとする活動をする、桂さんみたいな攘夷志士達も残ってるんだよ。

そんな彼等のテロから関係の無い江戸の住人を守る為に作られた組織が武装警察『真選組』しんせんぐみなんですよ」

『銀魂』世界の歴史を簡単に説明する新八。

要するに、僕達の世界の日本の歴史における幕末の重大事件である黒船来航が、外国からではなく宇宙から来た事になっているんだ。それなら、宇宙人がそこら辺に普通に居てもおかしくないよな……。冬樹達はその説明を聞いて「へえ〜……」と本日二度目となる感嘆の声を漏らすと

「昨日見慣れないゴリラ居たる？ アイツ、その局長らしいよ」
銀さんがこんな無駄な情報を付け足すので「え、ええええ！？」
あの人か！？」と冬樹達は驚愕し

「その割には軍曹さんみたいに威厳が無かったですねえ〜」
タママが包み隠さず正直な感想を述べると「グサーッ！」とタママの毒舌によりケロロがダメージを受けていた。

そんなこんなで真選組屯所にやって来た一行。

「『特別警察真選組』……」

大きな看板に書かれた文字を声に出して読む夏美。

門には二人、黒い制服らしい服を着た真選組の隊士のような門番が居たのだが銀さん達の顔を見ただけですんなりと入らせてくれた。屯所の中には門番が着ていた服と同じものを着た男が数人うろついていた。中にはバトミントンのラケットを素振りする妙な隊士も居たが

「山崎イイ！ てめーそこで何やってんだアア！！」

「う、うわアアアアア！！」

他の真選組の男達が着ているものよりなんだか偉そうな服を着た黒い短髪でかなりのイケメンがバトミントンのラケットを振る男に注意すると、山崎と呼ばれた男は一目散にその男から逃げ出す。

山崎と呼ばれた男が逃げ出すので注意した怒りっぽい男は凄惨な形相で山崎と呼ばれた男を追いかけた。

冬樹達がその様を呆れながら眺めていると

「あれ、旦那じゃねーですか。珍しいですねイ、旦那達が屯所に来るなんて」

不意に後ろから男の声が聞こえてきたのでちよっぴり驚きながら声が出た方向を振り向くとそこには先程の男のような他の真選組の男達が着ているものよりなんだか偉そうな黒い服を着た亜麻色の髪の毛の甘いマスクの確実にカツコイイ部類に入る男が居た。

バトミントン（以下ミントン）のラケットを振るう山崎と言う男は山崎退。

とにかく地味でその持ち前の地味さを密偵に地味に生かす、趣味はミントンとカバディと言うなんとも地味な男である。

山崎さんを注意した黒い短髪でかなりのイケメンは真選組鬼の副長土方十四郎。

瞳孔開きっぱなしの眼が特徴的でスパルタンな言動でテロリストだけでなく隊の若手からも恐れられる男。

極度のマヨラーで食べ物にならなんだってマヨネーズをたっぷりかけて食べる変人です。

どっかの赤ダルマさんみたくお堅く真面目な性格。

田 亜麻色の髪の毛の甘いマスクのカツコイイ男は真選組一番隊隊長の沖田総悟。

真選組随一の戦闘能力を有す好青年だが、超ドS気質。上記の土方さんとは真逆でかなりゆるいマイペースな性格で仕事は結構適当。正直何を考えているのか分からない男で真選組の中で一番歳が若いからか、言動が子どもっぽいところがある。

「来たくてこんなところ来た訳じゃねーよ。テメー等の大将はどうしたよ？」

銀さんが毒を吐きながら用事のある人物の事を尋ねると

「ああ、近藤さんなら……」

「お、万事屋じゃねーか。どうしたんだ？」

噂をすればなんとやら、昨日や今朝着ていた和服ではなく黒い制服に身を包んで何故か顔が蜂か何かに刺されたあとみたいにふつくと腫れ上がらせた近藤さんが姿を現した。

ひよっとしてまたお妙さんのところに行って殴られたのかな……、と冬樹達が呆れていると

「ちよつと用事があつて……」

「用事つてひよつとして、この子達の事か？」

新八が近藤さんの顔の事には一切触れずに会話を進める。

昨日会った時にその事を訊こうとしたけれども状況が状況で結局訊けずじまいで終わってしまった為、近藤さんも気になっていたようだ。

「察しが良いじゃねーか。んじゃ、場所変えようぜ」

銀さんがそう言つて他の連中に聞かれないよう場所を変える。

一行は真選組屯所内の一室に場所を変え、冬樹達の自己紹介、及び状況説明をすると

「お前等、一度精神科で診てもらった方が良いんじゃないのか？」

「あ、俺知り合いに居ますけどそいつに頼みましょうかい？」

大方読者のみんなも予想していた通り信じられないと告げる土方さんと沖田さん。

「ああ、頼む」

「それじゃあ土方さんもついでにお願いしときますねー」

「オイ、なんで俺もついでなんだ？」

「カツ井を犬の糞に昇華できるほどマヨネーズをたっぷりかける奴も充分異常でさア」

「よーし、テメーも診てもらおうじゃねーかドS王子！！ 叩っ斬つて病院送りにしてやらア！！」

沖田さんが土方さんをからかい、からかわれた土方さんは簡単にキレて自分の腰に差している刀を鞘から抜き放つ。

「やめる二人とも。冬樹君達に迷惑だろう」

冬樹達の説明を聞いて黙って腕組みをしたまま考え込んでいた近藤さんが二人にそう告げて制止させると

「状況は分かった。俺達も何か手伝える事があつたら協力しよう」

冬樹達の言う事を信じる、と真剣な口調で伝える。

「おいおい、本気か近藤さん？」

「マジでコイツ等の話、信じるんですかイ？」

土方さんと沖田さんが心底呆れながら尋ねると

「昨日、新八君の家で物凄い規模の爆発があつたんだが、この赤ん坊の力で跡形も無く綺麗に無くなった新八君の家が一瞬で元通りになったのを見させてもらったんだよ。」

正直に言うつとまだ半信半疑なんだが一度この眼で見た以上嘘だとは思えんし、何よりそれほどの力だ。悪用された時の規模がとてもじゃないが計り知れん。

そうならないようにするのも、真選組の仕事だろ？」

近藤さんはこう言つて考えを変えなかつた。

何時に無く仕事熱心で近藤さんの言葉を聞き、頭を抱えてハアと深い溜め息を吐く土方さん。

冬樹達の眼に映る、ゴリラによく似た男の姿。

少なくとも、昨日や今朝、お妙さんの前に現れた変態の姿はここには無かつた。

眼の前に居るのは紛れも無く真選組の猛者共をまとめる局長、近藤 勲その人だと彼が放つ雰囲気から感じ取れた。

「近藤さんがそう言うのなら信じるしか無いですよネイ、土方さん？」

「んな事ア言われなくても分かつてる！ つつーかテメーもさつきまで疑つてただろーが！」

沖田さんが嫌らしい口調で土方さんに話を振るとその土方さんは

沖田さんに対して苛立っているのだろう、少しだけ怒ったような言い方で返答する。

その二人の姿が、何処か身近な誰かさん達とそっくりなような気がして冬樹達から笑みが零れた。

銀魂世界での一日 part 2 (後書き)

ちず、いろいろ仮面……じゃなかった白黒仮面です。

ゴールドデンウィークツスねえ。読者の皆様、如何お過ごしでしょうか？

作者は相変わらず辛うじて死んでます。

今回のお話もいろいろありましたねー。

まあ『銀魂世界での一日』はそこまで大きな問題は起きないんで思う存分ほのぼの感を堪能してください。

まあ壊れた家が元に戻ったり、人が一人消えた時点で結構な問題かとは思いますがね。

では次回もお楽しみに！

銀魂世界での一日 part 3 (前書き)

『ちよこつと銀八先生!』

銀八先生「それでは早速質問。

『もしお妙に「これは卵焼きじゃなくて宇宙最悪の激不味い兵器だよ。そしてなんで火を通さないのに食べ物で、ダークマターに出来るなんて魔王なの?」なんて、言ったらお妙はめちゃくちや怒り狂いますか?』」

?「先生、その質問は誰からですか?」

銀八先生「百鬼丸さんからの質問です」

お妙さん「百鬼丸さん……ですか」

百鬼丸さん逃げて! 超逃げてエエ!!

「じゃあ次何処行きましょうか？」

のんびり歩きながら何処に行こうか会議する万事屋三人組。

ちよつとしたハプニングはあったものの当初の目的である真選組の連中に冬樹達の事情を説明したので、ここから先は適当に案内すれば良いのだが、なにせ銀さん達の知り合いと言つものは非常に多い。

神楽は「うゝん……」と唸り声を上げながら何処が良いか本気で悩み、銀さんは「もう帰ろうぜ……」と愚痴を吐く。

銀さんは外出する前も案内するのを渋っていたけど「どんだけ面倒臭いのよ……」と夏美が思った事を口に出してしまった。

「……平賀ひらが 源外げんがいの機械工場からくりに案内してくれ」

案内する場所に困っていた銀さん達に行きたい場所を告げるのはクルル曹長。

「別に構いませんけど……」

「黄色、なんでジジイの事知ってんだ？」

新八は気になりながらも承諾し、銀さんが新八も気になったであろう疑問を声に出して不思議がり、冬樹がさらに質問を増やすと

「ナイシヨだよーん。くつくつく……」

クルルがふざけた口調でこのように返答するので「……うぜえ」と銀さんは本心を口に出した。

「その平賀 源外ってどんな人なんですか？」

クルルが口にした人物の事が気になったのか、ケロロが銀さん達に質問すると

「江戸一番の機械からくり技師、平賀 源外。そう呼ばれるほど有名な発明家なんですよ」

「まあ、今はちよつと訳有りでツラみてーに指名手配されているけどな」

新八と銀さんは源外さんの事について知っている事を話す。
桂さんも結構頭がおかしかったし大丈夫かな……と心配する冬樹達。

源外さんの機械工場『からくり堂』に到着した一行。

「私、『からくり』ってもうちょっと違うものだと思ってたんですけど、なんだか全然違いますねー……」

大方カラクリ人形とかの『カラクリ』と思い込んでいたのである。う小雪が工場の床に四散するガラクタや並べて置かれたロボットを見た感想を呟く。

「ジジイ、居るかー？」

「なんだ、オメー等か。どうしたんだ、こんなガキ共たくさん引き連れて」

銀さんが源外さんの名前を呼ぶと工場の奥から眼にゴーグルを掛けて繫ぎを着たお爺さん、平賀 源外が姿を現した。

「その事でちよつと用事があつてな……」

真選組屯所での近藤さん達と同じように冬樹達の事を説明する。

「説明面倒臭いし、無駄に改行されるのもアレだからこつからは……えーつと、コンテのCMに出てたあの鹿で済ませるアル」

神楽の凄い発言に呆れ返りながら「『かくかくしかじか』ね」と夏美が指摘すると「あ、そうそう」と神楽が呟く。

「なるほどな……」

「どうせジジイも『信じられねえ』って言うんだろ？ そうなんだろう？」

今までのお話でもう読者は次の言葉だいたい読めてんだよ。裏取れてんだよ、こつちは」

「なかなか興味深い話じゃねーか。協力できる事があるなら協力させてもらうぞ」

「あれ、ジジイ、信じるの？ こんな馬鹿げた話信じちゃうの？」

「生憎馬鹿げた事をやってのけるのが俺の商売だからな。確かに信じられねー話だが、そう言う話ほど信じてやりてーのよ」

源外さんも信じないだろうと思っていた銀さんは源外さんの予想外の反応に言葉を失った。

「流石は江戸一番の機械からくり技師、平賀 源外。早速お願いがあるんだが良いかい？」

「何だ？」

「ここにあるガラクタとこの場所、使っても良いですかー？」

「良いぞ」

自己紹介する時にアンチバリアを切ったクルルが最後棒読み気味のふざけた言葉で源外さんにここにあるものの使用許可を求めると源外さんはあっさりと許可するので「軽っ！！」と新八が一言。

「くつくつく！ 話が分かるじゃねーか爺さん。代わりと言っちゃあなんだが俺達の世界の技術をちよつと見せてやるぜえ」

「良いのか？」

「大丈夫だ、気にすんな」

その後もクルルと源外さんはいろいろな話をして盛り上がっていた。

その後、いろんなところを案内する万事屋一行。

お妙さんの働くキャバクラ『スナックすまいる』では

「ドンペリはいりまゝす！」

「ちょ、何勝手に頼んでんの！？ そんな金無いの知ってんだろ！
？ それに冬樹君達未成年だからね！」

お金が無いにも拘らずお妙さんに勝手にドンペリを頼まれ。

オカマがいつぱいの『かまつ娘こ倶楽部』では

「あら、貴方可愛いじゃない〜！　ウチで働かないかい？」
「け、結構です……」

冬樹が店のママである西郷さいこうさんに働かないかと勧誘され。

イケメンホストが集う『ホストクラブ高天原たかまがはら』では

「ウチは職業柄、こう言うサービスしかできませんがどうぞ」

「は、はあ……」

そのオーナー兼No.1ホストの狂死朗きやうしろうさんが銀さん達の知り合いと言う事で冬樹達全員に場違いではあるもののお酒以外の飲み物をサービスしてもらって。

『火消しのめ組』では

「辰巳！！　火事だ！！」

「分かった！！　じゃあ銀さん、そう言う事だからまたな！！」

のんびり会話しようと思ったところに事件が舞い込み辰巳たつみさんが仕事に出掛けて。

こうしているんな場所に行って案内した一行が公園で一息入れているとサングラス（以下グラスン）を掛けて見るからに貧相なりな形をした男に出会った。

「あつ、長谷川さん！」

「マダオ、こんなところに居たアルカ」

新八、神楽がその男の名を呼ぶ。

見るからに貧相なりな形をしたグラスンを掛ける男性の名は長谷川はせがわ泰三たいぞう。

昔は幕府の入国管理局の局長と言う偉い人だったのだが不祥事を起こしクビになり、その時の姿は欠片も残ってない。

人柄はとても良いのだが、かなり不運なお方で今や職だけではなく家まで失ってしまいダンボールがマイホームと化している始末。

「やあ銀さん。どうしたの、そんな大所帯で」

「長谷川さん、悪いがそろそろ読者もこのやりとり飽きて来ただろうからかくかくしかじかで割愛させてもらおう」

「いやちよつと待ってよ銀さん。割愛するのはせめて俺の台詞に何か言葉返してからにしてよ」

「どうせまた俺が『まあいろいろあつてな』とか『そう言う長谷川さんは今日も独り身か?』とかそう言う感じの事言うだろうなって読者が思い始めてきたから思い切って割愛しようって言うてんじゃねーか」

「それ俺限定じゃん、今ここで言えば良いじゃん! その言葉に『宿無しだから独り身もしょうがないだろ』って俺が返せばそれで良いじゃん!」

と銀さんと長谷川さんがやりとりしている間に

「神楽さん、『マダオ』って言うのは?」

「『まるでだめなおとな』略してマダオアル。他にもいろいろな用途があるネ」

神楽が言うマダオの意味を本人から学ぶ桃華。

なんとまあ失礼なあだ名を年上の人に付けてるんだろう、と思いつつ自己紹介する冬樹達と長谷川さん。

「……それでなんでこんなところに居るんですか?」

今は平日の真昼間。銀さんのような特殊な職ならともかく、普通の人なら働いている時間なのだがその時間帯に何故こんなところに居るのかと冬樹が尋ねると

「働く仕事も帰る家も無いからさ……」

長谷川さんから帰ってきた予想外なまでに悲惨な返答に「わあ……と言葉を失う冬樹達。

そう言う長谷川さんも自分で言うておきながらもなんだか凹んで

いるようだ。

「励ましたりお金あげちゃダメアルヨ。そう言った悪い習慣がマダオに身に付いちゃうから」

「動物園の動物じゃないんですからそこまで言わなくても……」

神楽の発言に桃華がツツコむと

「気にしなくても良いよお嬢ちゃん達。すぐに俺のもの全部無くなるから……」

「全部って何!？」

「あわわわわ、諦めないで長谷川さん!!」

長谷川さんがなんだか危険な事を口にするのでケロ口は気になった言葉を問い、冬樹は長谷川さんを励ます。

そんな感じのやりとりをしているとまたもや前触れも無く強い光が発生して一行の近くにごく普通の一戸建ての家が出現した。

「ちょ、いきなり何これ? 確かに雨風凌げる宿が欲しいなあとは思ってたけどさ、今何が起きたの!？」

突然の出来事に慌てふためく長谷川さんに対し

「またか……」

「どうやらちよつとした冗談やささやかな願望でも形にしちゃうみたいですね……」

カオス君の額の水晶の力を四回も経験し慣れたのか驚くを通り越して呆れる銀さんと新八、その他の面々。

「ここまで来たら話すしかねーな……」

「じゃあとりあえず他の人に聞かれないよう家の中に……」

と言う事で場所を出て来た家の中に移す。

「信じられないけど、今こうしてありもしない家の中に居る事を考えると信じるしかないんだろうな……」

カオスの異常な力の説明、及びアンチバリアで姿を隠していたケロ口達の自己紹介を突如出現した家の中で済ませた長谷川さんの一言。

蛇口を捻れば水が出て、スイッチを入れれば明かりが点く、一見普通の家。

いったい何処から水が出て来るのか、電気はどうしているのかは謎だが、野宿をするよりは雨風は防げるし家賃、水道代、電気代も不要ともう何十倍もマシである為「折角だからここに住まわせてもらうけどいいかな？」と付け足す。

「でも、こんな公園の中に誰の許可も無く勝手に家を建てて大丈夫なの？」

ここで長谷川さんが気になる点を指摘する。

長谷川さんの言う通り、みんなが使う場所に許可も無く家なんて建てたら問題にされるのは明白である。

「じゃあ壊すアル」

そんな長谷川さんの気になる点をこの家を壊す事で解決しようとする神楽が己の拳で今居る家の壁を殴ってぶっ壊した。

神楽の拳で家の壁に大きな穴が空く。

「なんでだアアアア!!!」

「要は邪魔って事なんだろ、だからぶっ壊すネ」

「全然邪魔じゃねーよ！ そりゃ一般市民から見れば邪魔だろーけど、折角作ってもらった家なんだから壊すんじゃねーよ!!!」

神楽のおかしい言動に声を荒らげながら長谷川さんが注意していると

「ま、確かに場所が悪いな。場所を変えるか」

「そうだよ銀さん。だから……」

銀さんが尤もな案を告げるのでその案に長谷川さんが賛同するが

「じゃあ神楽、壊してー」

「だからなんでだアアアア!!!」

何故かその案を出した銀さんが壊すと言い出して神楽が「ウーッス！」と返事してから今度は蹴りで家の壁を壊すので長谷川さんは再度叫んでツッコミを入れた。

「なんで二言目には『壊す』って単語が出て来るんだよ!」

「このままじゃ運べねーだろ。だから小さく砕いて運べば……」

「運び終えてる頃には家が瓦礫の山になってるんだよ！！ 結局俺宿無しのままなんだよ！！」

「このまま運んでくれねーと意味無えじゃん！ あの子の水晶の力使えば簡単じゃん！」

「これ以上、騒ぎを起こしたくねーから使いたくねーんだよ」

「騒ぎを大きくしてるのはお前等！！」

まるで漫才のようなやりとりを経て

「そつだ、オイ、四字熟語娘！」

「はい、なんでしようか？」

「昨日のあれ、出来る？ この家だけぶっ壊したいんだけど……」

「ちょ、何言ってるの銀さん？」

「出来ますけど良いんですか？」

「良いよ。何か起こった時は黄色、頼むわ」

「りょうか……い……。くつくつく……」

「話聞いている！？」

銀さんが長谷川さんの制止を物ともせずモアにこの家の破壊を、クルルにその後の処理を頼むと

「銀さん、カオス君の水晶の力を使ってこの家の場所だけ変えてあげようよ」

「流石に可愛そうでござる」

「ここに居ると俺達も危険だな。神楽、コイツ等この家から追い出せ」

冬樹やドロロが長谷川さんに味方するも全く聞く耳持たずの銀さんは問答無用に事を進め、銀さんの命令を受けた神楽も「ラジャー！」と敬礼しながら返事して冬樹達を力づくで追い出した。

「ハルマゲドン、一億分の一っ！」

誰も居なくなつた室内で擬態を解除したモアちゃんがハルマゲドンを放つ。

先程まで家だったものが一瞬にして塵と化するのを外でグラサンごしに眺める長谷川さん。

泣いているのか、煌く何か長谷川さんの頬を流れ落ちていた。

「は、長谷川さん……」

「……良いよ、これで。そもそも楽しんで家手に入れようなんて夢みたいな上手い話、ある筈無いんだから……」

冬樹達が恐る恐る長谷川さんを励まそうとするが、長谷川さんは弱弱しい声でこの世の常識を告げる。

「こちとら下のババアが家賃、家賃うるせーってのに、なんで長谷川さんが家賃も無しに家に住まねーといけねーんだ。不公平だよ、不公平」

「マダオのくせして生意気アル！ あー、清々したー」

「おーい、オメー等行くぞー」

長谷川さんが落ち込んでいるのにも拘らず追い討ちをかけるように包み隠さず本音を打ち明ける銀さんと神楽が冗談抜きで悪魔に見えた。

こんな具合に行った先でトラブルに巻き込まれながらも他にもいるんな人達を紹介してもらった冬樹達。

気が付けばもうすっかり空は夕焼け色に染まっていた。

「いやあ、銀時殿達の知り合いつてとっても多いでありますな！」

「まあな」

「銀さん銀さん」

「なんだあ、ぱっつあん？」

「今思ってたんですけど、冬樹君達にキャバクラとかホストクラブとか紹介して良かったんですか？」

「吉原紹介するよりは数倍マシだろ」

「ま、まあ、そうですね……」

「『よしわら』ってどう言うところですか？ てゆーか、興味津々？」
「オメー等が知るにはまだ早え」
昨日、今日と銀さん達の生活に触れてすっかりに彼等に興味を持った様子のケロ口達だった。

その日の夜のスナックお登勢。

「客にお酒持って行って、コップにお酒を注ぐ。それがアンタ達の仕事だ。接客の時は笑顔を忘れないでね。」

あたしも一応注意するけど、たま、キャサリン、この子達に何かしようとする輩には容赦しなくて良いよ」

お登勢さんは夏美達に仕事の説明をするとたまさんとキャサリンに結構乱暴な注意事項を付け足す。

冬樹達やキャサリンは「はい！」「分ツカリマーシタ！」と元気の良い声で、たまさんは「了解しました」と抑揚の無い機械のような声でお登勢さんに返事して内容を理解したと言っ意思表示をする。

「お登勢さん、お酒ー！」

「こっちもー！」

そこで店に来ていた客が酒を要求してくるので「はいよ」と客に一言返事してから

「まあ初日で緊張するとは思っけど、すぐに慣れるさね。じゃ、行ってきな」

と夏美達に声を掛けて励ますと夏美達は「はいっ！」と再度元気の良い声で返事して客の下へ向かった。

「初めて見る顔だね、新入り？」

「は、はい、日向 夏美です」

「へえ、夏美ちゃんかあ、可愛いねえ〜！」

「い、いえ……」

「その子達に手え出すようなら容赦しないよ」

「分かつてるって、お登勢さーん……」

夏美がお客さんのコップにお酒を注いでいる間、店のお客さんが和気藹々とお登勢さんとの会話を楽しんでいると突如、ドカアアアアン！！と店内で凄い爆発が発生。

爆発により生じた煙が宙を漂う中、「な、何、今の？」などと口にしながら爆発に巻き込まれなかった者達は慌てて爆発の原因を探るべく爆発が起こったと見られる箇所を見つめる。

爆発により生じた黒い煙がある程度薄まるとその近くには無傷のモアにモツプをしっかりと手に握るたまさん、そして黒焦げにされたお客さんらしきものの三人が居た。

「ああなるから覚悟しておくんだね」

「は、はい……」

お登勢さんの言葉を聞いてお客さんは少しだけ顔を青ざめていた。たぶんお客さんがモアちゃんに何かちよっかいを出したのを確認したたまさんがお登勢さんの宣言通り攻撃したのかもしれないけど、流石にコレはやり過ぎじゃないんですかお登勢さん……。

冬樹達が二、三時間、お登勢さんの店の手伝いをした頃。

「こんな時間だし、アンタ達はあがってもう帰りな」

お登勢さんから仕事を終わりにして帰るよう命じられる。現在夜十一時前。普通の子どもなら寝る時間である。

「ええ！？ でもまだお客さんも大勢居ますし……」

しかし、このお店に来ている客はまだ結構居る。自分達が帰った後の事を小雪が心配するが

「良いつて良いつて。あとはあたし達だけでも充分さ」

とお登勢さんが言葉を返すので少しだけ納得がいかないものの「わ、分かりました……」と言って冬樹達が頷くと

「あ、今日は仕事の説明をする為に全員に来させたけど明日からは二、三人で充分だから。」

「アンタ達も街を見て回りたいたる？　だから明日までに誰と誰が組んで一緒に来るか決めといてくれ」
最後にそのような事を付け足した。

スナックお登勢から恒道館道場までの帰り道。

道中、子どもだけでは危険と判断した新八が帰る先が同じと言う理由もあって冬樹達とケロ口達に同行する。

「今日もいろいろあって楽しかったであります！」

「ですねえ〜！」

今日の出来事を振り返った感想を告げるケロ口とタママ。

「お登勢さんが言ってたあれ、さっさと決めちゃおうか」

冬樹がお登勢さんが言っていた誰と誰が組んで一緒に行くかを決めようと言い出すので「それもそうね」と夏美が賛同する。

（ヨッシャア！！　ここで冬樹君と二人で組む事が出来れば、仕事の無い日は二人きり！！　こんなチャンス、二度と無いぜ！！）

（はいっ！！）

『裏』桃華の妙案を実行に移すべく

「ふ、ふっ、ふふふ冬樹君！！！！　わ、わわわ、わわわわ私と…」

『表』桃華が顔を真っ赤にして私と組もうと懇願するがあまりに緊張して声が出ない。

「西澤さん。僕と組む？」

そんな彼女に聞こえてきたのは冬樹からの耳を疑うような素晴らしい申し出。

「えっ、えええ、えと……あ、あ、あ、あの、そそそそ、その、はい……」

憧れの冬樹君からの申し出、断る理由など無い。

顔を照れで真っ赤に染めてその真っ赤に染まった顔から湯気のように

うなものを出しつつ冬樹の申し出を承諾するとふ、冬樹君が……冬樹君が、私を誘ってくれたあゝ！！とか小さな声で呟きながら自分の妄想世界へダイブする桃華。

そんな桃華だが、肝心の冬樹はと言うとただ一人の友人として普通に声を掛けたのだろうが。

「じゃあ、私と小雪ちゃん、モアちゃんは三人で組みましようか？」

桃華の顔色を伺い、彼女の心情を察した夏美がそう告げると小雪とモアは「「はい！」」と元気の良い返事をする。

恒道館道場に帰り着き、風呂も早々と済ませて寝る準備が整った各々は蒲団の中に入り就寝する。

いろいろ驚かされたけど、私達の世界と意外に差が無かったわねー……。

家にはコンロに冷蔵庫、テレビもあるし外には自動販売機やコンビニだってある。

昨日みたいな普通じゃあ到底あり得ないようなバカ騒ぎも個性豊かな人達も……ハッ！ いけないいけない、すっかりボケガエル達に慣らされてる……。

でも……みんな悪い人じゃないみたいだし、大丈夫よね……。…本当に大丈夫かな？ あれ、なんか心配になってきちゃった。

とにかく明日からは絶対早く起きて朝御飯作るう、そう思い夏美は瞼を閉じ意識を手放した。

銀魂世界での一日 part 3 (後書き)

ども、白黒仮面です。

来た感想に書かれまくった桂さん。どんだけツラ好きなんだよお前等ww

いや、それだけの事をしたかもしんないけどさ。

……別に感想書くなって言ってる訳じゃないよ？

ただね、感想の返信に困るんですよ。作者のぼきやぶらりーは豊富じゃないんです。

たぶん、今回のお話の感想には長谷川さんの事が書かれるんじゃないかな。

カオスの成長（前書き）

『ちよこつと銀八先生！』

銀八先生「セイワさんの質問。『ケロロと銀さんが入れ替わる事件』や『ケロロ達と銀さん達が子供になる事件』はやるんですか？』

あー、リメイク前にやったお話を今回もやるのかって内容の質問ですね。

お答えしましょう。ズバリやります。

『ケロロ達と銀さん達が子どもになる事件』は結構早めに、『ケロロと銀さんが入れ替わる事件』は結構後に計画しています。

これ以上はネタバレになるので言えません。と言う訳で、セイワさん、廊下に立ってなさい！」

カオスの成長

銀さん達にいろんな場所を案内してもらった翌日の早朝。恒道館道場のとある部屋。

そこに敷かれた四組の蒲団の上で冬樹とケロロ、タママの『ケロロ軍曹』男メンバーがすやすやと気持ち良さそうに眠っていた。ギロロはこっちに來た初日にカオスの水晶の力で持って來たテントの中、クルルは源外さんのところで寝泊りするそうて不在。

ドロロはもうすでに起きているのかその部屋に彼の姿は無い。バキバキ、ガリガリ……

未だ眠る彼等の寢息と鼾と齒軋りが響く部屋に聞こえてくるのは謎の音。

音からして何か堅いものを削っているようだ。

「う、ううん……」

何処からか聞こえてくるそのお音に少し不快に思ったのか、眠ったまま唸り声を上げる冬樹。

バキバキ、ガリガリ……

それでもその音は止む事無くしんと静かな部屋に響き続ける。

「軍曹……うるさい……静かにして……」

起きるのが面倒臭い冬樹は毛布に包まって音の原因であろうケロロ口を注意するが

バキバキ、ガリガリ……

依然鳴り止まぬ謎の音を聞き、冬樹は毛布から少しだけ顔を出して重い瞼を強引にこじ開け焦点の定まらないとても眠たそうな眼で周囲を見渡すとケロロとタママが蒲団の中で気持ち良さそうに眠っているところだけははっきりと確認する。

じゃあ誰がこの音を出してるんだろ……？

この部屋に居ない姉ちゃん達や伍長、ドロロはそんな事しないから違つとして、一番あり得るのはクルル……だけど………眠い。

眠たいのを我慢して謎の音の音源を確かめるか、それとも眠気に負けて誰かが謎の音を止めるのを待つか。

バキバキ、ガリガリ……

冬樹が毛布の中で悶々としている間も聞こえてくる謎の音。

気になって気になって仕様が無い彼は興味関心に負けてとうとう毛布から抜け出して謎の音の音源を探す事にした。

本来なら後者を選びそうな自分がまさか前者を選ぶとは、我ながら珍しい事もあるものだなあ……、なんて心の中で呟きながら冬樹が謎の音がする方向へ向かっていると屋敷の至る所が荒らされているのを発見した。

座布団は大きく切り裂かれ中の綿が飛び出し、机や柱には堅いもので削った痕があちこちにあり、襖や畳には大きな穴が空いていた。

「なんだろうこれ……？」

当然、昨日寝る前にはこんな傷など無かった。

寝ている間に誰かが侵入して意図的に散らかした可能性もあるにはあるが

バキバキ、ガリガリ……

と先程から止む事の無い謎の音はよくよく聞いてみると硬いものを削っているような音にも聞こえる。

この事からこの謎の音の音源と部屋を散らかした犯人は同一人物である可能性が非常に高い。

冬樹が恐る恐る謎の音の音源に近付くとそこには小さな体をした赤い蛙のような生き物が居た。

一見ケロン人のようにも見えたが、よく見るとその頭はケロン人にしてはやけにトゲトゲが多く、それに加えてサイのような角が一本生えていた。

「なんだあ、カオス君か……」

泥棒か近藤さんかと思いついていた冬樹は安心して溜め息の代わりにふわぁ〜と大きな欠伸をするが、ふと何かおかしい点がある事に気付く。

どうやって謎の音を出しているか、だ。昨日までは歯は生えてなかった筈である。

ひよっとしたらとつても成長が早い種族でもう歯が生えたのかも知れないが、それでも気になってさらに接近する冬樹。

「む？」

その冬樹の気配を察したのか、カオスが冬樹の方を振り向くと器用に手に持った座布団のようなものに口を大きく開けて噛み付き、大きく口を開けた時に見えた綺麗に並んだ立派な歯を用いて引き千切る。

モグモグと口にくわえたものを噛んで飲み込むと座布団のようなものを捨てて手と足を使ってハイハイして冬樹の視界から消えていった。

寝惚けていたのもあつてしばらく黙つてこのカオスの様を見ていた冬樹だったが一気に眼が覚めて

「う、うわあああああ！　か、カオス君ダメだよそんなもの食べたら！！　体に良くないよ！！」

本当に体に良くないのかどうかまだ定かではないので最後に非常に小さな声で「たぶん……」と付け足し、カオスを大きな声で叱る。

「うええええええええん！！」

「ああ、ご、ゴメン！　泣かないで〜！！」

冬樹の大きな声を聞いてショックを受けたか、それともまだお腹が空いているのか。

そのどちらなのかは分からないがカオスが大きな声で泣き始めるので冬樹はカオスを宥める。

「どうしたんですかあ？」

「朝からやかましいでありますな冬樹殿　　つて何これ！？」

眠りから覚めたケロロやタママが現場に姿を現してはその惨状に愕然とする。

万事屋リビング。

「　　って事があつたんだ」

「へえ」……」

朝の出来事を銀さんと神楽に報告する冬樹。話の主要人物であるカオス君はと言うと桃華に抱かれたまま眠っている。

ちなみにカオスに食べられた部屋の物はカオスの水晶の力で元に戻したのだが、それは銀さんと神楽にも予想できていたので深く追求しない事にした。

「その後、カオスはお妙殿の作った卵焼きを一つ残らず全て食べ尽くしたのであります。それも平然とした態度で……」

「そのガキどう言う胃袋してんの？」

「……でもこれで食費は浮くし、ゴミは減るし、一石二鳥ですよ」
「ただ食うだけのウチの胃拡張娘とデカ犬にも見習って欲しいくらいだよ」

カオスの胃袋についてちょっと疑問を抱いた一行だったが銀さんが万事屋に居る家計を圧迫する一人と一匹に対する愚痴を吐くと

「なんかムカつくアル。定春ー、ゴミに噛み付くヨロシ」

銀さんの言葉が気に入らなかつたのか、神楽が定春に命じると定春は銀さんの頭にガブツと噛み付いた。

定春の牙が結構深くまで食い込んだのであろう、銀さんの頭から血が流れ落ちる。

「オイ、定春。なんで俺に噛み付いた？」

「流石定春アル、人間のゴミを判別できたネ」

「銀さんゴミつすか！？　離せこのデカ犬！！」

神楽が自分を人間のゴミと言つた事には一切触れずに頭から血を流しながら定春に注意する銀さん。

定春は噛み付いていた銀さんの頭から離れるとのっしのっしと誰かの下に向かう。

「……ゲロ？」

銀さんと神楽のやりとりを笑いながら見ていたケロロが自分の凄
い近くに居る定春に気付いてヒツと小さな悲鳴を上げる。

気のせいか、あの黒いつぶらな瞳がじくくと我輩の事を見つめて
いるような……。

そう思い、確認の為万事屋リビングの中を動き回るケロロ。

ケロロが動けば定春ものっしのっしとその後を追い、ケロロが止
まれば定春も止まる。

……間違い無い。定春君、完全に我輩を狙っているうう!! で
もなんで!?

「さ、定春くうくん?」

自分をじつと見つめる白い巨大犬に恐怖を抱いて裏返ったような
声で名前を呼ぶと白い巨大犬ががばつと口を大きく開けて自分に噛
み付いてきた。

「ゲロオ〜! タシケテ〜!!」

頭がすっぽりと定春の口の中に入ってしまった文字通り目の前が真
っ暗になったケロロ。

「ケロロもゴミと思われたみたいアルな」

「我輩ゴミっすか!? 定春君離して〜!!」

「もつと噛んでもらえば?」

「な、夏美殿〜!」

定春に噛まれながら神楽、夏美の言う事に驚くケロロであったが
「あ、あれ、なんか綺麗なお花畑が見えてきたであります……」
意識が朦朧としてきたのか、弱弱い声でおかしな事を言い始め
るので

「ぐ、軍曹!! そっち行っちゃダメだよ!!」

と冬樹が慌てて注意してケロロと定春の口を引き離した。

「冬樹君、そろそろお登勢さんのところに行きましょうか?」

頃合を見計らって桃華がお登勢さんの店の手伝いの話を切り出す
と力オスをモアに預けて

「あ、そうだね。じゃあいつてきます！」

桃華と冬樹がすっかりと手を繋いで万事屋から出て行く。

「……モテる男は良いよねー、新八君？」

「そうですねー、銀さん？」

その二人を嫉妬心のこもった眼でつまらなさそうに見つめる男二人。

「で、銀時殿銀時殿！ 今日は何するんでありますか？」

「ああ？ 今日は何もしねーよ」

「ゲロー……」

前日までもいろいろんな事があつて思いの外楽しかったので今日は何をするのかワクワクしながら尋ねるが銀さんから帰ってきた返答に落ち込むケロロ。

「あ、だったらケロロさん達の世界と連絡できるようにしましょうよ！」

夏美ちゃん達の親御さん達も心配してるでしょうし、夏美ちゃん達だって自分達の世界が今どうなってるのか気になるでしょうし……

……

「それは名案だな」

「新八のくせしてたまには良い事言うアルな」

「『たまには』は余計だよ、神楽ちゃん」

そこで新八が今日何をするのか提案するとギロロが褒めて神楽が余計な一言を告げるので新八はちよつとだけ不機嫌そうに神楽に注意する。

「それで具体的には何をやれば良いんですかあ？」

「え、そ、それは……その……」

タママの疑問を聞いた新八は詳しい事は何も考えてなかったよう
で口籠ると

「ノープランかよ。ダメだなお前は。本当ダメダメだな」

「これだからダメガネって呼ばれるアルヨ」

「アンタ等は案も何も考えてねえだろーが」

銀さん、神楽に立て続けに馬鹿にされるので苛立ちながら冷たく反論する。

「でも良い案でござるよ、新八殿」

「まあ、実現の為の具体的な策を考えてないところは評価できないでありますか……」

「お前が言えるか……」

「確かに」

ドロロが褒めてケロロが凄い上から目線で評価するとギロロが呆れながらケロロの発言を指摘すると、夏美がその指摘に同意する。

「おじ様、とりあえずクルルさんに相談してみてもどうですか？」

「お、そうですね」

モアのアイデアをケロロは採用する事にした。

困った時に頼れる我等がブレイン、ケロロ小隊作戦通信参謀クルル曹長。

たまに彼自身が困った時を作っちゃう事があるのが難点だが、それでも前例の無い早さで少佐まで昇進した過去が彼を有能だと語っている。

と言う事で一行がやってきたのはクルルと源外さんが居るからくり堂。

「オーイ、ジジイ、黄色い。居るんだろ、返事しろ」

いつもよりも静かなからくり堂に銀さんの気だるそうな声が響くだけで返事はなかなか帰ってこない。

「クルルクルルくん！ あーそーぼー！」

「ガキがお前？」

「えへー」

ケロロのボケに銀さんがツツコミを入れると

「……留守ですかねえ？」

「源外さんだけならまだしもクルルまで居ないなんておかしくない？」

タママの言葉を聞いて夏美が疑問を抱く。

元からこの世界の住人である源外さんが何処かに出掛けていて不在ならしょうがないが、ほんの数日前にこの世界に来て行く当ての無いクルルまで不在と言うのはどう考えてもおかしい。

「とりあえず中を探しましょう！」

少しだけ心配になった新八がからくり堂の中を探してみようと告げると夏美達と神楽は首を縦に振って頷き、銀さんは面倒臭そうに銀色の天然パーマの髪を掻いた。

「皆さーん！ 源外さん居ましたよー！」

数分の搜索時間の後小雪が源外さん発見報告をするとそれぞれ適当な返事をして小雪の下へと向かう。

小雪が見つけた源外さんと言うとパソコンのような機械からくりを操作している最中のようだが、何故かピクリとも動かない。

「ったく居るなら居るって言えやジジイ……」

銀さんがそう言いながらポンと肩を叩くと源外さんの体が力無く横に倒れてしまった。

「……源外さん？」

「ジジイ、そう言うギャグ流行らないアルヨ」

夏美や神楽が声を掛けるが一向に反応は無い。

その場に居た誰もがまさかと疑った。あんなに機械からくりが大好きで悪戯好きな子どものような、あの人に限ってそんな事ある筈無いと言い聞かせた。

しかしその想いとは裏腹にゴーグルを掛ける老人は少しも動かない。

「じ、ジジイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！」

「んん、うるせーな、誰だ？」

すっかり死んだと思ひ込んだ銀さんの悲痛な叫びを聞き、老人復活。死んだと思つていた人物がいきなり蘇るので絶句する一行。

「ああ、いつけねいつけね、つい寝ちまつてたみてーだな……」

完全にフリーズした銀さん達の事など一切気にも留めずに源外さんは呑気な言葉を口にす。

「どうやらこの爺さん、さっきまで眠つていたらしい。」

「おお、オメー等。そこで何突つ立つてんだ？」

驚愕の真実にしばらく源外さんの言うように突つ立っていたオメー等だったがその中で一番最初に我に返つた新八が「　　つて寝てたのかよオオオオオオオ！」と大きな声でツツコんだ。

「昨日クル坊の手伝いしてたら徹夜しちまつているんなプログラミングが終わつた途端寝ちまつてたみてーだな。悪いな、迷惑掛けて」
「ゴーグルのせいで目が見えねーから余計に死んだつて思つちやつたじゃねーか」

「全くアル。やつて良い冗談とやつたら悪い冗談があるアルヨ」

からくり堂内で源外さんの昨日の出来事を聞き、愚痴を吐く神楽と銀さん。

「いやあ、悪い悪い。……でオメー等、クル坊に会いに来たんだろ？」

「は、はい」

源外さんは一言お詫びしてから、大方彼等がここに来た予想を口にして話題を変えると夏美が少しだけ戸惑いながら返事すると源外さんは壁に取り付けたパネルの下に移動し一定の操作をする。

するとその壁の近くの地面がゆっくりと横にスライドして地下への隠し階段が出現した。

薄暗い為足元に気を付けながら隠し階段を下りて行く一行。

「一日も掛からずに地下室を作つちゃうなんて凄いですね……」

「クル坊達の事がバレるといろいろと厄介だろ？　だから普段使っ

ている上には作らずに下に作るうって話になったよ」

「上には作れないくらい大きなものを作ったんでありますか？」

「まあな」

そうこうしているうちにあつと言つ間に階段が終わり、クルルが居るのであるう地下に到着した。

ちゃんとした明かりが点いてない為周囲は依然として薄暗く、上と同じくらいに機械のコードやらパイプやらがあつちこつちに散乱しているのだが何故か壁の一部に押入れが作られている。

そんな部屋の奥にある、電源が点いていて光っている大きなモニターとキーが幾つも並ぶデスクの前にある回転椅子に座るクルルがくるつと振り返り

「ウエルカム、くつくつく〜！」

そう言つてどう言う訳か持つていたカレーライスをスプーンですくつて口に頬張る。

「ほとんど俺達の世界のクルルの部屋と大差無いぞ……」

「たった一日でここまでできるなあ、本当凄エな……」

「てゆうかクルルさん、なんでカレー持つてるんですか？」

「馬鹿か新ハイ！！ 黄色と言えばカレー、これこの世の常識ネ！！」

ギロ口、銀さん、新八、神楽の順に各々が言いたい事を口にする。クルルと源外さん。それぞれの世界で機械の扱いに長ける二人が協力すれば、一日足らずで環境を整えるなど容易な事なのだ。

「それでクルル殿、カオス殿の額の水晶の事で聞きたい事があるのでいづれが……」

「そうだろうと思つてこつちもいろいろ分析してたぜ〜」

「かあーっ！ やっぱクルル君は違うねえ！ いやっ、大統領！」

ドロ口の言葉を聞いてクルルがそう告げるとケロ口がクルルを褒める。

ケロ口の褒め言葉を聞いたクルルがく〜くつくつく！ といつもと変わらない、それでいて少しだけ嬉しそうな薄ら笑いしてから

「あのガキの水晶の願いを叶える力なんだが、水晶自体に蓄えられているエネルギーを消費して力にするみてーだ。

つまり、あのガキの額の水晶にエネルギーが溜まってなければ力は発動しねえ。

それに加えて、その水晶の力が発動する際消費するエネルギーの量には結構ムラがある」

この場に居る全員に分かりやすいように分析結果を報告し始めた。「ムラって誰か住んでるアルカ？」

「そのムラじゃないわよ……」

クルルの説明の言葉の中の気になる言葉を使って神楽がボケて夏美が鋭くツツコミを入れると

「要するに、水晶の力で消費するエネルギーの量が一回ごとにバラバラで一定じゃねえんだよ。」

例えば、一度で水晶に蓄えられたエネルギー全て消費する事もあるれば、その逆として何度も力が使えるくらい消費が少ない事もある」よく理解してない神楽の為に源外さんが分かりやすい説明を補足する。

「ま、とにかく水晶の力を使うにはそれに必要なエネルギーを溜めなきゃいけないって事か……」

今までのクルルと源外さんの説明を銀さんなりにまとめるとクルルがほぼ棒読みで「そう言う事」と相槌を打つ。

「それでどうやったらエネルギーは溜まるんですかあ？」

「あの小僧の身体と額の水晶は密接にリンクしていて、あの小僧がエネルギーが溜まる行動を取れば自然に水晶にもエネルギーが溜まるようになってる。」

勿論、あの小僧自身の身体にもエネルギーは溜まるぞ」

するとタママがエネルギーを溜める方法に話を変えるので源外さんがおおまかな説明をすると

「その『エネルギーが溜まる行動』って……？」

「睡眠・休養・食事の三つだ。その三つのどれかをあのガキがすれ

ばそれに応じた分だけのエネルギーが蓄積される筈だぜえ」

源外さんの説明の中に気になる言葉を聞いた夏美がその言葉について質問するとクルルが詳しく説明する。

「そこは人間とほとんど同じなんです……」

「ま、確かにそうなんだが食事に関しては結構違っぜえ」

クルルの説明を聞いた新八が感じたままに呟くとクルルが違う点がある事を指摘。そのクルルの言葉を聞いたケロロが「と言つと？」と先を説明するよう促すので

「ほとんどの生き物は食べたものの中に含まれている栄養を摂取する事で活動する為のエネルギーを作り出すんだが、あの小僧はそうじゃねえ。」

どう言う仕組みかはまだ不明なんだが、あの小僧の身体は食べた『モノ』に関係無くその量に応じて身体に必要なエネルギーを作り出すんだよ」

源外さんが普通の生き物とカオスとの食事の違いを説明する。

たんぱく質、食物繊維、鉄分、カルシウム……etcと言った私達の生活に必要な栄養素のうち、自分の身体から生成されるものはほとんどなく、ほとんどは食べたものから栄養を摂取しなければならない。

それに対し、カオスは何かを食べれば自然に必要なものが発生する身体になっている、と源外さんは言っているのだ。

さらに今朝、柱や机、座布団、仕舞いには暗黒物質ダークマターを口にしても平然としていた辺り、おそらく何を食べさせても平気だろう。

「……これで今分かっている情報は全部だ。これ以上はまだ調査中だぜえ」

ここでクルルが説明を終了すると告げると

「……しかし、こうして見るとカオスの水晶の力とは意外と不便でいじわるな」

ドロロがカオスの水晶に関する感想を呟く。

力の規模こそ世界を超えるほどだが、その力を使用する為にいち

いちエネルギーを蓄えなければならぬと言っ点は確かに不便である。

「じゃあじゃあ、カオス君の水晶の力で、水晶にエネルギーを溜める事ってできないのかな？」

水晶の力は願いを叶える力。ではその水晶にエネルギーが溜まるようお願いしたらどうなるのか？

「おお、それは名案でありますな！」

「くつくつく、面白そうだなそりゃあ……」

いちいちカオスの水晶にエネルギーを溜めなくとも水晶の力が使えるようになるかも知れない小雪の意見に興味を示すケロロとクルル。

ケロロはただ単に面倒臭かっただけだろうが、クルルはそうではない。

『エネルギーを消費して』願い事を叶える力を持つ水晶にエネルギーが溜まるようお願いをする、即ち『エネルギーを生産する』願い事をする。

この矛盾する事象に対し、研究者として純粋な興味が沸いたのだ。「じゃあ実際に実験して見てみようじゃねーか。俺がコイツの水晶にエネルギーが溜まるようお願いしてやるからよ」

「ちよつと待つネ、それは私の役目アル！」

「何を言ってるんでありますか、我輩の役目に決まってるでしょーが！」

「ああ、ズルイですう、僕もやりたいですう！」

銀さんが実験をすると告げると神楽、ケロロ、タママの四人が口論を始めるので

「アンタ達はダメよ」

彼等のその後の行動が容易く予想できた夏美が冷たく一言注意する。

機械で埋め尽くされた冷たい床にカオスを座らせて、何かやってくれそうだと代表に選ばれたモアがそのカオスの額の水晶に手をか

ざし「カオス君の水晶にエネルギーが溜まりますように……」と願う。

ひよっとしたら水晶の力が発動してエネルギーが溜まるかもしれない。

ひよっとしたら何も起きないかも知れない。

水晶の未知なる力が勝るのか、今までの分析で得た情報通りに事が運ぶのか、それとも別の何かが起こるのか。

結果が全く想像できない今回の実験にカオスの額の水晶を見つめる皆の期待が自然と高まる。

そしてもしこの願い事が叶うのならば、どんな願い事を叶えてもらおうかとこっさり願い事を準備する銀さん、神楽、ケロロ、タマの欲深き四人衆。

しばらく、モアが必死に願ってみたが何時まで経ってもカオスの額の水晶に反応は見られなかった。

モアが額の水晶に手をかざしたまま何もして来ないので暇になったカオスは「すーすーと寝息を立てて眠っている。

「ハア、ダメです」

「反応無し、か……」

源外さんがちよっぴり残念そうに実験結果を呟く。

欲深き四人衆は「チツ……」と悔しそうに舌打ちした。

「こうなったらカオスに食べさせるしかないですけど、隊長？」

「仕方ないでありますよなあ……」

クルルの言葉を聞いて残念そうにケロロが呟いた。

カオスの成長（後書き）

ども、白黒仮面です。

なんか未来のカオス君が妙なコートと手袋持って帰って来たんですけど、誰か知りませんか？

友達から貰ったって嬉しそうに言うだけでちよっぴ気になるんすけど……。

心当たりのある方は感想にてよろしくお願いします。

現在、シリアスなあるお話を製作中で執筆速度がちよっぴり減速中。ギャグ中心のお話はほとんどその場のノリを重視しつつ流れに合うよう書いているのに対し、シリアス中心のお話は先の展開を考えつつ言葉の一つ一つをじっくり練って書かないといけないから面倒臭い。

如何に先の展開を読ませないかが重要……。

ってか、これリメイクだからある程度は予想できるだろうけどね。

銀八先生「『訳：銀さん達に会う為に日向家の地下基地のガンブラームでスタンバってました』だって」

タママ「何処でスタンバってるんですかねえ……」

銀八先生「それでは百鬼丸さん、高畑ルパンー郎さん、とりあえず下駄箱前で立ってなさい」

繋がる世界

からくり堂から万事屋に帰る帰り道。

「こうなったらゴミを拾って集めて、集めたゴミをカオスに食べさせるしか方法は無さそうでありますなあ……………」

「それしかないですね……………」

ケロコの発言を聞いて仕方なく同意する新八。

ブラックホールのような胃袋を持つカオスに普通のものを食べさせていたら、桃華ちゃんの実家でも無い限りお金がいくらあっても足りない。

しかし、そこら辺に落ちているゴミならば拾ってくるだけなのでお金は掛からないし、今朝の出来事を見る限りカオスにゴミを食べさせても問題は出ないだろう。

かぶき町のゴミが減っているとして小さなニュースにはなるかもしれないが……………」

だがやっぱりここでも問題が出て来る。

「どれくらい集めれば良いアルカ？」

そう。どのくらい集めれば良いのか基準が全く分からないのだ。多ければ多いほど今後のカオスの食事には困らないだろうが、多くなればそれだけゴミを集めるのが苦勞する筈。

「面倒臭いですう……………」

「仕方ないですよ」

タママの言葉に深く同情しながらも自分達の世界と連絡をとると言う目的の為に夏美が注意すると

「心配すんなテメー等、こう言う時の為の万事屋ネットワークだ」

そうして一行がやって来たのは万事屋……………ではなく恒道館道場。

万事屋ではなく恒道館道場に彼等が居る理由としては、まずこれからするのは大量のゴミを無くすと言う大規模なマジックである。それも一日数回と言う凄い頻度の。

そのマジックには大量のゴミを置く広いスペースがどうしても必要になるのでお世辞にも広いとは言えない万事屋には向いてない。

万事屋の外に置けば、ゴミの代わりに下の老婆や近隣の住民達の文句が集まってくるのが眼に見えている。

その点、恒道館道場は元は道場だっただけにかなり広い為、場所としては好都合と言う訳である。

銀さんは一人で屋敷の中に入って行くと、数分くらい経った後戻って来た。

頼りになりそうな知り合いにでも連絡して来たのだろう。

銀さんの知り合いは先日会っただけでも相当な数だったので効果は期待できそうだ。

三十分経過。

「そろそろ来てもおかしくねーんだけどな……」

銀さんがそんな事をぼやいていると

「すいませーん、銀時君居ますかー？」

恒道館道場の門の向こうから誰かの声が聞こえてきた。その声を聞き、待つてました！と言わんばかりに凄い勢いで門の向こうへと銀さんがすっ飛んで行く。

その後新八や神楽が付いて行くので、ケロ口達も付いて行く。門の外で彼等が眼にしたのは満身創痕になり松葉杖を持つ黒い長髪の男とペンギンに似た被り物をした変な生き物。

「どうも、攘夷志士の桂 小太郎です」

『桂さんのペットのエリザベスです』

桂さんは声で、ペンギンに似た被り物をした変な生き物……エリザベスは何処から取り出したのか分からないがプラカードに書いた文字で自分の名前を告げる。

「……あれ、銀さんの眼がおかしいのかな？ 亡霊が目の前に居るんだけど」

「亡霊じゃない桂だ」

驚きを隠せない銀さん達。

それもそうだろう。

今日の前に居る人物はつい最近、カオスの水晶の力により行方知れずになっていた人物だ。

呼んでない人物が、それよりもまず呼ぶ事すら不可能な状態に陥っていた人物が何故今日の前に居るのか不思議で不思議でしょうがない。

正直なんで死んでねーんだよと心の中でばやく銀さん。

「まったく、つれないではないか銀時。」

こっちは突然ノーガツアヌヤバに飛ばされるわ、そのの原住民に襲われるわでもう本当大変だったんだぞ」

桂さんは一人、その時に一番辛かった時を思い浮かべる。

その時とは桂さんが階段から足を滑らせて転げ落ちるシーンだった。

「ノーガツアヌヤバって何処！？ どう読むの！？ つーかオメーの怪我ノーガツアヌヤバまったく関係無エじゃねーか！！！！」

読心術か何かで桂さんの想像を覗き見た銀さんがツッコむ。

「何はともあれ、だ。こうなったのはお前が原因だ、銀時。この怪我どうしてくれる？」

「オメーが一人で勝手に階段から落ちて負った怪我だろーが！！」

何人に責任押し付けてんだよ！！ 帰れよ、帰ってくれよ！ お願いい、マジで頼むからア！！」

銀さんが怒声で電波バカに注意していると「ぎ、銀さアアアアアん！！」と慌てた様子で新八が銀さんと呼ぶので「どした？」と用件を尋ねると

「カオス君の水晶が微妙に光ってます！！」

新八が自分の近くで発生した問題を叫んだ。

「え、ま、マジで！？　つてかなんで！？」

「よく分からないけどマジです！！」

銀さんは電波バカの事は放っておいて急いでカオスの傍に寄る。まだ大した異変は起こっていないのだが、どんな異変がこれから起こるにしろ今はマズイ。

これからエネルギーを生産しようとしている時に無駄に力を使ってエネルギーを消費したくないのだ。

「カオスウウウ！　今は水晶の力を使うんじゃねえええええ！！耐える、耐えるんだ！！　大丈夫、お前ならできる！！」

水晶の力の止め方なんて知らないのとにかくカオスにいろいろと言ってみるが、小さな赤子に言っている言葉など100%しつかりと認識できる訳が無い。

現に当のカオス君はと言うと嬉しそうにキヤッキヤ、キヤッキヤとはしゃいでいる。

銀さんの願いも空しく、カオスの水晶から一際強い光が溢れると水晶から溢れ出た光が桂さんの体に纏わり付いた。

桂さんの体に纏わり付いた光は十秒足らずで消えてしまったが、

桂さんの外見上、目立った変化は無い。

「ん、おおっ！　痛みが無い！　見るエリザベス！　怪我が治ったぞ！」

しかし、さつきまで松葉杖を突かないと歩けないくらいにふらふらだった桂さんが松葉杖を放棄し自由奔放に走り回って怪我が治った事を見せてやるとエリザベスは『良かったね！』と書かれたプラスチックカードを見せる。

「いやあ、凄い力だな銀時。いろいろ聞きたい事があるんだがまずは何が起きたのか説明し……」

「……せっかくの貴重なエネルギーをなんて事に使ってくれてんだテメーはアアアア！！！！」

悠長に何が起きたのか説明を求めてきた桂さんをドカドカ、ゲシゲシと万事屋トリオは足蹴りする。

つかは死ぬんだ、遅かれ早かれな……」

「ダメダメダメダメ！！ 長谷川さんが良くてもカオス君に人肉なんて食べさせられないですよ！！」

光を失った空ろな双眸で何も無い場所を見つめて自暴自棄な発言を繰り返す長谷川さんが死なないうよう夏美、ドロ口、新八の順に必死に説得する。

そんな彼等の近くに大きなトラックが走って来て、そのトラックに運悪くエリザベスがドカ！ っと激突。

激突した勢いでエリザベスの体が凄い速度で回転しながら天高く舞い上がり、ドシャッと地面に落下した。

地面に叩き付けられたエリザベスの口からじんわりと赤い液体が出て来る。

「え、エリザベスうううううううう！！」

桂さんがエリザベスを心配して駆け寄る中

「遅れてすまない」

「九ちゃん！」

エリザベスを轢いたトラックの助手席から降りてきた九兵衛さんが遅くなったお詫びの言葉を告げると

「いや先にお詫びの言葉を告げるべき人居るよね、人かどうかは分からないけど確かに居るよね！？」

新八がツツコミを入れるが

「僕の家や知り合いのゴミを集めて回っていたら少しだけ時間が掛かってしまった……」

「いやいや、あの短時間でこれだけのゴミ集められるなんて凄いアルヨ」

「で、どれくらい集まったんだ？」

「トラック二十台分だ。お妙ちゃんの家にも一度に二十台はマズイだろうから今日は一台だけだ」

九兵衛さんが掻き集めたゴミの事でのんびり会話する銀さん達。

改めてここに来たトラックの荷台をよく見ると調理中に出たと思

われる卵の殻や玉葱の皮と言った生ゴミや壊れて使えなくなったテレビや冷蔵庫と言った粗大ゴミとか他にもダンボール、雑誌、紙くず、空き缶、空き瓶、ペットボトルと言ったありとあらゆるゴミが山のようにいたくさん積んであった。

あの量でも凄いのにそれが二十倍である。今後、カオスの食事に困らなさそうだ。

ちなみにそのトラックの下で「絶対あれとつときやいつか使えるって!」「お、落ちてきてください敏木斎様!」とか言って小さな老人が暴れるのを誰かが抑えている姿もあつたが。

「安心しろ、エリザベス。あの子の力があればこんな怪我すぐ治るからな!」

「ヅラつち、手エ貸すぜ」

「ヅラつちじゃない桂だ。長谷川殿、かたじけない」

『すいません桂さん、長谷川さん……』

一方桂さんと長谷川さんはトラックに轢かれ重傷を負つたエリザベスに肩を貸し、必死に励ましながらカオスの元へと向かう。

そんな彼等に別の方向から走つて来たトラックにドカ! っと激突、激突した勢いで三人の体が凄く速度で回転しながら天高く舞い上がり、ドシャドシャと地面に落下した。

「銀時、言われた通りゴミを集めて来たぞ」

桂さんとエリザベスを轢いたトラックの助手席からブーツと網タイツを履いてスリットの付いた黒い着物を身に纏つた、顔に傷が付いているもののそれでもかなり綺麗な美人が煙管をくわえながら銀さんに声を掛ける。

「月詠さん!」

新八がその人物の名を呼ぶ。

ブーツと網タイツを履いてスリットの付いた黒い着物を身に纏つた、顔に傷が付いているもののそれでもなおかなり綺麗な美人とは月詠さん。

吉原と言つ子どもが入るには遙かに早い街の自警団『百華』の頭領であり、高い身体能力とクナイを駆使して戦うその姿は死神太夫と呼ばれ恐れられているほど。

主に郭言葉くわくごを用いて喋ります。

性格はとても真面目で気配り上手、ボケにも順応するとっても良い娘むすめなんです、お酒を飲むともう凄い事に。

「またお前も結構集めてきたな……」

「吉原中のゴミと言つゴミを集めて回つたから当然じゃ。おかげで街はかなり綺麗になつたが……」

「その口振りだとこのトラックに積まれているもの以外にもまだゴミありそうアルな」

「ああ、トラック二十台……いや三十台分だったか？ もつとあつたよつな気もするが……」

月詠さんが集めてきたゴミの量を報告する。やはり轢いた人物達に対する謝罪は抜きである。

ケロ口達『ケロ口軍曹』メンバーは轢かれた三人を心配そうに見つめている。

「合計五十台、か……。ま、これだけあれば上等だろ」

九兵衛さんと月詠さん達が集めて来たゴミの量を聞いて一人納得する銀さんに

「それで銀時、こんな大量のゴミをどうするつもりじゃ？」

大量のゴミの用途が気になつた月詠さんが説明するよう頼むと

「あー、その辺はこれから順を追つて説明していくから」

大量のゴミの用途を説明する為に、銀さんは九兵衛さんと月詠さんにケロ口達の事を詳しく説明してやつた。

「……なるほど」

「また貴様は奇妙な事に巻き込まれておるようじゃのう……」

九兵衛さんと月詠さんが半分呆れながら銀さん達の説明の素直な

感想を述べると

「ふむ、状況は分かった。俺も手伝える事があつたら手を貸してやるう！」

……その前に、カオス君の力で俺とエリザベスと長谷川殿の怪我を治してもらえないだろうか？」

先程の事故で体の至る所に負つた傷から流血する桂さんが手を貸す、と言うか手を貸してくれと言うので

「お前、いったい何しに来たの？」

桂さんに冷たい視線を向ける銀さんの口から本心が零れた。

この電波バカに何時までも居られるとウザイのでカオスの力で桂さん達の怪我を治した後すぐに長谷川さん、桂さん、エリザベスの三人を帰した。

そして恒道館道場の敷地内に場所を変更した後、それにしても……

……と銀さん達はあるものに視線を移し

「あの天人あまんとの子どもは本当によく食べるな……」

九兵衛さんが思った事を呟く。

彼等の視線の先には九兵衛さん達が集めて来た大量のゴミをバキバキバキベキと噛み砕いて胃に収めるカオスの姿があつた。

九兵衛さん達が持つて来たゴミには吐き気を催すくらい気持ち悪い腐臭が漂う生ゴミや堅いもので作られた粗大ゴミ、そして月詠さんが集めて来たであろう子どもが知るには早いゴミと言つたもうありとあらゆるゴミが山のようにあつたのだが、カオスのメンタル面には問題無かつたみたいだ。

躊躇い無く次から次へとゴミと言うゴミを口に放り込み処分する。そんなカオスの近くには黄色以外の蛙達が居て、定期的にカオスに水を飲ませたりゴミを運んだりカオスの食事の手伝いをしていた。

だいたいトラッカー一台分のゴミを食べ尽くした頃、満足したのか

ふあくあと大きな欠伸をしてすやすやおねむの時間に入ったカオス君。

すっかり日が暮れてもう空が橙色に染まっている。

「一食辺りトラック一台分か……。あの天人あまんとの赤子の体はいつたいどうなつておるんじゃ？」

「そんな俺達が知りてーよ」

「まだ調査中であります」

月詠さんの抱いた疑問に銀さんは同情、ケロロは正直に現状を報告する言葉を返す。

「でもこれでとりあえずエネルギーは溜まったんじゃないですか？
てゆーか、準備万端？」

「では早速実験といくでありますか！」

「毎回毎回良いところ取りしてんじゃねーぞ緑」

「わ、我輩、隊長でありますし……」

「え、そうなの？」

「ゲロ……」

何はともあれエネルギーは溜まって水晶の力が使えるようになってる筈。

その確認と当初のケロロ達の世界との連絡がとれるようにすると言つ目的の達成も兼ねて実験する事にした。

「じゃあ夏美ちゃん、お願いしますね」

少し前に家の事が気になると言っていた夏美を実験の願い事をする人物に新八が指名すると

「え、わ、私！？」

突然新八に指名された夏美は戸惑いを見せる。

「おいおい、新八い。ひよつとしてあの子が好みだったの？」

夏美をピンポイントで指名した新八に他意があるのでは、と銀さんはニヤニヤしながら新八をからかうので

「ば、バカ、そ、そんなんじゃねーよ！！ 僕が夏美ちゃんを指名したのは一番適役だと思つたからで……」

新八は必死に否定するが何故か頬が赤くなっている。

「ま、確かにナッチーは可愛いけど新八じゃナッチーに釣り合わないネ」

「ライバルも居るでありますし、それに何より夏美殿には想い人も居るでありますし……」

それに対して神楽とケロロが新八が夏美に好意を抱いている事を肯定した上で諦めると説得してくるので

「……え、そうなの？」

新八はケロロの言った事を聞いてどう言う訳か小さな声で残念そうに呟くと

「んだよその反応、ひよっとしてマジで気になってたアルか？」

「ち、ちちちち、違っつて言っつてんだろさつきから!!」

新八の態度を見た神楽は銀さんと同じようにちょっかいを出すのでやっぱり新八は必死に否定した。

「ライバル……!!」

一方の小雪&ギロロのライバル二人組、新たなライバル出現に闘志を燃やしていた。

「だから違っつて言っつてんだろーがアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

それはさておき

「てゆーか、閑話休題？」

新八に指名された夏美が先程のやりとりで眼が覚めてしまった力オスの額の水晶に手をかざし、眼を瞑って強く願う。

自分達の世界と連絡がとりたい、自分達の世界に一人、残された母親と話がしたい……と。

その願いを受け入れたかのように、カオスの額の水晶が一際強く光る。

直後、水晶から溢れ出た光が一瞬のうちに何も無い空中の一箇所に集まった。

一箇所に集中した光はあるものを作り出し、そのあるものが出来上がるとフツと消滅する。

水晶の力により出来上がったものは光が消滅すると同時に重力に従って地面に落ちた。

「……何これ？ 携帯でありますか？」

水晶の力により出来上がったものを見た感想を呟くケロロ。

ケロロの言う通り、水晶の力により作り出されたものは携帯電話そっくりだった。

ただ違う点があるとするとするならば、その携帯電話には番号や文字を打つ際に使用するボタンが存在せず、存在するボタンと言えば一昔前の電話の受話器が外れた状態のマークが描かれたボタンと反対に受話器が元の場所に収まったマークが描かれたボタンの二つだけ。

「これじゃあ電話掛けても誰にも通じないアルな」

「しかし夏美殿の願い事を叶えるべく水晶の力が作り出した携帯、普通とは違う筈でござる」

神楽がごく普通の意見を口にするのとドロロがいやそうじゃないだろうと反論する。

ボタンが通話と通話を終了する為のボタンの二種類しかない為、番号は打てないしメールだって打てない。

これでは誰かと連絡をとろうにもとれないだろう。ただし、それはドロロが言うようにその携帯が『普通だったら』の話である。

「とにかく電話してみるわね……」

夏美がそう言っただけで通話のボタンを押して携帯を耳に当てると携帯からプルルル、プルルルと普通の呼び出し音が聞こえてきた。

呼び出し音が四、五回ぐらい鳴ってからガチャと電話に出た音と『もしもし？』と誰かの声が聞こえてくるので

「も、もしもし、何方ですか……？」

カオスの水晶の力で作り出された携帯だ、相手はだいたい予想できるものでも誰が出るか分からなかった夏美は恐る恐る電話の相手に挨拶する。

『そ、その声、ひよつとして夏美!?!』

「ま、ママ!?!」

聞き慣れた声を久しぶりに聞きびっくりした夏美が電話の相手を大きな声で確認する。

「ヤッファー!!!!!!」

「どうやら実験成功ですね!?!」

実験が成功したと見るや否やケロ口達や神楽が歓喜の声を上げた。嬉しそうなケロ口達を見て銀さん達も嬉しそうな表情になっている。

『どうしたのよ夏美? こっちは仕事が終わって久しぶりに家に帰ったって言うのに家には誰も居ないし、いきなり頭の上から携帯が落ちて来るし、落ちて来た携帯に出てみればどう言う訳か夏美と繋がるし、驚く事ばかり起きてるんだけど、夏美は今何処に居るの?』

「ああ、それが……」

「我輩達が今居るのは『銀魂』の世界であります!」

夏美の母と夏美の会話に割って入るケロ口軍曹。

『まあケロちゃん! って『銀魂』の世界!?! どう言う事、ケロちゃん!?!』

「まあ話せば長くなるんでありますが、かくかくしかじか、こう言う訳なんであります」

『またおかしな事に巻き込まれてるわね……でも面白そう! 『銀魂』の世界でしょ、銀さんには会った?』

「会った会った!」

『じゃあ銀さんの知り合いには?』

「とりあえずは!」

ケロ口が秋さんとの会話を楽しんでいると

「ってなんでアンタがママと会話してるのよ!?!」

「我輩だって日向家の一員であります!」

「良いから変わりなさい! ……それでママ、そっちで何か変わっ

「た事あった？」

夏美が強引にケロ口から携帯での会話の主導権を奪い、自分達が居た世界で起きた異変を尋ねる。

『んー……そうねー、特に変わった事は起きてないけど、一回桃華ちゃんの家の人から電話があつたくらいかしら？』

世界経済の半分を占める西澤グループの令嬢が行方不明になつたとなればすぐさま搜索網が張られる事は眼に見えている。

ましてや彼女が最後に確認されたのが今や怪奇現象の巣窟と化している日向家だと言う事が分ければ、普通でも公にできない西澤家令嬢行方不明事件はさらに極秘裏のものになるだろう。

そんなあつちの世界の大騒動の様子、規模が容易くイメージできた夏美は「あぁ……」と半分呆れながら相槌を打ってから

「桃華ちゃんには後でそつちに連絡するよう言っておくから、桃華ちゃんの家の人に連絡しておいてね！ ついでにその時に冬樹にも連絡させるから！」

冬樹と桃華の無事を報せる予定を入れる。

『了解！ ……ねえ夏美。今、銀さんと電話代われる？』

「え、ぎ、銀さんに？ なんて？」

『だって『銀魂』の主人公と直に話ができるのよ！？ こんなチャンス滅多に無いでしょ！？』

「そ、そうだけど……」

もう少し私達の心配をしてくれても良いんじゃない……。

自分の質問に対し、興奮しながら返答する実の母親の声を聞いて少しだけ肩を落とす夏美は

「ちょっと待ってね。銀さん、電話代わってって」

「誰が？」

「ママが」

「ママってお前等のママ？」

「そつよ」

「……なんで？」

「さあ？」

銀さんと短い言葉でやりとりして銀さんに携帯を渡す。

「……はい、お電話代わりました、坂田 銀時です。こんにちは」

携帯を渡された銀さんはしぶしぶ電話の相手が代わった事を報告する。

「いったいママ殿は銀時殿とどんな話をするつもりなんでありませんようか？」

「あとで銀時に訊けば良いだろ？」

銀さんと夏美のママの会話の内容が気になる様子のケロロにギロロがどうすれば良いかアドバイスすると「それもそうでありますな」と言っけてケロロは納得する。

「……ああ、任せときな」

ちよつとだけ長かったもののようにやく話も終わったみたいで、最後にちらとケロロ達を観察するような視線を送りながらそう言っけて通話を終了させて電話を切る銀さん。

「銀時殿、ママ殿とどんな話をしたんでありますか？」

「大した内容じゃねーよ。気にすんな」

「そう言われると気になるのが人の性さが！」

「お前、人じゃねーだろ蛙だろ」

「んもう、そんなつれない事言わないでさあ、教えてよー！」

「だーから気にしなくても良い話だったのー！」

その頃、橙色から少しずつ暗くなってきた空で星が一つ二つと輝き始めた。

繋がる世界（後書き）

冬樹「……ところで桂さんはいつたい今まで何処に行ってたんですか？」

桂さん「さっきも言っただろう、ノーガツアヌヤバだ。

俺は眼が覚めたら不思議なところに居てな、ピンクの髪のが可愛らしい女子が俺にキスをしたのだ。

そしたら体が熱くなって……」

冬樹「あの、それノーガツアヌヤバとは違うと思うんですけど……」

桂さん「本当、大変だったぞ。戦争に巻き込まれ、一段落したら学園の女子四人がバンドを組んでライブをして、しばらく経ったら海軍と海賊の戦争に巻き込まれて……」

冬樹「……あの、もう良いです……」

桂さん「む？ そっか」

a u t u m n s i d e (前書き)

繋がる世界の別視点物語。

ぶっちゃんけサブタイでどう言っ話か予想できると思っけどね。

晴れ渡る奥東京市の空の下、アスファルトで覆われた道路をバイクで颯爽と走る私、日向 秋は中学生の子ども二児と一緒に住む一見普通の母親。

久しぶりに仕事が早く終わったから、子ども達や宇宙人達の為に夕飯でも作るっか。

そんな事を呑気に考えながら、いつもと同じくらいの速度で走っているときやく家に到着したのでバイクから降りてヘルメットを取る。

帰り際に買ってきた夕食の材料が入ったビニール袋をお土産に

「ただいま〜！」

と玄関から入っていつもと同じように帰って来た事を報せたんだけど、誰も居ないみたいで家の中から返事が返って来る事は無かった。

「……居ないのかしら？ 夏美〜！ 冬樹〜！ ケロちゃん！」

我が家の住人の名前を呼んでも返事は無し。

そこでふと玄関の下を見下ろすとそこにはいつもなら並んでない筈の、それでも十分見慣れた靴が一足あった。

この靴は……桃華ちゃんね。

……あれ？ ちよつと待って……。

ここで私が思い出したのは家に帰れなかったこの数日間、一回だけ桃華ちゃんの家の人から来た「お嬢様が何処に行かれたのかご存知ありませんか？」と言う連絡。

あの時は「いいえ、私は何も……」って答えてすぐに仕事に戻ったから印象薄かったけど、今こうしてあの時の電話の内容をじっくり考えると……桃華ちゃん、行方不明になったんじゃない……。

でも、じゃあなんで行方不明になった桃華ちゃんの靴が玄関に……

…？

もしや、日向家わがやで何か起きて何処かに消えたのでは……！？

……うん、こう言う推理ものの漫画も悪くないわねー、ってそうじゃなくて。

だとしたらいったい何処に行っちゃったのかしら……？

ガンツ！

「あいたつ！」

私がちよつとだけ悠長な事を考えちゃったのが原因か、天罰を食らって急に頭に軽い痛みが走った。

何かこう、硬くて軽いものが頭に落ちて来たような感じの……。頭を摩りながら何が当たったのか確認するとそれはすぐに見つかった。

……携帯電話？　なんでこんなものが玄関の上から……？

買って来た材料を急いで冷蔵庫の中に仕舞ってから、リビングにあるソファに座って何処かから落ちて来た携帯をじゅつと観察する。

私の目の前にある携帯は一見ごく普通の携帯だけど、ボタンが通話と電話を切るボタンの二種類しかない。

これじゃあ番号が打てないから何処にも掛けれないしメールも打てないじゃない……。それにこんなものがどうして玄関の上から現れたのかも謎だし……。

ひよつとして、消えたケロちゃん達とこの携帯は何か関係があるのでは……！？

いやきつと関係あるに違いないわ！　名探偵、日向　秋の眼はごまかせないわよ！

私が突如現れた謎の携帯電話に対する推理をしていると突然、何処かから落ちて来た携帯から電話が掛かって来た。

プルルル、プルルルと普通の携帯の呼び出し音だけが日向家のリビングに響く。

恐る恐る私は携帯の通話のボタンを押してから耳に当てて「もしもし?」と声を掛けてみると携帯から

「も、もしも……何方ですか?」

とどうやら相手も誰に掛けているのかちゃんと把握してないみたいで恐る恐る挨拶してきた。

あれ、でもちよつと待つて。今の声……。

「そ、その声、ひよつとして夏美!？」

今まで何度も耳にした疑いようの無い我が子の声を聞いて慌てて私が電話の相手を確かめると「ま、ママ!？」と相手も私を確認する。

「どうしたのよ夏美? こっちは仕事が終わって久しぶりに家に帰ったって言うのに家には誰も居ないし、いきなり頭の上から携帯が落ちて来るし、落ちて来た携帯に出てみればどう言う訳か夏美と繋がるし、驚く事ばかり起きてるんだけど、夏美は今何処に居るの?」

「ああ、それが……」

「我輩達が今居るのは『銀魂』の世界であります!」

電話の向こうで夏美が今の状況を説明しようとするのでケロちゃんの声が聞こえてきた。

「まあケロちゃん! って『銀魂』の世界!? どう言う事、ケロちゃん!？」

ケロちゃんの口から漏れた衝撃の真実を聞き、説明するように言う

「まあ話せば長くなるんですが」

とケロちゃんは最初に一言注意してからケロちゃん達が置かれていた状況を詳しく説明してくれた。

日向家の庭に謎の光の玉が落ちて来た事、謎の光の玉が突然ケロちゃん達のような姿になった事、そのケロちゃん達のような姿になった宇宙人（？）の額にあった水晶の力でケロちゃん達が『銀魂』世界に飛ばされた事、しばらくみんなが『銀魂』世界で生活する事になった事、この携帯がケロちゃん達のような姿の宇宙人の水晶の力で作ったものだって事……。

他にも耳を疑うような興味深い出来事がケロちゃんの口から携帯を伝って私の耳に入ってきて来る。

……まあ宇宙人と同じ屋根の下に住む私からしてみれば普段から耳を疑うような事でいっぱいですっかり慣れて抗体が付いているから実際、今回の事に関してもそこまで驚いてないんだけど。

『 と言う訳なんでありますよ 』

「またおかしな事に巻き込まれたみたいね……でも面白そう！ 『銀魂』の世界でしょ、銀さんには会った？」

『 会った会った！ 』

「じゃあ銀さんの知り合いには？」

『 とりあえずは！ 』

ケロちゃん達の状態に対する感想から私が興味を持っている事に話題を変えてケロちゃんとの会話を弾ませていると

『 つてなんでアンタがママと会話してるのよ！！ 』

『 我輩だって日向家の一員であります！ 』

『 良いから変わらなさい！ 』

と二人が口論し始めた。向こうでも相変わらずの二人の声を聞いてああ、本当に無事なんだと実感してホッと胸を撫で下ろした。

『 ……それでママ、そっちで何か変わった事あった？ 』

「んー……そうねー、特に変わった事は起きてないけど、一回桃華ちゃんの家の人から電話があったくらいかしら？」

さつきまで気になってた事だったけど、無事だったみたいだし問題無いでしょ。

私の言葉を聞いた夏美はこっちの状況が簡単に想像できたのか『

ああ……』と半分呆れながら相槌を打ってから

『桃華ちゃんには後でそっちに連絡するよう言っておくから、桃華ちゃんの家の人に連絡しておいてね！

ついでにその時に冬樹にも連絡させるから！』

と約束するので私は「了解！」と返答する。

長時間の通話でも料金とか取られないだろうけど、長電話すると一番重要な話を忘れてしまいそうだった私は

「ねえ夏美。今、銀さんと電話代われる？」

とお願ひする。

『え、ぎ、銀さんに？ なんで？』

「だって『銀魂』の主人公と直に話ができるのよ！？ こんなチャンス滅多に無いでしょ！？」

『そ、そうだけど……。……ちよつと待ってね』

ちよつとだけ落ち込んだような夏美の声の後に携帯を隔てた電話の向こうで会話しているらしい夏美と銀さんの声が聞こえてくる。

『……はい、お電話代わりました、坂田 銀時です。こんにちは

ー

その後に携帯から聞こえてきたのはやけに気の抜けた銀さんの声。

「初めまして、冬樹と夏美の母親の日向 秋と言います。子ども達やケロちゃん達がお世話になっております」

『いやいやいや、こちらの方こそお世話になってますよ。いやまったく、良くできたお子さんですよ、本当』

「いえいえ……」

銀さんにしつかりと挨拶をして短いやりとりを楽しんだところでそろそろ、銀さんに代わってもらった用件を言おうとすると

『……それで、俺に何か用ですか？』

先に仕事モードに切り替えた銀さんが気になっていた用件を尋ねてきた。グッドタイミングね！

「……しばらく、みんなはそっちで暮らすそうですね」

『成り行き上仕方なく、な』

「みんな楽しそうですか？」

『見る限りは』

「……………そうですか」

私からの質問に銀さんは短い言葉で返事する。

「銀さん。……………子ども達の事、お願いしますね」

私は万事屋に依頼する。

銀さん達なら言われなくてもやってくれそうだけど、ここは親としてちゃんとお願いしておかないと。

『……………ああ、任せときな』

私の気持ちを察してくれた銀さんの優しい言葉を最後に、電話を切る。

銀さんほど頼れる人はそんなに居ない。銀さんほど強い人はなかなか居ない。

漫画やアニメでしか知らないけど、そんな人物に頼んだのだ。きっとみんな笑顔で無事にお出かけ先から帰って来る筈。

子ども達は無事帰って来る筈だと信じて、私は家の電話の受話器を取る。

「あの、もしもし。桃華ちゃんの友達の、冬樹の母親で秋と言つものなんですけど、娘さんの事でお話したい事がありました……………」

a u t u m n s i d e (後書き)

はい、白黒仮面です。

最近は執筆速度が著しく低下中。

ほとんど遊びが原因だけど、書いているお話がシリアスと言つのも原因。

ギャグはノリ重視だから結構すんなり書けるとして、シリアスはじっくり考えないと良いのが書けないツスわ。

つつーか内容が何処かの黄色いぐるぐる眼鏡さんみたくスッゲー捻くれてるから余計に頭使わないといけないんでヒツジョーに面倒臭い。

でもその分すごい良い話になる……かと思えます。

尤も、俺が感じる『良い』と皆さんが感じる『良い』が同じかどうかは分かりませんがね。

それでは次回もお楽しみにー！

傘を差す理由（前書き）

いろいろ試行錯誤を繰り返したらこんなになっちゃった！

傘を差す理由

私達がカオス君の水晶の力でこちらの世界に飛ばされて早四日。
本日の天気、雨。

昨日の夜、昼間に銀さん達がカオス君の水晶の力を用いて作った
携帯電話で私達の世界に居る執事のポールと連絡をとる事に成功し
ました。

電話でのポールの最初の言葉は「お嬢様アアアアアアアア！！
御無事で、御無事でな」に「よ、り、く、！！」でした。相当心配さ
せてしまったみたいですね……。

電話で私の無事を報告し私達が消えた事を上手く誤魔化すよう指
示をしましたからこれで向こうは問題無いでしょう。

私達の元居た世界での心配事が無くなった今日、お登勢さんのお
店の手伝いは夏美さん達の当番で私と冬樹君はお休みです。

と言う事で、予てより計画していた『異世界でラブラブ探検大作
戦』を決行しようと思っていた矢先……

あんの銀髪天然パーマが「今日は男は男同士、女は女同士で楽し
もうや。な、冬樹君？」とか言ってる俺と冬樹君を引き離しやがった
！！ 覚えてろよ！！！！

そんなこんなで私と神楽さんは今、雨の中、定春君の散歩の最中
です。

ちよつとだけ濡れた定春君の白い背中に腰掛けながら、神楽さん
の紫色の番傘に二人で入ってしとすと降り続ける雨を防いでいま
す。

……一緒に傘に入っているのが冬樹君じゃないのが非常に残念で
すけど。

……あ、傘と言えば

「あの一、神楽さん」

「何アルカ？」

「神楽さんは雨の日だけじゃなくて晴れの日も傘差してましたよね？ 何か理由でもあるんですか？」

私が無気無く疑問に思っただけ事を尋ねてみると神楽さんがちょっとだけ悲しそうな顔で少しだけ喋るべきかどうか悩んでから

「……私、夜兔族やとって言う宇宙人。夜兔族は日の光に弱くていつも傘差さないといけないアル」

私が訊いた質問の答えをゆっくりと語り始めました。

「……そう言えば前に宇宙人だつて言つてましたね……」

神楽さんの表情が暗くなつたのを見て神楽さんに気を遣つて声のトーンを下げて相槌を打ちました。

よくよく神楽さんを観察してみると神楽さんの外に晒されている肌の色、日の光を浴びてないからだと思えますけど透けるような白色です。

……でも、ここまでの話を聞く限り、神楽さんが悲しくなる要素なんてどこにもありませんでしたけど……。

「それに……それに、夜兔は地球人と比べると頑丈で戦いが好きアル。

そのせいでパピーとバカ兄貴は喧嘩したし、私が江戸こゝに来た時はそれを理由に喧嘩に利用されて、私も敵とは言え人を殺しそうになつたネ。

……私、たとえ敵でも人殺しなんてしたくないヨ」

そこで神楽さんが悲しそうに自分の種族の説明と過去の話、その事に対する自分の気持ちを付け足しました。

これが話したくなかった理由ですね。

こんな私達と大して変わらない可憐な女の子でさえ人を殺しそうになるなんて……。

神楽さんでさえ人を殺しそうになるくらいですから、神楽さんのお父様とお兄様の喧嘩と言うのも私が想像しているものよりも凄まじいものだったんでしょね……。

神楽さんの話を聞いた私の心に同情する気持ちが沸くと同時に、私の脳裏に冬樹君と出会う前の出来事が過ぎりました。

「……神楽さんの気持ち、少しだけ分かるような気がします」

「分かるって？」

「……自分で言うのもなんですけど、私、元居た世界では有名なお金持ちのお嬢様だったんです。それも超がいくつも付くほどの」

「へえ、そうだったアルカ……」

「でも、だからと言って特別な待遇は望んでませんでした。

『特別』な立場であっても、『普通』の子どもとして接して欲しい……そう、望んでいました」

私達の頭上にある神楽さんの傘を朝から降り続ける雨がぼつぼつと叩きます。

「私が小学生の頃、ある普通の学校に通う事になったのですが、周りの生徒のほとんどは私を特別扱いして普通の女の子として接してもらえませんでした。

これから先、ずっとこんな望んでない『特別』扱いを受ける事になるのか……と落ち込んでいたその時、ある男の子が読書しながら私の方に向かって歩いて来たんです」

「ひょっとして、その男の子が冬樹アルか？」

真剣な態度で話す私の昔話を聞いて予想を口にする神楽さん。

そこで神楽さんの口から冬樹君の名前が出て来るのが予想できなかった私は

「え、え、そ、それは、そのー、そ、その通りですけど……」

どぎまぎしながらその通りと返答すると

「運命の出会いって奴アルかあ！……で、で！……その先は！……それからどうなったアルカ！？」

話の先が気になって気になってしょうがない様子の神楽さんは話の続きを語るよう促します。

さっきまで落ち込んでいたとは思えないくらい明るい神楽さんの笑顔を見て、私も少しだけ微笑みながら話を続ける事にしました。

「……初めて近くを男の子が通った私はそのまま冬樹君を見つめて、私が見つめる冬樹君はと言つと読書をしたまま私に気付かずにごっこの方に向かって来ました。」

「どんだんだん近付いてくる冬樹君の姿に気を取られていた私は冬樹君とぶつかって、廊下に倒れてしまいました」

「それでそれで!？」

「廊下に倒れてしまった私は冬樹君に謝りながらぶつかつた時に冬樹君が手放して廊下に落ちてしまった本を拾って冬樹君に渡して、冬樹君は私を『ごく普通の女の子として』教室に案内してくれました。」

「そんな冬樹君との一件があつたからか、私は学校で普通の子どもとして接してもらえたんです」

「それが桃華の恋の始まりだつたアルか……」

「そうです　　ってな、ななななな、何を言つんですか神楽さん!？」

「神楽さんの言葉を聞いてついうっかり誤って返事してしまい慌てて言い直します。」

「え、違うアルカ？」

「え、ち、違うって訳でも無いんですけど……。ってそうじゃなくて!！」

「そう言う訳で、神楽さんが自分の種族に対して感じている事が私にもちよつとだけ分かると言ってるんです!！」

「完全に違うかと言われればそうでもないので一応肯定して、私が言いたい事を改めて説明しました。」

「あ、そう言えばそう言う件くだりだつたネ」

「神楽さん……」

「なんで私がその話をし始めたのかすっかり忘れるくらい冬樹君との運命の出会いに興味を持ってしまった神楽さんに少しだけ呆れました。」

「そう言う神楽さんはどう言つた経緯で銀さん達と知り合つたんで

すか？」

「んー、江戸（こゝ）に来たらマネーつかめる聞いて遠い星からはるばる出稼（い）ぎに来て、パンチパーマに喧嘩誘われて、喧嘩が嫌になってパンチパーマから逃げてたら偶然銀髪天然パーマ達と知り合ったアル。

で、なんやかんやあつて万事屋に住み込みで働く事になったネ」

「へ、へえ〜……。神楽さんの御家族の方って今どうされてるんですか？」

「パピーは宇宙の何処かで何かと戦つてると思うアル。バカ兄貴は……どうだって良いネ。マミーは私が小さい頃にお星様になつちやつたヨ」

「そうなんですか……」

「そう言う桃華の家族はどうしてるアルか？」

「私のお父様は大企業の社長のようなもので毎日忙しくて、お母様は強さを求めて私達の世界の地球を旅しておられます」

「強さを求めて旅してる……」

「？　どうかしたんですか？」

「あ、いや、ちよつと気になって……。桃華のマミー、凶暴じゃないよネ？」

「ある意味凶暴かもしれませんが、むやみやたらに人を襲つたりしませんから大丈夫ですよ」

「そ、そうだよネ！　桃華のマミーに限ってそんな事ある訳ないよネ！」

「神楽さん？」

「な、何でも無いアル！」

こんな具合に、定春君の背中の上で神楽さんと家族の事についてのんびり会話していると

「モモツチ、これあげる」

急に神楽さんがタマちゃんのような呼び方で私を呼んで私に小さな箱を手渡しました。

「……酔昆布？」

私が小さな箱に書かれている文字を声に出して読むと

「友達の印ネ！ 酸っぱいけど美味しいアルヨ」

神楽さんがにっこりと笑顔でこう告げました。

「……ありがとうございます」

断る理由も無いので素直に神楽さんと私の友達の印を受け取って、小さな箱の中に入っている酢昆布と言うものを口にくわえます。

「……酸っぱい……」

それは想像していたものよりも遥かに酸っぱかったです。

「モモチ、私にできる事があればなんでも言っテヨ。色恋沙汰だろつと何だろつと万事屋神楽が全力で協力してやるネ！」

「分かりました、万事屋神楽さん」

胸を張る神楽さんに冗談で返す私。

そんな私達を乗せて、定春君は時折クシユンとくしゃみをしながら、のっしのっしと街を歩きます。

傘を差す理由（後書き）

ども、白黒仮面です。

今回短くなっちゃった理由はお話の展開上、ここで一旦切っちゃった方が良かったかな思て。

まあ次回を見れば分かるかもしれないんで次回をお楽しみに。

次回は早めに更新できるかも。あんまり期待しないでね。

逆成長

神楽と桃華、定春が二階にある万事屋前に来ると神楽が傘を振って傘に付いた水滴を落とすと同じように定春も二人から少し離れた場所でブルブルブルと体を震わせて毛に付いた水滴を落とす。

ガラガラと引き戸の玄関を開けて神楽と桃華が声を揃えて「ただいまー」と告げて玄関に入ると

「定春ー、すぐにタオル持って来て拭いてあげるからここで待つてるんだヨ」

「ワンツ！」

水滴を落としたとは言えまだまだ濡れている定春の頭を撫でながら神楽が優しく一言告げる。

そこに

「大変ですうー!!!」

そう言いながら万事屋のリビングから黒い蛙のような生き物、タママが慌てた様子で走って来た。

「タマちゃん、何かあったんですか？」

「銀時さん達が!!! 軍曹さん達が……!!!」

「銀ちゃん達がどうしたアルカ？」

「とにかくこっちに来て下さいですう！」

何故タママがここまで慌てているのか、帰ってきたばかりの二人がその理由なぞ知る訳無いので顔を見合わせて首を傾げながら言われるがままにリビングに向かう。

神楽と桃華がリビングに足を一歩踏み入れると

「鬼ごっこだー！」

「よーし、ゼロ口鬼ねー！」

「えええええ!？」

「にげるー!!!」

「ま、まってよー!!!」

緑色や青色、赤色の蛙のような姿の宇宙人にピョンと立ったアホ毛が特徴的な男の子と言った、見た事のある姿の小さな子ども達が狭い室内で追いかけてこいたり

「ああ、部屋の中で騒いだらダメですよー！」

見た目はごく普通の平凡な見た事のある……ような姿の小さな子どもが注意したり

「……………ZZZ……………」

銀髪天然パーマの見た事のある姿の小さな子どもが気持ち良さそうにお昼寝してたりしていた。

絶句する神楽と桃華。

今までの経験プラス自分の目で見て何が起こったのかすぐさま理解できたものの、あまりに現実離れしている出来事に言葉を失ったのだ。

「ぎ、銀ちゃん達が子どもになっちゃってるアル！！何が起こったアルカ！？ひよっとして謎の黒ずくめの男達に薬でも飲まされたアルカ！？組織に追われてるアルカお前等！？」

「いや違うと思います。タマちゃん、これはいったい……………？」

神楽のボケに冷静に対処してから一応、念の為にタママに話を伺ってみる桃華。

「実は……………」

事の発端は神楽と桃華が定春の散歩をしに万事屋から出て行った後の事。

「じゃ、早速男は男同士話をしましょうか？」

「桃の事どう思ってたんだ、冬君よお」

「え、えっと……………。別に、ただの友達ですよ」

「隠さないで良いんですよ？」

「隠してませんって。西澤さんは僕の普通の友達です」

まずは冬樹が桃華の事をどう思っているのか改めて本人に意識確認する銀さん&新八。

その結果、冬樹が桃華の事をどう思っているのかだいたい理解したところで

「銀さん銀さん。どうやら冬樹君は桃華ちゃんに対してそこまで深い感情を抱いている訳じゃないみたいですね……」

「友達以上、恋人未満、か……。メチャメチャ楽しい時期じゃねーか。羨ましいぜ、オイ」

「でも桃華ちゃんのあの態度を見るからに、桃華ちゃん自身は恋人以上の関係を望んでいるようですけど……」

「対する冬は桃にそこまでの感情を抱いてねえ。前に神楽をまじまじと見てもそんなに変わった様子を見せなかったし、冬は相当の鈍感みてーだな……」。

下手に詮索して二人の仲が縮まるとマズいな、これは……」
「マズイですね……」

今までに得られた二人に関する情報を確認し合い、その情報だけで今の冬樹と桃華の正確な関係を小さな声でこっそり吟味する男二人。

彼等が言うマズイとは冬樹が自分の心の奥底にある桃華に対する本当の気持ちに気付き、自分達の近くでもイチャイチャする事である。

「……あ、あのー……」

二人でコソコソ会話する銀さんと新八に冬樹が声を掛けると

「ああ、すみませんね。……それで冬樹君は桃華ちゃんと何時出会ったんですか？」

「僕が小学校の頃ですけど……」

「その頃の冬ってどんな奴だったよ？」

「今とそんなに変わらないよ……」

「そう言えば……冬樹君の子ども頃ってどんな子どもでした？」

それを避ける為になるべく気付かれないようにしつつもちよつとだけ強引に話の中心を桃華の事から冬樹の小さい頃の事にすり替えた。

「僕が子どもの頃？ えーっと……」

「やんちゃで生意気で、まさにガキ大将みたいな子どもだったであります！」

「なんでお前が答えるんだよ」

「いやー、我輩達にもいろいろありまして……」

「軍曹達が作った機械で子どもにしたり大人にしたりするのがあつて、それで……」

「ああ、なるほど……。つてええ！？ そんな機械からくりがあるんですか！？」

「ま、まあ……」

「それは凄いですね……。こっちにもいろいろと凄からくりい機械はありますけど……」

「そっちはそっちで変わってんだ……。ま、とにかく、冬がガキの頃は今と違ったんだな？」

「う、うん……」

「たまに居るよね、今と昔が全然違う奴。あれ、お前、そんなキヤラだったっけ？ みたいなさあ」

「あ、それ分かるわあ」

「え、なになに、お前等の知り合いにそう言う奴居るの？」

「知り合いも何も、ドロロがそう言う奴でありますよ」

「え、青が？ マジで？」

「昔のドロロって体が弱くって弱虫でさー、いつも我輩やギロロ、他の同級生達に後れをとってたんだよね」。

「そんなあのドロロがちよっと前まではケロン軍超精鋭部隊『アサシン』のトップ、今じゃあ忍者でありますからなあー！」

「い、いやあ……」

「へえ……ドロロさんって意外と凄い人だったんですね！」

「新八より地味で影が薄い割にはな」

「えええええ！？」

褒められて喜んでいられたのも束の間、銀さんが言う自分の印象

を聞いてドロロは部屋の隅で凹んでしまった。

「それに俺達が地球……いや、俺達の世界の地球に来た際に『ゼロ口』から『ドロロ』に改名したしな」

「……そうなんですか……」

「……っつーか銀時殿銀時殿」

「なんだあ？」

「我輩達の呼び方変わってね？」

「人の名前覚えるの面倒臭えんだよ……。これなら覚えるの楽だし、字数も減るから書く方も楽だろ？」

「そうかもしれないが……」

「ところで銀時さん達はどんな子どもだったんですかあ？」

「俺？ ただの小汚エクソガキだったよ」

「銀さんぐらい酷い訳じゃないですけど、僕もだいたいそんな感じですかね……」

そんな具合に会話しているとすやすやお昼寝をしているカオスの額の水晶が強く輝き出した。

「マズイ、と思った時には視界は真っ白になり……」

「気が付けば隊長達が子どもに戻ってた、って訳か。くっくくくく……」

タママの説明を聞いて結末を告げるぐるぐる眼鏡を掛ける黄色の蛙。

少しの沈黙の後、その場に居る筈の無い人物が突然登場した事に

「うわあ！！」とびっくり仰天の神楽、桃華、タママ。

「ってなんでお前がここに居るアルか!？」

その三人を代表して神楽が驚きながら質問すると「トラブルの匂いを感じて来てみました」とクルルは棒読み気味の言葉で返答する。

「それに昨日言い忘れてた事があったからな」

「言い忘れてた事？」

クルルがここに来た用件を聞いて興味を持った桃華がクルルが言

った台詞の中で気になったワードを復唱すると

「ああ、今後もこう言うあり得ねえ変化が起こるだろうから、その時は無理に元に戻そうとしないで放置してくれってな。

あのガキの水晶の事を調べるには、少しでも多くの情報データが必要なんだね……。く〜つくつく！」

と昨日、言い忘れていた事を説明した。

「は、はあ……」

「じゃあこれ放つとけって事アルか？」

クルルの話に納得したらしい桃華が溜め息のような相槌を打ち、確認する為に神楽が問うと「そうなりますね」とクルルはまたしても棒読みで返答した。

「もしこのまま冬樹君達が元に戻らなかったらどうしたら良いんですか？」

「そんな時はあのガキの水晶の力使って元に戻しゃあ良いじゃねーか」

桃華の疑問に即答するクルル。

「つつーかなんで僕はなんともねーんだ、ゴラァァァ！！！！！！」

ここでタママが銀さん達やケロロ等は子どもになっちゃったのに自分の体だけ変化が無い事に対する不満を爆発。

「さっきの回想で出て来た台詞が一回だけで目立ってなかったからじゃね？」

「え、そ、そうなんですかあ!?!」

「そうなんじゃね？」

神楽の予想を聞き、タママは慌ててクルルに意見を求めるとクルルはふざけたような言葉で返事する。

「……確かに軍曹さん達の昔話に入りづらかったのは紛れも無い事実ですけど、これじゃあ普段のドロロ先輩の扱いと同じだろーがアアアア！！！！！！」

「まあまあタマちゃん……」

自分の扱いに憤慨するタママを桃華が落ち着かせようとしていたところに

「ちよつと！！ 雨だからって家の中で騒がな……」
万事屋の下で仕事をしていた愚痴を言いに参上した夏美が万事屋の現状を目の当たりにして凍り付いた。

万事屋の下のスナックお登勢。

「……こりやまた凄い事になってるねえ……」
子どもに戻ってしまった銀さん達を見て驚きの言葉を口にするお登勢さん。

信じられない光景にキヤサリンとたまさんも驚いているようだった。

「また厄介事が……」

「夏美さん、しつかり！」

面倒な事が増えてがっくりと肩を落とす夏美を励ます小雪。

今の子どもになってしまった連中の状況を整理すると銀さんと新八の二人は身長で判断するとだいたい六から八歳くらいで銀さんは誰のものは知らないが自分の体と同じくらいの大きさの刀を大切そうに持っている。

冬樹はと言うとだいたい五、六歳くらいでケロロ、ギロロ、ドロロ等は顔の白い部分が多くなっておたまじゃくしのような尻尾が生えてタママのような姿になっている事から相当小さな頃に戻ってしまったみたいである。

特にドロロは大人の時と違って被っている帽子がケロロやギロロと同じものになり、口当ての代わりに普通の白いマスクをしている。そして今回、何よりも厄介なのはどうやらその中身までその頃に戻っているらしく、特にケロロ、ギロロ、ドロロを引き連れて威張る冬樹、他の子ども三人を涙目で追う子どもドロロ……もといゼロ口の二人の様子を見れば一目瞭然である。

普段の彼等ならそう言う事にはならないのだ。

「ドロロ達、元に戻るの？」

「このまましばらく放置して、元に戻らないようなら水晶の力で元

に戻せ、って黄色が言ってたアル」

「どうしてすぐに元に戻さないんですか？」

「なんでもカオス君の水晶の力を詳しく調べる為に少しでも情報が必要だそうで……」

小雪とモアの質問につきさつきクルルから聞いた内容を言う事で説明する神楽と桃華。

ちなみにそのクルルは話が済んだ際、源外さんとここに戻ったようです。

「何にしても、今の冬樹を働かせるのはマズイわね……」

今の冬樹はひたすらやんちゃで生意気な『子ども』である。

その頃の冬樹は素直に言う事を聞いてくれるような性格じゃないし、仮に素直に言う事を聞いても小さな子ども、何かと失敗してお店に迷惑を掛ける事になるのは目に見えている。

「あのー、私、冬樹さんの分まで働いても良いですよ？」

「本当に良いの、モアちゃん？」

「良いですよー、てゆーか臨時体制？」

「じゃあ明日冬樹が元に戻らなかつた時はお願いね」

そうならない為にモアが冬樹の代わりに働く事になった。

「ならモア、アンタ今日は休みな」

「い、良いんですか？」

「構わないよ。店の手伝いは二人居れば十分だから」

お登勢さんのお店の手伝いの方はこれで問題無さそうだ。

「すみません、僕達のせいで迷惑をお掛けして……」

「い、いいのよ、そんな、気にしなくて……」

声変わりする前まで年齢が戻ったからか若干高くなった声で丁寧に謝るちび新八とその対応に困る夏美。

「相変わらず眼鏡はクソ真面目アルな」

「眼鏡つて何！？ 掛けてないじゃん、ホラ！！」

小さな新八は神楽の発言に対し元の状態と大して変わらないツツコミを披露する。

「……ZZZ……」

「アイツも相変わらずみたいだねえ……」

店の席に堂々と座ってこんな事態にも拘らず気持ち良さそうに眠るちび銀さんを見て呆れるお登勢さん。

「……しっかし、これが後々あのチャランポランになるなんて信じられないねえ」

「何があつたらあんな人になるのでしょうか？」

「銀ちゃん、ちっちゃい頃の事喋りたがらないからよく分からないアル」

すやすやと眠る小さな銀さんを見てお登勢さん、たまさん、神楽がそれぞれ感想を呟く。

万事屋は狭過ぎるので恒道館道場に場所を移した一行は

「トランプをしましょう！」

室内で騒がせない為に、子どもになってしまった面子の中でも常識のあるちび新八がトランプで遊ぶ事を提案する。

「えー、トランプー！？ もっと違う事したーい！」

ちび冬樹が不満そうに反対するもの

「今日は雨ですし、これで我慢して下さいよ」

ちび新八はそう言って冬樹の意見を無視した。

ちびケロロやちびギロロ、ちびゼロロ、神楽、桃華、モア、タママが新八の近くに集まる。

恒道館道場に来た後も居眠りを続ける銀さんと赤ん坊である力オス以外のこの場に居た全員がトランプに参加するようなので「チエ……」と言いつつ冬樹もしぶしぶトランプに参加する事に。

「何しますか？」

「何でも良いアル」

「じゃあ……」

そうしてトランプで遊び始めて早一時間。

「トランプ飽きた〜!!!!!!」

「やんちゃ盛りの子どもが長時間じつとしていられる訳も無く、飽きたちび冬樹がギブアップすると

「ねえねえ、今からどっか遊びに行かない？」

同じくトランプに飽きたちびケロロが突然そんな案を告げる。

「どっかって何処行くんだよ？」

「そうだねー……あつ！ 『しんせんぐみ』 行こう、 『しんせんぐみ』！」

「な、なんで？」

「ここ広いだけで何も無いじゃん。あそこなら何か面白いものがあるかもしれないぜ！」

ちびケロロの何気無い一言がちび新八の心にグサリと刺さっていたがお構い無しにちびケロロ達は勝手に話を進めていると

「行こう、行こう！」

行った事の無い場所、探検した事の無い知らないところに興味が湧いたちび冬樹も賛成のようだ。

「よし、じゃ早速 『しんせんぐみ』 のところに行こうぜ！」

「オー!!!!!!」

「ああ、待ってよー！」

善は急げ、早速 『しんせんぐみ』 のところに向かう事にしたちびケロロ達は道場の玄関に向かって走り出す。

「あ、お前等！ モモツチ、タマツチ、追うアルヨ！」

「はい！」

「了解ですう！！」

「あ、僕も行きます！」

「私は銀時さんとカオス君の面倒を見ときますねー」

神楽と桃華、タママ、ちび新八はちびケロロ達を追う役、モアは道場に残ってカオスの世話をする役と言った具合に役割を分ける。

「おにごつこだー！ アイツ等に捕まったら『ごつもん』だぞー！」

「え、ええええ！？」

「よし来たー！！！」

「逃げるー！！！」

「待ってー！！！」

ちび冬樹が後を追いかけてくる神楽達をおにごつこの鬼に見立てて妙な事を言うのでちびゼロロは怯え、ちびケロロとちびギロロは楽しそうに神楽達から逃げる。

道場の玄関に到着したちびケロロはまず適当に近くにあったと言う理由で玄関に立てかけてあった紫色の番傘を持つが「これ重っ！！」と言う理由で別の傘にした。

一方のちび冬樹は急いで新八のお古の草履を履く。

「急げ！！！」

「……よし！！！」

ちびギロロの急かす声を耳にしつつ、しっかりと草履を履いてちびケロロが準備してくれた傘を受け取りそれを差して走るちび冬樹。

体が小さいから二人で一つの傘に入って、水溜りも気にせず入ってパシャ、パシャ、パシャと水音を立てる。

雨の中、小さな男の子が小さな手で開いた傘を支えながら足の数よりも多く水音を立てて街を駆ける。

「後ろどう！？ 撒いた！？」

「……追って来てないぞ！！！」

ちび冬樹がちびギロロに声を掛けるとちびギロロは走って後ろを振り向きながら返事する。

「やった！ 逃げ切ったぜ！！！」

ちびケロロが喜んでいると次の瞬間、突然自分達の目の前に紫色の番傘を差した赤いチャイナ服の可愛い女の子が姿を現した。

突然出現した女の子に「うわっ！！！」とちび冬樹達が驚いて立ち止まり

「この街で万事屋神楽から逃げられると思ったアルカ！」
神楽が堂々と発言すると

「待つてください、神楽さん！」

冬樹達の後ろからゼエハアと息を切らしながら桃華とタママ、ちび新八が近付いて来て神楽と合流。

「つ、捕まっちゃったよ……。『ごうもん』だよ……」

ちびゼロ口が怯えながらそんな言葉を口にするのとガン！ と神楽がちびゼロ口の頭に拳骨を食らわせる。

「これで許してやるから、一緒に行くアルヨ！」

「い、痛い……」

「……なんでゼロ口さんだけ？」

頭の上に大きなタンコブを作ったちびゼロ口を見てちび新八が一言ツツコミを入れた。

そんなこんなで到着した真選組屯所。

「ごめんくーださーい！！」

「ふざけてんのかお前？」

まるで友達の家に来た時のようなノリで神楽が真選組に挨拶するとちよつとイライラしている真選組副長が出迎えた。

「どうせつまんねー用事だろ、とつとと帰れ。こっちはテメー等に付き合っつてやれるほど暇じゃねーんだよ」

土方さんが手を振ってしっしと追い払うようなモーションをすると「誰もこんなムサイ男だらけの空間に来たくて来た訳じゃないネ。ただコイツ等がここ来たいから連れて来ただけアル」

神楽がここに来た理由を告げる。

「……コイツ等って何処居るんだ？」

土方さんの質問に神楽は「ん」と言っつてコイツ等であるちびゼロ口達を指差して答えるが、神楽の指の先にちびゼロ口達の姿は無か

った。

「……ってあれ？ アイツ等は？」

「ま、まさかまた勝手に行動し始めたんじゃない……」

ちびケロ口達の姿が無い事に気付いた新八が消えた連中の行動を予想すると

「つつーかお前誰だ？」

土方さんがさつきから堂々とこの場に居合わせる見慣れない平凡な子どもに質問する。

「新八です、志村 新八」

「……万事屋に居た眼鏡の？」

「そうですよ」

「……え、誰だって？」

「だから新八です！ 姉上がおたくの局長にストーキングされてる眼鏡を掛けたイマイチパツとしない地味な弟ですー！！」

「……どうやら俺ア働き過ぎのようだな。妙な幻覚が見えやがる」

「オイいい加減現実と向き合いやがれヨ、マヨラー」

目の前に居る見慣れない小さな子どもが新八だと信じようとしな
い土方さんに若干イライラしながら神楽が注意する。

「実はカオス君の力で銀さんや新八さん、冬樹君、ケロ口さん、ギ
ロ口さん、ドロ口さんが子どもの頃に戻ってしまったんです」

「それで小さくなったフッキー達がここに行きたいって言い出して
新八さんの家飛び出して……あとは成り行きでここまで来たんです
う」

桃華とタママが簡潔に今の状況を説明すると

「チツ、こっちはそれどころじゃねーって言う時に……」

「何かあったんですか？」

面倒な出来事に対し舌打ちをしてくしゃくしゃと短い髪を掻きな
がら土方さんがいつもよりも不機嫌そうにぼやいた言葉を聞いて、
新八が何事かと尋ねるが

「……いや、何でも無エ」

今は喋る時じゃないと感じた土方さんは自分に言い聞かせるように返答した。

一方、姿を消したちびケロロ達。

「今度はここでかくれんぼだ！」

「ねえ、もう止めようよ。今度こそ怒られるよ」

「だったらゼロロだけ帰れば良いじゃん」

「で、でも」

懲りない彼等は神楽達鬼に見付からないようこそと移動すると

「……………」

何処かから非常に小さな声が聞こえてきたのでちびギロロが

「しーっ！ 静かに……………」

と口元に立てた人差し指を付けて喋るなと警告するとちびケロロ達は声がしたと見られる物置に耳を近付ける。

「なあ、聞いたか？ あの辻斬りが江戸に向かってっているって話……………」

「ああ、聞いた聞いた！」

「なんでもその辻斬り、先月だけで千人は斬ったらしいぜ……………」

「せ、千人って！！ マジかよ!？」

「まだよく分からないが、たぶんマジだと思うぞ……………」

「ヤベエよな……………」

夜、街を歩いてうっかり出くわせば真つ黒な刀でバツサリ、運良く助かっても体に妙な模様が浮かび上がれば次の満月の夜、命を吸われる……………」

出くわしたら最後確実に死に至る事から付いた異名が『死神』だもんな……………」

「大丈夫だって、そうは言っても所詮噂。ウチ等真選組がそんな辻斬りなんかには負ける訳無いだろ？」

「そうかもしれないけど……………」

「なんか物騒だね……」

「『つじぎり』って何だろうね？」

「確か、刀の試し斬りや自分の腕試しの為に行きずりの人を斬る事やそれをする人の事を言っただよ……」

物置から聞こえてきた情報を聞いたちびケロロ達が他人事みたい
に各々思った事を口に出していると

「あつ！ 神楽さん、桃華さん、タママさん！ 居ましたよ、こっ
ちです！」

ちびケロロ達を探しに来たちび新八がちびケロロ達を発見。

「ゲツ！！」

「逃げるー！！」

ちび新八に発見されたちびケロロ達は慌てて逃げ出した。

ちび新八から逃げ延びたちびケロロ達は一旦ある部屋に避難する。

「ハア、ハア……」

「ここは……？」

走り疲れたちび冬樹、ちびケロロ、ちびギロロ、ちびゼロロは荒
くなった息遣いを整えながら部屋の中を見渡す。

「クソツ、アイツ等何処に行きやがった……」

屯所の中で消えたちびケロロ達を探す事に協力する土方さん。

真選組屯所には隊士達が休む部屋のほか、会議室、道場、通信室、
資料室など様々な場所があるのだが、その中には武器がしまっ
てある武器庫も当然存在する。

攘夷志士に後れをとらぬよう、また、攘夷志士から奪った武器が
置かれているその武器庫に小さな子どもが入り込み、その武器で悪
戯なんかされたら溜まったものじゃない。

それを避けるべく彼が屯所の中を必死に探していると

「あ」

「ひ、ひい……」

土方さんは廊下の隅で青い蛙のような生き物を発見。

「オイ、待て！」

ちびゼロ口は角を曲がって視界から外れるので声を掛けながらちびゼロ口の後を追いかけるとそこには武器庫から拝借したのである。うバズーカの砲口を土方さんに向けて発射準備万端のちびゼロ口とバズーカを支えてちびゼロ口のサポートをするちびゼロ口とちび冬樹が居た。

「ちょ、お前等……」

「撃てー！！」

引き撃った土方さんを他所に言い放たれるちび冬樹の発射合図。

ドカアアアアーン！！　と言う轟音が雨が降る屯所に響き渡る。

「　　何しやがんだ！！」

「逃げるー！！」

咄嗟にバズーカの砲弾を避けた土方さんが良識ある大人としてちび冬樹達を怒鳴るとちび冬樹とちびゼロ口は楽しそうに笑いながら、ちびゼロ口とちびゼロ口はちょっと気まずそうに逃げ出した。

「ちょっと待てテメー等！！」

「土方さん、危ないですぜイ」

青筋を立てて冬樹達に注意する土方さんに聞こえてくる甘ったるい声。

その声を聞いて不満そうに「ん？」と言いながら声がした方向に振り向くとそこにはバズーカを土方さんに向ける沖田さんの姿が。

屯所に二度目の爆音が響く。

「総悟オオオオ！！　お前まで何やってんだアアアア！！」

「何って土方さん殺そうとバズーカ撃つただけですよ。

それで上手く始末できたらガキ共の無邪気な悪戯に巻き込まれたって事にするつもりだったんですがねイ……チッ」

「何がきに罪着せてんだ！！　殺すぞ！！」

「まあまあ、落ち着いてくださいえ。無邪気なガキの悪戯くらい笑って許せねえとこの先やっていけませんぜイ？」

「邪気に満ちたお前の悪戯に巻き込まれたんだけどオー!!」
爆発により生じた黒煙がもうもうと舞う屯所の廊下で土方さんと
沖田さんが漫才のようなやりとりをする。

「オイ、冬樹!!」

「何ー?」

「本当にあれ大丈夫だったのか!??」

「大丈夫だって! 『てろりすと』と戦う『しんせんぐみ』に、こ
んな子どもが撃ったバズーカの弾なんて当たりっこないよ!」

「さっきのは思いつきり当たりそうだったけどな……」

一方の小さな子ども達、ちびギロ口とちび冬樹が逃げながらこん
な会話をしていると廊下の交差点で

「待てやくソガキ共オオオオ!!!」

「ヤバイ、来た!!」

彼等の後方から嫉妬に狂ったタママが追跡してきた。

「見つけましたよ!!」

「挟み撃ちだぜ!!」

急いでタママから逃げようとするが右からちび新八が、左からは

『裏』桃華が

「観念するアル!!」

前方には神楽が立ち塞がる。

他の四方は全て壁なので文字通り八方塞がりになった小さな子ども
も達は呆気なくここでお縄頂戴となった。

真選組の屯所から恒道館道場に小さな犯罪者達が連行される時、
犯罪者達の頭の上にはこれまた大きなタンコブが一つずつ付いてい
たそうだ。

逆成長（後書き）

と言う訳で感想でネタバレしちゃった銀さん達が子どもになるお話でした。

ちなみに回想シーンでどの台詞をタママが言ったのかは皆さんの想像にお任せします。

ウツス、白黒仮面ツス！

最近、銀魂アツイですね。原作はお久しぶりのアイツ登場、アニメはかぶき町四天王編。

アニメはこっちじゃ放送されてませんから、テレビであのお話が見れなくて凄く残念です。

で、あともうちょいで銀魂ベスト2も発売ですからもうテンション上がりまくりです。

ついでにようやく詰まっていた部分もスッキリしたので執筆のペー
スが上がる……かも。

まああんまり期待せずに気長におまちください。

第二次銀魂世界缶蹴り大戦（前書き）

『ちよこつと銀八先生！』

銀八先生「百鬼丸さんからの質問。『前のお妙さんの事での質問で、お妙さんはどの位怒っていましたか？』

前の質問と言うのは銀魂世界での一日 part 3で回答した『もしお妙に「これは卵焼きじゃなくて宇宙最悪の激不味い兵器だよ。そしてなんで火を通さないのに食べ物、ダークマターに出来るなんて魔王なの』ですね。

ズバリお答えしましょう。

大魔王並と言うべきでしょうか、とにかく魔王が泣きべそかいて土下座するくらい怒ってました。

それでは百鬼丸さん、背中に気を付けて下さい」

第二次銀魂世界缶蹴り大戦

銀さん達が子どもになった翌日。

即ちケロ口達が『銀魂』世界に来て五日目の空は昨日の雨が嘘のように澄んだ青色が独占していた。

恒道館道場の敷地内ではピョンと立ったアホ毛が特徴的な小さな男の子と緑、赤、青の体色の宇宙人と神楽が缶蹴りをしてわいわい楽しんでいる。

「結局、一日経っても元に戻らなかったわね……」

「でも子どもになってしまったとは言ってもみんな楽しそうですよ」

「まあそうだけど……」

楽しそうに屋外で遊ぶ子ども達を見てハアと溜め息を吐く夏美をなんとか励まそうとする子ども姿の新八。

冬樹が元に戻らなかったのも昨日念の為に計画していた通り桃華とモアの二人がお登勢さんのお店へと向かい、『ケロ口軍曹』メンバーの中で元のままなのは夏美と小雪、タママ、クルルの三人、万事屋メンバーに至っては神楽だけ。

しかしクルルは相変わらず源外さんのところに行っただけで滅多に姿を見せない為実質的には四人でしかも全員未成年。

脅威的な力を持つ水晶の持ち主である赤ん坊の世話に加えて、自分達よりも若くなって、それも元の状態とは比べ物にならないくらいやんちゃになってしまった子ども相手もしいといけない。

それなのに、元のままの四人のうち神楽と小雪、タママの三人は缶蹴りに参加して呑気に遊んでいるのだ。

そのような現状でただ一人、事の重大さをしっかりと理解している夏美の口から溜め息の一つや二つ出るのは当然なのである。

そんな夏美の沈む気持ちとは裏腹にカーン！ と空き缶を蹴った時に出る気持ちの良い音が恒道館道場に響く。

「やったアル！」

「ああ、蹴られた……」

神楽に缶を蹴られて小雪が落ち込む。

「ナッチーもやるうヨ！」

「楽しいですよー！」

「いや、楽しいって言っても私には無理だから……」

神楽が一瞬の隙を突いて物凄い速さで蹴る為に向かい、鬼である小雪がそれを見つけ負けじと物凄い速さで踏む為に向かう。文章では酷く単純かもしれないがその二人の速さは百メートルを十秒、いや五秒で走り抜けるくらいのものでもう速いのなんのつてぶつちやけその化け物じみた二人だけで缶蹴りをやっているようなものでちび冬樹、ちびケロロ、ちびギロロは二人の邪魔にならぬようちびゼロロとか子ども姿のドロロとか青い蛙のような宇宙人とかを使って鬼の小雪の注意を引く係に徹しているし。

「それにカオス君の世話だつてあるし……」

夏美がカオスの世話を理由に神楽の申し出を断るが

「カオスなら少しくらい放置しても大丈夫アル、たぶん」

「いや、この子の場合少しの放置が取り返しのつかない事態になり得るからね？ つつーか『たぶん』て凄い不安になるんですけど」

「うるさいネ、リトル新八。そんなに言うならオメーが様子見れば問題無いダロ」

「……それはそうですけど……」

「つつー訳でナッチー、カオスの事はリトル新八に任せて遊ぼうヨ！」

「はいはい……」

夏美は仕方なく神楽の誘いに乗る事にした。

一方、缶蹴りに参加してないちび銀さんはと言つと……日の当たる縁側で横になりながらのんびりお昼寝中。

「オイ、お前！」

眠るちび銀さんを誰かが呼ぶとその声を聞いたちび銀さんは横に

なつたままつつすらと眼を開ける。

ちび銀さんが眼を開けた先にはピヨンと立つアホ毛が特徴的な藍色の髪の可愛らしくてそれでいて何処か生意気そうな少年が偉そうに腰に手を当てながら立っていた。

それを確認したちび銀さんは相手が目の前に居るのにも拘らず再度眼を閉じて昼寝を再開する。

「寝るんじゃねえ!!」

それを見たちび冬樹が愛らしく怒鳴って再びちび銀さんを起こすと「んだよクソガキ、今俺ア忙しいんだよ。見れば分かるだろ?」

強引に起こされたちび銀さんは体を起こして大きな欠伸をしながらちよつぱり不機嫌そうに、そして面倒臭そうに反論する。

「何処が忙しいんだよ! 昨日も今日も、ずっと昼寝ばっかしてるじゃんか!」

「昼寝じゃねーよ、こつやつて眼を閉じて精神統一してるんだよ」「何処が精神統一なんだよ! 涎垂らして幸せそうにぐーぐー寝てるくせに!」

「うるせーな! 俺が精神統一って言ったら精神統一なんですー!」
子どもにされてもなお自分より年下のちび冬樹にムキになるちび銀さん。

「こつこつか俺に何の用だよ?」

「遊ぶぞ」

「は?」

「一緒に遊ぶぞ!」

「なんで?」

「なんでって、大勢で遊んだ方が楽しいだろ!」

「嫌だよ、面倒臭エ。ガキはガキ共だけで遊んでりゃ良いだろ」

「今のお前も十分ガキだろーが!」

「年下にガキ呼ばわりされたくねーよ!」

途中からちび銀さんとちび冬樹は口論を始めるが

「ああ、もう! 良いから一緒に遊ぶぞ!」

口で誘うのを面倒臭がったちび冬樹がちび銀さんの手を小さな手で掴んで引つ張った。

「……………」

自分に剣の使い方を教えてくれた先生、目指すものは違えど一期は一緒に時を過ごした古き友、戦場で知り合った仲間、そして万事屋を営んでいるうちに周りに居た家族に腐れ縁の連中。

かつての温かかった学び舎、鉄臭い血の匂いが充満し死体が転がる戦場、アイツ等と戯れるいつもの万事屋。

ちび冬樹に手を掴まれた瞬間、『今』の坂田 銀時の記憶がちび銀さんの脳裏に過ぎる。

それがどうして今起きたのか、何故なのか、それはまったく分からない。

ただ、この繋がれた手を離すとこの先きつと後悔する。それだけは直感だがはつきりと理解できた。

自分よりも年下のちび冬樹に体を引つ張られ、勝手に立ち上がって足を動かし、自分が裸足だと言う事も忘れて庭の土を踏む。

と言う訳でちび銀さん、夏美も参加する事になった缶蹴り。

鬼の神楽には見えない位置でちび銀さん、ちび冬樹、ちびゼロ口、ちびギロ口、ちびゼロ口の子どもになった連中とタママが作戦会議。

「缶を護る鬼はあの怪力女か……。どうする、銀さん？」

「俺達の体力じゃあ缶を蹴る前に缶を踏まれちまう。だからここは鬼である怪力女に見つからないように缶を倒す作戦で行こう！」

ちび冬樹と一旦戻って草履を履いてきたちび銀さんの作戦会議の後
「と言う訳で青、よろしくね」

ポンとちびゼロ口の頭に手を置いてちびゼロ口に作戦を任せるちび銀さん。

「ええっ!? 『と言う訳で』ってどう言う訳!？」

「お前なら鬼である怪力女に見つからずに接近できるだろ」

「な、なんで!？」

「この場に居る面子の中で一番影が薄いからな」

ちび銀さんがちびゼロ口に缶を蹴りに行かせる理由を告げるとガーン！ とシヨックを受けたちびゼロ口は「良いんだ良いんだ、どーせ僕なんて……」と道場の隅っこで膝を抱えて座り込んで地面に付けた指をぐるぐるぐるぐる回していじけてしまった。

「チツ、使えねー奴だな……」

「つつーかゼロ口、元に戻ってない？」

そんなちびゼロ口を見てちび銀さんとちびゼロ口が思った事を呟く。

「仕方ねえ、こうなったらプランBだ。黒、お前エネルギー弾である缶倒せ」

「なあ、それ缶蹴りか？」

「それが無理ならエネルギー弾である怪力女を狙って注意を引け」

「もうそれ缶蹴りじゃないよな」

ちび銀さんの妙な指示を聞き、ちびゼロ口がツッコミを入れていると

「タマメインパクトオオオオ！！」

タママが勝手に神楽に向けてタマメインパクト発射するので

「ってオイ！！！！ お前は何勝手に撃つてんだよ！！！！」

ちびゼロ口が怒鳴って現時点では年上のタママに注意する。

遠くから「オイイイイ！！ 人んちで何やってんだアアアア！

！」と言うちび新八の叫び声が聞こえてくる。

「今まで一緒に過ごしてきたて分かったんです……。あの女からは僕と同じ匂いがする……」

「同じ匂い？」とちびゼロ口。

「そうですね……あの女は万事屋のプリティキュートなマスコットキャラ……僕と……ゼロ口小隊のマスコットの存在のプリティキュートな僕と丸被りじゃねーかアアアアア！！」

「自分の事をプリティキュートって言うか普通？」

「とにかく、あの女見るとイライラするんだよ！！ うらアアア

ア！！」

ちび銀さんのツッコミも気にせず口から吐き出すエネルギー弾でガンガン神楽を攻撃するタママ。

ドカーン！ ドカーン！ とエネルギー弾が爆発するが神楽は開いた番傘を盾にして自分と缶を護っている為効果は無さそうだ。

「とにかく黒に注意が向いてるからプランBは成功だな……」

「成功かもしれないけど、こんな騒いで良いのか？ 正直昨日も思っただけ……。っつーかこれ本当に缶蹴り？」

「よし、プランCに移るぞ！ 赤、お前が持つて来たテントに爆弾とかある？」

「あるけど……いったい何するつもりだ？」

「俺等全員でその爆弾を使って缶と鬼を吹っ飛ばす。それがプランCだ。行くぞお前等！」

「了解っ！！」

「……………」

ちび銀さんのルール無用の無茶苦茶ぶりに心底呆れてツッコむ気が失せたちびギロロは小さくなっていく彼等を黙って見ていた。

鬼の神楽はと言うと、缶の近くでちび銀さんの指示通り物陰から隠れながらタママが放つエネルギー弾を番傘でひたすら防ぎ続ける。タママインパクトはタママの口から吐き出すエネルギー弾、つまりエネルギー弾が発射されたところには必然的にタママが居る事になる。

当然、その事に神楽も気付いてはいるのだが、まだタママをしっかりと見た訳じゃないので『見つけた』事にはならない。

それにタママが何処に居るのか分かっていても、そのタママを下手に探しに向かえば近辺に潜んでいた最大の天敵、東谷 小雪が缶を倒しに来るのは眼に見えている。

なので簡単にはタママを追う事ができない故、神楽はひたすら缶を護り続けるしかないのだ。

「これじゃあ埒が明かないネ……」

そう思っている去何処かから丸い何かが飛んで来て缶と神楽の近くに転がった。

おそらくちびケロ口等が神楽の妨害の為に投げたものだろう。

何処かからか飛んで来た物体を神楽は即座に遠くに蹴り飛ばす。

神楽に蹴り飛ばされた丸い何かは今度は屋敷の中に飛んで行き…

…ドカーン！ と爆発。

「ふい〜、間一髪アル……」

缶を吹っ飛ばされずに済んだと神楽が腕で汗を拭いながら一息吐いていると

「い、家が……。オイ、いい加減にしるお前等アアアア！！」

家を壊された怒りからちび新八がズンズンとちびケロ口達の下に向かう。

そんな新八にタママが放ったエネルギー弾が命中しては爆発したり、ちび銀さん達が用意した爆弾が爆発したり、鬼の神楽はとうとう番傘に仕込まれたマシンガンを乱射して隠れる連中を誘き出そうとしたりと言った具合に恒道館道場の敷地内は完全に戦場と化してしまった。

「流石にこれはまずくないか！？」

「もう止めようよお！！」

「デケー声出すんじゃねえ！」

「鬼に見つかるだろ！」

ちびギロ口やちびゼロ口がもう止めようと説得するがちび銀さん、ちび冬樹、ちびケロ口は聞く耳を持たなかった。

「ねえ、私も混ぜてもらえるかしら？」

誰かの仲間に加えてと言う言葉を聞いてちび銀さん達はゆっくりとその人が居る方向に顔を向ける。

そこには桃色の可愛らしい女物の着物を身に纏った茶髪のポニーテールの美女がただただ笑顔で指の骨をパキパキと鳴らして立っていた。

「遊ぶのは子どもの仕事ですけど、いくらなんでもやり過ぎです」
本物の鬼が……、いやお妙さんが缶蹴りと言う名の騒動を鎮めた後、常識人としてちび銀さん達に注意する。

事の発端であるちび銀さんはもう顔の原型を留めないくらいポツポツにされ、この事態を招いた神楽、ちび冬樹、ちびケロロ、タママの頭にはまた大きなタンコブが付いていた。

ちなみにどう言う訳かほぼ被害者だったちび新八、ちびギロロ、ちびゼロロの頭にも大きなタンコブが付いていたがここはスルーしておこう。

「……あれ？」

「どうしたんですか、夏美さん？」

「……カオス君は？」

「確かに居ませんね……」

お妙さんの被害を受けなかった夏美がそう言うと言つと皆は首を振って辺りを見渡し、この場にカオスの姿が無い事に気付く。

「なんでカオスから眼を離れたネ、リトル新ハイ!？」

「あんだけ自分ちで騒がれたら眼も離れるわア!！」

「つたく、しつかりしろよぱつつあん」

「元を辿れば全部オメーが原因なんだよオオ!！」

「新ちゃんもいい加減大人なんだから、しつかりしなさい」

「すみません姉上、今は歴れっきとした子どもなんですけど。そもそもなんで僕だけ責められてるの!？」

自分だけを責める『銀魂』メンバーにツツコミを入れるちび新八「それよりお妙さん、ここは一刻も早くカオス君を見つけ出すのが先決かと……」

ここで何処からか現れた近藤さんが当たり前のようにこの場に居たような顔でそう告げると

「お前は一刻も早くここから出て行けエエエエエ!！」

お妙さんは近藤さんの頭をがっしと掴んでそのまま力の限り道場

の庭にぶん投げた。

「とにかく手分けしてカオス君を捜しましょう！」

「は、はい！」

こうして、カオス君捜索大作戦が

「……面倒臭エ」

……始まったのだった。

第二次銀魂世界缶蹴り大戦（後書き）

タイトルにノリで第二次と書いたが第一次は何時だったのかは俺には分からない。

どーもー、白黒仮面でーす。最近毎日雨。雨。雨。

しとしと、じゃなくてドザーだよ。まさに滝のような雨よ？

そんな大雨が降る中、田んぼにこやしを振る重労働に借り出されました。

足場最悪、天候最悪、手伝う相手も最悪。重いもの背負う中、そりやないっしょ？

気力体力共につり持つてかれたよ。せめてもう少し天候が良い時にやってくれたら、もう少し頑張れたのになぁ……。

雨のバツキヤロー！！

さ、俺個人の愚痴はここまでにして。

迷子になったカオス君、そして意外な人物登場！？ こっからが新

約 ケ口銀の本番だ！！

……次回そんな感じになるかも。

旅する子ども

かぶき町某所にある団子屋。

「青い空、白い雲、空飛ぶ鳥に大きな船、辺りを見渡せば古いよう
で近代的な建物が並び、道を歩く人が着るのは色鮮やかな着物。

たまに妙な姿をした異人が居るけど……やっぱり良いねえ、ここ
は」

空を、街を、人を見て、そんな大人びた感想を呟くのは驚くほど
鮮やかな美しい水色の短髪で青色の大きな瞳の、外見は八、九歳く
らいの小さな男の子。

男の子は団子屋の長椅子に腰掛けて店に注文して出してもらった
団子を頬張りながら退屈そうに足をプラプラ揺らしていた。

「気まぐれで来てみたけど……どうしようかな。」

ここは『過去』だし下手に干渉したくないんだけど、かと言って
何もしないで帰るのはつまらないしなあ……うん……」

男の子が腕組みをしてなにやらうんうん唸って悩んでいると

「はいよ、団子お待ち！」

団子屋の親父が男の子が注文した団子を運んで来た。

「おっ！ ありがと、おじちゃん！」

男の子は歳相応の笑顔で素直にお礼の言葉を告げると

「しっかし……坊主はよく食うなあ……」

団子屋の親父は男の子が食べる団子の量を見て驚きの声を漏らす。
それもそうである。

男の子が平らげたと見られる団子の串の数は見るだけで優に五十
本は超えており、運ばれて来た団子も相当な数だ。

その大の大人でも食べられないような大量の団子を、一見そこら
へんにでも居るごく普通の男の子が胃袋に入れているのだ。

「どう言う胃袋してんだか……」

団子屋の親父が呆れながら小さな声でぼやく。

「おっちゃん、追加で百本頼める？」

「まだ頼むのかい！？ しかも百本て！！」

「あ、まずかった？ じゃあ二百本で」

「さらに増えてるじゃねーか！！」

「それじゃあ間を取って……三百本！！」

「何処が間ア！？」

ボケとツツコミの容量で男の子が妙な事を言うので団子屋の親父はおかしいところを指摘する。

「それより坊主、金、あるんだろうね？」

「もちのもちのもちコース！ たつくさんあるよー！」

これだけ店の団子食ったのだ。無銭飲食なんてさせたら店が終わってしまう。

団子屋の親父が金の確認をすると子どもは余裕いっぱい笑顔で返事する。

「本当かね？」

「本当、本当！」

しかし、こんな小さな子どもが金なんて持つてるのだろうか？

食べた分の団子だけでも結構な額になっていると言つのにさらに頼んでいるのだ。

親と一緒に来たのならまだしもこの子は一人、しかも格好はどう見ても金持ちそうじゃない。

どう考えても払えなさそうなので本当に払えるかどうか団子屋の親父は確認すると男の子は平然と答えて

「ホラ……」

と言って子どもとは思えない妖しい笑みを浮かべながら懐から十万はある札束をちらりと見せ付ける。

……… いったい何処にそんなもの仕舞っているのだから。

「………！！ ぐ、ごゆっくり………」

それを見た団子屋の親父はこれ以上妙な事をしてこの金蔓の機嫌を損なわないよう笑顔で店の中へと消えた。

「ふい〜！ 食った食ったあ！！ おっちゃん、お愛想ー！！」
出された団子を全部平らげて団子屋を後にした男の子が上機嫌で道を歩いていると小さな体で暗い赤色の妙な姿をした宇宙人を見つけた。

その宇宙人はハイハイで何かを追っていた。

近くに居た大人達はその宇宙人が見えてないようでもその子に眼を向けなかった。

「あれって……」

その宇宙人の事が気になった男の子はその宇宙人を追った。

「お〜、だ〜ぶ〜！！」

小さな体で暗い赤色の妙な姿をした宇宙人、カオスは目の前をひらひらと舞う白い蝶を追っかけ進む。

とうとうカオスは車道に出ってしまったが、赤信号など気にしないでどんどん進む。

そこに車が猛スピードを保って走って来た。カオスの姿が見えない上に普通の直線の道路上なので速度を落とす様子は微塵も無い。

カオスが猛スピードで近付いて来る車に気付き顔をそちらに向けてる。ぐんぐん大きくなる巨大なモノに今まで感じた事の無い感情が生じる。

カオスが今まさに轢かれる寸前、水色の髪の男の子が車をも上回る凄まじい速さでカオスを救出した。

カオスが居た位置を車が何台も何台も物凄いスピードで通過して行く。

「ふう……」

カオスの危険を回避した男の子は安堵して溜め息を吐くと黙って自分の腕の中に居る小さな宇宙人を見つめる。

男の子に見つめられているカオスはと言うといきなり居た場所が変わったのでふるふると首を振って自分が居る場所を確認する。

「……お！ あゝあ！！ おおー！！」

そして白い蝶の姿を確認するとその後を追おうと手足を動かす。男の子がカオスを地面に下ろすとカオスは白い蝶を追い、男の子はハアと溜め息を吐いてくしゃくしゃと鮮やかな水色の髪を掻きながらカオスを追った。

男の子に助けられたカオスは白い蝶をただただ追い続ける。

自分の身長は何倍もある塀の上や屋根の上に蝶が行ったら、水晶の力で自分を塀の上に移動して追う。

カオスが誤って足を踏み外し塀から落ちれば男の子がカオスを受け止めた。

崖の先に蝶が行ったら落ちるだろうが構わずに蝶を追う。

カオスが落ちないよう男の子は慌ててカオスの体を掴んで止めた。

そんなこんなで草花が生える土手に来てようやくカオスは危険な事をしなくなった。

まあ単純にたくさん蝶が居てどれを追えば良いのか迷っているだけのようなのだ。

「ハア、ちと疲れちった……」

男の子は草花が生える土手に派手に寝転がって溜め息を吐いた。

「キヤハハハハハ！」

その男の子とは裏腹にカオスは無邪気に笑っていた。

「つつーかアイツ等、何してるんだ？ そろそろ来ても良い頃……あ」

男の子がゴロゴロ寝転がりながら愚痴を吐いていると遠くから黒い服を着た男の人が近付いて来るのが見えた。

「あ、居た居た」

沖田さんが土手で蝶達と戯れるカオスを見つけると携帯を取り出

してカオスを探そう命じた人物に電話を掛ける。

「もしもし、近藤さん。クソガキ見つけました、すぐ連れて帰りやすんでそれじゃ」

近藤さんへの報告が済んだ後、沖田さんはカオスに接近する。

「お〜！ あ〜！」

カオスは近くに來た沖田さんに気付かずに蝶と戯れている。

姿や能力は天人^{あまんと}、いやそれ以上のものだと言うのに、こうして見ればごく普通の赤ん坊である。

「つたく、呑気なもんでイ……」

沖田さんがカオスの様子を見て呆れていると

「こんなつまらないところで何してるんだ〜い？ く〜つくつく！
何処かからかやって來た黄色い蛙のような宇宙人が話しかけて來た。

「えーつと、テーマは確か……」

「ケロロ小隊作戦通信参謀、クルル曹長。以後よろしくな、沖田君？」

沖田さんの質問にクルルはやけに真面目に自己紹介して返す。

沖田さんが疲れて眠ったカオスを抱いてクルルと一緒に恒道館道場に向かう道中。

「……なあ」

「なんでイ？」

「もし、もし死人が蘇ったとしたら……お前どうしたい？」

「……いきなり何の話でイ？」

「もしもの話だよ、もしも」

「別に。興味無エ」

「……そうかい」

クルルが妙な話題を振って來るので沖田さんが適当に相手をして

いるとクルルが少しだけ間を空けてこう言い放った。

「お前、姉貴を蘇らせてみたくなーか？」

クルルが言い放った言葉を聞いて話に眼の色を変える沖田さん。

何故、コイツが姉上の事を知っているのか？ それも興味あつたが、それ以上に『姉上が蘇ったら』と言う部分に興味をそそられた。

……けどダメだ。

「……馬鹿げた事言っちゃいけねーよイ。死人を蘇らせるなんて人がやっちゃあいけねエ。」

死んだ人間は蘇らねエ。蘇らせちゃいけねえんでイ」

沖田さんはそれはやってはいけないと自分に言い聞かせるように忠告すると

「くつくつく……。ま、そうだよな。」

だがよ、死んだ奴に言いたかった事やしたかった事なんてのはたくさんあるだろ？」

と黄色い悪魔は囁いた。悪魔の囁きに心が揺らぐ。

そりゃ姉上に言いたかった事なんて、したかった事なんてたくさんあります。

……だがコイツの考えが読めねエ。

「お前、いったい何考えてるんですかイ？」

「別に。ただ、ちょっと協力してもらおうと思ったただだよ」

「協力？」

「そうだ。」

俺も向こうでいろんな情報を見てきたが、そいつの水晶の力は今まで見た事が無え。

イメージを具現化する技術なら何処かの種族が持っているらしいが、それでも、世界を超えちまう規模の力なんてのは聞いた事が無え。

現段階で何処までが可能で何処からが不可能なのか、まったく予想が付かねえ。

だから、いろいろ実験して確かめる必要がある」

「その実験の協力をしろって事ですかイ？ 死者の蘇生はできるかどうかを姉上で試してみよう、と」

真剣な口調で別人のように語るクルルの話を聞いた沖田さんがクルルの考えを予想を口にする

「そーゆー事ー」

クルルが気の抜けるような返事を返す。

どうやら、コイツは実験さえできれば良いみたいだ。はた迷惑な野郎でイ……。

「嫌な奴……」

沖田さんがクルルの印象を呟く。

「よく呼ばれまーす」

「だからと言って姉上を実験に利用する気にはなれませんがねイ」

「そう言うなよ。姉貴は蘇るし、実験はできる。お互いにメリットがある、良い話だと思っただけだな」

「……確かに、聞く限りは良い話みてーですが」

「すぐには言わねーからやっってくださいよー（棒読み）」

「もうちよつとマシな頼み方ねーんですかイ？」

「くくくくくくくくくく！」

「よし、決めた。絶対やらねェ」

黒い服の男と黄色い宇宙人は親しそうに街に行く。

旅する子ども（後書き）

と言う訳で今まで読んでくれた読者なら予想できたかもしれない奴が登場したお話。

一部の台詞と口調とボケと食欲でだいたい分かったかと思うので名前は言わないぜ。

ども、白黒仮面です。

あゝ、早くケロ銀シリーズ進ませてエ。

書きたいシーンや台詞はたくさん思い浮かぶってーのになかなか執筆が思うように進まないやい。

ああ、カオス君の力で時間をゆっくりにできないかな！

できるのなら時間をゆっくりにして遊ぶ……いや執筆するのに。

……ハア。じゃ、頑張って続き書きますね……。

似た者同士（前書き）

赤いのと瞳孔開きっぱなし男のお話。

似た者同士

ケロロ達が『銀魂』の世界にやってきて六日目。

本日の朝、カオスの水晶の力で子どもになってしまった銀さん、新八、冬樹、ケロロ、ギロロ、ドロロ等がようやく元に戻った。

……のだが

「……………」

ケロロは恒道館道場の一室でカオスの水晶の力を使って自分の部屋から転送してもらったガンブラをせっせと組み立て

「……ZZZ………」

銀さんは万事屋のリビングのソファの上で横になって昼寝。

二日ぶりに元に戻ったと言うのにやっている事は子どももの頃と大して変わらない二人のだらしなさっぷりを目にして相変わらずだらしがない……と呆れたような安心したような表情を見せた神楽、冬樹、桃華、タママ、ギロロ等は今日は各々したい事をする事にした。とは言うものの特にやりたい事など無い（桃華はあったものの）冬樹と桃華は神楽と一緒にカオスも連れて定春の散歩をしに、タママは修行とか言っただけで何処かに消えた。

そろそろ言わずとも分かる頃だと思っけど、夏美と小雪とモアの三人はお登勢さんのとこに行きましたよ。

オイイイイイ！！ 僕とドロロさん忘れてんぞオオオオ！！！！作者さんまで酷いよ……と言う声が聞こえなくもないが気にしない。

そして赤ダルマことギロロ伍長はと言うと一人真選組の屯所に向かって歩いてた。

子どもの時に真選組の屯所に行った際、隊士達が話していた『辻斬り』とやらに興味を持ったのだ。

どうやらカオスの水晶の力により子どもになった期間の記憶、ギ

ロロで言えばこの二日間の記憶は消えずにちゃんと彼の中に残るらしい。

ギロロが道を歩いていると正面から真選組の制服である黒い服を着た瞳孔の開いた男、土方 十四郎が歩いて来た。

「ん？ てめーは確か……」

「ギロロだ」

「そうか。その様子だと元に戻ったみたいだな？」

「まあな。……それより、少し良いか？」

「好きにしる」

土方さんもギロロを見つけ二人は素っ気無い挨拶をすると一緒に並んで歩き始めた。

「……一昨日は迷惑を掛けたな。すまなかった」

「気にすんな、過ぎた事だ」

ギロロが一昨日の出来事を詫びると土方さんはあの時は怒ったが今は特に気にしてないと返事すると

「……で、何の用だ？ わざわざ詫びの言葉一つ言う為だけに真選組おれを探していた訳じゃねーだろ？」

土方さんがギロロに用件を訊いてきた。

こちらの行動を全て見ていたかのような発言に、ギロロは土方さんの事を随分と勘の鋭い男だと思いつつ用件を口にする。

「……ああ。一昨日、お前達のところに行った時に気になる話を耳にしてな」

「気になる話？」

「妙な辻斬りがここ、江戸に近付いているって話なんだが……」

ギロロの用件を聞いた土方さんは仕事と全く関係の無い相手にも仕事の話をしてはいけないのかと思いつつうんざりしたような声色で「なんだその話か……」とぼやいた。

そもそも、なんでギロロがその話に興味を持ったのか、土方さんが尋ねようかと思った矢先に

「その辻斬りがこの街に来た時の為に知っておこうと思ったただけだ。敵を知る事も戦場で生き抜く術だからな」

ギロ口が先にその話に興味を持った理由を告げると「へえ……」と感心したように土方さんは相槌を打つ。

「お前みたいな奴の口から『戦場』なんて言葉が聞けるとはな」

「俺はケロン軍のソルジャーだ。軍人として『戦場』を意識するのは当然の事だろう?」

コイツとは意外と気が合うかも知れない。

口元を緩ませてちよつとだけ嬉しそうな表情を一瞬見せてから土方さんはすぐに真剣な表情に戻って辻斬りの事を説明する。

「桜田 さくらだ 千兵衛 せんべえ」

脅威的な身体能力を駆使して老若男女、女子ども、種族、職業問わず、数多の人を斬り殺す最悪の人斬りだ。

何でも、奴が持つ刀身が真つ黒な刀には恐ろしい力が備わっているみてーで、その刀で斬られた相手は体に妙な模様が浮かび上がり、次の満月の夜に刀に命を吸われるんだと。

現に、今まで野郎と出くわして斬られた輩は全員死んでいる。

尤も、死んだ輩のほとんどが野郎に急所をやられて一撃で死んでいるんだがな」

「それは確かに恐ろしいな……」

「他にも野郎の脅威的な身体能力はその刀の賜物だとか、その刀は一振りですべてを切り崩し、一振りですべてを割るとかいろいろ物騒な噂がある」

「……それ、本当に刀か?」

「あくまで噂だ、噂」

土方さんの説明を聞いたギロ口が半信半疑になり呆れた様子で感想を呟くと土方さんは自分にも言い聞かせるようそう呟いてから

「とにかく、庶民に多大な被害を与えている悪党だ。

真選組として奴を見逃す訳にはいかねえ。だから最近奴を警戒して厳戒態勢をとってるんだよ」

真選組の今の状況を語った。

そこで二人は誰かの殺気を感じ地面を蹴ってその場を移動する。ドカーン！と二人がさつきまで居た位置が爆発する。

「土方さーん、死にましたか？」

黒い煙が舞うそこに沖田さんがバズーカを担いで登場。

「総悟オオ！！ やつぱりてめーの仕業かアアアア！！」

いきなり爆撃され当然の如く怒る土方さん。

「違いますよ、俺アただ目付きの悪い男が居たからてつきり辻斬りかと思つて……」

沖田さんが自分の上司を殺しかけたと言つのに真顔で土方さんを殺そうとした理由を告げる。

その理由の割にはさつき思いつきり『土方さーん、死にましたか？』と言つてましたけど。

「こんな真昼間から人斬る馬鹿が居るか。それよりお前、夜氣イ付けるよ。辻斬りにやられるぞ」

土方さんがこの男に対する苛立ちを抑えながら冗談ではない冗談を口にする。

「おお、怖。土方さんが言つと冗談に聞こえませんぜい。じゃ、俺は見回りを続けますんで」

沖田さんはその冗談に怯えたような演技をしてからそう言つて片手を小さく上げながらこの場から立ち去った。

そのやりとりの一部始終を見ていたギロ口はなんとなく二人の關係が見えた。

沖田がからかい、土方は怒る。

ただ、からかうのにバズーカを使用する辺り、かなり度が過ぎてはいるが。

「お前のあの部下、お前が話していた辻斬りより怖いな……。と言うか本当に部下か？」

「まったく……。そこいらのテロリストより性質たちが悪い」

この男とはなんだか気が合いそうだ。何処か馴染みのある二人の

関係に少し土方に親近感を抱いたギロ口はそう思った。

土方さん達と別れた沖田さんも見回りをしていた。

死者を蘇らせる、か……。

蘇って欲しいような、蘇って欲しくないような。矛盾する感情が心を惑わす。

昨日、クルルが言っていた事について沖田さんがちょびっと考えながら街を歩いていると

「あ、沖田さん！」

と誰かが自分に声を掛けるのでその声の主の居る方向に顔を向ける。

そこには万事屋のチャイナ娘と白い巨大犬、藍色の髪でピョンと立ったアホ毛が特徴的な男の子と水色の髪で側頭部に左右二本ずつ角みたい生えた髪が特徴的な女の子が居て、そして女の子の腕の中に暗い赤色の可愛い宇宙人が抱かれていた。

神楽、定春、冬樹、桃華、カオスである。

「おう、税金泥棒。こんなところで職務怠慢してる暇があったら仕事しろヨ」

「悪いが今はサボってませんゼイ。真面目に職務についてる警官でさア」

神楽がいつものように悪口を言うと沖田さんは否定する。

先程同じ職場の上司に向けてバズーカぶっ放した男が真面目に職務についてる警官とは言えないような気もするが。

「おお、だー！」

昨日も一緒に居たのだが道中で眠ってしまったカオスが沖田さんに興味を持ったのか沖田さんに手を伸ばす。

「俺も触って良いですかイ？」

そのカオスの様子を見て沖田さんがお願いすると

「ダメアル！ お前にカオス預けると何が起こるか分からないネ！」
と神楽が沖田さんの願いを拒絶する。

「あれねー？ 昨日そのガキ見つけて連れて帰ったのは何処の誰でしたっけ？ その時は何も起きませんでしたけどねイ？」

「そ……そこら辺に居た親切な通行人アル」

「俺も親切な通行人でさア」

「お前の何処が親切な通行人アルカ！」

こんな具合にいつものように口喧嘩をする二人。

「まあまあ、神楽ちゃんも沖田さんも落ち着いて……」

「神楽さん、触らせて上げましょうよ」

冬樹が神楽と沖田さんの口喧嘩を仲裁し桃華がそんな提案をする
と「ええ……」と神楽が不満そうな声を漏らしたが

「じゃ、お言葉に甘えて。触らせて頂きやすぜイ……」

と言つてカオスを抱きかかえた。

「キャハハハハ！！」

自分の腕の中で無邪気に笑う赤ん坊。

正直、姉上には会いたい。でも蘇って欲しくない。蘇らせたくもない。

カオスを、カオスの額にある水晶を見て昨日悪魔に囁かれた事で
考え込む沖田さんは軽く赤ん坊の頭を撫でる。

「はい、ここまでアルヨ」

ここで神楽が沖田さんの腕から強引にカオスを奪う。

「ケチな野郎でイ。もう少し触つても良いだろーが」

「ダメアル。これ以上お前と一緒に居させたら絶対とんでもない事が起こるネ」

「お前にだけは言われたくねーでさア」

神楽にいろいろとちよつかいを出したような出されたような沖田さんはようやく職務へと戻って行った。

一方、ギロロは土方さんと別れて真選組の屯所に来ていた。土方さんと話をして土方 十四郎と言う男に純粋な興味がほんの少しだけ沸いたのだ。

ここなら仕事仲間がたくさん居るから彼の話の話を聞けるだろうと踏んだ為、ギロロは屯所にやって来た、と言う訳なのである。

そんなギロロが屯所の中をふらついていると
「ギロロ君！」

小さな青い手に何かのラケットを持ったドロロが声を掛けて一見地味な隊士を連れて彼に寄って来た。

「ドロロ!？」

自分と呼ぶ声の主を見て驚くギロロ。ドロロも何処か行ったきりだったが、まさかこんなところに居ようとは思っても寄らなかったのだ。

「何故お前がここに? ……と言うかそれは？」

ギロロがドロロがここに居る理由と手に持つラケットの事について尋ねると

「ああ、これでござるか。」

拙者も真選組の者にちょっと訊きたい事があった故ここに参ったのでござるがその際、山崎殿と気が合っつてこうしてバトミントンをしている次第で……」

ドロロはギロロの質問に丁寧に答える。

「ドロロさん、その人は? ひよっとしてお仲間ですか?」

「ああ、こちらは拙者と同じ隊の仲間です昔からの友人のギロロ君でござる。ギロロ君、こちらが」

「真選組の監察、山崎 退です。よろしく、ギロロさん」

「あ、ああ、よろしく」

ドロロと一緒に居た地味な隊士、山崎さんにギロロの事を紹介すると山崎さんはギロロに自己紹介する。

「それより呑気にバトミントンなどしている暇などあるのか？ なにやら物騒な辻斬りが近付いているらしいが……」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。近付いてはいますけどまだ遠いですし、ここに来たって情報もまだありませんから」

ギロロが山崎さんの行動を鋭く指摘すると山崎さんは落ち着いている理由を告げる。

ちょうど良い、コイツに訊こう。初対面の山崎さんにいきなり土方さんについて尋ねる事にしたギロロ。

「そうだ山崎、土方はどう言う人なんだ？」

「初対面でいきなり呼び捨て……って副長ですか？」

「何故土方殿なにゆえの事を？」

「す、少し興味を持ったただけだ、別に良いだろう？」

ギロロの説明で納得できたのか、それとも追求しても無駄だと思っただけか、ドロロはそれ以上追及しなかった。

一方でギロロの言葉を聞いた山崎さんは「そう言う事なら別に構いませんけど……副長に絶対言わないでくださいね？」と釘を刺してから

「鬼の副長、土方 十四郎。局長である近藤さんに並んで真選組の頭脳と言っても過言じゃないくらい隊にとって重要な人物です。」

副長だけあって剣の腕前はかなりのもので、それに加えて仕事熱心で真面目な人なんです。少しだけ融通が利かなくて簡単にキレては刀抜くんでちょっと怖いですがね。

あと食事には何でもマヨネーズぶっかけて食べるんですよ。それだけは本当止めて欲しいですね……」

土方さんの印象を語る。

……なんだ？ この妙な胸の痛みは……？

山崎さんが語ったのは土方さんの印象だと言っのに何故か痛む、ギロロの心。

「なんだか話だけ聞くとギロロ殿にそっくりなような気がするでござるな……」

ギロロが妙な感覚に囚われている中、土方さんの印象を聞いたドロロが素直な感想を述べる。

「な、何を言い出すドロロ!?!」

いきなり自分の名前を話に出すのでびっくりしながらギロロはドロロに注意すると

「いや、ギロロ殿も銃の腕前はかなりのもので仕事熱心で真面目だし、それにちよつと融通が利かないし、簡単に怒りやすいところがある故……」

とドロロは土方さんとギロロが似ていると思われる点をあげる。

「あゝ、なるほど……。そう言う点は確かに似てますね」

ドロロの言葉を聞き、広げた掌にポンと拳を置いて納得する山崎さん。

「どんな反応をしたら良いんだ、俺は……」

褒められているような、褒められていないような微妙なドロロの言葉を聞いて反応に苦しむギロロ。

まあ良い、土方のだいたいの印象は分かったところで……

「じゃあ、土方の昔の話は何か知らないか?」

今度は土方さんの昔の話を聞いてみる事にした。

「副長の昔の話?」

「知らないのなら知っている人だけでも教えてくれないか?」

「んー……俺が知っている事って言えば局長と副長、沖田隊長の三人は武州に居た頃からの知り合いくらいですかねー……」

山崎さんから土方さんの昔からの知り合いの情報を得る事に成功する。

こう言うプライベートな話は土方本人に聞くのは止めておいた方が賢明だろう。

かと言って沖田はと言うとさつき会ったメチャクチャな男なのでギロロがまともに土方さんの事で話ができるとしたら局長である近藤だけとなるな。

しかし、と普段の近藤さんの、ストーカーゴリラの姿を思い浮かべ

「局長と言つと、あの男か……」

と溜め息のようにギロロは呟いた。

「ああ、ギロロさん達は姐さんの家で寝泊りしてるんですね」

「どうもあの男は好きになれん……」

「普段がああですからね……」

『普段の』近藤さんの姿を想像してはギロロが落ち込む理由を察する山崎さん。

『普段がああ』な近藤さんを見ているギロロさんなら近藤さんに対して良いイメージを持ってないのはよく分かる。現に真選組の隊士の中にも呆れている人が居るほどだ。

「お互い妙な上司を持ってござるな……」

「ですね……。ってドロロさんの上司って？」

「俺達の中に緑色の奴が居るんだが、そいつが俺達の隊長だ。」

いつもガンプラだ、インターネットだ、アニメだで現を抜かして真面目に侵略（トリック）をやるうとしない。

基本的にはだらけきつた……そうだな、銀時のような生活を送っている」

「ああ……なるほど……。そりやまた妙な上司ですね」

妙な上司を持ったと言つ事でギロロとドロロは山崎さんと意気投合した。

ある漢の過去（前書き）

前回と続けてどうぞ。

ある漢の過去

ドロロ&山崎さんのジミーズと別れたギロロが向かった先は恒道館道場。

「お妙さアアアアアアアアアアん!!!」

バキイ!!!

案の定、お妙さんにストーキング行為を繰り返す警察らしくない局長がお妙さんに成敗されていた。

「懲りないな、お前も……」

「誰だお前は!!! ってなんだ、万事屋んどこに来たって言う天人か。えーっと名前は……」

「ギロロだ」

「ああ、そうそうそう。ギロロだ、ギロロ……。で、俺に何の用だ?」

「近藤と土方、沖田は昔からの知り合いだと聞いたんだが……」

「ああ、そうだ。アイツ等とは武州に居た頃からの知り合いだぞ。

で、それがどうした?」

「昔の土方の事をいろいろ聞きたくてな……」

「……なんでだ?」

「な、なんでって、その……土方の事に興味を抱いただけだ」

近藤さんの子どものような質問攻めにギロロは一つずつ真面目に答えていく。

目の前に居る小さな赤い天人あまんとから自分の身近に居る誰かのような雰囲気かした近藤さんは笑みを浮かべながら自分が知る土方さんの過去を話し始めた。

俺達が江戸に出て来る前、武州で俺が剣術道場をやった頃の話だ。

巷ちまたを騒がすともねえワルガキが居てなア。滅法喧嘩の強エー

匹狼で、近隣の道場に片っ端から喧嘩売ってしばき回してる暴れん坊よ。

田舎道場の連中なんざみんな血の多いチンピラみてーな奴等ばかりだ。これじゃあメンツがたたねーってんで、みんなで協力してそいつをやっちまおうって話になっただ。

奴等、一対一の武士道なんて持ち合わせちゃいねえ。まア自業自得だがな……。俺も物見遊山で見に行ったんだ。

そしたらコイツがなかなか太エ野郎でな。

大人数を前にしても物怖じ一つせず、詫びいれるどころか、たった一人で多勢相手に大立ち回り。

バツタバツタ敵を薙ぎ倒し、いや強エのなんの。

……まアでも、あの人数相手に勝てるわきやねエ。最後の最後、ボロ雑巾みてーになるまで暴れ続けてたかな。

俺アどうしたもんか迷ったが、そいつを道場に連れて帰る事にした。

そのまま捨て置けば死んじまいそうだったし、何より面白そうな男だったんでな。

「 3 3 3 ! ! ! 3 3 4 ! ! ! 」

若き日の近藤さんが丸太を振った回数を苦しみながら数える。

彼の持つ丸太とは手で持つ部分はちゃんと握り易いように削ってあるものだ。

しかし、その大きさはかなりのもので当然その重さもその大きさに比例しとっても重い。

そんなものを三百を超える回数振ってるのだ、疲れて腕がプルプルと生まれたての子馬の足みたく震えている。

「ぬおおおおお!! もうダメ! もう限界!! 腕がもげるうー!!」

「甘ったれた事言っでんじゃねエ!

そんなんじゃ何時まで経っても道場任せられねーぞ。もうスグわ

し死ぬぜ多分、どーすんの!？」

弱音を吐く近藤さんに厳しく注意するのは近藤さん達の師匠。

師匠の言葉を聞き、不満を抱いた近藤さんが丸太に込めていた力を抜いて床に付ける。軽く床に付いたただけだったのだが丸太は重さを語るかようにドスンと鈍い音を立てた。

「こんな丸太素振りして意味あんのかよ! もう手が血豆だらけなんだよ!」

掌に出来た血豆を見せながら反論する近藤さん。

彼の申し出に対し、師匠は持っていた杖で少しだけ強めにドンと床を叩いて

「剣術は技じゃねエ、氣組みじゃボケエエ!!」

こんだけの剣ものを振ってればしぜん筋も違ってくる! 根ねも植えつけられる!

小手先で振るな、呼吸を練ていって体ごとさばけ!!」

と説教すると道場に居た小さな男の子に眼を向ける。

師匠が眼を向けた小さな男の子は近藤さんが持つ丸太と同じくらい、下手したらそれよりも太い丸太を軽々と振り回していた。

見た目は普通の、八歳くらいの可愛らしい男の子だと言うのに。

「総悟を見る! あんなにちっせエのにあんなに太エの振り回してんぞ! スゴクね?」

やっぱスゲーなオメエ。わしが見込んだだけあるわ、神童だよ神童!」

良い例だと子ども頃の沖田さんを褒める師匠だったが

「アレ、なんかめくれてね? ってかコレ、ただの木の皮じゃね?」

子ども頃の沖田さんが振る丸太がなんかめくれてきたのに気付きツツコミを入れる。

子ども頃の沖田さんはそんな師匠の言葉を無視してふんふん丸太を振り、丸太は子ども頃の沖田さんが振る度にどどんめくれていった。

「ったく、これだからウチには何時まで経っても門人が集まらねー

んだ」

近藤さんが愚痴を吐く。

こんなふざけた雰囲気のある道場ではやる気のある人は来ないだろう。

現に今道場に居るのは門弟の近藤さんと子どもの頃の沖田さん、そして師匠の三人だけだ。

……いや四人だった。

近藤さんが道場の外で黙って座っている、つい先日道場に連れ帰った四人目の若い男の存在に気付きその男に歩み寄る。

「どうだ、お前も……。まだ無理か、その怪我じゃ」

近くに寄り、持っていた丸太を彼の近くに置きながら馴れ馴れしく声を掛ける。

「俺の見たところ、お前には天賦てんぷの才がある。何処で習った訳でもねエのに、体さばきと言い機転と言い、並々ならねエ。」

だが才だけでは勝てねエ。結局、努力してる奴には勝てんぞ」

近藤さんがその男の戦いぶりを見て感じた事を述べるが返事は帰って来なかった。

面白い返事が帰って来るかと期待したものの、この様子だと返事は帰って来ないだろう。

そう思った近藤さんは彼に背を向け師匠達の下に戻ろうとすると興味ねーな。丸太振って強くなれりゃワケねーんだよ」

若い男がそのように言葉にするのを耳にする。

一旦立ち止まって聞いていた近藤さんは所詮、ただの喧嘩屋か……とその若い男にがっかりしながら師匠達の下へと戻っていった。

そのくせその男はそこから動かなかった。いつもそこで俺達の稽古を噛み付きそうな眼で見っていた。

だがある日。傷も癒えてねーってのに野郎、道場から姿消しやが

ってな。

心配して探しに行ったら……

「そこどけエコルア!!!」

先日、近藤さんが連れ帰った若い男が大勢の男達に囲まれ喧嘩を売られていた。

「俺達や今から近藤んトコの道場に殴り込みに行くんだよ！ 野郎、めえを匿っていたらしいじゃねーか、あん!? 一体どー言うつもりだ!?!」

どうやら大勢の男達は先日、若い男をボコボコにした連中のようだ。

「だから今出て来たって言うてんだろ。奴はもう関係ねエ。手エ出すな」

「オメーになくてもこつちにはあんだよ！ 近藤やる前にまたてめーブチのめしてやるうか!! あん!?!」

敵対する大勢の男達の一人がそう告げると若い男は躊躇無く持っていた木刀でその一人を突き上げた。

若い男に攻撃された男は高く宙を舞い、仲間達の目を惹きながら彼等の後方にあつたボロボロの建物に落下する。

仲間の一人が攻撃されたのを見て若い男を睨み付け、近藤さん達の道場に殴り込もうと企んでいた連中は一斉に攻撃を開始した。

若い男は襲い来る敵をバツバツと倒していく。

野郎は以前より強くなっていた。

怪我が癒えてねエにも関わらず、その動きには以前には無いしっかりした骨格ができていた。

だが奴の戦いを見てられたのもここまで。

気が付きや周りには血の海。立ってんのは俺と野郎だけだった。

「……なんで居るんだ、お前?」

「ウチの流派の剣を私情の戦いに使ってもらっては困る」

「俺が何時お前の流派に入ったよ。大体、お前も散々暴れ回ってた
だろーが」

近藤さんと若い男が木刀を構えてハアハアと肩で息をしながら背
中を合わせた状態を保ちつつ会話する。

「ったく、お人好しだかなんだかしらねーが借りを返すつもりがま
た借りつくつちまつた」

若い男は近藤さんに背を向けてそう言いながら足を引き摺って痛
い箇所を手で押さえながら何処かへと向かう。

「借りなんて思わんで良い！ また何時でも遊びに来い！ もうお
前はウチの門弟だ！」

「だから何時俺がお前の流派に入ったってんだよ？」

若い男の言葉を聞き、近藤さんはハツと呆れて笑った後告げる。

「その掌、血豆そいつがその印だ」

若い男の掌には血豆がいつぱいできていて真つ赤に染まっていた。
それも近藤さんが自分の手を師匠に見せた時以上の。

おそらく、人知れずこっそり近藤さん達のやり方を真似して丸太
を振ったのだろう。何回も何十回も何百回も、誰よりも多く。

「何回振った？ 俺でもそこまで血豆はできんかったぞ。道理で傷
の治りが遅い筈だ」

「血豆じゃねエ」

近藤さんの言葉を否定せんと若い男は振り返ってこう告げる。
「四越デパートの自動ドアに挟まった」

それが土方 十四郎と言う男との出会いだった。

「ほう……」

「とまあトシとの出会いを語った訳なんだが、俺達の昔話には俺と
総悟、トシの他にもう一人、必要な人物が居るんだ」

「誰だ？」

「沖田 ミツバ。総悟の実の姉だ。」

総悟は幼い頃に両親を亡くしてな、ミツバ殿が親代わりだったんだ。

総悟が一人で遊んでいるのを見て、俺と一緒に遊んでやったら総悟の奴、やたら俺に懐いてな。

それから総悟は俺の道場で剣の腕を磨き、ミツバ殿も暇を見つけてはよく顔を出すようになったよ」

「ほう……あの男にも姉が居るのか……」

……ちよつと待て。 姉……と言う事は女……だよな？

まさか……まさか……！ ……いや、あり得ん。何もそこまで似ている筈が無い。

お、俺がそう言う訳ではないぞ！ 断じて、断じてだ！ 俺はケロン軍のソルジャーなんだからな！

いや、しかし……。何故だろう、嫌な予感しかしない……。

山崎やドロロは言っていたが、そんなに似てるのか！？ 俺はあの男と……。

さっき山崎さんとドロロに土方さんと似ていると言われたのもあって、首をふるふると振りながら悶々と考え事をするギロロ。

「ん、どうしたんだ？」

ギロロの異変に近藤さんは声を掛ける。

「な、何でもない……。と、ところで近藤……」

「何だ？」

「まさかとは思うんだが、その……ミツバと言う女に土方は……」

ギロロは自分を気遣う近藤さんに何でもないと言って、恐る恐る確認すると

「……ああ、惚れていた。心底惚れていたよ。あいつの性格柄、それを直接口にする事はしなかったがな」

と近藤さんは真顔でギロロが聞きたかった事を答えた。

「こつ言つところまで似てるのか……とギロロは複雑な表情を見せる。

「まあ、そうなくてもおかしくはねーよ。総悟もよく自慢してたが

ミツバ殿は本当に綺麗でおしとやかだったからな」

「……『だった』？」

近藤さんの言葉に違和感を感じたギロ口が何事か尋ねると
「……少し前に亡くなったんだ。ミツバ殿は昔から肺を患っていてな、それが悪化して……だ」

近藤さんは言葉の深意を悲しそうに露にする。近藤さんに気を遣い、ギロ口は「……そうか」と短く相槌を打った。

昔はよく四人で一緒に食へに行ったりしてたな。

それで出された料理をミツバ殿が唐辛子で真っ赤にしたり、トシがマヨネーズで真っ黄っ黄にしたり、困ったもんだよ。

まあ総悟にとつては俺やミツバ殿がトシに取られたみたいで気に食わなかったみたいだな」

近藤さんが懐かしみながら昔の話をするとその話を聞いたギロ口が話の中の人物達が食べたものを想像しては気味悪がって「どう言う味覚だ……」とツッコんでから

「だから沖田は土方に悪戯をするようになった、と」

「それもあるだろうが……おそらく一番の原因はトシがミツバ殿を拒んだのも原因だろうな。」

トシがミツバ殿に惚れたように、ミツバ殿もまたトシに惚れた」
ギロ口が沖田さんが土方さんに悪戯を仕掛けるようになった理由はそれかと予想すると近藤さんはそのもう一つの理由を付け足す。

その言葉の後に「面おもては良いからな、あいつ。俺と違ってよ……」
と落ち込みながら小さい声で愚痴って話を脱線させたがすぐに気を取り直し語る。

「それは良いとして、だ。」

好きな人の傍に居たいと思うのは世の常だ。俺がお妙さんの傍に居たいと思うように」

「お前のは行き過ぎだと思うがな。あれでは女も寄って来んぞ」

近藤さんの余計な一言を聞いたギロ口は彼の普段の行動を思い浮かべては呆れながら注意する。

ギロ口も恋愛に関してはまだまだだが、それでも何がマズイかくらの判断はしっかりしている。

「お妙さんは照れてんだよ、まだ心の準備ができてねーんだ」

「何処をどう見たらそう見えるんだ……？」

お妙の行動は何処からどう見ても照れてる輩の行動じゃないと思うんだがとぼやくギロ口。

もはやこの男には何を言っても無駄だな……。やれやれと首を振ってまたまた呆れてハアと溜め息を吐く。

「また話が若干それちまつたが……」。

ミツバ殿もトシの傍に居たいと思うようになった。だが、トシはミツバ殿を拒んだ。

野郎が進むと決めた道はいつ何時命を落とすか分からねエ危険な道だ。

そんな危険な道に大切な人を巻き込まない為に、トシはミツバ殿を拒んだんだ」

「それを沖田は大切な姉の心を蔑ろにされたと思ひ込んだ……と言っ訳か？」

近藤さんが途中でそれた話を元に戻し、ミツバさんに対する土方さんの心情を語るとギロ口はその時の沖田さんの気持ち想像して口にする。

「ああ、そつだ。察しが良いじゃねーか。あいつもまだまだ子どもだったつて事よ。」

ま、姉の事に関してはもう吹っ切ったようだが」

ギロ口の言葉に関心しながら沖田さんの事を語る近藤さん。

「……ところで近藤。さっきまでの話……俺が聞いても良かったのか？俺が言い出しておいてなんだが」

「なーに、大丈夫よ。お前と話をした事のは今日が初めてだが、お前なら信頼できる」

「何故そう思う？」

「トシに似てるような気がしたからさ。なんと云つかいこう、雰囲気
がな、初めて会った時の野郎そっくりだったのよ」

「またか……」

再び聞いた言葉にギロロはちよっぴり肩を落としつつ、それでも
少しだけ嬉しそうな表情を見せた。

その日の夜。恒道館道場の庭に張られた赤いテント。

この世界のソルジャーは面白い連中ばかりだな……。俺も見習わ
なければ。

昼間に近藤さんから聞いた話の感想を一人呟くギロロ。

同時刻、恒道館道場一室。

すーっと襖を開けて部屋の中に入るクルル。その部屋では冬樹、
ケロロ、タママ、そしてカオスが深く眠っていた。

「くっくっく……」

クルルが不気味に、小さな声で笑う。

ある漢の過去（後書き）

はい、どうも白黒仮面です。

最近、ちょびつと執筆速度が上がったので二話連続で更新しました。

途中、原作・アニメとほとんど同じ部分がありました。

正直、書かない方が良かったのですが話の流れ上、どうしても必要だったのでつい……。申し訳ありませんでした。

次回はだいたい予想できるかと思いますが、あの方が登場！！

蘇った女(前書き)

ついにあの方登場！

蘇った女

ケロ口達が『銀魂』の世界に来て一週間。真選組屯所の沖田さんの部屋。

「……………」

誰でイ、こんな朝っぱらから……………。

ぼんやりとした意識に話しかける誰かの声を聞いて鬱陶しがる沖田さん。

「……………ちゃん……………そーちゃん」

この声……………その呼び方……………!! まさか!!

懐かしい声と呼び方を訊いて畳に敷いた蒲団の上で、いつものアイマスクを付けて眠っていた沖田さんは飛び起きて慌ててアイマスクを外す。

暗闇を抜けた光の世界の中に居たのはあの、死んだ姉の顔だった。

「あ、やっと起きた。おはよう、そーちゃん」

嘘だと思った。幻だと思った。夢だと思った。

だが彼女は目の前に存在する。あれだけ慕っていたんだ、見間違える訳無い。しばらく驚きで声が出なかった。

「あ、姉上……………ですよねイ？」

「そつよ」

「本当に、本当に姉上ですよねイ？」

「そう言ってるじゃない」

「……………姉上!!」

何度も何度も声で確認して、さらに強く抱き締めて確認する。

「……………そーちゃん」

一度死んだ筈の姉が優しく頭を撫でる。その頭を撫でられる感覚が目の前の現象が嘘ではないと告げる。

「どうやら蘇ったみたいだな」

その部屋に躊躇い無く堂々として来たのは黄色い蛙のような宇宙人、クルル曹長。

「沖田君、ちよつと邪魔するよん」

「お前……!!」

「そーちゃん、その子だあれ？」

「お、俺の知り合いでさア」

部屋に入って来た邪魔者に動揺を隠しきれない様子の沖田さんが姉の質問に答えると

「まあ、そーちゃんの知り合い？　じゃあ挨拶しないと。私、そー

ちゃんの姉の沖田　ミツバです」

「クルルだ、よろしくな」

「よろしく、クルルさん」

ミツバさんは素敵な笑顔で、クルルは相変わらず何を考えているのかよく分からない表情で自己紹介する。

「それでいったい何の用ですかイ？」

「ちよつと質問したらすぐ帰るからちよつとだけ待ちな。ミツバさん、アンタなんでここに？」

「私も気付いたらここに居たからよく分からないの。私驚いたわ、眼を開けたらそーちゃんが寝ていたんだもの。」

てつきりそーちゃんまで死んじゃったのかと思ってたらそーちゃんはちゃんと息してるし、私も息してるから死んだんじゃないって思ってもつと驚いちゃったけど」

クルルがミツバさんが本当に嬉しそうに話をするのを聞いて「そうか……」と相槌を打つと無言で沖田さんを指差し手招きする。

そのジェスチャーを見てクルルの言いたい事を理解した沖田さんは彼が喋りやすいよう腰を下ろす。

「お前の姉貴がこつちに居られるのはおそらく今日一日が限度だ」

クルルが小声で呟いた情報を聞いた沖田さんは特に驚く様子も無くただ冷静に「……そうですかイ」とだけ返事する。

「あらア、やつけに素っ気無い返事ですな」

「心から望んでませんでしたしねイ。……それより、何しに来たんですかイ？」

俺アこんな事望んでなかったんですけど、とクルルに尋ねると「何だつて良いだろ……」とクルルは嫌らしそうにそう答えて

「それじゃあそーちゃん、言いたい事も言っちゃったから邪魔者はさっさと消えるぜえ。くくくくく……」

最後にム力つく言葉といつもの不気味な薄ら笑いを残してそそくさと部屋から出て行った。

「本当ム力つく野郎でイ……」

「ふふふ、おかしな子ね」

部屋から立ち去ったクルルの印象を呟く沖田姉弟。きょうだい

沖田さんはしばらく黙って姉を見つめる。死んだ筈の姉が生前と変わらない姿で目の前に居る。

彼女にしてやりたい事や言いたい言葉が次から次へと頭に思い浮かぶ。

それを堪え、沖田さんは立ち上がって寝間着から普段の黒い制服に着替えて刀を腰に差し支度をする。

「じゃあ姉上、姉上の警護には旦那をあてますんで好きだけこき使つてやつてくださいませ」

「そーちゃんは？」

「俺は……ちよつと仕事があるんでこれで失礼させてもらいます。

あ、そうだ。姉上が蘇った事はなるべく口外しないでくださいね。騒ぎが大きくなると厄介ですから」

姉に背を向けて沖田弟は部屋を退出する。

その背中をミツバさんは寂しそうな、それでいて何処か嬉しそうな顔で見つめる。

その後、恒道館道場の別の一室。

「いや、まさかミツバ殿が蘇るとはまったく想像してませんでしたし

た！」

「私もよ、近藤さん。まさかまたこうしてお話できるなんて夢み
たいです。」

でも、近藤さん。どうして私、生き返ったんでしょうか？ 私に
は思い当たるものなんてありませんけど……」

「ああ、それなら心当たりがありますよ。」

最近、俺達の知り合いのところに異世界から来たって言う妙な姿の
天人あまんとと子どもが数人降って来てね。

なんでもその原因が彼等と一緒にこっちに来た妙な姿の天人あまんとの
赤ん坊の額に付いた水晶の力だつて言うんだから驚きなんですよ。

俺が見た限りでも、壊れたものを一瞬で元通りに修復したり、一
瞬で何かを作ったり、人を子どもにしたりしてましたね」

「まあ、すごい！」

「それにこの赤ん坊がまた凄くてね、柱とか机とか座布団とか、さ
らにはゴミまで食べられるんですよ。」

もう綺麗にゴミを食べてくれますからね、屯所にも欲しいくらい
ですよ。ま、その代わり食欲も凄まじいんですがね……」

近藤さんが自分のものみたいに嬉しそうにカオスや額の水晶の話
をするとミツバさんも嬉しそうにころころと笑う。

近藤さんが何処で見っていたのかは……もう説明しなくても分かる
つしよ？

……とまあ、こんな具合に近藤さんとミツバさんが話に華を咲か
せていると

「おう、ゴリラ。DS君に呼ばれて来たんだけど……」

銀さん達万事屋トリオが夏美、小雪、モア、ケロロ、ギロロ、タ
ママ、ドロロ、カオスを連れて近藤さんの下に姿を現した。

「おお、万事屋！」

「お久しぶりです、銀さん」

近藤さんとミツバさんがやって来た客人に笑顔で挨拶すると

「あれ、銀さん。あの人と知り合いですか？」

「しかし、これならこれで納得できるような気が……」
「確かに……」

新八、神楽、夏美、ケロロ、タママの順にミツバさんに対する印象を口にする。

その一方でさつきまでのやりとりで銀さんがミツバさんの知り合いである事は容易く理解できたのである。うろギロロが無言でミツバさんを見つめたまま銀さんの白い着流しを引っ張る。

「ん？」

銀さんは子ども達とミツバさんを眺めていたのだが、すぐさま着流しが引っ張られていると感じ、着流しを引っ張る犯人に視線を向ける。

わざわざ声に出さずに銀さんの注意を自分に向けさせた辺り、他の連中には言えない事でもあるのだろう。

そう察した銀さんは腰を下ろすと

「どう思う？」

すぐさまギロロは口を開いた。

「どうって何が？」

「惚けるな。あの女の事だ」

あの女が、死んだ筈の人間が何故ここにこうして生きているのか、だ。

「だいたい分かんたら」

「こう言う真似ができるのはあのガキの水晶の力しか無エだろーが、ま、誰がやったかは知らねーけど。」

「……やはりか」

「そうじゃないかとは思っていたんだが。」

「……誰から聞いた？」

銀さんはミツバさんが死んだ事を誰から聞いたのか確認する。

ギロロはこの世界の住人ではないからこの世界の事なんてそんなに詳しくない。

たとえこの世界の住人であっても、新八や神楽のようにミツバさ

んが死んだと言う事を知らない者はたくさん居るのだ。当然、情報源は限られてくる。

「近藤から」

ギロ口は情報源である人物の名前を口にすると銀さんは納得した様子で「そうか……」と呟く。

「赤、分かってるなあと思うが」

「ああ、この事は誰にも言わん」

言っても問題は無いかも知れないが、これは言わない方が良い。そう判断した二人は秘密を共有する事にした。

かぶき町某所。

火を付けた煙草をくわえて街に行くのは真選組副長、土方 十四郎。

土方さんがいつもと変わらず見回りの為道を歩いていると

「やつほく、ひーじかーたくくん」

クルルが声を掛けてきた。

「ああ、赤いの仲間か。いったい何の用だ？」

そんなにあつた事無い筈なのに酷いクルルの態度を見て、コイツは適当にあしらおうと決めた土方さんがクルルに質問する。

「そんなに冷たくすんなよ。せつかく面白い情報を教えようつてのによ」

「面白い情報？」

「沖田 ミツバが蘇った。あのガキの水晶の力で、な」

クルルが口にした情報にピクリと反応を示すが、すぐに何事も無かったように取り繕う。

「……それがどうした？」

「ま、それだけなんだけどな」

「何処が面白いんだか分からねーな……」

「死んだ筈の人間が蘇ったんだぜえ？ 面白いだろ？」

「どうだって良い」

「そうそう、言い忘れてたけど沖田 ミツバが蘇っていられるのはおそらく今日一日限りだと思っよ」

「だからどうだって良いって言ってんだろ」

勝手に情報をベラベラ喋る黄色い宇宙人に再三にわたって注意する土方さん。

「土方さん」

そこにいつの間にか来ていた沖田さんが自分の名前を呼ぶ声を耳にする。

「……ちょっと良いですかイ？」

沖田さんが土方さんを誘う。クルルは一人くっくくく、と陰湿な笑い声を上げる。

蘇った女（後書き）

本日、七月七日は七夕。

ちなみに作者の願い事はこの小説を、ケロロ軍曹&銀魂シリーズを無事完結させる事です。

意外と早く更新できました。ども、白黒仮面です。

蒸し暑いし、雨続きだし、もう散々。さらに今年は節電、節電つてね？ 元から無いやる気がさらに無くなります。

部活とかやってる人は熱中症、日射病などにならないよう水分をこまめに補給して下さいね。

蘇ったミツバ編（仮）はかなり変えてますので次回からも楽しみにして下さい下さい！

女を巡って

かぶき町某所にあるファミレス。ミツバさんを連れて一行はのんびり談笑中。

「まあ、貴方達銀さんと一緒に万事屋をやってるの？」

「ええ、そうなんです」

「とは言っても大した仕事なんか来ないけどナ」

「ねえねえ、今までどんなお仕事があったの？」

「んー、迷子の猫探しとかコンビニの店員とか……まあ、いろいろです」

「なんとまあ地味な仕事でありますなあ……」

「アンタが言える？」

「確かに」

「ゲ、ゲロオ……」

「どっちかと言うと騒ぎに巻き込まれて仕事になってる事がほとんどネ」

「騒ぎって？」

「んー、まあいろいろアル」

途中でケロロが感想を呟いたり、その感想に夏美とギロロがツツコんだり。

ミツバさんの万事屋に関する質問に新八と神楽が適当に答えたところだ

「ところでミツバさん、弟さんはどうしたんですか？」

夏美が姿の見えないミツバさんの弟についての話題に変える。

「そーちゃんは……私の事は銀さんに任せるって言って何処か行っ
たきりなの」

ミツバさんが寂しそうな表情で夏美の質問に答えると

「こんな綺麗な姉ちゃん放ってどっか行くなんて、酷い弟アルな」

神楽がミツバさんの言葉を聞いて感じた事をそのまま口に出す。

あれ、その言葉……。

「ふふふ、前に銀さんも似たような事言ってたわ」

神楽の言葉を聞いたミツバさんが嬉しそうに告げる。

「そうだったか？」

わざとなのか、それとも本当に忘れていたのか。

それはともかく銀さんが惚けるのでミツバさんは優しく「そうですよ」と教える。

「そう言えば、銀時殿とミツバ殿は面識があるそうでござったな」

「その時はどんなお話をしたんですかあ？」

『前に言ってた』と言うワードを聞いたドロロとタママが以前銀さんとミツバさんが出会った時の話に興味を抱いた。

この話に関しては近藤さんから何も聞かされてないギロロも素振りには見せなかったものの他の皆同様に興味津々だった。

「大した話はしてねーよ」

「本当にイ？ 嘔吐かない？」

「嘘じゃねーよ。っつーか何、小学生？ 小学生なのお前？」

ケロロが少しだけ銀さんを疑っていたがそれでも銀さんは適当にはぐらかした。

「……その子が近藤さんが言ってた天人あまんとの赤ん坊ね？」

そこでミツバさんが自分を蘇らせた力を持つと言う水晶の持ち主である赤ん坊に視線を移して話題を変える。

「ミツバさんも触りますか？」

「良いの？」

「良いですよー」

「それじゃあ……」

モアが良いと言うのでお言葉に甘えたミツバさんはカオスを抱いてやった。

「あゝ、だゝおゝ！！」

角やトゲがあつてちよつと刺々だけど、大きな青い瞳の眼と小さな口の可愛らしい天人あまんとの赤ん坊が自分を見上げる。

この水晶が、いや、この子が私とそーちゃん達をまた巡り合わせたのね……。

「不思議な縁ね……」

その場に居るみんなでも耳を澄まさないと聞こえないくらい小さい声で呟くミツバさんだったがその声は

「オイ姉ちゃん！ チョコレートパフェ五つ！」

「んぐんぐ！ 甘くて美味しいですう！！」

「おかわりー！」

甘党コンビと胃拡張娘のトリオが発した大きな声で掻き消されてしまった。

「……アンタ達、もう少し遠慮しなさい」

「食べ過ぎでござる」

銀さんとタママはチョコレートパフェやらアイスクリームやら甘いモノガンガン食って、神楽はオムライスやらハンバーグやらどんどん食って。

彼等のテーブルの上は空の容器と皿でいっぱいだ。お金は沖田さんがなんとかするらしいが、これはいくらなんでも食べ過ぎだろうと夏美とドロロが注意する。

「まあ、よく食べるわね」

彼等の声を聞いてふと我に返り、三人の様子を見ていたミツバさんが呑気に感想を口に出していると

「あ、そうだわ！ 良かったら私が特別美味しい食べ方をお教えしましょうか？」

ぱんと手を叩いてそう言った。それを聞いて何か思い当たる事でもあるのか銀さんはピクリと反応し

「悪い。俺、ちよつとトイレ行って来る」

「ちよ、ちよつと、銀さん？」

「お腹でも下したんでしょうか？ てゆーか緊急事態？」

そそくさと席を立ち上がると新八とモアの声も無視してトイレへと消えて行った。

そう言えば辛いものが好き、みたいな話を近藤がしていたな……。しかし、銀時が逃げ出すほどとは……。

ギロ口は近藤さんがしていた話を思い出し、ミツバさんがどれくらい辛いもの好きなのか興味を持った。

銀さんが席を外した直後に、銀さんとタママ、神楽が頼んだ甘いデザートや料理が十皿近く運ばれてきた。

ミツバさんはテーブルに調味料として置かれていた真っ赤な液体の入った小瓶をがしつと掴み、その小瓶の……タバスコの蓋を開けて中の液体を運ばれて来た一つの料理にドバアツと全部ぶっかけた。全員、ミツバさんのいきなりの行動に啞然とし硬直。

「すいません、タバスコの追加お願いします」

軽く手を上げてウエイトレスに素敵な笑顔でさらっと地獄の言葉を告げるミツバさん。

「……あ、あの、ミツバ殿。さつき料理に入れたあれって……」

「タバスコよ」

「……あ、やつぱり？」

ケロ口が恐る恐るさつき料理に入れた調味料を再度確認するものの帰って来た返事は予想通りの言葉とれんばかりの笑みだった。

「私、昔から病弱で食も細かったんですけど、辛いものをかけると食欲が沸いてたくさん食べれたんです」

「いや、病弱の身でこれは……」

「身体に悪いですよ……」

ミツバさんの言葉を聞いて、彼女がタバスコを食べた料理を見て注意する夏美と新八。

少量でも食べ物を辛くできるタバスコを、あんなにぶっかけたら辛いなんてもんじゃない。良くて辛い、悪くて痛いだろう。

早くもさつきミツバさんが注文したタバスコが数本運ばれてきた。ミツバさんは運ばれてきたそれを料理にかけようとする。

「ちょ、ちょっと、待つアル！ 私、辛いもの好きじゃないネ！」

神楽がストレートに食べる事を拒絶すると、ミツバさんはコホン

「コホンと若干わざとらしく咳をして苦しそうに嫌なんですね、そーちゃんの知り合いなのに」と告げる。

知り合い関係無くね？

全員が心の中でツツコむと同時に悟った。さつき銀さんがトイレに行っただのはこれを回避する為だ、と。

あんの天パアアアアアア！！！！！！ この場に居合わせた皆が叫ぶ。

興味を持った俺が馬鹿だった、とギロクも数分前の軽率な考えを抱いた自分を悔いていた。

「ぼ、僕、お腹いっぱいになっちゃったから無理……じゃなかったご馳走様ですう！」

タママが食事を強制終了させて逃げようとするミツバさんはゴホンゴホンとさつきよりも遥かに激しい咳をする。

その様はこのままだと本当に死んじゃうんじゃないかね？ と思えるくらい凄い様だった。

この激辛料理を自分達が食べなければミツバさんが死にそうになって、この激辛料理を自分達が食べれば自分達が死にそうになる。

さて、どうするべきか……と一行が悩んでいると

「皆さん、ここは私に任せてください！」

小雪が名乗りを上げた。

「小雪ちゃん！？」

「ドロロ！」

夏美は突然の小雪の行動に驚きつつ心配して、小雪はドロロにも協力してもらおうと相手の名前を呼ぶ。

小雪に呼ばれたドロロは彼女の言いたい事を理解したようで無言でこくりと首を縦に振って頷く。

そして小雪とドロロはテーブルの上にある料理全てにミツバさんが頼んで運ばれて来たタバスコを一品一本ずつぶっかける。

「心頭滅却すれば火もまた涼し！」

「これも修行の一巻でござる！」

小雪とドロロはそう言って料理に相応しい道具、オムライスならスプーン、ハンバーグならフォークとナイフを手にとって……タバスコ一本全部かけられて真っ赤になった料理をガーツと口の中に掻き込んだ。

物凄いスピードでタバスコにより激辛になった料理が空になってゆく。

「くっ、君って人は！」

ケロロが何処かで聞いた事があるようなベタな台詞を悔しそうな演技をしながら呟いた。

数分後、『ケロロ軍曹』の忍者コンビはなんとか無事完食する事ができた。

しかし、流石にあの激辛料理全てを平らげるのはいくら超人の忍者コンビと言ってもきつかったのだろう。

体中の汗腺からどんどん汗が分泌され、まさに滝のように汗を掻いている。

尤も、常人ならあまりの辛さに悶え苦しむであろう恐ろしい辛さに耐え、滝のような汗だけで留めているのだから逆に凄いと云わざるを得ない。

「まあ、嬉しい。こんなに綺麗に食べてくれるなんて思わなかったわ」

ミツバさんの言葉を聞いてあの激辛料理を食べずに済んだ事、小雪とドロロの頑張りが報われた事に安堵してホッと溜め息を吐く一行。

「正直に言つと病弱なのは昔の話で今は健康そのものよ。苦しそうにしてたのは実は演技だったの」

ミツバさんの驚きの発言を聞いて超えてはならない一線を越えてしまった小雪&ドロロ、顔を真っ赤にして口から火遁の術を披露し

た。

「こ、小雪ちゃん!!」

「ドロロさアアアアん!!」

夏美と新八が二人の心配をする。

それからまた数分後。

「まだまだ修行不足だね、ドロロ?」

「そうでござるな、小雪殿。まさかこんな修行があるうとは……」

ようやく口の中から辛さが消えた小雪とドロロがお互いを励ます

と「もう修行とかそんな関係無いような気もしますけどねえ……」

とタママがさつきから感じていた素直な気持ちを呟いた。

「いやー、悪イ悪イ。やけにでけーう。こが出ちゃってさー……」

ここでトイレに避難していた銀さんが頭を摩って申し訳無さそうな演技をしながらトイレから帰って来た。

「タママインパクトオオオオ!!!!」

帰って来た男の呑気な声を聞いて溜まっていたイライラが爆発、

タママインパクトをお見舞いするタママ。

タママインパクトが直撃した銀さんは爆発、床に倒れてしまった。

突然の爆撃にファミレスに居た人達が全員爆発が起きた箇所に向けて目を向ける。

「よくもお前だけ逃げやがったなコノヤロオオオオオ!!!!」

「おかげで小雪ちゃんが酷い目にあっただじゃない!!」

倒れてしまった銀さんにドカドカ、げしげし蹴りを追加する神楽

と夏美。

「夏美さん夏美さん、ドロロさん忘れてます」

夏美の発言に新八がツツコむ。

彼等のコントのような面白おかしいやりとりを見て昔を思い出す

ミツバさん。

子どものような笑顔を見せる近藤さん、道場の人達に悪戯をする

そーちゃん、そして、冷たいけどかつこよくて優しいあの人。

……いつも、いつも賑やかで、それを見ているだけで幸せになれた。そんな彼等の雰囲気とこの人達の雰囲気があまりにも似ていた為
「ふふふ、銀さん達も賑やかですね」
と笑いながら呟いた。

その頃、真選組屯所内にある道場にて。

沖田さんと土方さんは真選組の制服ではなく、普通の着物を身に纏い手には竹刀が握られていた。

相当動いたらしく、全身汗だくだ。

「珍しいじゃねーか。不真面目なお前が、辻斬りと殺り合う時の為に俺に稽古を頼むたあ」

「幕府や天人あまんとに目を付けられていながら何年もの間、一度も捕まる事無く罪無き民衆を斬り殺した外道でイ。珍しい事が起こるには充分でさア」

「……違いねエ」

ハアハアと息を切らして竹刀を交えながら言葉を交わす二人。

本当は相手がどう言う事を考えているのかすでに想像できていたもののそれはあえて聞かなかった。

ここで一旦沖田さんが構えを解いて一息吐くとある提案をし始める。

「土方さん。だいぶ体も暖まったところで一発、勝負しませんかい？」

「勝負？」

「でもただやるだけじゃあつまらないですねイ……。そうだ、賭けしましょうよ。」

そうですねイ……。じゃあ俺が勝ったら……

今日一日、土方さんには姉上と一緒に居てもらいましょうかねイ？」

いきなりの沖田さんの提案に土方さんは一瞬だけ不愉快そうに眉をピクリと動かす。

「安心してくだせエ、自分で一緒になれとか言っておきながら後でとやかく言うなんてバカな真似はしませんから」

「……じゃあ、俺が勝つたらどうするんだ？」

沖田さんが勝った時の報酬の話聞き、土方さんはだいたい分かっているような様子で自分が勝った時の報酬を伺う。

「土方さんが勝った時は俺ア今日一日だけ真面目に仕事してやるよ、てめーが勝とうが俺が勝とうが今日は姉貴とは関わらねエ、ってか？」

お互いの賭けるモノを聞き、チツと小さく舌打ちする土方さん。

「……嫌な野郎だ」

「お互い様でさア」

「……ちげーねエ」

昔、似たような事をした自分が言える言葉じゃないのは土方さんも重々承知していた。

短い言葉での対話でお互いの心を理解した漢達は静かに竹刀を構える。

「……行くぞ、総悟」

「来やがれ土方コノヤロー」

そして二人はしばらく相手を真剣な表情で見つめ、ニイと口元を嫌らしく吊り上げる。

次の瞬間、竹刀と竹刀が交差した。バシンと乾いた大きな音が道場のような部屋に響く。

道場のような部屋の外にはすぐ近くの壁にもたれて嬉しそうな呆れたような顔をした近藤さんと相変わらず何を考えているのか分からないクルルが居て、無言でバシン、バシンと言う音を聞いていた。

女を巡って（後書き）

ども、白黒仮面です。

暑いですね〜（ミ〜ン）（こっちは近所で）ミ〜ン（鳴く蝉が）ミ
〜ン（うざくてうざくて）ミ〜ン（しょう）ミ〜ンミ〜ン（蝉黙れ
！！）

熱中症とか日射病とかシャレにならないので本当注意して下さいね。

次話からが蘇ったミツバ編（仮）の真骨頂！ ……になると思っ。
楽しみにしててね。

どいつもこいつも

「なかなか良い勝負だったぜえ〜！」

「かなり惜しかったがまた負けちまったな、総悟」

真選組屯所内にある道場の壁にもたれて俯く沖田さんに近付き、
励ましの言葉を掛けるクルルと近藤さん。

沖田さんは土方さんと相当派手にやりあいながらも負けたらしく、
息はまだ乱れており傷だらけだ。

「それで、これからどうするつもりだい？」

「どうするも何も、勝負には負けたんでイ。約束通り、大人しく真
面目に仕事しまさア」

クルルの質問を冷たくあしらうと沖田さんは何処かへと消えて行
った。

近藤さんとクルルは男の背中を黙って見つめる。

姉上、ごめんなさい。

せつかく蘇ったってーのに一人ぼっちにさせちまって。

せつかくあの野郎と二人つきりにさせようと頑張ってみたってー
のに結局できなくて。

でも、これで良かったんですよねイ？

姉上もあんな酷エ奴なんかと一緒に居たかねーでしよう？

こんな事で余所見をするようなあの野郎の面なんざ見たかねーで
しよう？

だから……これで良かったんですよねイ、姉上？

あ、あと最後にもう一回だけ謝らせてくださいせエ。もう姉上には謝
らねエから。

かぶき町の街中を歩きながら沖田さんの想いを想像していた土方さん。

土方さんの体も沖田さんと同様に全身傷だらけである。

「あ、土方殿！」

そんな土方さんと街を散歩していた銀さん達と鉢合わせ。

そこには自分が惚れた女の、ミツバさんの姿もあった。

何を言ったら良いのか分からず黙って相手を見つめる二人の男女。下手な事をして二人の雰囲気壊さないよう、事情を知る銀さんとギロ口の二人は目配せしつつ、その二人以外の連中も空気を讀んで無言で彼等を見守る。

「…………と、十四郎さん…………」

とりあえず相手の名前を呼ぶ事にしたミツバさん。

名前を呼ばれた土方さんは無言のまま、彼女の横を通り過ぎたがほんの二、三メートルほど彼女から離れたところで立ち止まる。

そしてゆつくりと懐から煙草を取り出しマヨネーズ型のライターで煙草に火を付けて口にくわえながら先程の沖田さんの言葉を思い返す。

『じゃあ俺が勝つたら…………今日一日、土方さんには姉上と一緒に居てもらいましょうかね？』

『土方さんが勝ったそんな時は俺ア今日一日だけ真面目に仕事してやるよ』

コイツを放っておいたら、総悟の思い通りになる。

今までがそうだったからコイツの事は別に良いとして、総悟の思い通りになるのだけはどうも気に食わねえ。

人一倍プライドが高い土方さんにとって、自分が大将と定めた近藤さん以外の誰かの思い通りになるのはあまり好きではないのだ。

特に今日、沖田さんの思い通りになるのだけはどうしても許せない。

……………そうだ。

吸い込んだ煙草の煙をふうと口から吐き出し、背を向けたまま告

げる。

「オイ、万事屋。……その女、借りても良いか？」

その女と、ミツバさんと二人きりになりたい。

その言葉の意味をすぐに理解できたミツバさんは驚きのあまり眼を見開き、銀さんとギロ口は少しだけ不愉快そうに眉をしかめながら土方さんの背中を見つめる。

「どう言う風の吹き回しだ？」

今までこの女の為と思つて背を向けてきたんじゃないのか？

銀さんが何時になく真剣な表情で問い質す。

「こつちにもいろいろ事情があるんだよ」

相変わらず背中を向けたまま沖田さんの事や自分の考えには決して触れずに話を進める土方さん。

この男の事だ、何か考えがあつての事だろう。

今までの付き合いもあつてそこまでは分かつたものの、この男の考え全てが読めた訳じゃない銀さんは

「……どうするよ姉ちゃん？」

とりあえず話の当人であるミツバさんの意思を尊重する事にした。生前、ずっと背中を見つめ続けていた男が、生前、ずっと想い続けてきた人が、自分の目の前で二人きりになりたいと言つ日が来るなんて。

正直嬉しかった。けど悲しかった。

私が好きになつた十四郎さんは、こんなところで振り返らずに脇見もしないで前だけ見て歩いていく、勝手な人なんだから。

愛する人と一緒に居られると言つ喜びと愛する人の姿の違いによつて生じた悲しみが彼女の中でぐるぐる回る。

それ以前に、どうして土方さんが二人きりになりたいと言つたのか？ その理由がまるで見当たらない。

いろんな感情、疑問が浮かんで黙つて考え込むミツバさんだったが、せつかくの貴重な機会なので「……じゃあ、少しだけ」と返事した。

「……なんだかお似合いのカップルですね」

「でありますなあ……」

「激辛好きだし、マヨネーズ好きだし」

「……マヨネーズって何ですか？」

「あれヨ、赤いキャップからニユルニユル出てくる黄色の……」

「誰もそう言う事聞いた訳じゃないわよ」

遠ざかっていく二人の男女を見て嬉しそうに会話する部外者共。

「面白い展開になったみたいだな、くっくっく！」

そんなほのぼのとした雰囲気の中、突如響くは黄色い蛙の笑い声。

「く、クルル曹長!？」

ケロロがこの場に居なかった筈の人物の事を口にする。他の部外者達も驚きを隠せない様子だ。

「……そう言う事か」

少しだけ考えた後にクルルがここに来た理由を察する事ができた
ギロロがフツと鼻で笑ってから

「クルル、貴様この世界の事について詳しいだろう？」

そのような確認をすると「だったら何だい？」とクルルは遠回しにイエスと答える。

「……なるほど、全部でめーが元凶って事か」

ギロロとクルルのやりとりで理解したような銀さんも呆れながら
呟く。

死んだミツバさんを蘇らせた原理はまず間違いなくカオスの水晶
の力なんだろうが、あの力は願いを叶える力。つまり何も願わな
ければ、何も起きはしないのだ。

土方さんや今の沖田さんが、ミツバさんを蘇らせたいと願うかと
問われればおそらく、と言うか絶対にしないだろう。近藤さんも然
りである。

だが、この黄色い宇宙人に、トラブルとカレーをこよなく愛する、
前に超が十以上は付く程の物凄い捻くれ者にここ『銀魂』世界の知

識があつたのなら、今日起きた全ての出来事に辻褄が合う。

クルルが見ず知らずの源外さんの事を知っていたあたりが良い証拠だ。

けれども、それに伴って銀さんとギロクの頭には様々な疑問が浮かんだ。

そもそも何故クルルはミツバさんを蘇らせようと思ったのか？

いったい何の為に彼女を蘇らせたのか？ どうやってこの世界の事を知ったのか？

しかし、それはあえて口外しないようにした。

それを尋ねたとしても、この宇宙人から本当の答えが帰って来るかどうかわからないし、何より、今日質問したらクルルに負けるよな気がしたから。

「くつくつく〜！」

「嫌な野郎だよ、てめーは」

「まっただ……」

何にしても『良い』迷惑を生んでくれた宇宙人を、銀さんとギロクはなんだか嬉しそうな表情と優しい声色でそう言った。

銀さん達と別れたミツバさんと言うと、少しだけ土方さんとの距離を置いて歩いてきた。

好きでありながら嫌いな相手と、どのくらいの距離を保てばいいのか彼女には分からなかったのだ。

土方さんも土方さんで自分が誘ったにも拘らず、あれ以来一度もミツバさんの顔を見ようとしなない。

「……十四郎さん。何故、私と二人きりになりたいだなんて言い出したんですか？」

このままでは埒が明かないと思い、ミツバさんが話を切り出す。「てめーの弟と賭けをした」

「……賭け？」

「つまんねー賭けよ。」

俺とあいつが剣で勝負して、あいつが勝ったら俺とお前を引き合わせて、俺が勝ったらあいつは素直にお前から手を引くっつー内容の、な」

ミツバさんの問いに対し沖田さんとのやりとりを教える事で答えた土方さん。

「それじゃあ、ひよっとしてそーちゃんが……」

「いや、野郎との勝負には勝った」

沖田さんが勝ったから土方さんはここに居るのかとミツバさんが予想を口にするより先に、そうではないと土方さんが告げる。

「ならどうして……」

そーちゃんとの賭けに負けたんじゃないければ、どうして私と二人きりになりたいと言ったの？

昔の十四郎さんなら、私と一緒にになりたいだなんて絶対言う筈がない。

ミツバさんは余計に土方さんのらしくない行動が気になりさらに質問する。

「別に、大した理由は無エ。……ただ、野郎の思い通りになるのが気に食わなかったただけだ。」

それに、野郎には俺が勝った時どうするかなんて言うてねーしな」その土方さんの答えを聞いた時、嬉しそうに微笑むミツバさん。

私と一緒に居ようと思っただ理由が、今までの謝罪とか私が気になったとかじゃなくて、ただそーちゃんを困らせたいただけだなんて。

十四郎さんならそーちゃんが私と関わる事を避けた理由くらい分かっている筈なのに。

……そーちゃん、きつと怒るわね……。

「……本当、嫌な人」

ミツバさんがそう呟くと「てめーの弟にもそう言われたよ」と土方さんは一言付け足す。

その言葉は決して良い言葉じゃないのに、土方さんは何故か一切否定しない。むしろ何処か嬉しそうだ。

「……ま、まア、そう言う訳だ。今日はお前の好きなところに連れて行ってやるよ」

一向にミツバさんと顔を合わせないようにしながら、ミツバさんの行きたいところに関する話題に変える土方さん。

素直に彼女の顔を見れない理由としては今までミツバさんに散々酷い事をしてきたからそれを意識してとか本心では心底惚れた相手だから恥ずかしいとかも確かにあるだろうが、一番の理由は照れる自分の顔をミツバさんに見られたくないからだろう。

その頃、かぶき町某所。

「そーちゃんそーちゃん。面白い情報が入ったぜえ〜」
パトロール中の沖田さんに声を掛けるクルル。

「その呼び方、止めてくれませんかイ？」

「じゃあ沖田弟ー」

「……もう良いでさア」

クルルの呼び方に沖田さんは注意するものの、一向に改める気持ちは無いクルルを見て何を言っても効果は無いだろうとすんなり諦めてしまった。

「真選組の副長とそーちゃんの姉貴と一緒に居るところを見た。かなり仲が良さそうだったぜえ〜、くっくっく〜！」

クルルはクルルで沖田さんの事など一切気にせずに先程現地で仕入れてきた情報を口にする。

あの野郎が、あれだけ避けてきた姉上と一緒に居る……だと？

……気に食わねエ。

予想外の土方さんの行動に虫唾が走り、沖田さんは悔しそうに齒を食い縛り拳を強く握り締める。

しかし、それと同時に彼は心の何処かで安心していた。
過程はどうかであれ、姉であるミツバさんと土方さんを引き合わせる事ができたからではない。

土方さんがやっぱり変わらぬ、気に食わない男だったからだ。

沖田さんはなんとか怒りを抑えて平静を装い「……そうですかイ」と冷たく返事する。

一方、土方さんとミツバさんの二人は映画館へ来ていた。

本当の事を言つと土方さんは来たくなかったのだが、ミツバさんが行きたいと言つのでここに来てしまったのだ。

「すぐに見れそうなのは……と」

クルルや沖田さんからミツバさんがこの世に居られるのは今日一日限りだと聞いているので、待つ事無くすぐに見られるものを選ぶ方が良いと考えた土方さん。

それが自分やミツバさんの趣味と合うかどうかは二の次で上映時間が一番早いものを眼で探していく。

(……で)

『きゃあああああ!!!!』

館内に響く怖そうなBGMと女性の叫び声。特大のスクリーンに映るのは透き通る体の女とそれから逃げ惑う人々の姿。

(なんでホラー映画なんだアアアアアア!!!!)

よりにもよって自分の醜態を見られたくない人と一緒の時に、自分の苦手なジャンルの映画を見る羽目になろうとは。

少し前までの軽率な考えを持った己とこんな状況になるよう仕組んだ作者を恨んだ。

あまりの怖さに思わず席の両側に設置されている手すりを力いっぱい掴んで自身のうちに湧く恐怖の感情に耐える。

それを見て映画より自分の近くの手すりに置かれた土方さんの手の方が気になったミツバさん。

ここに至るまで土方さんはミツバさんに触らないよう、またミツバさんにも自分を触らせないよう注意していたのだが、ここに来て映画の恐怖にその注意が散漫になってしまい今や隙だらけになっている。

勇気を振り絞り手を伸ばしては引っ込め、また伸ばしては引っ込めてを繰り返しながら、ゆっくりと優しく土方さんの手に自分の手を接近させる。

よつやく目的地へと達した自分の手を土方さんの手の甲の上に重ねる。

彼女の手の感触を感じ眼を見開きミツバさんを見つめる土方さん。そのミツバさんは暗闇だと言うのに照れた顔を見られないよう顔を逸らした。

映画が終わり、映画館を出た二人は相変わらず恥ずかしそうに顔を逸らしながら街を歩く。

「え、映画、面白かったな」

ずっとこのままではマズイと察した土方さんが適当な話題で話を切り出すと

「ええ、とつても怖かったです」

とミツバさんも話を合わせてきた。

二人とも相手の手が触れた瞬間から映画の内容など何処かに吹っ飛んでしまったのであいまいな感想しか言えないのだ。

「つ、次は何処行く？」

「……そうね、遊園地に行ってみたいわ」

と言う事で、すぐさま遊園地に直行した二人。

そこではメリーゴーランドに乗ったり、コーヒークップに乗ってぐるぐる回ってその後トイレでこっさり吐いたり、ジェットコースターに乗ったり、お化け屋敷に入ったりして楽しんで……。

そうして今、彼等は観覧車に乗っていた。

「高い……」

子どもみたいに窓ガラスにへばり付きながらどんどん高くなっていく景色を眺めるミツバさん。

「私が生きてた頃は体の事でいっぱいだったから、こんなところに来れるなんて本当に夢のようです」

「……ああ」

「むしろ、一度は病気で死んだ筈なのにこうして十四郎さんと一緒に居られる事の方が夢みたいですよ」

「……そうだな」

土方さんも外の景色を眺めながらミツバさんの言葉に何度か素っ気無い返事をしたところで会話が途切れ、沈黙の時間が流れる。

伝えたい想いは、伝えたい言葉は同じなのに彼等は決して口に出さない。

言ったらダメだと分かっているから。言うだけ無駄だと分かっているから。

なんで言ったらダメなのか？　なんで言うだけ無駄なのか？

その理由も全部分かっているから彼は、彼女はその言葉を絶対に言わないのだ。

それでも……。

昔からずっと気になっていた男と二人きり。邪魔が入る可能性はほぼ零。

彼女の中でずっと積み重なってきた気持ちがこの状況で一気に爆発する。

「と、十四郎さん」

「……な」

名前を呼ばれ、なんだ？ と反応しようとした土方さんの口がミツバさんの口で塞がる。

相手の顔が、香りが、吐息の音が眼前に迫る。一瞬、自分がいたい誰と何をしているのか分からなかった。

ミツバさんが土方さんから離れると、二人は耳まで真っ赤になった顔を見られないように逸らしたまま黙り込んでしまった。

二人が居る部屋はゆっくりとゆっくりと空高く持ち上げられていく。

観覧車から降りた後、ミツバさんは土方さんと別れてトイレの中に居た。

水道で手を洗ってふと前を見ると鏡に映った自分と眼が合う。

その瞬間、少し前の、望んでいながらも彼の為に諦めた夢の光景が頭を過ぎる。

「……………少しやり過ぎたかしら」
さっきのあの事がきっかけで十四郎さんが振り返ったりしないだろうか。

決してそうはならないと信じてはいるものの、やっぱり少し気になったミツバさんは鏡の中の自分に向かって呟く。

このまま一人でいろいろと考えていたかったが、土方さんをこれ以上待たせる訳にはいかないので急いでトイレを出た。

その彼女の前に編み笠を被り、腰に刀を差した男達が立ち塞がる。

どいつもこいつも（後書き）

ども、白黒仮面です。暑いですね。

でもこれくらい室温の方がやる気が出ます。

たまに蝉がうるさいのが欠点ですが、それでも結構なペースで執筆が進んでおります。

明日あたりにもういっちょ更新しちゃうかな？　なんて……。

今回のお話、書いててすっごいキュンキュンしました。

ミツバさん可愛いー！　土方さんカッコイー！

なるべく原作の雰囲気壊さないよう、かつ甘甘の展開になるよう力入れてみた。

ど、どツスか？

ではでは、また近いうちに更新したいと思ひやす。

黄色と赤の調味料（前書き）

柳生四天王の北王子「読んだか？」

誰も読んでねエ！！

黄色と赤の調味料

「……遅工」

一方、土方さんは待ち合わせ場所でミツバさんを待っていた。おおよそ十分くらい待っただろうか、それでも彼女はまだ来なかった。

さっきの事もあって一人で少し考えたいのだろうとミツバさんの心情を予測した土方さんは空を仰ぎながら煙草を吸って待ち続けていると突然、彼の目の前に編み笠を被り刀を腰に差した者達が現れ「真選組副長、土方 十四郎殿とお見受けする」と土方さんである事を確認する。

彼等の格好や声から知り合いではない事を確認し、その声の主が何の目的で自分を呼んだのか察する土方さん。

こんなところでもか、勘弁しろよと落ち込む彼に「大人しく我々と来て貰おうか」

攘夷志士の一人が場所を変えようと提案する。

なかなか戻って来ないミツバさん、突如接触してきた攘夷志士。その状況下であり得る最悪の可能性が土方さんの脳裏に過ぎる。

「断つたら？」

念には念を。土方さんが断つたらどうするのかを尋ねると「お前の女が死ぬだけだ」

攘夷志士達はそう答える。

土方さんの最悪の可能性のように、攘夷志士達の中には辛そうなミツバさんの姿があった。

すっかり廃れてあちこちボロボロになった建物内部。

「今まで我等の同胞が世話になつたな！！」

「この、この……」

刀は奪われ、ミツバさんを人質にとられ、土方さんが抵抗できないのを良い事に攘夷志士達は集団で取り囲み殴る、蹴るの暴行を加える。

土方さんは口の中を切り血の味が口を満たし、顔はすっかり腫れて、少し前に沖田さんとやりあつて傷だらけだった体がさらに傷でいっぱいになってしまった。

私が蘇ったりしなければこんな事には……。

ミツバさんは土方さんの酷い有様を見て、生きてこの場に居合わせた事を激しく悔いた。と同時に、ある考えが浮かぶ。

私が蘇らなければこうはならなかったのなら、私がもう一度死ねば十四郎さんは……。

気が付けば、ミツバさんは近くに居た攘夷志士の刀を奪おうとしていた。

「な、何する気だ!？」

「お前……!」

攘夷志士達は突然の女の行動に驚き、土方さんはミツバさんを真意をすぐに察知しそれを止めさせる為彼女を呼ぶ。

もうちよつとだけ貴方達の背中を見ていたかった。もうちよつとだけ貴方達の声を聞きたかった。

けど……もう充分。

二度と会えない筈の貴方達と、十四郎さんと一緒の時間をたっくさん過ごせたから。

それにこれ以上、十四郎さんの重荷にはなりたくない。

その一心でミツバさんは攘夷志士にしがみ付くが男と女では力の差は歴然、あつと言う間に振り払われてしまった。

「ミツバ……!」

土方さんが心配して女の名を呼ぶ。

「悪イが死なせねーぜ、姉ちゃん」

そこに響く謎の声。このまま想い人がなぶり殺されるのを黙って

見てるとでも言うつもりなのだろうか。

「なんでって？」

謎の声の主がそう言うのとミツバさんの周囲に居た攘夷志士達が意識を失い、支える力を失った彼等の体は次々と地面に倒れていった。「だって俺、木刀しか持ってねーもん」

木刀でどうやって死ぬつもりなのか、といつの間にかここに来ていた銀さんが言う。

その気になれば死ぬるのかもしれないがそれはともかく。

「銀さん……！！」

ミツバさんが心底驚いた様子で名前を呼ぶ。

なにせ彼等が居る場所一帯は廃墟だらけで絶対観光には適さない場所。

そんな誰も来そうにないところで知り合いと出くわしたのだ、驚かない方がおかしい。

「てめー……」

「随分と派手にやられたな、多串君？」

「誰が多串だ……」

ポコポコにされた土方さんいつものようなやりとりをする。

「貴様……何しにここへ来た？」

「何しにつて？ んー、そうだね、良いところ取りに来た……とでも言うべきか？」

その姉ちゃん、んなポコポコの男より俺の方が強くてカッコイイぜ？」

憎き怨敵の知り合いが来たようで不愉快そうな攘夷志士の質問に銀さんは髪をくしゃくしゃと掻きながらニツと笑ってここに来た理由を告げる。

ちなみに、この理由を考え付くまでに掛かった時間はわずか三秒である。

「舐めてるのか貴様！！ この数相手に一人で立ち向かえらとでも思ったか！？」

その適当に考えた言葉を挑発と受け取った攘夷志士の一人が怒りながら一言問う。

攘夷志士達の数はおよそ五十。一人で相手取るにはちと多過ぎる。「悪いな、一人じゃねーよ」

銀さんが攘夷志士達に実に憎たらしい笑顔を見せながらそう言った直後、ドカーン！ と大きな爆発が起きた。

その爆発に攘夷志士達だけが巻き込まれ「うわー！」とか言いながら吹っ飛んだ。

「二人だ」

近くの何処かで自分達の小さな体に合わせて作られたバズーカなどの重火器を手足に装備したギロ口が呟く。

「な、なんだこの爆発は！？」

「わ、分かん！」

アンチバリアを使用しているギロ口の姿は攘夷志士達には見る事ができない。

しかもその爆撃はミツバさんと土方さん、銀さん達を巻き込まないように発生している為、彼等に見えているのは何者かが何処かから発生させている爆発による死の脅威のみ。

「てめー等カップルは何処へなりとも消え失せな！」

爆音が鳴り響く戦場で木刀一本で敵を薙ぎ倒しながら土方さん達に逃げると告げる銀さん。

その言葉を聞いた土方さんは悔しそうにチツと舌打ちをしてミツバさんの手を掴んで強引に引っ張り、銀さんの言う通りにその場から逃げ出した。

引っ張られる力に身を委ねるミツバさんは、目の前に居る男の背中をずっと見ていた。

銀さん達が派手に騒ぎを起こしたおかげで土方さんとミツバさん達は比較的楽に攘夷志士達の縄張りから脱出する事ができた。

「ここまで来れば安全だろ……」

土方さんがふうと息を吐き安堵すると、ハツとなって自分が掴んでいるものがなんなのか気付き、慌てて手を離して顔を逸らした。彼の顔は耳まで真っ赤である。

奪われた刀を探し出し敵を斬るか、素直に銀さんの言う事を聞いてあの場から立ち去るか。

さっきの状況において、普段の土方さんならまず間違いなく前者を選ぶだろう。

しかし、今日の土方さんは後者を選んだ。ミツバさんが居た、その理由だけで。

何があっても彼女を自分の生き方に巻き込みたくない、その一心で。

昔から分かっていたけどこうやっていつも私を護ってくれていたのね……。

心の中でそつと呟きながら、ミツバさんはそんな彼を優しい表情で見つめる。

すると、彼等の近くに真選組のパトカーがやって来てそのパトカーから沖田さんが降りて来た。

パトカーから降りて来た沖田さんは真っ直ぐに土方さんに近付き、土方さんの近くまで来るとピタと歩みを止める。

土方さんと沖田さんの眼が合う。直後、いきなり沖田さんが抜刀し土方さんに向けて刀を振るった。

眼にも留まらぬ沖田さんの斬撃は直撃こそしなかったものの、少し掠ったのが土方さんの顔に小さな切り傷ができた。

「こんなところで何してるんでイ、土方さん？」
「見りゃ分かるだろ、デートだ」

「このクソ忙しい時期に女とデートたあ、良い度胸じゃねーですかイ。」

「こっちは辻斬り警戒している時にここいらで攘夷志士と見られる連中とチンピラが派手に暴れ回っているって情報聞いて、そいつ等をしょっ引きに来たってーのに」

本当は土方さんが姉であるミツバさんと一緒に居るが気に食わなくて堪らない筈。

なのにその事には一切触れず、沖田さんは刀を鞘に納めながらここに来た理由を語ると

「じゃ、そう言う訳ですんで俺ア行きますア。刀を無くしちまうよ
うな馬鹿野郎はデートでも何でも好きに続けといてくだせエ」

腰に刀を差してない男に嫌な言葉を残し、さつさとパトカーに乗って二人の前から消えた。

沖田さんの乗ったパトカーがどんどんどんどん小さくなる。

「オイ、さつきの台詞『二人』じゃなくて『一人と一匹』だろーが。
空気読め！」

「そ、そんな事どうでも良いだろうー!!」

何処かへ向かった沖田さんと入れ替わるように、銀さんとギロ口が些細な事で口論しながらミツバさん達のところへやって来る。

アイツは……と土方さんが、確かあの子は銀さん達と一緒に居た……ミツバさんは心の中で呟く。

「お、居た居た。多串君、忘れモン」

土方さんに気付いた銀さんは攘夷志士達に奪われていた土方さんの刀を投げて渡した。

土方さんは投げられた刀を反射的に片手でキャッチし腰に差し直す。

「お前、いい加減名前を覚えろ」

「オイオイ、お礼の言葉とかねーの？ 忘れ物届けに来てやったんだからよ」

「お前に言うお礼の言葉なんてねーよ」

「つたく、相変わらず嫌な野郎だ」

銀さんと土方さんが短い言葉でそんなやりとりをしていると

「そうだ。真選組が攘夷志士とオメー等をしよっ引きに来てたぞ」
土方さんがお礼代わりにとさつき見た情報を教える。

「攘夷志士ならともかく、なんで俺等までしよっ引かれないといけ

ねーんだ。

俺達は困った人を助けた善良な一般市民だろーが。一人姿見えな
いから達じゃなくて俺だけかも知れないけど」

「ただのチンピラだろーが、てめー等は」

「貴様も真選組だろーう？」

「刀無くすようなバカにや関係無エ話だ」

「確かに、ちげーねエ」

銀さん、ギロ口、土方さんがそんなやりとりをしていると

「それじゃ、連中に会わねーうちに帰るとすつか。行くぞ赤ー。

……そう言えばさ赤、お前あんなに暴れて良かったの？」

「構わん。あれくらいが俺にはちょうど良いんだ」

「あつそ……」

最後にそんなやりとりをしながら、さつさと銀さんとギロ口もこ
の場から去って行った。

この場に残る二人の男女。気が付きや、空は茜色に染まる夕暮刻^{どき}。

「……俺達も屯所に帰るか」

「ええ」

これ以上何処かに行く時間も無いし、何よりいろいろあり過ぎて
疲れたので二人は帰る事にした。

二人の顔が赤くなっていたのは、夕日のせいだろうか。

土方さん達が屯所に帰った際、隊士達が土方さんの怪我を見て少
し騒いでいたもののそれ以外は特に特筆すべき事も無く時間は過ぎ、
真つ黒な夜空に星が瞬く頃。

屯所の食堂の机に、マヨネーズや唐辛子がたっぷり盛られた料理
が並べて置かれる。

常人ならほぼ確実に吐き気を催すであろうその料理を、顔色一つ

変えずに口に運ぶ二人。

その光景をニヤニヤしながら眺めていた隊士達数名と彼等の料理を見て吐き気を催した隊士数名が沖田隊長のバズーカの餌食になった。

沖田さんの行動に「な、なんで!？」とツツコむ隊士も同じようにバズーカの餌食になった。

その後はミツバさんのお風呂タイム。

男だらけの屯所に生身の女が来て泊まるなど今後もう二度と無いだろう。

それがたとえ沖田隊長の実の姉だろうが、鬼の副長と恐れられる土方 十四郎の女だろうが知った事か!

麻薬のような美女の誘惑に負け、彼女の裸体を覗こうと立ち上がった勇者と言う名の変態隊士数名が沖田隊長のバズーカの餌食になった。

「相変わらず賑やかなね」

隊士の悲鳴と爆音が夜の屯所に響く。

「湯加減どうでした?」

お風呂からあがり、縁側に腰掛けて激辛せんべいをかじるミツバさんに声を掛けるクルル。

「ええ、最高だったわ」

クルルの質問に笑顔で返答するミツバさん。

「ところでクルルさん。貴方、どうしてこんなところに居るの?」

ミツバさんの問いにクルルは「どうしてでしょー?」と一言冗談を返してからここに来た用件を告げる。

「強いて言うなら、アンタがこの世に居続ける事ができるのはあと少しだって事を教えに来た、みたいな感じだな」

「………そうですか。限りある時間じゃないかと思ってはいましたけど、随分短いのね………」

クルルがここに来た用件を聞いたミツバさんは今日の土方さんや自分の弟の行動から感じていた事を口にする。

「だからと言って『やり残した事があるのなら今のうちにやっとなーんて事は言わないぜえ』」

「そうね、気を付けます」

本当に言わないつもりだったのなら口に出さずに心の中に留めておくものだ。それを口に出して言うあたり、どう考えてもおかしい。

「あ、良かったらこれ食べます？」

「じゃあ遠慮無く」

とりあえず手元にあつた激辛せんべいを厚意で勧めるとクルルはそれを素直に受け取った。

「……辛いもの、好きなんですか？」

クルルが激辛せんべいをやけに素直に受け取るのを見たミツバさんがクルルに辛いものが好きなのかどうか尋ねると「嫌いだな」とクルルは即答する。

あれだけすんなり受け取っておいて『嫌い』ってはっきり言うなんて。

「おかしな子」

ミツバさんはクルルの印象を呟く。

「ひよつとして、私を蘇らせたのは貴方？」

「なんで俺が見ず知らずの女を蘇らせる必要があるんだい？」

「……なんとなく、そうじゃないかと思って」

そーちゃんが、近藤さんが、銀さんが、十四郎さんが、私の知る人達が死者の蘇生なんて馬鹿げた真似は絶対しないと信じているから。

「じゃあ……そうなんじゃね？ くっくっく……」

一通り会話した二人は同時に激辛せんべいをかじる。

その日の深夜。

もうそろそろかしら……。

体に目立った違和感とかは感じないものの、そろそろ自分が消えるような気がしてきたミツバさんは自室でいつものアイマスクを付けて仮眠をとる沖田さんにそっと近付く。

沖田さんは横になって深く眠っているらしく、ミツバさんが近付いて背後に立つても微動だにしない。

しばらく無言で目の前で眠る弟の背中を眺めていると、彼女の予感が的中したようでミツバさんの体が淡く光り始めた。小さな光の粒子が体から出ては大気中へと消えていく。

久しぶりに会った二人は変わっていた。

以前のそーちゃんならずと傍に居そうだったのに、今日のそーちゃんはずっと私に背中を向けていた。

以前の十四郎さんならずと背中を向けていそうだったのに、今日の十四郎さんはずっと私の傍に居た。

でも……それでも二人は変わってなかった。

昔と違う筈なのに、昔と同じだった。望んでない姿なのに、望んだ姿だった。

らしくない行動ばかりだったのに、何処か彼等らしいような気がした。

不思議な一日だった。一度終わった筈の人生の、その先を楽しむ事ができるなんて。

夢のような一日だった。あの十四郎さんと一緒に居る事ができるなんて。

本当に、変わった一日だった。

とつても素敵な一日だったから終わるのはちよつと辛いけど、もう心残りなんて全く無い。

以前死ぬ時に言いたい事は言っちゃったし、何よりみんなの背中をまた見れたから。

ただ、一言言い残すのなら……

「嫌な弟」

その言葉を笑いながら告げるとミツバさんは跡形も無く消えてしまった。

眠っていた筈の沖田さんの肩がわずかに震え、彼の頬に涙が伝い枕が濡れる。

黄色と赤の調味料（後書き）

前書きの北王子さんはアレです、ケチャラーです。
タイトル見て勘違いする人が居るかもしれないので。

ども、白黒仮面です。

いよいよ夏休みですねえ〜。

遊びも良いですが宿題も忘れずに頑張ってくださいね。

タイトルは土方さんとミツバさんの料理をイメージしていますが、
他にも意味を込めてこのタイトルにしました。

ピンと来た方、感想で思う存分ゲロってください。

嫌な奴

ミツバさんが蘇り、そして消えた日の翌日。

かぶき町某所にあるからくり堂の地下にあるクルルの研究室。

その大きなモニターに映る文字、情報をぐるぐる眼鏡ごしに眺めながら休む事無くカタカタカタとパソコンのキーボードみたいな部分を操作するのはクルル曹長だ。

「クル坊、客人だ」

彼が操作に集中していると連絡用に取り付けた近くの無線機から源外さんの声が聞こえてきた。

昨日、あれだけの事を仕出かしたのだ。誰かが文句を言いに来たのだろう。

そうじゃなくとも自分を知る人物なぞ非常に少ないので客人はかなり限定される。

「通してくれ」

用件、人物などある程度予想できたクルルは即刻スピーカーの先に居る源外さんに返事すると少しの間の後

「よう、研究捗はかどってるか？」

銀さんとギロロがクルルの居る場所にやって来た。

その銀さんの言葉にクルルは「んー、まあボチボチー」と棒読み気味の台詞で適当に返してから

「で、何しに来たんだ？」

彼等に背中を向けて操作を続行しながら面倒臭そうに用件を尋ねる。

とは言うものの、用件もだいたい予想できているが。

「一緒に墓参り行こっかなーって思ってたよ」

誰の墓参りなのかはクルルも予想できるだろうからあえて言わずに銀さんはここに来た用件を告げる。

「時期外れだろ。だいたい墓参りに行くほど親しい奴なんてこの世こゝち

界にゃ居ねーよ」

「別に良いじゃねーか、少しくらい。ちよつと付き合えや」

「……仕方ねーな。んじゃ、少し付き合っただけか」

「何、その上から目線」

「やっぱり嫌な奴だ、貴様は……」

「くっくっくっ！」

ピンポン

その頃、万事屋内部に客の来訪を報せるインターホンの音が鳴り響く。

「はいはい」

そう言っただけで新八が玄関を開けると玄関の外に沖田さんが立っていた。

その沖田さんの中には箱のようなものを入れてあるビニール袋をぶら下がっている。

「ってなんだ、沖田さんじゃないですか。何しに来たんですか？」

見知らぬ依頼人ではなく腐れ縁の面を見て肩の力が抜けた新八が用件を尋ねる。

『沖田』と言うすっかり聞き馴染んだワードが居間にまで聞こえたのか、奥からケロロとタママが玄関に顔を出した。

「旦那と赤いの、あとムカつく黄色居ますかイ？」

「銀さんとギロロさんなら朝から一緒に何処か行っただけで、クルルさんは知り合いのところまで泊まりつきりですけど……」

沖田さんがここに来た用件のある人物の名前を告げると新八はその人達は不在ですと返すと

「そうですかイ……まあ良いか。これ、てめー等にやるよ」

沖田さんは残念そうにそう言いながら手にぶら下げていたビニール袋を新八に手渡した。

「何でありますか、それ？」

「昨日姉上の世話をしてもらった礼でさア」

ケロ口が沖田さんが持つて来たものの中身を訊いているうちに何時の間にか居間で神楽が沖田さんが持つて来たものを勝手に開けて「わーい、ケーキですう！」

神楽と一緒に居たタママが嬉しそうに中身を告げる。

そのタママの声を聞いた新八とケロ口は客人を放置して急いで居間に戻る。

「ちょ、ちよつと、アンタ等何勝手に開けてんの!？」

「大丈夫ネ、ちよつと摘まむだけアルよ。モグモグ……」

「その通りですう! んぐんぐ……」

「何処がちよつと!?! 結構なハイペースでありますよ!?!」

「だ〜!」

「お、カオスも食べるアルか？」

「おー!」

「あーもう、残り一個じゃないですか!」

「一個はオメー等で分けるヨ」

「何その地味な嫌がらせ!?! てめー等の残りモンなんていらねーんだよ! ここまで来たんなら全部食えや!」

奥から聞こえてくるいくつもの賑やかな声。

その声と姿に昔の自分達を重ね、かつての姉の心情を予想しては優しげな表情を見せる沖田さん。

「ところで新八殿、客人を玄関で放置と言つのは如何なものかと……」

……

「あ、すっかり忘れてた。沖田さーん!」

「……もう居ないでありますな」

新八達が気付いた頃には沖田さんはすでに万事屋の玄関から姿を消していた。

そりゃ接客も忘れてワイワイやってたらいくら知り合いと言えども帰りたくなるものである。

かぶき町某所。一人街をパトロールする土方さん。
気持ちを改め、昨日らしくない行動をとった分頑張らなければ。
そう自分に言い聞かせてはいるのだが、頭に過ぎるのは昨日の映
像。

生前より元気なミツバさんの顔が、声が、香りが、感触が、鮮明
に蘇る。

「……こりゃ浮気なんてできそうにねーな」

脳裏に焼き付いた彼女の姿を思い出し、髪をくしゃくしゃと掻き
ながら土方さんは呟く。

「あ、土方さん！」

そんな土方さんを人ごみの中から発見したのは冬樹と桃華の昨日
ミツバさんに会えなかった二人組。

冬樹が彼の名を呼びながら二人は土方さんに近付くと

「……あれ、沖田さんのお姉さんは一緒じゃないんですか？」

冬樹と一緒に居た桃華が土方さんの周囲を見渡し、目的の人物が
居ないので質問してきた。

「なんで俺がアイツと一緒に居ないといけねーんだよ」

その質問に土方さんはぶっきら棒な返事を返してから「……で、
アイツに何か用か？」と問う。

「昨日の夜、沖田さんのお姉さんに会ったって事を軍曹達から聞い
て、どんな人かなーって思って会いに来たんです」

土方さんの問いに桃華がここに来た用件を告げる。

会いに来たって言ってもな……。

「……アイツは昨日帰っちゃったよ」

あの世に、な。

「え、もう田舎に帰っちゃったんですか？」

「……ああ」

何も知らないコイツ等にもう二度と会えないだなんて教えるのは
少し酷だ。

……だいたい、これは俺達の問題でコイツ等には全く関係無エ。よってそれを教える義理も無い。

まあ、野郎も同じ考えだったからこそコイツ等には何も教えなかつたんだろうが。

「それじゃあ会うのは無理そうだね」

「人生の先輩としていろんな話（主に恋愛に関する話）を聞いてみたいと思ってたんですけど、それじゃあ仕方ないですよね……」

「運が悪かったな」

「ミツバさんってどんな人でした？」

「姉ちゃんからは味覚以外は銀さん達よりまともな人って聞いてますけど」

「確かに、味覚以外はまともな女だったよ」

この場に居ない女の事についてしばらく三人が語り合っている

「……でも、沖田さんのお姉さんって意外と酷い人なのかも知れないね」

いきなり冬樹がミツバさんの印象を口にする。

「どうしてそう思うんですか？」

会った事の無い人物の印象を急に語り出す冬樹に疑問を抱いた桃華がそう思う根拠を尋ねてみると

「だって昔からの知り合いの土方さん達を置いて、さっさと田舎に帰っちゃうような人だよ？」

冬樹はするように理由を語る。

昔、俺達が田舎に置いて行った女が今や俺達を置いて先に逝ってしまった。

それも昨日、昔のアイツならあり得ない事をあれだけしておきながら。

「……そうだな、嫌な女だよ」

冬樹の言葉と真実は違うものの、あながち間違いつて訳でもないので土方さんは寂しそうに呟く。

「何か理由があったんですよ、きっと。そうじゃなきゃ土方さんを

置いて帰るなんて事しないと意思します」

「オイ、ちよつと待て。なんで俺だけなんだ？」

「え、違うんですか？ 神楽さんが『絶対あの二人惹かれ合ってたアル。私の目に狂いは無いネ』って言ってたからてつきりそうかと……」

「違エよ。アイツとはそう言う間柄じゃねエ」

本当は『そう』なのに、決して『そう』とは言わない。『そう』とは言えない。

けれど何時でも、何時までも『そう』だと信じている。
それが彼等の間柄。

嫌な奴（後書き）

ども、白黒仮面です。

今回のこのお話で『蘇ったミツバ編』終了です。

作者としては満足してますが、読者の皆さんはどうでしたか？
良かった、楽しかったと言ってくださればそれで充分です。

近日中に活動報告で『蘇ったミツバ編』の裏話をぶっちゃけたいと思いますんで興味がある方は見てくださいまし。

ストックはかなり溜まっているんですが、かと言ってガンガン消費するとすぐ空になるんで頃合を見計らって更新したいと思います。

たかいたかーい

ケロロ達が『銀魂』の世界に来て九日。

銀さんはまたもや朝から何処かに行つたきり、冬樹と桃華は当番で下のスナックお登勢に、クルルは相変わらずからくり堂に泊まりこみと数名この場に居ないもののほとんどの連中が万事屋に集いのほほんとくつろいでいた。

「完成であります！」

そんな万事屋のリビングのソファの上で完成し立てのガンプラを天高くに持ち上げ喜びを表現するケロロ。

テーブルの上にはすでに数体作り終えたガンプラが立たされている。

「よくもまあ飽きもせず作れるアルな」

こつちの世界の空気にだいぶ慣れたのか、最近ではほぼ毎日ガンプラを作るケロロに呆れて神楽が言う。

一緒に万事屋に居た新八や夏美、タママ、ギロロ、ドロロ等も言葉には出さないだけで神楽と同じく呆れているようだった。

「好きでありますからなく、当然であります！」

この場に居るほぼ全員に呆れられているとは知らずにケロロが堂々とそう告げていると

「あー！！ だーぶー！！」

カオスがテーブルの上によじ登りガンプラの一つをがっしと掴んでぶんぶん振り回し始めた。

「あー、それはダメだってばカオス！！ ホラ、こつち！ こつちなら少し多めに買ってあるから！」

宝物を赤子の遊び道具にされ、慌ててケロロは冬樹と一緒に作って遊ぼうと思って多めに買ってあった別のガンプラで遊ぶよう勧める。

「おー」

れながらケロロに注意する。

その様は宛ら小さな子どもと母親のようだ。

「また買って作れば良いだけの話じゃないですか」

新八が呆れながらもケロロを励まそうとすると

「また！？ またって何よ！？ 優しくしたあの人を忘れて、新しい男を作れって言うの！？ 私には……私にはできない！！」

「……いや、なんで女の人みたいなんですか」

ケロロが女の人っぽい声と口調で反論するので新八は冷静にツツコミを入れる。

「おう、てめー等居るかー。これから飯食いに行くぞー」

そこに銀さんが帰宅しこんな事を言うので

「え、本当ですか！？」

「本当本当。さっきパチンコで勝ってきたからさ」

「キャツホイー！！」

「ぎ、銀時殿！！ そのお金でガンブラ買って！！」

「ふざけんな。なんでオメーの為に金使わねーといけねーんだ」

「カオス君に壊されて……」

「あっそ」

「あっそって何よ！？ 私にとっては大切なものなのよ！？」

「何その女っぽい話し方」

「と、とにかく一生のお願いでありますから！！ ねっ、ねっ、ねっ！？」

「そう言う奴に限って、何度も何度も『一生のお願い』って言うんだよ。」

「ったく、てめーの一生は一体何回あるんだっつーの」

「しょ、しょんなあゝ！！！！！！」

そう言う訳でかぶき町某所。

万事屋トリオとケロロ、タママ、ギロロ、ドロロ、夏美、小雪、モア達は街を歩いてお店に向かっていた。

「ガンブラ……我輩の……ガンブラ……」

「おじさま、しっかりしてください！」

ガンブラクラッシュのシヨックから立ち直れず真っ白になりながらとぼとぼと歩くケロロをモアが励ます。

「あの女〜！」

それを見て嫉妬の炎を燃やすタママ。いつもの事である。

「たかいたかーい！」

「キヤハハハハ〜！」

その一方で、神楽はカオスを高く持ち上げる。

神楽に持ち上げられたカオスは青空を背景にして太陽に負けないくらい眩しい笑顔を見せる。

「オイ、あのバカにはガキ触らせないようにって言ってあっただろーが。誰だ、触らせたのは？」

そんな神楽とカオスの母子のような微笑ましい触れ合いを見ても銀さんは不機嫌そうに注意する。

「別に良いじゃないですか。神楽さんも嬉しそうだし」

「そうよ、それに減るものでもないだし」

銀さんの注意に対し神楽の味方になり反論するのは夏美と小雪だ。確かに二人の言うように、神楽とカオスは二人とも心から嬉しそうで見える限りは何処にも問題は無い。

「それが減るんだよ、あのバカが触ると」

それでも、と二人の反論を聞いた銀さんが反論する。

「……どう言う事？」

銀さんの言葉の意味がよく分からず首を傾げる夏美。

「神楽ちゃん、お前のペットにまつわるお話コイツ等に教えてやって」

「んとね、私が小さい頃ペットに兎を飼ってた事あるアル。名前は定春一号。」

ある日の夜、一緒に抱いて寝てたら夢でうなされて、朝起きたら腕の中で定春一号冷たくなっていたアル」

仕方ない、と銀さんが神楽に過去を話すよう促すとさっそく神楽は飼っていた兔に起きた悲しい(?) 事故を涙ながらに告白する。

「何、その微妙な話……」

それってただ単に抱いて眠ってたら暑苦しくなっただけなんじゃ……。それで原因でつい強く抱き締めちゃっただけなんじゃ……。

って言うか、そうなるって予想できなかったのかしら……。

どう言っすりアクションをとれば良いのか迷いながら夏美が神楽の過去話の感想を呟く。

他にもペットの名前はやっぱり『定春』なのか、一号と言う事は他にも居たのだろうか、とかいろいろ気にはなっただけでもそれらの疑問は心の中にしまっておく事にした。

「とにかくそれが原因で生き物に触るのを控えたんですか?」

「うん、それからは定春飼うまで動物触らなかつたネ。でも力オスなら触っても大丈夫アル、きつと」

銀さんが神楽に力オスを触らせないようにと言っていた理由はこれか。

小雪が神楽に確認すると神楽はその通りだと告げる。

「確かにそうかも知れねーが、くれぐれも気イ付けろよ」

「分かっているアル!」

いくら力オスが異常でも神楽が同じ事を繰り返しそうない気かしてならない銀さんは念の為神楽に注意して再度釘を刺した。

「そう言えば……ケロロさん達の世界には他にも宇宙人は居るんですよね?」

宇宙人である神楽が話題になったからか、ここで新八が話題をケロロ達の世界の宇宙人に関する話に変更する。

前々から多少なりとも興味はあったのだが、それどころじゃない騒ぎばかりで聞く事をすっかり忘れていたのだ。

「そ、そうでありますよ。我輩達やモア殿の他にも、たっくさんの

いろんな宇宙人が地球に潜伏ペコポンしているのです。」

だいぶガンプラを壊されたショックから立ち直り始めたケロロが新八の質問に答える。

「ところでその『ペコポン』って何？」

まさか何、川柳の最後の五文字を当てるゲームとか順番に出される料理を食べてその料理の値段をあらかじめ用意されている値段の中から予想するゲームとかするあれ？

負けたらししおどしとか失敗したら椅子が高速回転する罰ゲームとかあるあれ？」

「確かに名前似てるけどそれ違うです。」

「『ペコポン』と言うのは、我輩達の世界の宇宙人が地球このほしを呼ぶ際に用いる言葉なのでありますよ。」

前々から聞いてて不思議に思っていた『ペコポン』と言う言葉について銀さんが自分の予想を告げるとタママが呆れながら否定しケロロが説明する。

「ふ〜ん……その『ペコポン』とやらにオメー等は侵略しに来た、と。」

「そう言う訳であります。……ってそんな事言っただけ？」

銀さんがケロロ達が何故この星に来たのか予想するとケロロは素直に頷いた。

「それじゃあやっぱりモアちゃんもケロロさん達と同じ理由で地球に来たんですか？」

ケロロ達が地球侵略なら一緒に居るモアも同じ理由で地球に来たのではないか？

そう思った新八が問う。

「そう言えば宇宙人だったな、四字熟語娘も。」

銀さんは新八に言われるまでモアが宇宙人だと言う事をすっかり忘れていたようだ。

姿が違うケロロ達ならともかく普段、モアは神楽みたいに普段宇宙人っぽい事をしないから忘れていても別段おかしくはない。

「あー、モア殿は違うであります」

「モアは地球を破壊しにやって来たんですよ。てゆうか初期設定をいつものようにさらりと言う？」

ケロロが新八の言葉を否定し、モア本人が地球に来た仰天の理由をいつものようにさらりと言う。

「……え、ゴメン。もっかい言うて？」

「モアは地球を破壊しにやって来たんですよ」

モアの言葉を信じられなかった銀さんがもう一度モアが地球に来た驚きの理由を言うようお願いするとモアは親切にも同じ台詞をもう一度口にする。

しばしの沈黙の後

「は、は、は、は、破壊イイイイイイイイ！？」

新八&銀さん大絶叫。

「破壊つて、え、ちよっと待って、何、モアちゃん、地球壊しに来たの！？」

「はい、そうですよー」

「ど、どどどど、どうやってこんなバカデカイもの壊すんですか！？」

「『ルシファースピア』と言う私達の種族特有の武器を用いて、グラグラグラグラ……パカッて壊すんです」

「パ、パカアッ！？ そんな簡単に地球つて、いや星つて割れるものなの！？」

「はい、綺麗に割れますよ。場所にもよりますけど……なんならやつて見せましょうか？ てゆうか、実演披露？」

「そ、それだけは止めてモアちゃん！」
流星にそれをされたら困ると夏美は必死になってモアを制止させる。

「ヤベ、今のモアちゃんの話聞いたら神楽の種族がなんかスツゲー可愛く見えてきた」

「同感です」

星を破壊できると言う事はそれ即ちその星に住む命も全て奪えると言う事に等しい。

夜兎も夜兎で人一人の命なぞ容易く奪える戦闘狂なのだが、如何せん一度に奪える命の数が圧倒的に違い過ぎる。

せめてもの救いはこのモアと言う娘が神楽のように、いや神楽以上に余計な感情を持ってないところだろう。

「銀ちゃ〜ん!!!」

異世界の宇宙人に関する話で弾む銀さん達に聞こえてきたのは神楽が銀さんと呼ぶ声。

その声を聞いた一行は周囲を見渡して神楽を探すが何故か彼等の視界に神楽の姿は映らなかった。

「……あれ、今何処から聞こえてきた?」

「み、皆さん! あれ!!!」

真つ先に神楽に気付いた小雪が上を指差すので一行は一斉にその方向を見る。

そこには三階立ての家屋と同じくらいの高さで空中に浮かぶ神楽とカオスの姿があった。

何かに乗っている訳でも何かに吊るされている訳でも無いのに二人の体は空中にあった。

「……なんでアイツ浮いてんの?」

いや、だいたい予想はできてるけど。

だいぶこう言った怪現象に対し抗体が付いたらしい銀さんが然程まばら驚かずに一言呟く。

「神楽さーん! どうして浮いてるんですかー?」

「なんかカオスの体が急に軽くなって気が付いたら私も浮かんでたアル!」

モアの質問に神楽はそう答える。

どうやらこの現象は『神楽の』体が軽くなって宙に浮いているのではなく、『カオスの』体が急激に軽くなった事により生じたみたいだ。

事実、カオスは特別何かに掴まっている訳でも無いのに非常に安定しているのに対し、神楽はカオスの小さな体を両手でガシツと掴む事ようやく安定しているように見えなくもない。

あの神楽に掴まれているにも拘らず笑顔のカオスを見る限り、神楽の馬鹿力や体重などはまったく問題無いみたいだ。

「チツ、しょうがない奴だ……。ドロロ！」

「承知!!!」

騒ぎを軽減するべくギロロがドロロを呼ぶ。

と同時に同じ事を考えていたドロロが自分のマークでもある十字の手裏剣の形をしたスペアの階級章を神楽に投げ付ける。

ドロロに投げられた階級章は神楽の背中にペタリと上手くくっ付き、カオス同様に神楽の姿も一般人には見えなくなった。

「神楽ちゃん、今すぐカオスから手を離して降りて来てくださーい!!!」

新八が神楽に降りるよう告げる。

現時点でのカオスと神楽の居る高さはだいたい二、三階建ての建物の高さくらい。

普通の人なら怪我をしそうだが、神楽ならこの高さから飛び降りても怪我はしないだろう。

「ダメアル!!! 今手を離したらカオス、空高く昇っていつてお星様になっちゃうヨ!!!」

しかし神楽はそう言ってカオスから離れようとはしなかった。

お星様になる、とは聞こえは可愛らしいもののこのケースだと冗談抜きでお星様になっちゃういそいだ。

「ケロロさん達が持って来た物の中で使えそうな物とか無いんですか?」

「持って来た物って言うても我輩はガンブラだけでありますから…

…」

「僕は何も持って来てないですう」

「拙者は忍具だけござる」

どんな方法で今のカオスの下まで行くのか、どうやってカオスを地上に引き摺り下ろすか。問題は山積みだ。

とりあえず新八はケロロ達が持って来た物を頼りに問題を解決しようと考えてるもケロロ等の返事は望まないものばかり。

「ドロロは良いとして、まったく貴様等は……」

ケロロとタママが持って来た物を聞いてほとほと呆れるギロロ。同じケロン軍人として、軍人とはどうあるべきなのかを説教してやりたくなるくらい不愉快になったがそれは後回しだ。

「そう言う赤は何か役に立つものを持って来てんのか？」

ケロロ達が持って来た物に対して不満を漏らすくらいだ、自分は役に立つ物を持って来ていて当然だろ。

銀さんはギロロが持って来た物について尋ねる。

「持って来た物の中に飛行ユニットがある」

「飛行ユニット？」と新八。

「背中に取り付ける事で空を飛ぶ事が可能になる装置の事だ」

「へえ、そりやまた随分と便利な物があるんだな」

と言う事でギロロのテントがある恒道館道場に来た一行。

「これが飛行ユニットだ」

「へえ……」

「これが……」

ギロロが自身のテントの中にあつた機械でできた小型のランドセルのような形の飛行ユニットを銀さんと新八に見せると実際に背中に取り付ける。

すると飛行ユニットから淡い桃色の光の大きな翼が生えたかと思うと次の瞬間にはギロロの体が空に浮かび上がったのだ。

「お……」

「本当に飛んでる……」

銀さんは相変わらず死んだ魚のような眼で、新八驚きで目を丸くしながら空を飛ぶギロロを見つめる。

現代と大差無い、いやそれ以上の技術を持つこの世界でも大きくもないに一人の人が自由に空を飛べる……例えるのならドラ もんの夕 コプターのようなものは存在しないのだ。

とにかくこれでカオスの下へと向かう事が可能になった。

「……しかしながらギロロ殿、いったいどうやってカオス殿を地面に下ろすつもりでござるか？」

「そんな事行ってから考えれば良いさ。とにかく俺はカオスの下に向かう！ お前達は急いでクルルに原因を聞いてきてくれ！」

いったいどう言った原理でカオスが宙に浮いているのか、まだ分かってもないのにどうやってカオスを地面に下ろすのか？

ドロロの質問にギロロはそう言っただけ空を飛びカオスの下へと向かう。

「へいへーい」

「分かりました！」

銀さんはやる気を微塵を感じさせない声色で、新八は真剣な表情で返事する。

対照的な態度で二人が返事する中、一行がギロロの空を飛ぶ姿を眺めていると、空の彼方から意外にカッコイイデザインの飛行船が凄く速さでやって来て空を飛んでいたギロロを狙ったかのように直撃。

その飛行船はギロロを機体に貼り付けたまま、ドカーンと言う爆音と共に地上に墜落した。

突然の現象に言葉を失う一行。

「ぎ、ギロロさアアアアアん！！」

「ギロロ ……！！」

新八と夏美はギロロの身を案じ名を叫び

「さーて、黄色に話を聞いてくるとすっか」

「了解であります」

銀さんとケロロは何事も無かったかのようにクルルに話を伺う為
行動し始める。

「変わり身早っ!!!」

「アンタ達はもう少しギロロの心配をしなさいよ!」

ギロロの身に起きた事故をまったく気にしない様子の二人に当然
の如く新八や夏美が怒声で注意する。

「大丈夫でありますよ、ギロロ伍長はそう簡単には死なないであり
ますから」

「いやそうかも知れないけど、もう少し心配してあげた方が良く
じゃないですか?」

ケロロの態度はギロロに対する強い信頼からか、それともただど
うでも良いだけなのか。

おそらく後者だと感じた新八が一言物申す。

「緑の言う通り、大丈夫だってぱっつあん。ホラ、小説の最初らへ
んで隕石食らっても赤は生きてたじゃねーか」

「なんでアンタがそんな事知ってんのよ!？」

銀さんがケロロ達しか知り得ない情報を平然と口にすると夏美に
ツッコまれた。

墜落する宇宙船に巻き込まれ重傷を負ったギロロを包帯でぐるぐ
る巻きにした後、銀さん達がやって来たのはからくり堂の地下。

「あのガキがチャイナ娘と一緒に空高く浮いたって?」

銀さん達から聞いた現状をクルルはリピートしてから「やはりな
……」と小さな声で呟く。

「その様子じゃ予想できてたみたいだな」

クルルの様子を見た銀さんの言葉にクルルは「まあな」と返して
「あのガキの体には重力を操作する力と重力に反発する力が備わっ
ていてな、あのガキの意識次第で自由に体を浮かして空を飛んだり、

体を重くしたり軽くしたりする事が可能だ」

カオスの体を分析して分かった事について説明する。

クルルがカタツとキーボードを操作するとキーボードと連動するモニターにカオスの体と重力と書かれた矢印が表示されその矢印の大きさが大きくなったり小さくなったり、それとは反対方向に別の矢印が伸びたりする。

「私達の世界の夏美さんの家でカオス君の体が重くなった原因もそれなんだね？」

ここに来る前、『銀魂』が放送されているテレビの前からカオスを動かそうとした時の事を思い出した小雪はクルルに確認するとクルルは「たぶんな」と答える。

「そ、そう言えばカオス君を抱っこする度に重さが微妙に違うような気がしてたのよね……」

「な、夏美さんですか!？」

「私もです!！」

それ、気付こうと思えば気付けたんじゃないのか？

夏美、小雪、モアの三人娘がカオス君に関する疑問を口にするのを聞いて男共は呆れた表情で三人娘を見つめる。

「しかしクルル曹長、どうしてカオスは空を飛んだんでありますか？」

意思次第で自由に体を浮かしたり、体を重くしたり軽くしたりする事ができる能力。

つまり、飛びたいと思えば飛べるし、体を重くしたいと思えばそれだけで体を重くできる力。

体を浮かす原理は分かっても、何があってカオスが空に興味を抱き、飛ぼうと思ったのかが分からない。

「んな事まで俺が知るかよ」

現場に居たケロ口等ですら分からなかったのに、現場に居なかったクルルがその答えを知る訳が無いが

「ま、あくまでこれは可能性なんだが……あのガキは幼過ぎるせい

で力を制御できてねエ。

重くなりたい、空を飛びたいと直接意識せずとも重くなったり空を飛んだりする事で問題が解決するような状況下で勝手に力が発動するのも知れねーな。

俺達の世界での出来事を例にするなら、動きたくないから重くなつて動かせなくした、みたいな感じで」

一応クルルはカオスの力についての推論を述べる。

その推論を聞き、一行はカオスの行動を振り返り新八が代表して
呟く。

「確か、空に浮かぶ前は神楽ちゃんがたかいたかいてましたよね……」

神楽がたかいたかいてた。高いところが好きになった。空を飛べばもつと高いところに行ける。

故に空を飛んだ。

「まさか……ね？」

そんな事ある訳が無い。自分に言い聞かせながら夏美が口にするいや、ここに居る皆もそう思った筈だ。この場に居合わせる誰もがこの言葉を否定して欲しかった。

「そのまさかだろうな」

だがしかし、クルルはその言葉を肯定する。

「どうすんだオイ!! 俺達空なんて飛べねーぞ!!」

ここでは鳥やヘリコプターだけではなく大きな船や一部のパトカーだつて空を飛べる。

そんな安全とは決して言えない空にカオスと神楽は浮かんでいるんだ。

しかも現在、二人はアンチバリアの効力により銀さん達以外の住人には姿が見えない。

その為、一刻も早く二人を地上に引きずり下ろさないとギロ口のように事故に巻き込まれる可能性が非常に高いのである。

「安心しな。こう言う時の為と思って作ってたモンがあるからよ」

銀さん達とは打って変わって慌てる様子も無くクルルがポチっと手元にある機械からくりのボタンを押すと床の下から何かが迫り上がってきた。

「コイツは……」

床の下から迫り上がってきた物体を見て眼を丸くする一行。

それは機械でできた小型のランドセルのような形の何らかの装置……そう、ついさっきギロクが空を飛ぶ為に使い、何処かから飛んで来た飛行船の墜落事故に巻き込んで壊してしまった飛行ユニットとそっくりだった。

「俺達の世界にある飛行ユニットをこの世界にあるものを使ってジジイと協力して作ってみた。

コレ貸してやるからとつとあのガキのところに行きな」

クルルは源外さんと一緒に作った装置を銀さんに貸してくれるよ
うだ。

「あのジジイと協力して作ったつてあたりがちよつと心配だけどな
じゃ、お言葉に甘えて……」

製作者が製作者なので銀さんは一言愚痴を漏らしてから飛行ユニットを背中に取り付ける。

「ちよつと待て天パ」

「なんだ、黄色？」

いざカオスの下へ！ と銀さんが思った矢先、クルルは銀さんを呼び止めると黄色い小さな掌を広げて差し出した。

「……何？」

クルルの行動の意味が理解できず銀さんが眼を点にして尋ねると「いや、だから金くれや。情報料に加えてわざわざ作ったモンを貸してやるんだからな、当然だろ？」

下手すれば誰かが命を落とすかもしれない状況にも拘らずクルルは金を取ると言う。

「ハア！？ お前何！？ この状況で金！？」

「そうですよ」

「『そうですねーよ！』」

クルルのふざけた台詞を聞いて怒鳴る銀さん。

そりゃそうだろう。こんな状況下でこんなふざけた事をされたら不満の一つや二つ出て当然だ。

相当クルルの話が不愉快なようで銀さんの目元や口元はピクピクと震えている。

「タダほど高いものは無いんでね……。」

ちなみに言っておくが、それは俺が許可しない限りは使えねえよ。うになってるから早いとこ払ってくれや。今なら特別サービスで千円にまけてやるからよ。」

それでもクルルは金払えと上から目線で要求してくる。

「く〜くくくくく〜！」と言う黄色い彼の薄ら笑いがいつもの数倍は嫌らしく聞こえてくる。

嫌な奴〜……。

その場に居た者達の心の中で呟いた言葉が完全に一致する。

「……覚えてるよ、黄ばみ野郎」

背に腹は変えられぬ。

銀さんは悔しそうにそう吐き捨てながら財布の中から千円札を取り出し、風で飛ばされぬよう少しだけ曲げて持った江戸のお偉いさんが描かれた紙幣をぶんと勢い良くクルルの掌の上に叩き付ける。

情報料と困った発明家達を作った機械からくりの使用料を受け取った黄色い宇宙人は引き続きくくくく〜！と笑ってから

「空飛ぶコツはイメージする事だ。ま、後はやってみれば分かるだろ。じゃ、頑張つてね」

空を飛ぶコツとその気持ちなど微塵も感じられない励ましの言葉を銀さんに送った。

そうして一旦表に戻り、源外さんが立ち会う中クルルのアドバイス通りイメージしてみる銀さん。

ジェットコースターの急降下中みたいなふわっと体が軽くなる感

覚に襲われた直後、銀さんの体は地面から数十センチだけ宙に浮か
び上がった。

いろんなあり得ない事が起こる世界で生きてきた銀さんや新八だ
が、よもや自分がこんな小さな機械からくりで空を自由に飛べる日が来よう
とは思ってもしなかっただろう。

「……スゲーな、マジで……」

心底驚いたような感心したような雰囲気で空に浮かぶ感想を呟く。
地面に足が付いてない感覚がどうにも怖くて落ち着かない。

「その機械からくりには探し物、この状況で言うならあのガキが今何処に居
るのか音声で案内するナビゲーション機能と任意の相手にはしか見る
事ができないアンチバリア機能に環境の変化に即座に対応できる特
殊なバリア機能、それからこっちと連絡できるよう無線が付いてい
るから気にせずテスト飛行してくれ」

源外さんがニツと笑いながら飛行ユニットに備わる機能について
さらっと説明すると

「ちょ、ちよつと待つてください源外さん。今『テスト飛行』って
言いませんでしたか？」

源外さんの口から聞いてはいけないワードが出て来たような気が
した新八が尋ねてみる。

「言ったがどうかしたか？」

新八の疑問に特に悪びれる様子も無く返答する源外さん。

「あんの野郎……!!」

金取っておきながら、俺を実験台にしゃがったな……。

銀さんはクルルに対する凄まじい怒りでワナワナと体を震わせる。
「とにかく、早いとこあのガキに降りてもらって今回のエピソード
はおしまいにしようじゃねーか……」

しかし神楽が酷い目にあっているのだ。怒っている場合ではない
くらい銀さんも承知している。

すぐさま銀さんは空高く飛び上がり、疾風の如くカオスの下へと
向かっていった。

「僕達も追いましょー!!」
続いて新八達も小さくなってしまった銀さんの後を追う。

かぶき町上空千メートル。

人はすっかり小さくなって蟻んこかミジンコくらいになり、普段は見上げるしかない建物も今は遙か下方に小さく見える。

銀ちゃん……新八……。この際、誰でも良いから助けに来てヨ……。流石に高過ぎるアル……。

いくら体が頑丈な夜兎族とは言えこの高さで落ちてしまったらただでは済まないだろう。

普段気丈な神楽もあまりの高さに弱気になっていたところに背中に飛行ユニットを付けて空を飛ぶ銀さんが接近する。

「神楽！」

「銀ちゃん！」

銀さんの声を聞き、彼の姿を見てさっきまで沈んでいた神楽の表情がパツと明るくなる。

「……っつーか、どうやって空飛んでるアルか？」

「んな事どうだって良いだろーが。さっさとこっちに移れ」

神楽が銀さんが空を飛ぶ原理を尋ねるが銀さんはそれを無視し、神楽に自分に掴まれと告げる。

銀さんが神楽が自分の体に飛び移りやすいよう限りなくカオスと神楽に近付くと神楽はカオスの体から手を離し、すぐさま銀さんの体にしがみ付いた。

神楽の身の安全を確保したからには後はカオスを地上に引きずり下ろすだけ。

「オイ、クソガキ！ 下に降りるぞー!!」

銀さんが説得するがカオスは何が楽しいのかは謎だが「キャハハハハ！！！！」と笑ってさらに高いところ上昇した。

「チツ、面倒臭エ……」

銀さんが体に神楽をしがみ付かせたまま上昇して力オスを追跡しようとしたその時

『応答願います。こちら源外だ、銀の字応答願います』

飛行ユニットに取り付けてあった無線から源外さんの声が聞こえてきた。

「んだア、こんな時に!!」

「銀ちゃんは飛行中アル、私が代わりに応答するネ!!」

銀さんの代わりに神楽が応答すると

『なんだ神楽か。まあ良い、銀の字にも聞こえてるだろ。そのまま聞け。』

言い忘れていたがその機械は恐ろしくエネルギーを食う機械だ。

おそらく長時間の飛行は無理だ』

と源外さんが早口で用件である飛行ユニットの欠点について説明する。

「……あれ、どっかで聞いたよその台詞。だいたい次の台詞予想できちゃうんですけど、予想できちゃったんですけど」

その説明に聞き覚えのある銀さんが顔を引きつらせながらそうぼやいていると

『たぶん三分くらいで爆発するから気イ付けろよ、く〜つくつく〜』

源外さんの説明の続きをクルルが語った。

その場に響くのはクルルの嫌らしい笑い声だけ。

「うわあ、たかいたかーい……」

銀さんがマズイと言う言葉を表情にしながらポツリと呟いた次の瞬間、銀さんの背中にあった飛行ユニットはドカーン！ と大爆発。

「ぎゃあああああああああああああああ!!!」

空を飛ぶ力を持たない二人は真つ逆さまに落下していく。

「な、何!?!」

街を駆けながらいきなりの爆発に空を見上げる新八達。

「銀時さんの飛行ユニットが爆発しました！ 銀時さんと神楽さんが落下してますー!!」

かなり上空で起きた事の筈なのに視認できたのか、瓦の上を走っていた小雪が何が起こったのかを報告する。

「な、なんですとー!!」

小雪の言葉を聞き緑色の顔を両手で挟んで変形させながら驚くけ
口口。

あの二人は常人では眼に見えないほど上空に位置していた筈、そんなところで空を飛ぶ手段を失ってしまったえば怪我どころでは済まないのはもはや明白である。

「ドロロー!!」

小雪がドロロに最悪の事態に備えようと指示を出すとドロロはコクリと首を振って頷いた。

一方、猛スピードで落下する二人。

「銀ちゃん、助けに来たんじゃないアルか!? もっと酷い事態になってるアルヨー!!」

「俺に文句言っんじゃねエ!! そう言うのはあの黄色とジジイに
言いなー!!」

「黄色ー!! ジッジー!! 私が死んだら絶対恨むからなー!!」

「ヤベ、俺このまま死ぬのかな、マジで死ぬのかな? 早かったな

ー……俺の人生。本当、F1マシンが走り抜けるくらい早かったよ

……。ヤベ、マジで風を感じるよ……」

「そりゃ落ちてるから風を感じるのは当然ネ」

「あ、そっか。そうだよねー……あははははは……」

「私、まだやりたかった事たつくさんあったアル!! もっと酔昆
布食べたかったネ、もっと卵かけご飯食べたかったネ、それから……」

「お前、食べる事ばっかじゃねーか」

「本当よね」

無事地上に戻れた銀さんと神楽が愚痴を吐き、ケロロと夏美が二人を励ましていると

「私が行けば何も問題無かったのかも知れませんねー。てゆうか、安全第一？」

モアの口からとんでもない言葉が飛び出てしまった。

「え、モアツチ空飛べるアルか!？」

「はいっ!」

それ、先に言ってよモアちゃん……。……。ゴメン、すっかり忘れてた……。

その事に気付いていればこんなに苦労する必要は無かっただろうに。

モアの衝撃発言を聞いた今回苦労した組は真っ白に燃え尽きてしまった。

「どうしたネ、お前等？」

チャイナ服の女の子は不思議そうに首を傾げ、彼女の腕の中に居た子どもはすやすやと眠る。

たかいたかーい（後書き）

ども、白黒仮面です。

ようやく修理に出してた携帯ゲーム機が帰ってきた。キャッホーイ
！！

これがあるのとないのではやる気が変わります。
頑張っぞオオオオオオ！！！！

宇宙人に始まり、宇宙人に終わった今回のお話。
みんなは何処が面白かったかな？

次回からはあのお話。

忍び寄る狂気

キャバクラ、ホストクラブなどの店の看板に仕込まれたネオンライトが派手に輝き、店や街灯の明かりが夜空に浮かぶ月以上に道を照らす。

そんな光に満ちる夜のかぶき町を編み笠を深く被り腰に刀をぶら下げた怪しげな男が一人で歩いていると見るからにチンピラのような風貌の連中の一人と肩がぶつかってしまった。

「オウ、コラてめえ！！ 何処見て歩いてんだ、ああ！？」

「……すまん」

「すまんて済めば警察はいらねーんだよ！」

「……そうだな、悪かった」

「謝れば済むってモンじゃねーんだよ！」

この男からたっぷり金を巻き上げよう。

下卑た笑いをするチンピラ達に対し、編み笠の男は深く被ったその編み笠の下の表情を決して崩さなかった。

「兄ちゃん、ちよつと面貸せや」

「……悪いが、お前等に貸すものなど何も無い」

「ああ！？」

チンピラの誘いを断る編み笠の男。

刹那、編み笠の男と絡んでいたチンピラ達の体から鉄臭い真紅の液体が凄まじい勢いで噴き出した。同時にチンピラ達の体が地面に崩れ落ちる。

辛うじて体から赤い液体を噴出せずに済んだチンピラの一人は腰を抜かし恐怖で体を震わせながら地面に座り込んだ。

「貸しても返つて来なさそうだからな」

編み笠の男は呟く。

手に持った刀の、眼を凝らして見なければ見えないくらい夜の闇に溶け込むほど真っ黒な刀身にチンピラ達の体から噴き出した赤い

ケロ口達がこの世界に来て十日目の朝。恒道館道場。

「昨夜から未明にかけてかぶき町で辻斬り事件が発生。被害者は五十人超でその全員が即死した。」

被害者の数、及び目撃者の証言から犯人はかの有名な辻斬り『桜田 千兵衛』と思われる警察はかぶき町周辺に住む住人に注意を呼びかけている……」

縁側に座り自分達の体よりも大きな新聞紙を広げ記事の一つを分かりやすく説明するのはドロ口兵長。

「一夜で五十人……か。刀一本でそれだけやるとは、その辻斬りとは、それは相当の実力を持っているようだな」

ドロ口の言葉を聞き、ギロ口は何時に無く真剣な声色で呟く。

「ギロ口殿、まさか辻斬りと戦うつもりは無いでござろうな？」

好戦的なギロ口の事だ、戦うなど馬鹿な事とか考えているのではないかとドロ口が危惧して質問すると

「まさか。その者と戦う事が無ければ良いと思っっているほどだ」

戦うつもりなど毛頭無いとギロ口は返した。

「しかし、もしも戦う事になれば……」

「分かっている。他の連中に殺し合いなどさせる訳にはいくまい」

「となれば……」

「ああ、俺達が戦うしか無いだろうな」

「銀時殿達が素直に戦わせてくれるかどうかは分からぬでござるが」

「そうだな……」

辻斬りはおそらく機械からくりや化け物ではなく人間だろう。

冬樹等子ども達に流血沙汰など似合わないし、タママ二等兵は戦闘能力は高くてもまだまだ若輩者、クルル曹長は技術兵の為肉弾戦は不得手。隊長であるケロ口軍曹に至っては実質的な能力を持ってないので論外だ。

こう言う汚い仕事は大人がやるべきだと二人が会議している最中に

「およつ！？ お二人さん、そこで何してるんでありますか！？」
小さな体で縁側を雑巾掛けをしていたケロロが偶然通り掛り、ギロロとドロロが何をしているのか尋ねてきた。

「隊長殿には関係の無い話でござるよ」

「ちよつとちよつと！ 関係無いってどう言う事よ！？」

「ドロロの言った通りだ。それより、貴様は何をやってるんだ？」

「え、見れば分かるつしょ？ 掃除でありますよ、掃除」

「ケロロ君が進んで掃除をするとは珍しいでござるな」

「普段はあれだけ嫌々なのにな」

「そりゃ夏美殿が『やれ』って言うからでありますよ。我輩だってやる時はやるんであります！

「つーか、さっきまで何話してたの！？ なんで我輩関係無いの！？」

「本当に自分達とは関係無さそうだ。」

自分達の隊長と緊張感など欠片も無い言葉を交わす度ギロロとドロロは思った。

万事屋にて。

「辻斬り……ですか？」

「ええ、昨日の夜かぶき町に出たらしいんですよ」

「かぶき町って、ここじゃないんですか？」

「その通りアルヨ」

「って、昨日の夜って事は僕達も辻斬りに出くわしたかもしれないんじゃない……」

「そうかもな。ま、ババアの計らいで最近はやめに新八んちに帰れてたし、帰る時は新八も一緒だからたぶん大丈夫だったんじゃないの？」

「悪かったですね、『たぶん』で」

「……あのー、ところで辻斬りって何ですか？」

「そう言う前も出た言葉は自分で調べるなり小説を読み直すなりしてください」

「そう言うボケはもう良いんだよ!」

「でも実際同じ内容もう一回やる事になると結構つまらないアルヨ
『リメイク』とか言ってるこの小説も然りネ」

「失礼な事言うな!! ……まったくもう。」

桃華ちゃん、辻斬りって言うのは簡単に言うと通り魔の事なんですよ

「と、通り魔!? ぶ、物騒ですね……」

「てめー等が気にする事アねーよ」

「そうアル! いざとなったら私達が護ってやるから大丈夫ネ!」

「あ、ありがとうございます……」

万事屋の下、スナックお登勢では。

「一晩デ被害者が五十人モ出タソウデスネ。オー、怖い怖い……」

「ひ、一晩で五十人も!」

「あまりにも危険なので夜間は出歩かないように、と先程警察から連絡がありました」

「てゆーか、緊急事態!」

「アンタ達、しばらくは店に来なくて良いよ」

「ええ!? でも……」

「どうせ客も減って手伝いなんて必要無くなるだろうからね」

「ハ、ハア……」

昨日の辻斬り騒ぎ、噂の『死神』がやったんだとよ……。

おー、怖……。真選組の隊士も数名やられちまったそうじゃねーか……。勘弁してくれよ、これじゃあ夜もおちおち寝てもいられねエ……。早く誰かなんとかしてくれないかね……。街の至る所で辻斬りの話が飛び交う。

その日の夜更け。

恐ろしい辻斬りと出くわすかも知れぬ街を堂々と行く二人の人影があった。

一人は着物姿がよく似合う艶やかな美女で、もう一人は剣豪のような格好に腰に刀を差し左目に眼帯を付けた一見男のようにも見える。

「ゴメンね、九ちゃん。こんな事頼んで……」

「気にするな妙ちゃん。辻斬りが出没する危険な街を妙ちゃん一人で歩かせる訳にはいかないだろう？」

仕事帰りらしいお妙さんと彼女のボディガードにと志願した九兵衛さんだ。

本来、お妙さんの仕事は朝日が出る頃に終わる事が多いのだが今日はお客である住人が辻斬りの横行を恐れ、夜間に外出する住人が激減し店の客も大幅に減少、客が来なくては仕事にならないと店長が早々と店を閉めた事が原因で二人はこんな時間に街をうろついているのである。

それに加えてお妙さんがボディガードとして連れて来た九兵衛さんと一緒に店に働きにきていた娘達を家まで送り届けてあげていたのだ、仕方ないっちゃあ仕方ない。

蛇足として付け加えさせてもらうとお妙さんのボディガードに一匹のゴリラが、九兵衛さんのボディガードに一人の糸目の男が志願したそうなのだがゴリラはお妙さんに、糸目の男は九兵衛さんに殴

り飛ばされたらしい。

「店のお客さんも一人か二人だけだったし、しばらく店も休みになりそうね。早く誰かなんとかしてくれないかしら……」

「安心してくれ、妙ちゃん。僕がなんとかしてあげるよ」

そんな仲良しな彼女達に少しずつ接近する編み笠の男。

お妙さんと九兵衛さんは男に気付いていないのか、特に変わらぬ様子で会話しながら歩き続ける。

自分の攻撃範囲内に彼女達が入ったのを見て、編み笠の男は即座に刀を鞘から抜き放った。

眼にも留まらぬ超高速の凶刃が二人に襲い掛かる。

二人も血に染まり地に伏すのかと思いきや

ギィーン!!!!!! と言う甲高い金属音と共に編み笠の男が振るう刀が止まってしまった。

九兵衛さんが編み笠の男に負けないくらい速く腰に差していた刀を抜き、それで編み笠の男の刀を受け止めていたからだ。

編み笠の男がお妙さん達に斬りかかり、九兵衛さんがその攻撃を受け止めるまでの間は一秒以下。

瞬きをしていたら何が起こったのか分からないくらい一瞬の出来事だった。

拮抗する力が逃げ場所を求め、二人の刀をガチガチと振るわせる。「……ほう、俺の居合いを見切るとは。それなりにできる奴のようだな」

刀に力を込めつつ、自分の攻撃を止められた事に驚きながらも自分の初撃を見切り受け止めた相手を素直に褒める編み笠の男。

深く被った編み笠に隠れてどんな表情なのかは依然として謎だが声色と編み笠で隠し切れない口元が緩くなっている辺り、編み笠の男はどうやら嬉しそうだ。

「きゅ、九ちゃん……!!」

九兵衛さんの後ろでお妙さんが心配そうに目の前で自分を護る者の名を呼ぶ。

「貴様が噂の辻斬りか……。妙ちゃん、ここは僕に任せて助けを呼んで来てくれ！」

編み笠の男を睨み、こちらも刀に込めた力を一切緩めずに助けを呼ぶようお妙さんに頼む九兵衛さん。

お妙さんは大事な友人をこの場に残す事に心を痛めながら、無言で首を縦に振って頷いてから助けを求めに走って行った。

一方、この場に残った二人はこのままの体勢で刀に力を入れ続けていては悪戯に体力を浪費するだけと察し一旦間合いを空けて相手との距離を置く。

「女を逃がし犠牲になるつもりか？」

「僕は犠牲になるつもりなど毛頭無い。ここで貴様を……斬る！！」
九兵衛さんは編み笠の男の行動を常に警戒し刀を相手に向けながら明確な殺意を向ける。

「そうなると良いな。だが一言、物申させて頂く。貴様ではない」
男はフツと鼻で笑ってからそう言うと言った編み笠がふわりと天高く舞い上がり、ゆらゆらと風に揺られながらパサリと地面に落ちた。

紺色の短髪が、左目と鼻を横切る大きな傷が、赤黒い眼が、イケメンの部類に入るであろう綺麗に整った顔が、月明かりに照らされる。

「桜田 千兵衛だ」

「己の名を告げる男、千兵衛。」

「其方そなたの名は？」

「柳生 九兵衛だ」

「ほう。江戸屈指の名門、柳生家の次期当主にして『神速の剣の使い手』と謳われるあの……。道理で俺の剣を見切れる訳だ」

「随分と詳しいんだな」

「いろんなところを巡ったからな、俺の耳にはいろんな噂が集まってくるのだ。」

真選組内部で起きた動乱、吉原を統べた夜王鳳仙の死去。

他にもいろいろと耳を疑うような噂もあったが、俺が一番驚いたのは俺の初撃を見切り受け止めめるほどの実力を持つ其方が女である事……かな？」

「……僕を馬鹿にするつもりか？」

「いやいや、これでも褒めているつもりさ。」

女の身でありながら並の剣客では到底適わんであるうその実力、身に付けるのに相当苦労しただろう？」

千兵衛は刀を下に向けまるでリラックスしたような体位で九兵衛さんと言葉を交わす。

九兵衛さんは目の前の敵とは打って変わって依然として構えを一切解かず警戒心を維持したままだ。

ここで九兵衛さんが斬りかかれば簡単に斬られるのではないか、そう思えるほど千兵衛は無防備だった。

だが、それをすれば自分は目の前の男と同じになってしまう。故に九兵衛さんは手を出せなかった。

「……何を企んでいる？」

「別に、何も企んでなどいないさ」

……この男、得体が知れない。

いきなり斬りかかってきたかと思えば急に親しげに話しかけてきて、しかもその上、僕が女である事まで見抜くとは。

辻斬りなんて非道な事をする輩は大抵、人を人とも思っていない外道の筈。

なにごうして面と向かい合っても全く彼の意図が読めない。

「さて、そろそろ殺り合おうじゃないか。俺は口でもものを言うのはあまり好きじゃないんだ」

急に眼の色を変えて千兵衛がそのように告げるとつい先程まで殺意どころか敵意すら感じなかった男から凄まじい殺気が解き放たれた。

恐ろしい殺意が体に突き刺さり、九兵衛さんの額に汗が浮かぶ。

「なら、何故さっきまでペラペラ喋っていた？」

「いや、何。久々に楽しくなりそうだったからつい、な」
千兵衛が言葉を言い終えらるとしばらく二人は黙って相手を見つめる。

男の表情には余裕があるのに対し、相手の実力、考えがまったく分からない為か九兵衛さんの表情には余裕が無さそうだった。

誰かが合図した訳でも無いのに二人は同時に刀を振るい、二本の刀が交差する。

忍び寄る狂気（後書き）

はい、白黒仮面です。

先日のギャグ中心のお話とは打って変わってまたシリアス。今までの作品を読んでくださった読者ならご存知のあの男とあの刀です。

若干の設定変更がありますが、それはまあ読んでからのお楽しみっつー事で。

最近、暑いし蝉うるさいしで執筆が進まない。

こう言うのって一度つつかえるとなかなか進まないんですよ。なんとか頑張るんでこれからも応援よろしくお願いします！

大人の戦場（前書き）

「ちよこつと銀八先生！」

銀八先生「百鬼丸さんからの質問。

「もしも神楽とお妙に「二ヶ月間、暴力と暴言と暴走と、気に入らない事を物や相手に、八つ当たりをするのがマンしなさい」と命令して、2人がそれをガマンしたらどうなりますか？」

ズバリお答えしましょう。二ヶ月も我慢するのは無理だと思いません。っつーか命令した時点で八つ当たりするので無理です。

そう言う訳で百鬼丸さん、登下校の際は後ろに気を付けなさい」

大人の戦場

九兵衛さんが編み笠の男、桜田 千兵衛と戦っている頃。

お妙さんはハアハアと息を切らしながら走り辛い草履で地面を蹴つて必死に走っていた。

まずは新ちゃんにこの事を報せないと。それから銀さんや神楽ちゃんにも。

待ってて……九ちゃん。

こつ言つ時は信頼できる友人達の姿を脳裏に思い浮かべ、女は走る。

「あれ、早い帰りでしたね姉上」

我が家である恒道館道場に到着すると入り口の近くに自分の弟の姿があった。

いくら姉や九兵衛さんが強いとは言っても何が起こるか分からない。一応二人を心配して門の近くで待機していたのだろう。

普段は地味だがそれでもいざと言つ時はある程度頼りになる弟の姿を見て少しだけ安心したが今はそれどころではない。

「新……ちゃん……」

すぐに辻斬りの事を弟に伝えたかったのだが走って帰って来た為息が切れて上手く伝えられない。

「どうしたんですか、そんなに息切らして。それより九兵衛さんはどうしたんですか？」

新八も姉の異変が気になったようでお妙さんに問う。

姉上がこんなな息を切らすほど走るなんて、よっぽどの事があったんじゃない……。つてまさか！

「ひよ、ひよつとして、辻斬りに会ったんですか！？」

さつきはただ気になった事を普通に口にしただけであったが、姉を襲った脅威になり得るものを少し考えて思い付いたもの言つて

みると

「そ、そうなの！ 九ちゃんのおかげで私は逃げて来られたけど、九ちゃんがまだ……」

乱れた呼吸を少しずつ落ち着かせながらお妙さんは状況を告げる。「分かりました、姉上！！ じゃあ僕はすぐに九兵衛さんのところに行きますから、姉上は銀さん達に連絡して下さい！！ 辻斬りは何処に居たんですか？」

自分なんか九兵衛さんの力になれるかどうかは分からないけど、姉上の、僕達の大事な友人を放つては置けない！

新八がそう言うと

「新八殿、拙者達も行くでござる」

さっきの新八の大声が聞いていたか、青の宇宙人がそう言って赤の宇宙人と一緒に志村姉弟の下に歩み寄ってきた。

「ドロロさん、ギロロさん！ で、でも……」

ドロロとギロロは別の世界の住人で辻斬りはこの世界での問題と
言う事で二人には全く関係の無い。

そんな問題にこの二人を、いやケロロ達を関与させる訳にはいかない。

何より、この子達に流血沙汰などとても似合わない。新八が反論しようとして口を開くのだが

「今は一刻を争う事態だ、言い争う暇など無い。そうだろうか？」

ギロロが至極まともな意見を口にしながらお妙さんの心配そうな顔を見るので、新八は言い返せず黙り込んでしまった。

「それに、兵は多い方が良いだろうしな」

「やれやれ……。あ、拙者達はそう言う事は慣れてる故御氣に為さらず」

素直に新八殿の事が心配だと言えば良いのに。ギロロの真意を理解していたドロロが苦笑する。

こう言う馬鹿には何を言っても無駄だ。赤と青の宇宙人達の雰囲気は何処か銀さん達に似ているような感覚がした新八はハアと溜め

息を吐いて

「……分かりました。もう勝手にしてください」
と呆れながら呟いた。

「ドロロ！」

「小雪殿」

いざ出発！　と言う時に小雪がドロロを呼び止め

「私も行く！　九兵衛さんを放つては置けないよ！」

何処で聞いていたのかは知らないが自分も一緒に行くと言い出した。

「小雪殿はここに残るでござる」

ドロロがここに居ると告げるが小雪は「でも！」と食い下がる。

「ここから先は戦場、小雪殿では足手纏いにしかならんでござる」

いくら忍で脅威的な身体能力を持っているとは言えども小雪は齡十五にも満たない女の子。そんな彼女を巻き込みたくない。今はまだ血で汚れて欲しくない。

その一心でドロロが小雪の気持ちを拒むと

「悪いが、何があっても貴様は行かせる訳にはいかん。行くと言うのならただでは済まさんぞ」

冗談ではなく本気だ、とギロロが小雪の背後でビームライフルを武器に脅し警告した。

「ドロロ、先に行け。お前ならすぐに九兵衛と合流できるだろ」

「……かたじけない」

ギロロの指示を聞いたドロロはギロロに感謝の言葉を残して疾風の如く素早さでその場から立ち去る。

「それで脅したつもり？」

「そのつもりだが？」

小雪の脅威的な身体能力ならばビームライフルの弾の軌道から外れる事など容易なのだろうが、ビームライフルを構え小雪を脅す相手は一流のソルジャーであるギロロだ。

少しでも小雪が妙な動きを見せればすぐさまビームライフルの引

き金を引かれるのが眼に見えていた。

「ちよ、ちよつと、ギロ口さん！！」

ギロ口の気持ちは分からなくもないがそれは流石にやり過ぎじゃないのか。こんな事をしている暇は無いんじゃないのか。新八は横から口を挟む。

「ギロ口さん」

そこに先程まで彼等の口論を心配そうに見守っていたお妙さんもハアと溜め息を吐いてから口を挟んだ。

「何だ？」

ギロ口は小雪から眼を離さずにお妙さんに用件を尋ねる。

「早く行け」

「……は？」

お妙さんの少しだけドスの利いた声を聞き新八や小雪、さらには小雪から眼を離してはいけないギロ口までお妙さんに視線を移した。「良いから早く九ちゃんのとこ行行って言っただよ。

言い争う暇は無いって言ったのはためーだろーが、何時までもこんなところでちんたらちんたらやってんじゃねーよ。

九ちゃんの身に何かあつたら責任取れるんだろーなア、ためー等？」

お妙さんが指をパキパキと鳴らして宛ら悪魔のような迫力満点の顔で見下しながらドスの利いた声でギロ口を脅迫する。

お妙さんのあまりの怖さと意外な行動に眼を点にする新八、小雪、ギロ口。

このお妙さんに逆らつたら辻斬りを相手にするよりも恐ろしい事になりそうだったので、ギロ口と新八は辻斬りの居場所をお妙さんから聞き出すと恐怖で顔を引き攣らせたまま逃げるようにその場から立ち去った。

あれで辻斬りもどうにかならなかったのか、そう心の中でこっそり呟きながら。

「お、お妙さん……」

邪魔者を追い払えた事に対する感謝の念より遙かに勝る恐怖に思わず小雪がポツリと呟く。

「小雪ちゃんが行っちゃダメよ。ギロ口さんとあの……青い子の気持ちを無駄にするつもり？」

貴方の気持ちは嬉しいけど、この世界で小雪ちゃんが戦うにはやっぱりまだ早過ぎるわ。今は我慢してね」

小雪の肩にポンと優しく手を置いて、凜とした声色で説得するお妙さん。

一番九兵衛さんの事を、新八さんの事を心配している筈なのに、一番苦しい筈なのに、さつきまでの顔が嘘みたいなその魂の強さと気高さを表すような素敵な笑顔で。

その笑顔で言われちゃあ何も言い返せない。

小雪は己の弱さを強く恨み、きゅっと固く拳を握り締め

「……青い子じゃなくてドロ口です」

一言注意する。

「そっかわ。小雪ちゃん、ちょっと頼まれてくれないかしら？」

「な、何をですか？」

「この事を銀さん達に報せてきて欲しいの。できるかしら？」

「……お、お安い御用です！」

「報せたら真っ直ぐに帰って来て頂戴ね」

「はいっ！」

……私もまだまだ修行が足りないなあ。お妙さんの姿に感銘を受けつつ小雪は夜の街を飛び回る。

一方、お妙さんから逃げ出したギロ口と新八。

「毎回思うが本当メチャクチャな姉だな……。苦労しないか？」

ギロ口はさつきのお妙さんの、鬼でも逃げ出すような凄まじい表情を思い返しながら呟く。

「……本当、メチャメチャ苦労しますよ。

そりゃ作れる料理と言えば暗黒物質ダークマターだけですよ。

美人なのにストーカーを拳で撃退しちゃう、おしとやかさなんて欠片も持ち合わせてないゴリラですよ。

銀さん達みたいに時々変な事言っただけの姉ですよ。

いつも笑顔で何でも背負い込むような馬鹿野郎ですよ。

実の弟が死地に出向くと言っつのに脅して送り出すような人ですよ。でも……そんな姉上だからこそ、僕は好きなんです。そんな姉上

だからこそ、九兵衛さんは必死になって護ったんです」

新八が真剣な表情で愚痴りながら姉の事を語る。

「……やはり、この世界に住む連中は面白いな」

土方と言い、銀時と言い、この者の姉と言い、この世界に住む連中はどうしてこんなにも魅力的なのだろう。

新八の言葉を聞いて笑みを浮かべながら感心するギロ口。

「なら一刻も早くそんな姉を護ってくれた九兵衛のところに行かねばならんな」

「……はい！」

赤い宇宙人と一人の若い侍は九兵衛さんと辻斬りの下に急ぐ。

少しだけ時を遡り、千兵衛と対峙する九兵衛さんは激しい剣戟を繰り広げていた。

夜の闇を切り裂く銀色の刃は幾重にも交差し、断続的に鳴り続ける金属音は邪魔をするなど言っているようだ。

現に近隣の住民は誰一人として近所迷惑だ、なんて言わずにじつと身を潜めている。

鳴り止む事の無かった金属音がピタと止まり、また二人は一旦距離を置く。

強い……！！……これほどとは……！！

自慢じゃないが僕もかなり強い方だ。それこそ、この男が言ったように女の身でありながら柳生家次期当主、『神速の剣の使い手』と謳われるくらいである。

そんな僕と対等に渡り合える力を持つ千兵衛と言う男、やはりただ者じゃないな……。

……だが、これほどの実力を持ち、戦う相手の事を素直に認められるような器を持つこの男が何故辻斬りを……？

九兵衛さんが警戒しながら千兵衛の事で思考に浸っていると「流石は柳生家次期当主。だが……ここから先はどうかな？」

どうやら今まで本気ではなかったらしい千兵衛が呟く。

と同時に、漆黒の刀から何かが溢れ出し、カタカタと震え出した。決して千兵衛が震えているから刀まで震えているように見えてい
るのではない。

文字通り、刀がまるで本当に生きていくかのように震え、膨大な殺意が、桁外れな禍々しい力が、眼には見えないが確かに刀から溢れ出しているのだ。

な、何だあれは！？

予想だにしない事態に眼を見開き、気を引き締め直す九兵衛さん。しかし、九兵衛さんが気を引き締め直した次の瞬間には千兵衛の姿が眼前にまで迫っていた。

千兵衛の刀の薙ぐ攻撃が九兵衛さんを襲う。九兵衛さんは咄嗟に刀を盾にしたが、同じ鉄でできたものなのかと疑いたくなるほど呆気無く刀の刀身が折られてしまった。

折られた刀身がくるくると回転しながら空に上がる。

斬られる……！！

即座にそう判断できた九兵衛さんはそれを阻止すべくぐるりと体を回転させて千兵衛の横つ腹を一蹴し悪足掻きする。

体の回転による遠心力と普段の稽古で身に付けた強靱な筋力による蹴りは凄まじく重かったようで千兵衛はよろめいた。

頼みの綱である刀は容易く押し折られ、丸腰の自分にこの男を止

められる手立ては無い。ここは逃げるが勝ちだ。

九兵衛さんは千兵衛に背を向け逃げ出した。だが、刀の未知なる力で強化された千兵衛を前に逃げ切る事は容易じゃなかった。

千兵衛が猛スピードで接近する。千兵衛の接近に気付き振り返る九兵衛さん。

決死の抵抗も空しく、背中を斜めに切り裂かれ鮮血が宙に舞った。前のめりになり、そのまま地面に倒れる。千兵衛の顔に、彼が持つ真っ黒な刀身に返り血が付く。

折れた後空を飛んでいた九兵衛さんの刀の刀身が地面に突き刺さる。

「くっ、うっっ……!!」

「傷が浅かったか……。すまん、一撃で殺せず苦しい想いをさせて」

背中を切り裂かれた激痛に女性として非常に整った顔を歪ませながら、それでもなお逃げようとする九兵衛さんに千兵衛がトドメを刺しに近づく。

「すぐに楽にしてやる」

大量の失血と痛みにより霞む視界に映る、自分に向けて刀を振り上げる男の姿。

もうダメだと命を諦め眼を瞑り心の中でお妙さんに対し何度も何度も謝罪する九兵衛さん。

そして男が刀を振り下ろそうとしたその時、何処からか飛んで来たクナイが刀を握っていた千兵衛の右腕に命中。クナイは男の右腕に数本突き刺さり、クナイが刺さった部分から血が噴出す。

刀を握る力が緩んだのか、千兵衛の刀が手から滑り落ち刀はそのまま重力に従って真下に落ちて地面に突き刺さった。

「九兵衛殿オオオオオ!!!!」

あの子は確か妙ちゃんのところ泊まっている異世界の……。

誰かの声を耳にし目を開く。そこには青い体の小さな宇宙人が夜の空を翔る姿が映った。

クナイ、と言う事は忍の手の者が……。姿は眼に見えんが確かに居るな……。

一方、姿の見えない敵に攻撃された千兵衛はその邪魔者をどうにかしようと腰に差したままの刀の鞘を引き抜き、微かな気配を頼りにそれを振るった。

「ぐっ……！！」

ドロ口の小さな体に千兵衛が振るった鞘がクリティカルヒットし、小さな体が軽く打ち上げられるがドロ口はすぐに体を捻ってすたと無事に着地を決める。

「当たったような感触はしたんだが、姿が見えんからイマイチよく分からんな……。どうだ、当たったか？」

地面に落ちた刀を拾って鞘を腰に差し直し、姿の見えない相手に一言確認する千兵衛。

傍から見れば痛い人なのだろうが、実際に相手が居るだけにこれは凄い人と言うべきだろう。

アンチバリアに加えて気配もしっかり消していた筈……。それを見破り拙者に一撃を加えるとはこの男……。化け物でござるか！？

男、千兵衛の実力を恐れるドロ口。
そこに淡い桃色の光線が数発飛んで来る。ギロクのビームライフだ。

「九兵衛さんから離れるオオ！！！！」

さっきのギロクの銃撃をさっと避けた千兵衛に腰に差した刀を抜き構えながら新八が叫ぶ。

「居たぞ、こつちだ！！」

さらにそこに通報を受けた真選組の隊士達も数名到着。

「ぞろぞろ、ぞろぞろと……」

眼に見えない不思議な輩も居るみたいだし、全員相手にするのは流石に骨が折れるな……。

「ここは引くでしょう。じゃあな」

千兵衛は不利と察するや否や軽やかな動きであつと言う間に屋根

の上に昇り屋根の上を伝ってその場から立ち去った。

「ま、待てっ！！！！！」

「追うぞ！！！！！」

真選組の隊士達は全員一丸となって逃げた辻斬りを追う。

脅威が去ったと知り安心して気が抜けたのか、九兵衛さんが意識を手放す。

「九兵衛さん！！ しっかりしてください、九兵衛さん！！！！！」

親愛なる友人の弟の声を耳にしつつ、体に不気味な紋様を浮かび上がらせながら。

大人の戦場（後書き）

ども、白黒仮面です。

最近遊び呆けてたのもあって執筆速度が著しく低下中。

このバカチンが！！これから頑張って速度を上げましゅ。

夏休みに入っただいぶ経った頃だと思いますが、如何お過ごしでしょうか？

終わってない人がほとんどだと思いますけど宿題はちゃんとやりますか？

これ読んだらちゃんとするんだよ。

っつー訳でやつぱり斬られちゃった九兵衛さん。

これから銀さん達はどう行動する！？

リメイク前とはちょっとぴり違う辻斬り千兵衛編、お楽しみに！

夜が明けて

ケロ口達が『銀魂』の世界に来て十一日目。九兵衛さんが斬られた翌日の恒道館道場。

九兵衛さんが眠る一室にて。

「どうですか、クルルさん？」

九兵衛さんの体の異変を分析するクルルにお妙さんが質問すると「傷はあのガキの力で癒えたから問題無いとして、体温が四十三度つーのはどう考えても異常だな。それに、体に浮かび上がっている模様と言い、こんな症状見た事ねーぞ」

九兵衛さんの片腕にいくつか取り付けた丸いシールから細長いコードを経由してパソコンのディスプレイに映った情報をクルルが述べる。「そうですか……」と残念そうに呟く。

九兵衛さんの全身には炎みたいなの紫色の不気味な模様が浮かび上がっていて、高熱にうなされているのか苦しそうに悶えている。

「すみません、お妙さん！！俺達真選組が街を警備していながら、こんな事になってしまつて……」

頭を深く下げて謝るのは昨日の一件を聞き付け飛んで来た真選組局長、近藤 勲。

「良いんです。九ちゃんのおかげで私も助かりましたし、九ちゃんも背中を斬られただけでちゃんと生きて帰つて来てくれたし……」

近藤さんの謝罪にお妙さんは友人が昨晚深手を負つたにも拘らず毅然とした態度で応対する。

「俺がずっと傍に居てやれば良かったんですが……」

「それは遠慮させて頂きます」

近藤さんの言葉がどうも冗談に感じなかったお妙さんは即座に拒否する。

「そつでもしないと実際にこのゴリラはずっと傍に居そうだと怖かったのだ。勿体無い男である。」

「若アアアア！！！！ 私に傍に居ればこんな事には……。東条歩、一生の不覚！！ こうなったら、腹を切ってお詫び申し上げます！！！！！！」

「東条さん、九ちゃんの傷に響きます。出て行ってください」

糸目の男、九兵衛さんが幼少の頃より護衛と御世話を仰せつかった東条 歩が九兵衛さんが眠る傍で大声でわめくのでお妙さんは外に追い出そうとする。

出て行け！？ 静かにしろではなく！？

良いから早く出て行けって言うてんだろーが。てめーの耳は節穴かコラア？ そのゴリラもだ！

え、ええええ！？ お、俺も！？

当たり前だろーが！！！！ いつまでもここに居られると思ったら大間違いだぞー！！

こんな感じでやかましい一室の隣には小雪から事情を聞き万事屋から飛んで来てそのまま一泊した銀さんと神楽に、冬樹、夏美、桃華、小雪、モア、ケロロ、タママ、ギロロ、ドロロが集合していた。……まさか九ちゃんが斬られるなんて……」

神楽が心配そうに呟く。

柳生 九兵衛は知る人ぞ知る剣豪、そんじゃそこらに居るゴロツキじゃあ束になってかかっても勝てやしない。

銀さん達は考えの相違から一度対峙した事もあった為、彼女の腕前は重々承知していた。そんな彼女が斬られたのである。

「昨夜、拙者が駆けつけた時にはすでに……。本当に申し訳無いでござる」

ドロロが申し訳無さそうに告げると

「……九兵衛さん、大丈夫かしら……」

「きつと大丈夫ですよ」

「お妙さんもずっと寝ないで看病してるし……」

「僕達にも何かできる事があれば良いんだけど……」

ドロ口、夏美、桃華、小雪、冬樹の順に今の心境を語る。

九兵衛さんとはほんの数回会っただけの間柄だが、だからと言って何とも思わないほど彼等は人でなしではない。

むしろ、ほぼ毎日この家で顔を突き合わせて笑ってくれたお妙さんの、あんなにも辛そうな顔は見えていられない。そう想うようなお人好しの集まりだ。

「ZZZ……ZZZ……」

皆が皆、浮かない顔して九兵衛さんの身を案ずる中、縁側で横になつて気持ち良さそうにぐーぐーと眠る馬鹿が一人居た。坂田 銀時である。

「……………」

寝てる場合じゃないだろ、とケロ口達は全員呆れたような表情で銀髪の男の背中を見つめる。

すると九兵衛さんが眠る部屋とこの部屋を仕切る襖がスーツと開き、九兵衛さんの具合の観察とカオスの水晶の力を分析していたクルルがカオスを連れてケロ口達と合流する。

「おっ、クルル曹長！ 何か分かったんでありますか！？」

「いや、ただやかましいからこつちに來ただけだ」

「ああ、ナルホド……」

ケロ口の問いにクルルがそう答えるとその場に居た全員、納得した様子で襖に眼をやり、その奥から聞こえてくる声から中の様子を想像する。

いや、だから今度こそお妙さんのボディガードに……。

いや私をボディガードにしてください！ 若が護ろうとしたものを、私もお護りします！

九ちゃんの傷に響くって言うてんだろーが！！ さっさとここから出て行かねーとこの世から追い出すぞ！！！！

ちよ、それ薙刀！！ 危ない、マジでそれ危ないって！！！！

若も寝苦しそうですぞ！！

オメー等が原因だ！！！！

ええええええええ！？

病人が居ると言うのにドタバタドタバタ。九兵衛さんの傷に響くとか言いながらお妙さんが一番暴れてるじゃん……。

「ま、分かった事もあるにはあるがな……」

隣の部屋の様子に呆れる一行がクルルの言葉を耳にした途端、眼の色を変えた。

「ど、どんな事が分かったの！？」

冬樹が慌ててクルルに尋ねる。

何時の間にか隣の部屋からそのまま外に出たお妙さん、近藤さん、東条さんの耳にもその冬樹の声が届き、それが気になってこっそり彼等が居る部屋を覗く。

「どう言うカラクリかはまだ謎だが……眼帯の体に浮かび上がったあの妙な模様、あれが眼帯に高熱と激痛を与えているんだ」

「どうにかできないんですか？」

「原因がよく分からない以上、俺達の持っている技術じゃ治せねエ。あのガキの水晶の力も試してはみたが、一時的に症状を抑えるだけで完全に治療するのは無理だった。たぶん他の方法でも無理だろうな」

クルルは説明する事で冬樹、桃華の疑問を解決させる。

「カオス君の水晶の力でもできない事があるんですね……」

クルルの説明を聞いて新八が感慨深そうに呟いていると

「……辻斬りの噂は本当だったようだな」

これ以上彼等に隠す意味は無いと感じ、ギロロが眼を閉じて腕組みをしながら辻斬りの噂について口にする。

「噂？」

「何アルか、噂って？」

ケロロと神楽がギロロが口にしたワードが気になり質問する。

「真選組の副長から聞いた情報なんだが……」

ギロロは語る。

曰く、辻斬りが持つ刀身が真っ黒な刀には恐ろしい力が備わって

いると。

曰く、その刀に斬られた相手は体に妙な模様が浮かび上がり、次の満月の夜に命が吸われると。

「何イイイイ!!! そんな話は初耳だぞ!?!」

「貴様の部下から聞いた話だぞ。いったい何をやっとするんだ貴様は?」

「四六時中、お妙さんの警護を……」

「仕事をしろ、仕事を!」

ギロロの話をこっそり聞いていた近藤さんが急に大声でわめき出すのでギロロは呆れながらも不機嫌そうにツツコミを入れた。

「九兵衛殿の体に現れた不気味な紋様はまさしく噂通り……ならばそんな馬鹿とは違い落ち着いた様子でドロロが予想を口にするにああ。このままだと次の満月の夜には……」

ギロロもドロロと同じように落ち着いた様子で最悪のケースを言いかげ口籠もる。

「次の満月は何時だ?」

「たぶん明日です」

「……そうか」

ギロロが次の満月が何時なのか新人に確認する。このままでは明日の夜には九兵衛さんが死んでしまうだろう。

せっかくの知り合いが明日の夜には居なくなっちゃうんじゃないかと冬樹達が心配して表情を曇らせていると

「そうはさせないアル!!」

彼等を、そして自分を励まそうとぐつと拳を固く握り締めて神楽が言う。

「で、でも、治す方法とか分からないんですよ!?!」

「そんなん辻斬りとやらに会って聞き出すネ」

「き、危険です!?!」

九兵衛さんが負けた辻斬りだ、九兵衛さんがどれくらい強いのかよく分からないがそれでもかなり強い筈。

そんな相手に、こんな可愛らしい女の子が相手になるとは到底思えない。

桃華やモアが必死になって神楽を止めようとするが

「大丈夫ネ、こっちには銀ちゃんがいるアル！」

神楽は自信の源である銀さんが居る縁側に視線を移す。

「その銀時さん、居ませんけど」

がしかし、タママの言葉通りそこには銀さんの姿は無かった。

さっきまで寝てた筈なのに、何時の間に……。

忍であるドロロや小雪さえも何時居なくなっていたのか分からなかったように首を傾げていた。

その頃のかぶき町某所。

「よっ」

銀さんは熱せられて真っ赤になった鉄を一心不乱に金槌で打つ、青い髪の女性に声を掛ける。

「銀さん！ どうしたんだ、こんな時に」

銀さんに声を掛けられた女性は銀さんの顔を見ると嬉しそうな表情になった。

この女性は銀さんの知り合いで刀鍛冶を営んでいる村田^{むらた} 鉄子^{てつこ}さんです。

「こんな時だからこそ来たんじゃないか」

「それもそうだな。で、用件は？」

銀さんの言葉に笑ってから、真剣な表情で銀さんの用件を伺う。

「 刀身が真っ黒で、斬った相手を呪う妖刀……か。ゴメン、銀さん。私もそんな妖刀、聞いた事が無い」

「そうか……」

申し訳無さそうな鉄子さんの言葉を聞き、残念そうに銀さんが呟

くと

「とは言え、それだけ強力な妖刀だ。調べれば何か分かるかもしれない。刀の調査の方は私に任せてくれないか？」

「じゃあ頼まア」

少し調べる時間をくれと鉄子さんが告げるので銀さんは彼女に刀の調査を一任する事にした。

「あ、それから……」

何かを思い出すように鉄子さんがそう言うと鞘に収まったままの一本の刀を銀さんに放り投げる。

銀さんは反射的にその刀を片手で受け取った。

「それ、使ってくれ。必要だろう？」

まるでこれから銀さんが戦う事を知っているかのように口元を緩めながら鉄子さんは告げる。

「……金ならねーぞ」

「構わないさ」

それぞれ最後に短い言葉を口にして銀さんは受け取った刀を腰に差してその刀鍛冶の店から出て行った。

「何処ほつつき歩いているんですか、銀さん」

刀鍛冶の店から出てからすぐに銀さんと呼ぶ聞き慣れた声が聞こえてきたので銀さんは立ち止まり「何処だつて良いだろ」と返すと「てめー等、今日は早めに寝とけ。特に神楽、夜更かしは美容の大敵とか言っても寝かさねーぞ。」

今日は夜遊びすつからな、それもド派手によ」

後ろに居た二人にそう告げる。

後ろに居た二人……新八と神楽はその言葉の意味を理解し嬉しうな、それでいて凜とした表情で首を縦に振って頷いた。

一旦恒道館道場に帰った万事屋トリオ。

「あ、銀さん!!」

「銀時殿!! いったい何処行つてたんでありますか!? いきなり居なくなつたから心配したんでありますよ!」

帰つて来た銀さんを見て冬樹とケロロが銀さんに声を掛ける。

つい先日、九兵衛さんが斬られただけあつてみんながみんな心配そつだつた。ギロロだけは違つたようだが。

『銀さん。……子ども達の事、お願いしますね』

銀さんはふと秋さんの依頼を思い出す。

「ここで死んだらアンタの依頼、途中放棄になつちまうがそれ以前に……言われなくても分かつてらア」

銀さんは小さい声でそう呟くと腰に差していた木刀を引き抜き、ケロロにそれを渡した。

「あの、何これ? まさかこれ使つて我輩に戦えと……?」

「んな事頼まねーよ。っつーか期待すらしねーし」

「な、何ですと!?!」

ケロロのボケに辛辣な言葉でツッコむと

「そいつを、自慢の愛刀『洞爺湖』をちよつと預かつてもらおうと思つただけさ」

銀さんはなんで木刀を渡したのか、その理由を告げる。

「な、なんで?」

何故そんな事をするのか、銀さんの行動と言葉に首を傾げる『ケ

ロロ軍曹』メンバー。

「今回はそいつ使えなさそうだからな。だから、オメー等に預ける。やるんじゃねーぞ、預けるんだからな? 必ず返してもらつ」

「で、でも、銀さん……」

銀さんの言葉を聞き、もし銀さんが辻斬りの被害にあつて死んじやつたりしたらどうするのかと冬樹が反論しようとしたが銀さんが彼の頭にボンと手を乗せて

「安心しな。侍はできねー約束はしねーんだ」

と口元に笑みを浮かべながら言った。

その笑みは見ているだけで不思議と安心し、その言葉は何故か信頼できた。

なんでそう思ったのか、根拠なんてものは何も無い。だがしかし、確かにそう感じさせるものが銀さんにはあった。

「……うん!!」

「了解であります!!」

銀さんを信じてみよう、と冬樹達は素直に返事しケロロ等はビシツと敬礼する。

「っつー訳だ。てめー等はこれ以上この件に首突っ込むんじゃねーぞ」

「それは助かる。こちらとしてもこの世界の厄介事に、深入りするつもりは無かったからな」

銀さんの忠告にギロロが賛成する。

まるで九兵衛さんやお妙さんの事を心配してないような口振りについカチンと来た夏美が何か言おうとする前に

「……だが生憎、ついさっきドロロが辻斬りの監視に向かってしまったし、九兵衛の治療にはカオスの水晶の力を使ったんだ。

不本意だがここまで来たらとことん首を突っ込まさせてもらう。

とは言っても、戦闘はお前達に任せるがな」

ギロロは今後も九兵衛さんやお妙さんの為に辻斬り騒動に關与する姿勢を見せたので夏美は黙り込んでしまった。

「……素直じゃねーな」

銀さんはギロロの態度を見て前々から思っていた事を呟いた。

夜が明けて（後書き）

どーもー、白黒仮面です。

更新、遅れて本当に申し訳ありませんでした。

ちよーっと盆に母方の故郷に行つて遊んで思う存分リフレッシュした後、調子が戻らなくてすっかり更新が遅れてしまいました……。調子が戻るまでは更新が遅くなるかもしれませんが、あしからず。

俺の近況はこんな感じですが、皆さんはどうですか？

夏の暑さにひーひー言ってる人、宿題が終わってなくてひーひー言ってる人、様々だと思いますが頑張ってください。作者の俺もいろいろ頑張りますから。

今後もケロ銀をよろしくお願いします！

辻斬りの刀

その日の夜更け。

「ドロロが帰って来んからな、この女に辻斬りの居場所を探ってもらう」

ドロロが辻斬りの監視に行ったつきり帰って来ないので小雪に辻斬りの居場所を探ってもらう事にしたギロロ。もはや緑の隊長そっちのけである。

「え、ユツキー、辻斬りが居る場所が分かるアルか!？」

「まあだいたいは……」

「それだけでも充分だ」

今の銀さん達には辻斬りの居場所が分かる術など存在しないので小雪やドロロの悪意を察知する能力は今の銀さん達には非常に有用なのだ。

「じゃ、ちよつくら行ってくつか」

一方その頃。

ドサツと男が血塗れで地面に倒れる。倒れた男を無表情で見つめるのは辻斬り、桜田 千兵衛。

昨日と同じように深く編み笠を被ったまま、千兵衛は血の付いた刀を鞘に納めてまたぶらりと街を行く。

昨日戦った九兵衛と言う女と言い、姿の見えない奴と言い、この街は面白い。この街になら……。

千兵衛が少しだけ哀しそうな、それでいて決意に満ちた眼でそんな事を考えていると敵意を感じさつとその場から離れる。

刹那、何処かから銃弾のようなものが何発も先程千兵衛が居た場所に飛んで来た。

「こんな時間に何やってんだ、兄ちゃん？」

間髪を容れずに千兵衛の耳に聞こえてくる男の声。それと同時に夜の闇から銀髪天然パーマの男と赤いチャイナ服の可愛い女の子と何処かで見た眼鏡の青年が姿を現した。

「そこに居る眼鏡のお前は昨日の……」

見覚えのある顔を見て編み笠を外す千兵衛。

「よくも九兵衛さんを……！！」

「……ふん、一人では勝てぬと見て援軍を呼んだか。こんな可愛い女の子まで巻き込むとは……」

千兵衛が面識のある新八を鼻で笑いながら刺激するような言葉を吐くとその挑発に乗った新八が斬りかかるうと身構える。

だが、新八が攻撃するまでには至らなかった。

何故ならそれよりも先に銀さんが千兵衛に接近し昼間に鉄子さんからもらった刀で千兵衛を薙ぎ払おうとしたのだから。その攻撃を千兵衛は難無く刀で受け止めた。

「……コイツを馬鹿にするつもりか？」

大切な友人である九兵衛さんを斬られたからか、新八を馬鹿にされたからか、あるいはその両方からか。

銀さんが眼に鋭い光を灯しながら千兵衛に問う。

この男、あの眼鏡が動くのを察知し先に動いたか……。相当の手練と見た。それにこの銀髪……。

千兵衛は銀さんの珍しい髪の色を観察してある噂を思い出す。

その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿はまさしく夜叉。

「まさか。どうしても戦わなければならぬ状況でも無い限り、自分より格上の相手に一人で立ち向かうなど愚の骨頂。」

仲間を連れて来たのは正解だ、と言おうとしたんだが……。やれやれ、近頃の若者はせっかち過ぎていかな

銀さんの問いに考えを悟られぬよう飄々とした態度で応える千兵衛。

さっきの気に障る態度に侮辱するような言葉……どう聞いても挑発にしか聞こえなかっただろう。

「お前、なかなか嫌な性格してんじゃねーか。友達少ねーだろ？」

「友達が居ればこんなところに居やしねーよ」

「……ちげーねエ」

なんだか嬉しそうに二人が対話していると銀さんが千兵衛から距離を置いた。

直後、月明かりに照らされていた千兵衛の体を小さな影が覆う。

ふと千兵衛が顔を上げるとそこには地面を蹴って高く跳躍していた赤いチャイナ服の女の子が紫色の番傘を大きく振り上げていた。

すぐさま千兵衛がその場を離れると神楽が力の限り番傘を振り下ろす。

相当な力だったのか、神楽が番傘を叩き付けた部分の地面がクレターのように丸く凹んだ。

姿は可愛らしい少女のくせして信じられないほどの怪力に番傘、そして透き通るような白い肌……なるほど。

「凄腕の剣士に傭兵部族『夜兎』の娘か。恐ろしい駒を持っていたみたいだな」

千兵衛があの手時間の間に見抜いた銀さん達の情報を心底嬉しそうに告げると

「だが、駒なら俺も持っている」

彼の口からこんな言葉が飛び出る。

同時に、真っ黒な刀身の刀から溢れんばかりの禍々しい力が漏れ出し、刀が震え始める。

いきなりの現象に眼を見開く万事屋トリオ。

そしてすぐに確信する。コイツの妙な自信はこれか……！と。

「コイツの名は『黒月』と言ってね、コイツに血を吸わせると吸った血の持ち主を呪うのさ。」

そしてコイツに呪われた相手は高熱と激痛にうなされ続け、次の満月の晩にはその命を吸い取られる……」

千兵衛が刀を銀さん達にもよく見えるよう真っ直ぐに立てながら妖刀『黒月』の事を語る。

「だが良かったじゃないか。昨日俺が斬った九兵衛のようにお前等は苦しまずに済む。」

……何故なら、お前等は俺がここで殺すからな」

千兵衛はそう言うと刀を水平に振るおうとする。

その動作を見て何か感じたのか「伏せろ!!」と銀さんが子ども達に指示すると指示通り全員姿勢を低くする。と同時に振るわれる漆黒の妖刀。

刹那、両サイドに並ぶ家の壁が抉れた。宛ら、刀を振るった衝撃波が真っ直ぐに飛び触れるもの全て断ち切ったかのように。

「何処の海賊世界の剣豪だよ……」

その様を見て銀さんがぼやいていると

「余所見をする暇があるかな?」

至近距離から千兵衛の声が聞こえた。

千兵衛が刀を振り下ろすのと同時に銀さんは刀を盾にして攻撃を防いだ。

しかし、妖刀により強化された千兵衛の肉体から放たれた強烈な一撃は、攻撃を受け止めた銀さんの足を地面に十数センチ減り込ませ、それだけに止まらず銀さんを中心とした円状の地面を砕いた。

全身にかかる脅威的な力に銀さんは一瞬意識が飛びかけたが必死で堪え尚も続く力に全力で耐える。

「銀ちゃんから離れるアル!!」

そんな銀さんを助けようと神楽が番傘を振るう。

が、すでにそこに千兵衛の姿は無かった。いつの間にか神楽の背後に回った千兵衛が刀を真っ直ぐに突き出す。

咄嗟に神楽は体を捻り千兵衛の突きを避けると同時に千兵衛が刀で突いた先にあった人が住んでいるであろう家の壁がベコツと凹んだ。

「ほあちゃあああ!!!!」

千兵衛の突きを避けた神楽が千兵衛に向けて右足上段の蹴りを放つ。

その感触から確かに当たったと思った神楽だがすぐに違う事に気づき、眼を大きく見開いた。

千兵衛が左手で神楽の蹴りを受け止めたばかりでなく、右足をがっつちりと掴んでいたのだ。

千兵衛は神楽の右足を掴んだままぐるぐると体を回転させて勢いを付け、その勢いで神楽を投げ飛ばす。

「う、うわ……」

勢い良く投げ飛ばされた神楽の体は新八を巻き込みながら吹っ飛び、そのままの勢いのまま建物の壁に激突した。

「新八！！ 神楽！！」

壁に叩き付けられた二人を心配する銀さんだったが千兵衛が刀を振り上げるのを見て時を移さずその場から離れる。

直後、先程まで彼が居た場所が縦に真っ二つに割れた。

「……オイオイ、本当にそれ妖刀か？」

ちらと真っ二つに割れた箇所をやって千兵衛に問う銀さん。

「さあな。そう見えねーのなら好きに呼びな」

「じゃあとりあえず化け物で」

ハアハアと息を切らす銀さんと余裕さえ見える千兵衛が言葉を交わす。

ヤベーな、マジでクソ強エ……。

視認できない飛ぶ攻撃に、夜兎に匹敵するほど使い手の身体を強化し、加えて吸った血の持ち主を呪う。

妖刀ならいくつか聞いた事はあるが、そのどれよりも規模が違い過ぎる。

それでも負けられない。さっき千兵衛の一撃を受け止めた時に何処かの筋肉が千切れ、何処かの骨が折れたのか、体の至る所から生じる痛みに堪えながら刀を構える銀さん。

するとそこに千兵衛目掛けて砲弾が飛来してきた。千兵衛がその

砲撃を回避すると砲弾は地面に直撃しドーン！ と爆発する。

「今のは……！？」

新八が何処から今の砲撃が来たのか探している

「面白そうな事になってんな。俺も混ぜろよ」

「てめー等ばっかり目立ってズルイでさア」

「加勢に来たぞ、万事屋！！！！」

「土方さん、沖田さん、近藤さん！！」

土方さん、沖田さん、近藤さん等真選組トリオがパトカーに乗って参上。

土方さんは運転席で煙草を口にくわえ、沖田さんは助手席の窓から上半身を出してさっきの砲撃の元と見られるバズーカを持ち、近藤さんも沖田さんのように後部座席の窓から上半身を出して鞘から抜いた刀を真つ直ぐ掲げる。

「今更何しに来たアルかお前等！」

「ちょ、助けに来たつてのにそれは無いだろチャイナ娘！！」

「まだ見せ場はありそうですねイ」

「誰もお前等なんて御呼びじゃねーんだよ！」

「こつちは仕事で来てるんだ。それに、仲間に手を出した奴を前にして帰れはねーだろ？」

神楽、近藤さん、沖田さん、銀さん、土方さんの順に辻斬りを無視してそれぞれ言いたい事を口にする。

無視される辻斬りは別段怒っている様子は無く、むしろ一瞬だが嬉しそうに口元を吊り上げるがすぐに真剣な表情に戻し刀を振り上げ振り下ろす。

「あ、危ない！！」

「えっ？」

新八が近藤さん達に危険を報せ、逃げるよう告げると何の事やらさっぱりの近藤さんが素つ頓狂な声を出す。

次の瞬間には近藤さん達が乗っていたパトカーがちょうど真ん中で縦に割れる。

「『まるで』『じゃねエ。マジで化けモンの仕業なんだよ』
土方さんが吐いた台詞に銀さんは一言注意した。」

辻斬りの刀（後書き）

ども、白黒仮面です。

最近、『ゼロの使い魔』の小説にドハマりしています。小説の参考にする為、買って見ましたがやっぱりスゲーや、モノホンの小説は。

手に汗を握りながら、彼等の冒険に魅入っております。それ以上に物語の可愛い女の子達にもだえております。

ええ、読者の皆さんの予想通り、作者は変態です。でも変態じゃないと『銀魂』は書けないと思うのでこれくらいがちょうど良いんです、きっと。

そんな雑談はさておき。

化け物じみた妖刀の力！ どうする、銀さん！？

では次回もお楽しみに！

妖刀『黒月』（前書き）

『ちよこつと銀八先生！』

銀八「百鬼丸さんからの質問。

『質問ですがもしも銀時が桂に「お前本当に空気読んで人の話を聞けよ！！」て、言ったら桂はなんて答えますか？』

……だいたい予想できる人がほとんどだとは思いますが、実際にやって頂きましょう」

銀さん「お前さ、本当空気読め！　ちゃんと人の話聞け！」

桂さん「何を言っている銀時。ちゃんと人の話を聞いているではないか。

ところで銀時、近くのスーパーで安売りセールがあるんだが手伝ってもらえんか？」

銀さん「んなくだらねーセール、てめーのペットと一緒に行けばいいじゃねーか」

桂さん「エリザベスだけでは力にならんから言っている。あそこのおばさん達ヤバイんだぞ。

獲物に向かって真っ直ぐに進むその姿はまさに獣そのもの。あれは真選組と言えどもそう簡単には超えられんだろう。

だから銀時、白夜叉と呼ばれたお前の力を借りたい。ぜひ俺に、攘夷に協力してくれ！」

銀さん「しょーもねーところで俺の力借りるんじゃないよ！

「っつーか何さり気に俺を攘夷志士に勧誘してんの！？
そんなに言うんだったら、連中攘夷志士に勧誘すれば良い
じゃねーか」

桂さん「はっ！ そうか！ なんで今まで気付かなかったんだ……。
分かった、では早速連中を攘夷志士に勧誘して五時からの
タイムセールに備えるでしょう！

さらばだ、銀時！ ハーッハッハッハ！！」

銀さん「……あれ、結局何の話だったっけ？」

銀八「みたいな感じで結局意味がありません。なのでやるだけ無駄
です。

と言う訳で百鬼丸さん、一週間廊下で逆立ち！」

妖刀『黒月』

ケロロ達が『銀魂』の世界に来て十二日目。即ち九兵衛さんが斬られて二日後。

恒道館道場の九兵衛さんが眠る一室に集う新八、神楽、お妙さんとケロロメンバー。

「妖刀『黒月』……か」

「どんどん事態が深刻になっていくね……」

新八と神楽から辻斬りに関する情報を聞きギロロ、小雪が思った事を口にする。

「確か、今夜が満月ですよね……？」

確認するように桃華が言う。もしこのままだったら九兵衛さんは今夜、確実に死ぬだろう。

その通りにならないと銀さんの事を信じながらも、何せ銀さんや新八、神楽の万事屋トリオを一度に相手してボロボロに打ち負かすほどの強敵が相手だ。どうしても嫌な事ばかり予想してしまう。

「……九ちゃん」

九兵衛さんの近くで正座をしていたお妙さんが九兵衛さんの身を案じる。

決して銀さん達の事を信じてない訳ではない。普段はゴリラ並に凶暴でメチャクチャでも、親しい友人が呪いで苦しむ姿を黙って見られないほど本来はとても心優しい人なのである。

それに、一番辛く苦しいのは他の誰でもない九兵衛さんの筈。

自分が弱音を吐く訳にはいかない、と自分を言い聞かせるがその表情は不安な気持ちを隠しきれていなかった。

すると、眠っていた九兵衛さんがお妙さんの膝の上の、微かに震える手にゆっくりと手を伸ばししかと掴んだ。

いつもより遥かに高い体温を手に感じ九兵衛さんに眼を向けるお妙さん。

「……大丈夫……妙ちゃん……。……僕は……。必ず、良く……。なるから……妙ちゃんは……。笑って……。待つて……。くれ……」

「九ちゃん……!」

「……正直、嬉しい……。かな……。大好きな、妙ちゃんに……。こうして……。看病……。して……。もらえる……。なんて……」

お妙さんの声に反応したのか意識を強引に叩き起こし、ハアハアと息を乱しつつ高熱と激痛で霞む視界に友の顔を映して、一番苦しい身でありながら九兵衛さんは笑顔で冗談を言つてのけた。

大切な人の笑顔が見たい、その一心で。

「九ちゃん……。!! きつと、きつと良くなるわ!! 待つて、今卵粥作つてあげるから!!」

「ありがとう……。妙ちゃん……」

九兵衛さんの要望に答え、笑顔でそう告げるお妙さんの目尻には何か光るものがあった。

傍から見れば感動的なシーンなのだろうが、生憎お妙さんの作る料理は料理ではなく劇物。

そんなもの呪いで弱っている今の九兵衛さんに食べさせたら間違はなく九兵衛さんがあの世に行つてしまう。

かと言つて二人の美しい友情を邪魔する気には到底なれない。

「……新八さん、お妙さん止めるべきでしょうか?」

「止めなくて良いと思いますよ」

迷つた夏美がどうするべきか新八に意見を求めると新八もどう言つたら良いか分からない様子でそんな意見を返した。

「あーもつっ!?!?! 我輩達になんかできる事無いの!?!」

「僕も暴れたくなくて来たですう!! 暴れさせろやゴリアアアア!?!」

お妙さんと九兵衛さんの会話を見て、何かしてあげたい気持ちになつたケロ口とタママが手足をバタバタさせて今に今まで抑えて来た感情を露にする。

何とかしてあげたい。その想いはこの場に居る全員が同じだ。

「クルル曹長、なんか無いの!？」

「残念だがねーな……。」

分かった事と言っても眼帯の体に浮かび上がった紋様は受信機みてーなモンだつて事くらいだしな」

「だったらその受信機をなんとかすれば……。」

「無理だな。だいたい、あのガキの水晶の力でどうにもならなかったんだ。発信機の方をどうにかするしか方法はねーよ」

僅かな希望もクルルの説明に無情にも掻き消されてしまう。

「……それよりも新八さん。銀さんはどうしたんですか？」

「さあ……?。」

「まああのチャランポランは放つて置いてても大丈夫アル」

『侍はできねー約束はしねーんだ』

あんな事言うんだから諦めるなんてしないとは思うけど……本当、何処行つちやつたんだらう？

冬樹はさつきから姿の見えない銀さんの行方が気になった。

かぶき町某所にある刀鍛冶。

「どうよ、何か分かったか？」

「銀さん！ ちよつと刀見せてもらつて良いかい？」

銀さんが来るや作業を降り出し否や刀を見せてくれと頼む鉄子さん。

「ん、ああ……。」

鉄子さんの頼みを聞いて銀さんは腰から鞘ごと刀を抜いてそれをそのまま鉄子さんに手渡す。

「……やっぱり、相当痛んでる……。」

……銀さん、昨日戦つたんだらう？ 辻斬りと……いや、妖刀

黒月』と」

鉄子さんは受け取った刀を鞘から取り出し、その刀剣をじっくり観察しながら話を切り出す。

「どうやらちよつとは掴んだみてーだな？」

「ちよつとだけさ。そつちは？」

「こつちも名前が分かっただけでほとんどお手上げよ」

お互い大した情報は掴めなかつたと戦況を報告したところで

「いろいろな文献を引つ張り出してようやく分かった事なんだが…

…。

ある戦に『黒月』を腰に差した武士が参加した事があつたそうなんだが、戦の途中に刀に魂を乗っ取られて周囲に居る兵を敵味方問わず一人残らず切り伏せたらしい。

他にも山を切り崩し地形を変えたとかその斬撃は大地を抉り、海をも割るとかとにかく物騒な伝承しか残つてなかつた。

ただ、確かに実在するものだったみたいで噂では『黒月』の強大な力を恐れ強力な封印を施して海の底に沈めたそうだが……」

「何時の間にかこの世に蘇つてたと。何処のゲームの大魔王だよ。

ああ、おつかねおつかね……」

「でも、それだけ『黒月』は危険な代物だつて事は間違い無いだらうな」

鉄子さんは妖刀『黒月』で分かつた事を報告するといきなり彼女がすまない、銀さんと一言謝つた。

いきなり謝られて訳の分からなかつた銀さんはああ？ とちよつぴり不機嫌そうな声色で返す。

「結局まともな事は何一つ分からなかつた……」

「良いよ良いよ、気にすんな。そんな事もあらーな」

本当に申し訳無さそうに鉄子さんが謝ると銀さんは鉄子さんを励まそうとする。

「刀は預からせてもらうよ。夜までにできる限り鍛え直しておくから」

「頼まア。俺はちよつと気になる場所があるからそこ行ってみるわ」

刀を鉄子さんに任せて、銀さんはその場を後にした。鉄子さんは出て行った男の背中を無言で見つめる。

そうして銀さんがやって来たのは大きな門の前。

銀さんがその門の中に入るとなんだか平安時代みたいな白い服を着た男達とごつくて大きな体に牛の角を頭に生やした化け物……まさに鬼が何人も居た。

「何者だ！！　ここが何処だが分かって……　つてあ、アンタは！！」
最初は侵入者を警戒していたものの、銀さんの姿をはっきりと確認すると男達は驚愕の表情を浮かべた。

「お兄さま居る？」

大きな屋敷の一室で将棋を指す二人が居た。

一人は平安時代の貴族のような白い服を着た短髪の男でもう一人は対峙する男とは真逆を示すような黒い服を着た黒髪の男。

白い服を着た短髪の男が陰陽師集団『結野衆』けつの 頭目、結野 晴明せいめい

黒い服を着た黒髪の男は陰陽師集団『巳厘野衆』しりの 頭目、巳厘野 道満ちみん。

結野衆と巳厘野衆は長い間対立してきたのだが、つい最近起こったある出来事がきっかけで見事和解した。そして今では……

「王手」

晴明さんが将棋の駒を動かそうと告げると

「ま、待った！！」

道満さんは待ったを掛ける。

しかし、道満さんの駒は非常に少なく、晴明さんの手持ちにはまだ強力な駒が残っている為、ほとんど結果は見えているようなものだった。

「またか道満！！　いったい何回『待った』と言えば気が済むんだ

「!!」

「一回くらい構わんだらう清明!! あと一回!! 一回だけだから!!」

「待たん!!!!」

二人が子どものような醜い言い争いを繰り広げていると

「相変わらず仲良さそうじゃねーの、お二人さん?」

銀さんが二人に声を掛けた。

「……来たか」

清明さんは一族歴代最強の天才陰陽師で江戸に無数の式神を放ち、絶えず江戸を監視している。

何があつたのか『見て』よく知っているからこそ銀さんが何故ここに来たのか、分かっていた清明さんは慌てる事無く冷静にそう口にする。

「……え?」

それに対し状況を全く分かってない道満さんは素っ頓狂な声を上げる。

「その様子だと知ってるみてーだな。詳しい話、聞かせてもらおうじゃねーか?」

清明さんが『見て』知っているだけでなく何か重要な情報を握っていること察知した銀さんが詳しい話を伺う。

「……ああ。道満、妖刀『黒月』の事は知っているな?」

「あ、ああ、勿論。」

闇天丸をも凌ぐほどの強大な魔力を宿す妖刀で、ほんの五十年くらい前に我等巳厘野衆も悪用したところ結野衆が全力を以ってそれを封じ海の底に沈めたんだらう?

尤も、あまりに膨大な魔力を有しているが為、封印できるのもせいぜい数十年くらいだと聞いているが……ってまさか!?

「左様。その『黒月』が復活し、今はかぶき町に来ている辻斬りの腰に収まっている。」

『黒月』が何時この世に生まれたのかは未だ謎だが、元はただの縁

起物の刀剣だったらしい。

何時しかその刀剣を呪術の儀式に持ち込むようになり刀剣は少しずつ魔力と、そして人の悪意を蓄えていった。

そして何時の間にか刀身が真っ黒になり、それを振るうと漆黒の三日月のように見える事から『黒月』と呼ばれるようになったそう
だ」

道満さんや清明さんが彼等陰陽師に伝わる『黒月』の歴史を語ると
「あの化け物刀におたく等の一族も関わってたのかよ……」

銀さんがそれを聞いて思った事を零した。

「『黒月』の厄介さは多々あるが、一番はその膨大な魔力により災いを生む事ができる点だ。

流行り病や戦、天災と言った、歴史に名を残す大災厄のほとんどに『黒月』が関与していると言われているほどだ。

斬った相手を いや、正確には血を吸った相手だな を呪ったり、持ち主の身体を強化したり、刀身から力を攻撃として放つ事ができるのも力の一端だろう」

斬った相手を『呪う』。その言葉を辻斬りから聞いたからこそ、銀さんはここに来たのである。

「それだけ知っていながら、なんで今の今まで放置してんだよ。こっちは知り合い斬られた上に呪われて困ってるってーのによ」

銀さんが彼等陰陽師達に対し愚痴を吐くと

「……知っているからこそ手が出せんだ」

と清明さんが少しだけ辛そうな表情で眼を閉じながら呟いた。

「……どう言う事だ？」

銀さんと道満さんは清明さんの表情を見て首を傾げる。

同時刻、町外れにある小さな家屋に潜むは辻斬り、桜田 千兵衛。自分の手が届く範囲に刀を床に置き、正座をして眼を閉じ精神統

一 しているようだった。

そんな彼をドロロは屋根裏に隠れて監視する。

一向にピクリとも動かない彼にゆっくりと近づく人影が一人。

微かな足音と気配を察知し、千兵衛が眼にも留まらぬ速さで刀を鞘から抜き放ち横に薙ぐ。

直後、彼が居た家屋の壁が抉れた。ほとんど斬ったと言っても過言じゃなく、抉れた箇所から外の光が家屋の中に入り込む。

千兵衛は刀を鞘に納めそれを腰に差した。

「相変わらず派手に暴れてるなア、千兵衛」

蝶が描かれた紫色の着物を着て、紫がかつた短髪に頭に巻いた包帯で左目を覆った男が壁にもたれて煙管を吹かしながら千兵衛に声を掛ける。

「……何の用だ、高杉」

千兵衛が男の名を、この世界で最も過激な攘夷志士の名を呼ぶ。

な、何者でござるか、あの者……。とても人間とは思えない気配、例えるならそう、血に飢えた獣のような……。

ドロロが高杉を一目見て息を呑む。

「お前の事だ、俺がここに来る理由なんざ大方予想できてるだろ」

「さアな、全く予想が付かん」

本当は分かっているくせに惚ける千兵衛をフツと鼻で笑う高杉。

千兵衛はそんな高杉に呆れたのか眼を閉じたままその場から立ち去ろうとする。

「どうなるか見物だな。化け物じみた妖刀の力が勝るか、アイツの力が勝るか。」

ま、お前にとっちやどっちに転ぼうが万々歳なんだろうがな」

別れ際の高杉の言葉を聞いて千兵衛がある程度家屋から離れた後、今までに無いほど本気で刀を縦に振るった。さっきまで居た家屋が真っ二つになる。

「……逃げられたか」

その言葉は隻眼の男に向けたのか、それとも姿の見えない密偵に

向けたのか。それは誰にも分からない。

その日の夕方。

「あ、銀さん！」

「やっと見つけたであります……」

「何の用だ、オメー等？」

鉄子さんに打ち直してもらった刀を腰にぶら下げ帰路に付いていた銀さんを見つけ冬樹とケロロが駆け寄ると

「銀時殿！ 我輩も銀時殿と一緒にいきたいであります！！」

「僕も！！」

いきなりこんな事を言い出した。

「……何しに？ 言つとくが助太刀ならお断りだぞ。野郎とはサシで決着付けてーからな」

「い、いや、できるものなら助太刀したいのでありますが、そのー、我輩そんなに強くないし……」

「ならとつとと帰りやがれ。こつから先もタグ通り『残酷描写有り』

『R15』なんだからな」

どうしても行かせたくない銀さんは行かせたくない理由を言つて彼等を納得させようとするが

「それでも構わないであります！！ たとえ『残酷描写有り』だろ
うが、『R15』だろうが、『R18』だろうが！

我輩達は銀時殿の傍に居るであります！！」

「新八さんの家に居てもできる事なんて無いしね。

それに、『侍はできない約束はしない』んでしょ？ だったら、何処で待つても同じじゃないの銀さん？」

ケロロと冬樹はそう言つて聞かなかつた。

冬樹とケロロの眼からは一抹の不安も感じたが、それよりも銀さんに対する信頼の方が勝っていた。

この様子だと連れて行かなくともまず間違いない勝手に付いて来るだろう。

「……仕方ねーな」

「こう言う馬鹿には何を言っても聞きやしないのだ。自分もそう言う馬鹿だからよく分かった。」

銀さんが折れて彼等の要求を呑む。

「その代わり、行かなきゃ良かったなんて言うんじゃねーぞ」

「そんな事を言うくらいなら行くななんて言わないでありますよ。ね、冬樹殿？」

「うん！」

そして、丸いお月様が東の空に浮かぶ頃。

「で、なんでコイツが居る訳？」

「ここ、千兵衛と約束した場所である街外れの港付近に銀さん達の姿があった。」

新八と神楽はいつもの事、冬樹とケロロは反対を押し切ってここに居ると言う為特別に許可した。

他の『ケロロ軍曹』メンバーはギロロやドロロから手を出すなど忠告されていたし、冬樹とケロロは万事屋で待っていると事にしたので二人以外は誰もここに来てない。

「ここまでは銀さんも納得の範囲内である。」

「おー！ ぶー！！」

では何故、カオスがここに居るのか？ 他の『ケロロ軍曹』メンバーが見てるんじゃないのか？

「さ、さあ……？」

冬樹達もなんでカオスがここに居るのか、分からないみたいで首を傾げた。

流石にこの宇宙人の赤ん坊をここから先へは連れて行けない。

「神楽、コイツをアイツ等のところに置いて来い」

「アイアイサー！」

銀さんの命令を受けて神楽は敬礼した後、カオスを抱いてダッシュで恒道館道場に向かった。

数分後、神楽がカオスを恒道館道場に居る皆に託し戻って来た。

「……よし、行く……」

改めて気合を入れ直して銀さんはそう言うが途中で妙なものが視界に入り口ごもった。

さつき神楽が確かに連れて帰った筈の赤ん坊が何事も無かったかのようにハイハイしてこつちに向かって来ているのだ。

脅威的な身体能力を持つ神楽だからこそ数分で帰って来れたのだが、ここから恒道館道場までは結構距離がある。

赤ん坊でなくてもこの一瞬でここに帰って来るのはどう頑張っても無理だ。

「神楽、ちゃんとアイツ等に渡したのか？」

「ちゃんと渡したアル！」

神楽の事だからちゃんと夏美達に渡したのかも知れないが念の為に銀さんが確認すると神楽は嘘偽りの無い言葉を返した。

「……だよな？」

「じゃあ何故にここに……？」

「たぶん、あれじゃないかと……」

ついさつき神楽が一旦恒道館道場に帰した筈のカオスがなんでこんなところに居るのか。思い当たるものは一つ。

「神楽、もっかい新八んちに強制連行しなさい」

「ラジャー！」

再度銀さんの指令を受けた神楽は敬礼した後、カオスを抱いて猛ダッシュで恒道館道場に向かった。

数分後、神楽が戻って来ると一行は周囲を見渡しカオスが居ない

事を確認してホツと溜め息を吐いてから

「……よし、行くぞ」

と銀さんは告げた。

街外れの港には積荷が入っているのかどうかは分からないが四角い大きなコンテナが幾つも置かれていて、近くには運ばれて来た積荷を保管していたであろう倉庫が建ち並んでいた。

今はこの港は使われてないのか、人氣が全く無い。

「来たな……」

そんな場所に一人佇む千兵衛に近付く銀さん達。

「……随分多いな。俺はサシで戦いたいと言った筈だが」

「安心しな、コイツ等はただの観客だ」
キャラクター

銀さんと千兵衛さんが腰にぶら下げた刀を鞘からすらと抜き放つ。白く光り輝く刀身と真つ黒な刀身が向かい合う。

「……どうしたんだ、その刀？」

「オメーにや言われたくねーよ」

「違うない」

「普通の刀じゃあおたくの化け物刀に勝てそうにねーからな。知り合いに頼んで強くしてもらった」

「どんな知り合いだよ？」

「俺の好きなお天気お姉さんのお兄さまだ」

「やはりお前は面白い奴だ」

「そいつはどうも」

興味本位で千兵衛が銀さんの刀の異変を尋ねると銀さんからはふざけているような言葉が返って来る。

鉄子さんから刀を貰ってから晴明さんや道満さんに退魔の力を刀に込めてもらったのだ。

「それじゃあ早速殺り合おうじゃねーか」

千兵衛がそう言って一回瞬きすると、その瞳にはさっきまでとは違うものが宿っていた。

二人は眼を合わせ、いつでも動けるよう構える。じつと身構え身

体が、精神が最高に研ぎ澄まされた瞬間、二人は刀を振るった。

ちよつどそれが同時だったようで彼等が振るった刀が激しくぶつかり合う。二人の刀から溢れ出した力が暴風となって周囲に拡散する。

妖刀『黒月』（後書き）

ヤッフィー、白黒仮面ツス。

気付けば八月も終わり九月。

夏休みは終わりましたが、夏のような暑さは未だ健在です。

読者の皆様、くれぐれも体調を崩さないように注意して下さい。

辻斬り千兵衛編もいよいよ大詰め！

今回はスペシャルゲストに登場して頂きました。

『呪い』っつーからにはこの人達が関わってた方が良いかなーって
おもっくそこの設定は後付けです。

いろんな方から感想を頂いております。誠にありがとうございます。
至らぬところの多い未熟な作者ですが、今後もケロ銀をリメイク前
よりも読みやすく、また面白くしていきたいと思っておりますので
応援の程、よろしくお願いします。

満月の夜(前書き)

ついに決着！ 括目せよ！

満月の夜

少女は迷っていた。こんな時に好きな人と一緒に居ようと思うなんて不謹慎ではないか？と。

しかしながら少女は想う。いやこんな時だからこそ二人つきりになれるんだろーが！と。

人通りの無いかぶき町を歩く一人の影。

正確にはそこには二人居るのだが、一人は普通の人には見えないようにしている為そう見えるのだ。

その少女の名は西澤 桃華。ご存知の通り二重人格である。

辻斬り騒動真っ只中の夜のかぶき町を堂々と歩けるのは辻斬りが銀さん達に掛かりつ切りだと知っているからだろー。

「やっぱり皆さんに失礼なんじゃ……」

「そうは言っても、俺達にはできる事なんてねーだろ。だったら何して待とうが同じじゃねーか！」

「でも……」

「その為にタマ公も連れて来たんじゃねーか！」

「そうですね……」

それでも状況を考慮し『裏』の提案に伸るか反るか決め兼ねている『表』と待つしかないこの状況を利用してしようとする『裏』の人格が代わり番こにそれぞれ想う事を口にする。

彼女がそうこうしているうちにいつの間にか万事屋に到着してしまっただ。

あわわ、来てしまった……。どうしよう……。

ここまで来たら腹くくりやがれ！！

……そ、そうですね。ここまで来たらやるしかないですよね！！

「モモツチ、早く入ろうですー」

しばらく玄関の前でブツブツ言いながら迷っていた桃華だったが

『裏』の言葉に励まされ、またタママに急かされ、ようやく覚悟を決めた桃華が万事屋の玄関をガラガラと開ける。

「ふ、冬樹君！ い、一緒に銀さん達を待ちましょう！」

「軍曹さん！！！」

万事屋に入って早速ここに居るのであるう人物の名前を不安を吹っ飛ばす為満面の笑みで呼ぶ桃華タママ。しかし、返事は返って来ない。

「……あれ、誰も居ませんねえ」

素足のタママがピコピコと足音を立てながらリビングに行ってみたものの目的の人物達の姿は無かった。

その頃、冬樹とケロロは銀さんと千兵衛の戦いを眺めていた。

「「おおおおおおお！！！」」

銀さんが縦に刀を振るうと同時に千兵衛は横に振るう。同じ様に銀さんが横に振れば千兵衛は縦に振り、斜めに振れば斜めに振った。

決して二人は刀を刀で受け止めている訳ではない。

常に攻勢に出ているにも拘らず、刀を振るうとまるで磁石が引き合うように、刀と刀が、力と力が真正面からぶつかり合うのだ。

それに加えて、その速さも尋常じゃなかった。一連の動作が人が一度瞬きをするのと同程度のスピードで進行している。

凡人の冬樹とケロロの眼にはもう何が起こっているのか分からないくらい二人の戦いは凄まじかった。

さらに言うと二人とも相手の攻撃を刀で防いだり、避けたりして今まで一太刀も浴びてないのである。

人を超えると書いて超人と読むが銀さんと千兵衛の戦いはまさしくその類だろう。

す、スゴイ……。

目の前で繰り広げられる剣戟に素直に魅了され、冬樹とケロロは

開いた口が塞がらなかった。

普段、ぐうたらでダメ人間の模範と言われてもおかしくはないあの銀さんがそれだけの戦いをしているのだからさらに驚きだ。

二人の戦いは命がかかった戦い故にその戦う姿からは恐ろしさもあつて確かに怖かった。

だが、それ以上に二人から感じたのは美しさだった。

鋭く、真っ直ぐで、それでいて決して折れない強さ。そう、それはまさに彼等が武器として手にするもののような。

だからこそ、瞬きも呼吸も忘れて二人の戦いを見入ったのだろう。

一方の銀さんや千兵衛はと言うと戦いの中で眠っていた勘や才能みたいなものが少しずつ目覚めてきたのか、二人の攻撃はより精度を増し、より強く、より速く、激しくなっていた。

少しずつ二人の体に切り傷が付き、小さな傷口から少量の血が体外に出ていく。

相手に負わせる傷は微々たる変化だったものの、徐々に、確実に大きくなっていった。

銀さんの胸が横に切り裂かれ、そこそこの量の鉄臭い赤い液体が地面に零れ、白い着流しと中に着込んだ黒い服が赤く滲む。

「ああっ!!!」

それがいつたいたいと言う事を表しているのか、妖刀の力を銀さんから聞いて分かっていた冬樹が声を漏らす。

妖刀『黒月』は吸った血の持ち主を呪う……。銀さんもマズイと思ひ咄嗟に千兵衛を薙ぐ。

しかし千兵衛は目にも留まらぬ速さで動く銀さんの刀を器用に片手で挟んで受け止め、そのうちに漆黒の刀身を地面に零れた銀さんの血に付けてそれを吸わせてしまった。

「王手だ」

まるで本当の生き物のように『黒月』は血を吸い、九兵衛さんの体に浮かび上がったものと同じ模様が銀さんの体にも浮かび上がっ

た。

それだけで意識を失いそうなほどの高熱と筋肉が千切れ、骨が砕けたかのような激痛が銀さんの全身を蝕む。

立つのもやっとな状態の銀さんに追い討ちをかけようと千兵衛は一直線に銀さんをおこうとする。

『銀さん。……子ども達の事、お願いしますね』

危機的状況下で銀さんの脳裏に浮かぶのはある言葉。たった一つの約束。

それが銀色の男を駆り立て、ふらふらな体を強引に動かし千兵衛の突きを刀で受け止めた。

「うおおおおおおお！！」

その瞳に銀色の光を宿し、立つだけでやっとの体で刀を振るい、今までのようなとらえ所の無い剣技を披露する。

この男……！！

油断をすれば吹っ飛ばされるほどの力に、追い付かなくなるほどの速さ。

刀を交わしている千兵衛だからこそすぐに気付けたのだが、銀さんの力や速度のそれが『黒月』に呪われ状態も体力も有り余る以前よりも上がってきているのだ。

……これだ！これを、今この瞬間を、俺はずっと待ち望んでいたんだ！！

敵が強くなったのを感じ、千兵衛が口元を吊り上げ心底嬉しそうな表情を見せると一度銀さんと距離を置くと漆黒の刀身を自分の腹に向けて深く突き刺した。地面にポツポツと赤い斑点が付く。

千兵衛の突然の行動に冬樹やケロロは咄嗟に眼を背け、新八や神楽が冬樹には見せないよう手や腕で冬樹の視界を覆い隠した。

「お前のような面白い相手に、ハンデなど勿体無い……。これでイブンだろ……」

口から血を涎のように垂らして苦しそうに千兵衛が呟く。彼の顔や手には九兵衛さんの体に現れた不気味な模様が浮かび上がって

た。

自分の腹に刺した刀を体から抜くと刀の真つ黒な刀身にこびり付いた鉄臭い赤い液体がみるみるうちに消えていった。

「てめーが勝手にハンデ付けたんじゃねーか……」

「そう言うなよ……。『黒月』の死の呪いが発動するのは満月が沈んでから……。つまり、明日の夜明けに俺達は死ぬ……。」

逆に言えば、だ。明日の夜明けまで俺達が死ぬ事はありません……。コイツが、『黒月』が夜明け前に壊れねー限りはな……。」

『黒月』の高熱と激痛の呪いに加えて大量失血により朦朧とする意識で苦しそうに息を切らしながら千兵衛が『黒月』の呪いについて説明する。

「随分性質たちの悪イ化け物じゃねーか……。俺達に苦しんで死ねるか……？」

「そう言う事だ……」

ふらつく足取りに霞む視界、朦朧とする意識。二人共気力も体力もとうに限界を超えていた。

おそらく次が最後の一撃になるだろう。新八達が固唾を呑んで見守る。

「……おおおおおおお！！」

銀さんは横に、千兵衛は縦に刀を振るう。

「銀さん！」「銀ちゃん！」「銀時殿！」と子ども達が負けて欲しくない一心で銀さんの名を叫ぶ。

刀と刀がぶつかり合う。今の一撃で折れた刀身がくるくると宙を舞う。二本の刀の刀身が同時に地面に突き刺さった。

『黒月』が折られたのだ。銀さんや千兵衛の体の妙な模様が少しずつ薄れていつては消えていく。

千兵衛が地面に倒れ、銀さんも少し体勢を崩した。

勝った。勝ったんだ。銀さんが勝ったんだ！！

「銀さん！！！」

「銀時殿！！」

子ども達と小さな宇宙人が心の底から喜んで飛び上がった。そして急いで銀さんに駆け寄り、ケロ口がちゃんとここに持って来ていた銀さんの木刀『洞爺湖』をゆつくりと差し出した。

「……言つただろ、『侍はできねー約束はしねー』ってな」

銀さんも息を切らしながら口元を緩ませて嬉しそうに言つてケロ口から木刀を受け取り腰に差した。

そして一行はゆつくりと今回の騒動の主犯に視線を移す。

うつ伏せに寝ていたその男は仰向けになり、その腹から無尽蔵に赤い液体を出し、ごふつと口からも赤い液体を吹き出した。

さつきまで戦っていた敵とは言え、あまりに無残な姿である。

「……でも、なんであの人切腹なんか……」

確かに、呪いに苦しみながら戦う銀さんと健全な肉体で戦う千兵衛とでは明らかに千兵衛の方が有利だ。

いくらその優劣の差を埋める為とは言え、腹を切る必要は無かつたのではないか？

冬樹が疑問に思つた事を呟くと

「……妖刀『黒月』は何も血を吸つた相手にだけ呪いをかけるんじゃないんだよ。

その持ち主にも呪いをかけるんだ。『その持ち主の周囲に居る近い人物の命を奪う』つっー厄介な呪いを、な」

銀さんが知り合いから得たであろう『黒月』の情報を告げる。

「銀ちゃん……？」

なんでそんな事を知っているアルか、と神楽が銀さんの名前を呼ぶ。

「てめーが決着付けたかったのは俺との喧嘩じゃねエ。『黒月』との喧嘩だろ？」

銀さんが本人から聞いた訳でも無いのにしっかりと確信を持って千兵衛に確認する。

「……随分と……お詳しいじゃねーの……。……誰から聞いた……」

？」

「俺の好きなお天気お姉さんのお兄さま」

銀さんが自分の事に、『黒月』の事にやたらと詳しい事に疑問を抱いた千兵衛が尋ねると、銀さんはまた同じ人の事を口にする。

「ふふ……さつきも似たような事言ってたな……」

そのおかしな言葉に千兵衛は弱弱しく、それでも素直に笑いながら呟くと

「……アイツはある日突然俺の前に現れ、俺に力をくれた。憎いもの全て亡き者にするほど強大な力を、な。

だがその対価は予想以上に大きかった。

仕事仲間として気が合った奴が真っ黒に焼け焦げた焼死体になった。

仕事を紹介した輩が次の日には俺とは別の辻斬りに巻き込まれ殺された。

唯一心を許せた母も原因不明の謎の奇病に罹り亡くなった。

次から次へと、俺が関わった奴等が屍になっていくんだ。辛うじて生き残っても、酷い有様よ。

俺ア知り合いだろーが誰だろーが、人が苦しむ姿なんざ見たくねーんだ。

アイツを捨てて逃げた事もあつたさ。

でも気が付けばすぐ近くにアイツは居た。何処まで行っても逃げられなかった。

いつその事、罪滅ぼしの為に死んでやろうとも思つたさ。

でも俺が死んだら、他の奴が俺と同じような目にあうんじゃないか、俺以上に人を殺すんじゃないかと思うとどうしても死ねなかった。

だから……アイツを壊してくれる奴を探して旅に出た。

陰陽師とかそう言う連中の噂を聞いては必死こいて頼んでみたさ。腕っ節の強い輩に力づくで叩き折ってもらおうとあえて辻斬りなんて非道な真似を試みたさ。

なるべく『黒月』の呪いで苦しまないように一思いに殺してやったさ。

でも結局、増えるのは屍だけなんだ。どいつもこいつも次の日には、次の瞬間には変わり果てた姿になるんだ。

誰かの為に戦いながら、誰からも感謝される事は無い。

憂さ晴らしに近くに居る人を殺しても、心に満ちるのはどうしようもない虚無感だけよ」

時折口から血を吐き出しながら苦しそうに千兵衛が自分の過去を掻い摘んで説明する。

この人は本当はとつても優しい人なんだ。苦しんでいる人を放っておけないほどのお人好しなんだ。

彼の言葉や瞳から、彼の溢れんばかりの優しさを感じる。

「俺の知り合いも言ってたよ。

そこまで知っていていながら手を出さなかったのは、助けられるかどうかも分からねーのに『助ける』とか言って手を出して『何もできませんでした』じゃ話にならねーってな」

事情を全て知っていたとしても、不用意に千兵衛と、妖刀『黒月』と関われば呪いで死ぬだけだ。

そうなればまた千兵衛は絶望してしまうだろう。

彼の中にある一縷の望みを奪わない為に、銀さんの知り合いである結野 晴明はこの件に手を出さなかったのだ。

尤も、そいつはいろいろとごたついて結局助けられなかったらしいが……、と銀さんは続けると

「『黒月』が折られれば呪いも消える。『黒月』が無くなれば俺の生きる理由も無くなる。

だからコイツは俺の負けを確信したあの時、腹を切ったんだ。だいたいお前、『黒月』の力使ったの最初の一発だけだっただろ」千兵衛の本当の気持ちを察する。

「戦つのが疲れたんだよ。俺には何も無い。『黒月』に奪われてな。帰るべき場所も行くあても、家族も友人も仲間も、何も無い。他

新八や銀さんは呆れ、神楽はちゃんと置いて来たと言い、冬樹は嬉しそうにそう告げる。

「オイオイ、正気か？ コイツは有名な辻斬りだぜ？」

助けた後はどうするつもりだ、と銀さんが尋ねるが

「そんなの関係無いであります！」

今日の前で困っている人を、苦しんでいる人を放つてはおけない

！ ケロロはそう言って聞かなかった。

「ったくてめー等は……」

銀さんは冬樹やケロロの態度を見て呆れながらハアと溜め息を一つ吐いて満更でもない表情でくしゃくしゃと頭を搔いた。

その後、彼等の心のような強く優しい光が街外れの港を包み込んだ。

満月の夜（後書き）

ども、白黒仮面です。

残暑が厳しいですね。昼間は暑くてやってられない……。でもその分、夜が涼しいです。ちよっぴり肌寒いような気がするくらい。

台風だの地震だの、今年は自然災害ばかりツスね……。せめてこれを読んでいる人が元気になるような作品になるよう頑張ります！

そう言いつつ、執筆速度は相変わらず微妙。しかし、詰まっていたところがスッキリしたのでここからガーっていきそうです。たぶん。まだ脳内ですが今後も驚きの展開をたくさん用意しておりますよ、イヒヒヒヒ。

辻斬り千兵衛編はもうちつと続きます。

満ち足りる（前書き）

『ちよこつと銀八先生！』

銀八「百鬼丸さんからの質問。

『もしも神楽とお妙に「二ヶ月間、暴力と暴言と暴走と、気に入らない事を物や相手に、八つ当たりをするのがガマンしなさい」と命令して、2人がそれをガマンしたらどうなりますか？で、神楽とお妙はどんな言葉使いでどんな態度でそしてどんな顔になりますか？』

百鬼丸さん、前にも言いましたがあの凶暴な女共が我慢できる訳無いでしょ。

作者からも『そんなの想像すらできねーよ』ってコメント頂いてますからいい加減諦めて下さい。

と言う訳で百鬼丸さん、もうちよつと想像しやすい質問を考えなさいー！

満ち足りる

意識を失ったままの千兵衛さんを銀さんが担ぎ、帰路に着く一行。『黒月』の呪いの脅威が去った安心と千兵衛の事情を知って湧いた同情が混ざり合い、皆が発していたしんみりとした空気を破るべく、ケロロが口を開く。

「……銀時殿」

「なんだ？」

「千兵衛殿が言った、『白夜叉』っていったい何の事でありませるか？」

ケロロの質問に銀さんは答えるべきかどうかを少し考えてから

「……何でも良いだろ。オメー等は知らなくても良いの」と告げる。

「銀さんが攘夷戦争に参加していた時に付けられた名前らしいですよ」

銀さんが言わないので新八が自分が知っている範囲でケロロの質問に答えた。

「銀さんも攘夷戦争に参加していたんですか？」

前に攘夷戦争の話は聞いた事があるけど、まさかあの銀さんが参加しているとは。思いも寄らなかつた冬樹。

「僕達も詳しい話を聞いた事が無いからよく分かりませんが、そうみたいですよ」

「で、なんか凄い活躍したらしいネ」

いつもはだらしないのに、結構凄い人なんだ……。

新八と神楽の攘夷戦争時代の銀さんの話を聞いて冬樹とケロロはへえ〜、と声を揃えて改めて銀さんの事を感じる。

「つたく、余計な事を……」

銀さんは余計な事を冬樹達に教える子ども達に呆れて頭を掻いた。「道理で強いんですなあ〜。ぜひともその力、我輩達の世界

の地球侵略の為に使って頂けないでしょうか？」

銀さんの力を見込んで自分達の仕事を頼もうとするケロロに冬樹が軍曹、と名前だけ言って苛めるとケロロは冗談でありますよ、と告げる。

「何、お前。地球護った輩に地球侵略させるつもり？」

「お、やってくれるんですか！？ そんならこの契約書にサインを……」

冗談とは言ったが意外にも銀さんが呆れながらもこの話に食い付いてきたので、ケロロは契約書と書かれた紙を何処かから取り出し、銀さんにサインするようお願いする。

「俺ア地球とかそんなデケーもんのをに戦うつもりは無エよ」

予想はしていたもののやっぱり断られたのでケロロはゲロ、と残念そうに呟く。

しかし冗談と言うのは本当だったみたいでそこまで凹んでなかった。むしろその答えを待っていたようで何処か嬉しそうだった。

一行が恒道館道場に着くと銀さんはお妙さんに千兵衛の世話を頼んだ後、真選組の屯所に行くと行ってすぐに居なくなってしまった。「冬樹、ボケガエル」

腰に手を当てて凄いい剣幕で恒道館道場に帰った冬樹とケロロの名を呼ぶ夏美。

何故だか彼女はご機嫌斜めのようなだった。

彼等が居る部屋には夏美の他に桃華、小雪、モアにタママ、ギロロ、ドロロと言った『ケロロ軍曹』メンバーの他の面子とお妙さんが集まっていたのだが、他の面子は心配しているような呆れているような表情をしている。

ちなみにクルル曹長は九兵衛さんが良くなったと見るや否や、さつさとからくり堂に帰っちゃいました。

「ど、どうしたの姉ちゃん？」

とりあえずどうして夏美が不機嫌なのか冬樹が尋ねると

「アンタ達、今まで何処に居たの？」

腰に拳を当てて夏美は質問に質問で返す。今の今まで銀さん達と一緒に居た事がバレたのかと思い一瞬ギクツとしたがすぐに平静を取り繕い

「ど、何処って万事屋だよ。ね、ねえ軍曹？」

「ねえ冬樹殿？」

こつ言つ時の為と思ひあらかじめ用意しておいた嘘の情報を口にする。

「万事屋……ねえ？ 桃華ちゃんが夜そつちに行つたんだけど会わなかったかしら？」

そこで、夏美がにっこりと笑顔を作つて柔らかな口調で彼等を疑う理由を告げる。

「え、」

夏美の意外な言葉に思わず動揺して声を漏らす冬樹&ケロロ。

万事屋に行つた桃華と会つてない、と言ふ事はそれ即ち彼等が万事屋には居なかつたと言ふ決定的な証拠である。

「もう一度聞いわ。アンタ達、いったい何処行つてたの？」

「こ、ゴメンなさい！！」

さらに強力になつた夏美の迫力に耐えられなくなつた冬樹とケロロはこれ以上は誤魔化しきれないと踏んで素直に頭を下げた。

「……銀さんが辻斬りをなんとかしてくれたから良かったものの、そうじゃなかつたらどうするつもりだったのよ？」

弟と我が家の居候の行動に呆れて溜め息を吐いてから夏美は彼等を叱る。

「だ、だつて、『侍はできない約束はしない』つて、銀さん言つてたから……」

「何処で待つても同じだと思つて……」

姉に威圧されすつかり小さくなつた冬樹とケロロがぼそぼそと銀

さんに付いて行った理由を告げる。

居ても立っても居られなかった二人の気持ちは分からなくはないけど、どうしてじっとしてられないのかしら？

……まあそれが良いところと言っても良いのかもしれないけど、と心の中でぼやきつつまた夏美は呆れて溜め息を吐く。

「……ところで九兵衛殿は？」

ここでふと呪いが解けて元気になったであろう九兵衛さんの事が気になったケロロが尋ねる。

「九兵衛さんなら一旦帰って家の人を安心させてくるって言ったけど」

「そっかぁ……」

夏美が九兵衛さんの行動を告げてケロロの質問に答えると感慨深そうに冬樹が呟く。

元気になった九兵衛さんの顔を一目見てみたかったのもあるだろうが、『家の人を安心させる』と言う言葉が何より気になったのだろう。

決して銀さん達の事を信頼してない訳じゃないのだが、向こうで待つ母親が自分達の事を今も心配していると思うとどうしても気になってしまうのだ。

「……大丈夫ですよ！ 皆さんが向こうに帰るまでは僕達万事屋が必ず皆さんをお護りしますから！」

「その通りアル！ 私達に任せれば万事解決ネ！」

そんな冬樹の心情を察したのか、新八と神楽が堂々と胸を張って告げるとケロロ達は全員笑顔を作る事で信頼していると返した。

同時刻、満月の月明かりに照らされる大きな船の甲板の上。

「妖刀『黒月』が折られちゃったって本当ツスか、晋助様！！」

「江戸を焦土にできるほどの代物だったと言うのに残念ですねえ」

何処で聞いてきた情報なのかは謎だが、桃色の丈の短い着物を着て綺麗なへそや脚線美を外気に晒すサイドテールの美女となんだかいろんな意味でいっちゃった顔の男が本当に残念そうに呟く。

「しかし、その割には随分と嬉しそうでござるな。晋助？」

サングラスにヘッドホン、青い革ジャンの現代風な格好で三味線を背負う男が晋助、そう高杉に言う。

「ああ。『黒月』と千兵衛以上に面白エものを見てきたからな」

高杉は彼等に背を向けながら煙管から吸った煙をふうくと吐き出し、口元を吊り上げくつくと不気味に笑ってから告げると

「万斉、また子、変平太。お前等は銀時達の近くに居るガキ共を見張れ」

サングラスにヘッドホン、青い革ジャンの現代風な格好で三味線を背負う男、人斬りと恐れられる剣豪河上かわかみ 万斉ばんさいと桃色の丈の短い着物を着て綺麗なへそや脚線美を外気に晒すサイドテールの美女、紅い弾丸と恐れられる拳銃使い来島きしま また子こ、そしてなんだかいろんな意味でいっちゃった顔の男、変人謀略家武市たけち 変平太へんぺいたの三人に指示を出す。

「ええええ！？ あのチャイナ娘と眼鏡のガキツスか！？」

「それはそれでそえられるものが……」

また子が以前顔を合わせた事がある神楽と新八の事を嫌そうに口にするると武市は妙な事を言い出すので

「死んで下さい武市変態」

「変態じゃないから先輩だから」

また子が冷たく注意すると武市も一言注意する。

「違エよ、今まで一度も見た事の無エガキだった。一目見ればすぐにピンと来る」

そこで高杉がまた子の言った奴じゃない事を報せると

「その子どもは女の子でしたか、男の子でしたか？ 場合によっては何よりも重要な情報なんですけど」

「晋助様、このロリコンぶっ殺して良いツスか？ うざくてうざく

てしょうがねーんすけど」

「ロリコンじゃないフェミニストです」

武市の異様な食いつきぶりに冗談抜きで気持ち悪くなったまた子が顔に怒りマークを浮かべて高杉に武市を殺して良いかどうか質問すると武市はまた一言注意する。

「晋助、何故監視を？」

仲間が馬鹿やってるのを無視して一人真面目に問う万斉。

「面白エものを見てきたは良いが、何が起こしたのかまではよく分からなくてな」

「なるほど。その原因とやらを探って持って来れば良いのでござるな」

高杉が見てきた情報をありのまま教えると万斉は高杉の考えを察して告げる。

「察しが早くて助かる。だが、あくまで見張るだけだ。手は出すなよ」

「了解ッス！」

高杉は先程指名した三人にさらに詳しい指示を出すとまた子は元気の良い返事をした。

その日の翌日。ケロ口達が『銀魂』の世界に来て十三日目。

「ん、んん……」

千兵衛がゆっくりと眼を開けると天井が視界に入ってきた。

そのまま寝惚け眼で天井を見ながら数回瞬きをすると、昨日起こった事を思い出し慌ててガバツと上体を起こす。

「……ここは……」

首を振って周囲を見渡すとそこは襖と障子に囲まれた八畳の部屋のようにだった。

自分の下半身が畳の上に敷かれた蒲団の中にあつた事からどうや

ら自分は助けられて何処かの家の一室に寝かされているのだと千兵衛は察した。

「……だが、何故俺は……。千兵衛がある事を気にしていると……眼が覚めたか？」

何時の頃からかその部屋に居た近藤さんが千兵衛がちゃんと起きたかどうか声をかけて確認する。

「お前は一昨日の……」

近藤さんはゆっくりと千兵衛の近くに歩み寄ると刀を腰から外して自分のすぐ傍に置き正座で座った。

それを見て千兵衛はこの目の前の男に敵意は無いと見て安心して警戒心を解いた。

武士が正座で座るのは相手に対し警戒心が無い時だけである。

何故なら相手に不意打ちされたら、正座ではすぐに立って反撃できないからだ。

つまり、正座で座った近藤さんは丸腰で敵意など無いと言っているのと同じなのだ。

尤も、今の千兵衛は不意打ち以前に武器になるものなど何も持っていないのだが。

「真選組局長、近藤 勲だ。よろしくな！」

見覚えのある顔を見て千兵衛がそう呟くと近藤さんは千兵衛に二カツと歯を見せながら無邪気な子どものように笑って自己紹介する。

「事情は全て万事屋から聞いた。大変だったな……」

「万事屋……？」

「おお、そうだな。銀髪の男とでも言えば分かるか？」

「ああ、あの……」

近藤さんと『万事屋』と言う聞き覚えの無い言葉について短いやりとりをすると少し間を空けて

「……なんで俺は生きてるんだ？」

千兵衛が近藤さんに先程気になった事を尋ねてみる。

「俺達の知り合いに凄い力を持った天人あまんとの赤ん坊が居てな。そいつ

の力で……」

近藤さんが笑いながら千兵衛を助けた『方法』を語っていると

「そうじゃねエ。なんで俺を、たくさんの人の命を奪った辻斬りをアイツ等は助けたんだ……？」

千兵衛がなんで銀さん達が自分を救ったのか、その『理由』を質問した。

昨日のあの時、俺が死を望んだのは己の生き方に疲れたと言う意味合いも確かにあるが、それと同時に、今まで殺した連中の為にも死んで詫びようと思っただからだ。

あの銀髪ならそれも見抜いていた筈。なのに何故……。

「アイツ等にとってお前が元辻斬りだろーが妖刀の呪いと果敢に戦った戦士だろーが関係無エよ。」

目の前で苦しむ人が居たから助けた、ただそれだけさ」

千兵衛の問いに近藤さんはあの場に居た銀さん達の気持ちを用意して答える。

アイツ等……。千兵衛は昨日戦った男と一緒に居た連中の顔思い浮かべ、複雑な表情を作る。

「お前、俺に何の用だ？俺を捕まえに来たのか？」

近藤さんは真選組のトップ、つまりは警察の一員だ。

近藤さんがここに来た用件を辻斬りだった自分を捕まえに来たのかと千兵衛は思ったのだ。

「いや、万事屋の話聞いて気が変わった」

銀さんから聞いた千兵衛の境遇に同情したのだろつ。近藤さんが

目の前の男を捕まえないとつきり告げると

「……お前、真選組に、俺達の仲間に入らないか？」

いきなり千兵衛を真選組に勧誘し始めた。

「……俺はお前の仲間も斬った辻斬りだぞ。俺を仲間にしたらお前の仲間が黙ってない筈だ」

「まあ最初はそうかもしれんが何、俺の仲間達ならすぐに納得してくれるさ。大丈夫だよ」

正直な話、千兵衛にとって近藤さんの勧誘はとても嬉しかった。できるなら素直に「はい」と言いたかったのだが、生憎自分は人斬りだ。

それも近藤さんの仲間を斬った男とあつては彼の仲間の誰かが自分や自分を仲間にした近藤さんに文句を付けてくるのではないか？

そのような心配した千兵衛が自分の過去を理由に断ろうとするが、近藤さんは仲間にする気満々で聞く耳を持たなかった。

「それに、お前行くあても帰る場所も無いんだろ？ 屯所は男だらけで正直むさ苦しいかもしれんが、どうだ？」

近藤さんの真つ直ぐな姿勢と真つ直ぐな優しさに打ち拉がれた千兵衛がその勧誘に対する答えを言おうとしたその時

「入っても良いか？」

九兵衛さんが一言断りを入れてその部屋に入って来た。

「……話の途中だったかな」

「いや、良さ。俺の用件はもう言ったからな」

「そうか……」

近藤さんと千兵衛の様子から見て話の邪魔をしたのかと思った九兵衛さんは申し訳無さそうにそう言つと立ったまま千兵衛と眼を合わせる。

斬った相手と斬られた相手がしばらく黙つてお互いの眼を見つめていると

「事情は銀時達から聞いた」

「……… だつたら何だ？」

近藤さんも言つたような台詞を九兵衛さんも言つと、千兵衛はどんな事をされても良いよう覚悟して堂々と用件を尋ねる。

「……… 君の力になれなくてすまなかつた」

九兵衛さんの口から出た言葉は千兵衛の予想を大きく裏切つた。

千兵衛は己の耳を疑つた。

何言つてるんだよ。俺はお前を斬つたんだぞ。殺そうとしたんだぞ。

なのに、なんで……なんでお前が謝るんだよ。謝るのは俺の方なのに……。

憎しみが、妬みが、寂しさが、辛さが、苦しみが、罪悪感が、虚無感が、今まで彼が一身に背負ってきたもの全て一斉に軽くなっていく。

空っぽだった器に溢れんばかりの優しさが注がれる。

「……こちらこそ、本当にすまなかった……！！」

誠心誠意を込めて土下座して、今まで一番言いたかった言葉を告げる千兵衛。

器はあつと言う間にいっぱいになったと言っのにまだ注がれ続け、器に入り切らなくなつた雫が溢れてぼろぼろと零れ落ちる。

零れ落ちた雫が畳を濡らす。肩を震わせてしゃくり上げる男の聲が静かに部屋に響き渡る。

満ち足りる（後書き）

ども、白黒仮面です。

これで辻斬り千兵衛編終了です。

ぶっちゃけちょくつと変更したただけで全体としてはリメイク前とだいたい同じだから結構楽しかったんだけどネ。

ま、とにかく、今後の千兵衛さんの行動、黒月の行方、そして銀さん達がいつたいたいと言う騒動に巻き込まれるのか？

今後のケロ銀にご期待ください。

ある男の記憶（前書き）

『ちよこつと銀八先生！』

銀八「はい、獄水さんからの質問。『ケロ銀のキャラの中で誰が影が薄い？』

やっぱり新八、ジミー、青の三人ですね。

でもジミーはそもそも真選組メインのお話が今のところ少ないですし、青は最近に至ってはメツチャ目立ってるし、今のところ一番影が薄いのは新八でしょうか。

ツッコミが取り得なのに最近はや赤にツッコミを取られてほとんど目立ってませんから。

では次、mega12さんからの質問。

『ギロロに質問です。銀魂キャラクターのこの3人の内の誰かと戦うとしたら誰と戦いたいですか、理由も教えてください。』

？白夜叉 銀時

？鬼の副長 土方

？狂乱の貴公子 桂』

じゃ赤、よろしくー」

ギロロ「銀時は結構一緒に居るがなかなか侮れんし、土方は以前の騒動で興味を持ったから選ぶのなら土方か銀時だな。

桂もなかなか手強そうなんだが……どうも、な。

どちらかと聞かれると……銀時は見てて誰かに似ているような気がしてたまにイラつく時があるし、土方は土方で同じくらい興味があるし……。

……今のところは土方かな」

銀ハ「ハイ、クソ真面目でつまらない回答ありがとうございました。
獄水さん、mega12さん、廊下に立ってなさい！」

ある男の記憶

「なんであんな人と結婚しちゃったのかしら」

それは母親の口癖だった。

その子どもの父親は名声の事しか頭に無いろくでなしだった。

お偉いさんに頭を下げ、稼いだ金は家には回さずに地位を確立する為にすり減らす。

そんな家庭を一切顧みない夫の姿を見た母親は決まってそう言うのだ。

その子どもが五歳の頃。

いつも辛そうな母を見て父に憎しみを抱いていたその子どもは表札に長い棒切れを使って悪戯をしていると

「何をしている!!」

帰ってきた父に見つかってしまった。家で絶対的な存在に見つかり子どもは畏縮する。

父親はその子どもを連れて家の中に入ると台所から包丁を持ってきてその包丁で子どもの顔を切りつけた。

左目と鼻を横切る大きな切り傷が顔に付き、傷から血が溢れ出す。

「うわアアアアアア!!!!」

痛そうに傷を手で押さえる子ども。

「お前が悪戯していたあれを何だと思っている！ 我が家の、桜田家の名が刻まれたモノだぞ！」

「アンタ何してんだい!!」

「この分からず屋に躡をしてやったんだ！」

「あたしから言わせればアンタの方が分からず屋だよ！ …… 大丈夫かい？」

その子どもの母が父と口論しながら子どもを心配する。

「…… 大丈夫」

母にこれ以上の心配はかけさせまいと子どもは痛いのを我慢して
そう言うと

「失明したらどうするんだい!？」

「それならそれで自分がやった事の重さが分かる筈だ」

「それはアンタだろ!! 息子の躰だけにこんな事する輩他に居ないよ!!」

母は再び父と口論する。そして最後にはいつもの言葉を吐くのだ。
「ホント、なんであんな奴と結婚しちゃったのかしら」
顔に傷を負ったその子どもは辛うじて失明だけは避けた。

その子どもが九歳の頃。

「人斬りが来たぞー!」

「これでもくらえー!」

近所に住む悪ガキがその子どもを人斬りと見立てて石を投げ付ける。
る。

「あの子は危ないから近付いたらダメよ」

ある子どもの親は自分の子どもとその子どもを遠ざける。

顔の大きな傷、それだけの理由で。

その子どもは家に帰るといつも部屋の隅で声を殺して泣いた。

そんなその子どもに母親はそつと近付き頭を撫でた。

その子どもが十四歳の頃。

「これを我が家の家宝にする!」

父親が何処からか刀を買ってきた。

「アンタまた妙なものを買ってきて……。そんなものに金回すのなら家に回してくれよ」

「そんなものとは何だ!」

父と母が口喧嘩をする中、その子どもはその刀をじっと見つめる。

その刀が来て数日後、母親が原因不明の奇病に罹った。

いろんな医者が入れ替わりに家に訪れ母を診るが結局どの医者もさじを投げた。

日に日に痩せ衰えていく母親。その子どもはどうにもできない自分を恥じた。

「……どうやら私もここまでみたいね。ホント、なんであんな人と結婚したんだろ……。」

千兵衛、どんなに辛くても生きて……。生きていればいつか必ず良い事があるから……。

母さんはいつまでも貴方の味方……よ」

それが母親の最期の言葉だった。

母の最期を看取ったその子どもは一日一日を懸命に生きた。母の言葉だけを信じて。

しかし、相変わらず変わる事の無い父や周囲の態度にその子どもは日々憎しみを募らせていく。

そして運命の日。その子どもは父が家宝にと買ってきた刀をこっそり拝借する。

その刀を腰に差すと体中に力が漲っていった。刀を鞘から抜き放つと漆黒の刀身が姿を現した。

この世の闇を全て内包したような黒。それに魅了され、今ならどんな奴にも負けないと思った。

……それがいけなかった。気が付けば周りは血の海だった。

人間だったものは醜い姿で道端に転がり、まるで怪物が暴れた跡

れた子どもはしばらく歩いた後、地面に寝そべった。

正直な話、憎い連中に復讐できて清々したのも事実だ。しかし、それ以上に彼の心を占めていたのは人を殺したと言う罪悪感だった。やってしまった以上、どうしようも無い。どうやって罪を贖おうか……。

子どもがそんな事を考えているとぐるる……と猛獣の唸り声が聞こえてきた。

子どもは立ち上がって唸り声が聞こえてきた方向に眼を向けるとそこには自分の身長のお二倍はあろうかと思う大きな熊が居た。

子どもに付いた返り血の匂いにも誘われて来たのだろう。子どもは恐怖で腰を抜かす。

熊は一切躊躇う事無く真っ直ぐに子どもに襲いかかった。子どもは縮こまって怯える。

だが、なかなか痛みが来なかった。もういつ傷を負ってもおかしくないのに熊は一向に攻撃してこなかった。

恐る恐る子どもが眼を開けると熊がゆっくりと地面に倒れた。その背中には、見覚えのある漆黒の刀身の刀が刺さっていた。

誰かが助けてくれたのだろうか。しかし、仮に運良く生き延びていたとして人を殺した自分を助けるのはどうもおかしい。ではいったい誰がこの忌々しい刀を持って来たのだろうか？

分からない事が多かったが、今後もこう言う事があるかも知れないと思いついてその刀を持って子どもは何処かへと消えていった。

子どもはしばらく一人で過ごした。

食事は熊や猪の肉や魚を原始的なやり方や旅人や町の店からくすねたマツチで起こした火で焼いたもので済ませた。

飲み水は近くに川や湖、海がある時はそれを飲んだが、それらが無い時は水溜りなどの泥水を飲んだ。

綺麗に洗淨された水を常に補給できる訳では無い為、下痢になる事が多々あった。

帰る場所が無いが行くあても無いので適当に移動した。

雨の日は木の下で雨宿りして、雪の日は洞窟の中で寒さに耐えた。たまに崖から落ちた事もあった。それでも運良く生き延びた。

時間が経つにつれ子どもは男へと変わっていった。

その男が十九歳の頃。男は江戸で一旗揚げようとする主人の下で働く事にした。

野生の中で培った勘と度胸、そして何時の間にか磨かれていた剣術で襲い来る敵を一人、また一人と倒してゆく。

その高い実力が認められ、主人や仲間からも気に入られた。

……だが、その時間は長くは続かなかった。

ある日、屋敷から火の手が上がった。その男が奉公していた家だ。炎は全てを飲み込み焼いていく。その男には炎はどうしようもできず、それをただ黙って見つめるしかなかった。

結局、その主人や仲間はその業火に飲まれ、真っ黒に焦げて変わり果てた姿で発見された。

その後もめげずに様々な職を転々としたが、その先々で知り合った連中が落下してきた鉄骨に潰されたり、原因不明の妙な病に罹ったりと不幸で不可解な出来事に巻き込まれ死に至るので一日二日もたなかった。

次から次へと知り合いが事故に巻き込まれるので流石におかしいと思ったその男は昔からずっと持っている漆黒の刀身の刀を鍛冶屋に見てもらった。

どうやらこれは相当ヤバイ妖刀らしく、すぐになんとかした方が良いと言われた。

その鍛冶屋も翌日には原因不明の病で急に亡くなり、言われた通

りなんとかしようと思つた。陰陽師の噂を聞き付け頼んでみたが、やはり結果は同じ。

数日、早ければ数刻の後に妙な事故に巻き込まれて死んでしまった。

止められぬ惨劇に巻き込まれ悲惨な姿になる者達を見て男は心を痛めた。

何時の日か男はとうとう刀を捨てて逃げ出した。

刀を捨てたところから何十キロも離れた茶屋で一休みしているとあの刀が、何時の間にか近くに立てかけてあつたのを見つけた。確かに捨てた筈、それなのにだ。

そう言えば昔も似たような事があつたと思ひ出し、今度は海に沈め、土に埋め、遠くへと逃げた。

それでも当たり前のように刀は自分の近くから離れようとしなかつた。

その男はならばと刀を壊してくれる輩を求めて旅に出た。

当時は攘夷戦争の真っ最中。単独で戦場にも行ってみた。

しかし数十分後、その戦場に立っていたのは漆黒の刀を持った男だけだつた。

その後もいろんな場所を巡ってみたが、何一つ変わらなかつた。

自分と関わつた輩が死んでいく。元凶である刀は依然として自分の腰にある。

何処まで行つても一人きり、何時まで経つても一人きり。

それでも死ぬ気には到底なれなかつた。母だけは、母が残した言葉だけは何か何でも信じたかつた。

それを変える為、自分でも分らないくらいの距離を歩き、何百もの川を越え、山を越え、本来なら心打たれような素敵な景色をいくつも目にした。

それでも男の心は満たなかつた。

人から避けて孤独に打ちひしがれ、周りでのうのうと笑って生きる連中が羨ましいと素直に想いながら、妬ましいと想った。

その衝動のまま人を斬ったがやはり変わらず、延々と同じ事を繰り返し、何一つ変えられない己を恥じた。

ある日出会った銀色の侍に漆黒の刀身の刀を折られるまでは。

ある男の記憶（後書き）

と言う訳で、今回は千兵衛さんの過去でしたー。

どーも、白黒仮面です。

最近、急に冷えてきて風邪気味なのかくしゃみが止まりません。体もなんかだるい……と言っても、年がら年中だるいですが。とにかく、皆さんはくれぐれも体調管理に注意して下さいまし。

次回は千兵衛さんのその後を予定しております。意外な千兵衛さんの特徴が明らかにならな！？
ぜひ楽しみにして下さい。

辻斬りのその後 一日目（前書き）

『ちよこつと銀八先生！』

銀八「久しぶりに感想を書いたサディストさんからの質問。

『武市に質問。神楽との再会と、今後出会うかもしれない少女達（ケロ口組）との出会い……どっちが楽しみ？

また子に質問。上の質問に真剣に答える武市変態をどう思う？ 正直に答えてくれ』

では鬼兵隊の二人、よろしくー」

武市「紅桜の時に会ったあの女の子。可愛かったですねえ」。

朱色の髪を団子にして纏めた姿は本当に可愛らしかったです。

それから青くて大きな瞳は吸い込まれそうでしたね。

細くて小さいあの体はこれからの成長に期待できそうで非常に良い。

それに夜兔族故の綺麗な白い肌はもう最高ですね。赤いチャイナ服は彼女の為にあるようなものですよ。

ぜひとももう一度会ってみたいですが、まだ見ぬ美少女も捨てがたい……。

どっちと言わず両方じゃいけませんかねえ？」

また子「死んでください変態」

銀八「こんな感じです。と言う訳でサディストさん、廊下に立ってなさい！」

辻斬りのその後 一日目

近藤さんに真選組に入隊する旨を伝えた後、近藤さんと九兵衛さんは用事が済んだからかさつさと部屋から出て行ってしまった。

……もう少し話をしたかったが、二人にもいろいろ用事があるんだろう。仕方ない。

と言う事で、一人になってやる事の無かった俺は寝転がって懐から某最新の携帯ゲーム機を取り出し現在攻略中のゲームを始めようとしたところに

「あら、起きてたんですか」

と言いながら茶髪でポニーテールの美女が入って来た。三日前の夜に九兵衛さんと一緒に居たあの人だ。

「その節はどうもご迷惑をおかけしました」

「良いわよ、そんな。貴方も苦しんでたんだもの、おあいこよ」

「ありがとうございます。……えーっと……」

「志村 妙と言います」

「あ、俺は桜田 千兵衛と言います。以後よろしくお願いします」
俺がお妙さんに謝罪するとお妙さんから優しい言葉が返ってきたので再度俺は頭を下げた。

……こうして見ると本当に綺麗な人だ。モてるんだろうな……。

そついや、女の人と話をするのって母さん以来だっけ。あ、ヤベ、何を話したら良いかさっぱり分からねエ……。

俺が一人で勝手にドキドキして視線をそらしているとぐうぐうと俺の腹の音が鳴った。

「あら、お腹が空いてるみたいですね」

「そ、そう言えば今日は何も食べてないな……」

「良かったら卵焼き食べますか？」

卵焼きか……懐かしいな。

『黒月』を腰に差してからは人から避けて生きてたから、当然キッ

チンとか食材などある訳が無い。

熊とか猪の肉とか魚とかキノコとか山菜とかを獲ってきて原始的な方法とかで火を起こして焼いて食ってたから、今までまともな食事はほとんどしてない。

「じゃあお言葉に甘えて」

特に断る理由など無いので、俺はお妙さんの厚意を受け取る事にした。

数分後、卵焼きが乗っていると見られる皿を持って現れたお妙さん。

『と見られる』と言うのは正直、それは卵焼きには到底見えなかったからだ。

真っ黒に焦げた何か。もう炭と言っても良いんじゃないだろうか。

「……あの、お妙さん。これは……」

「卵焼きです」

念のために俺はお妙さんにこれは何なのか尋ねるが、返って来た言葉は『卵焼き』ただそれだけだった。

……今まで一番まともじゃねエエエエエエエエエエ！！！！

これじゃあ料理された卵が可愛そうだ。っつーか本当にこれ卵！？ヤバイ、熊とか猪の肉の方がまだマシに見える。

しかし、せつかくのお妙さんの御厚意、無下に扱う訳にもいくまい千兵衛。

俺は箸で恐る恐る真っ黒に焦げた何かを掴み、顔に寄せる。

……やはり、何処からどう見ても卵には見えない。

それでも視力は良い方だ。その俺がそう言うんだから絶対卵じゃない。

少し躊躇いつつも、意を決した俺はそれを口の中に放り込む。

じやりじやりとした最悪の触感、さくさくと言う卵焼きを噛んでいるとは思えないおかしな音。マズイと言うかヤバイ、ヤバ過ぎる。なんとかそれを飲み込む事はできたが、もうお腹の調子がおかし

い。大丈夫だろうか。

鏡とか無いから見る事はできないけど、たぶん今の俺の顔は文字通り真っ青なのだろう。

「おわかりありますよ。どうですか？」

「……いいえ、結構です……」

そしてこの人、まだ真っ黒に焦げた何かを俺に食べせようとする。顔は良くても、これじゃあ将来の旦那がかわいそうだ。

お妙さんのおかげでお腹がさらに空いたまま、この家をふらついていると

「おお、千兵衛！ ちょうど良かった、これから俺と一緒に来い！」

近藤さんと出くわした。今まで人と付き合う事がほとんど無かったので名前を呼ばれると嬉しいんだけど、なんだかくすぐつたい。予定なんてものも俺には無いので俺は近藤さんに付いて行く事にした。

この家を出るとすぐ傍に近藤さんが呼んだらしいパトカーが止まっていた。

そのパトカーに乗って俺達は何処かへ向かう。近藤さんの話だとこれから警察庁長官に会いに行つて俺が真選組に入隊する許可を貰いに行くそうだ。

警察庁長官、か。警察で一番偉い人なんだよな。なんだか会いたくないな……。

辻斬りなんて馬鹿な真似をした俺だ。流石にいきなり斬られたり銃弾ぶつ放されたりはしないとは思うけど、やっぱり怖い。

……まあ、それはそれで別に良いとして。なんだか、気持ち悪くなってきた……。

「緊張してるのか千兵衛？」

松平のとつつあんはちょっとおかしいところもあるが良い人だよ。

それに俺も居るんだ。

大丈夫だ、自信を持って！」

「い、いや。そうじゃなくて。なんだか気持ち悪くて……」

俺の様子を見た近藤さんが緊張していると思って声をかけるがそうではないと俺は返す。

「え、ちよ、何？ お前酔ったの？」

「あー、そうか、この気持ち悪さは酔ったからなのか……うぶっ、ヤベ、吐きそう……」

「ちよ、山崎！ ビニール袋とか無エの！？」

「知りませんよそんな事！ 俺運転中ですから局長が探してくださいよ！」

「とにかく何処でも良いから早く止まってくれ！ 窓開ける窓！

千兵衛、もうちよっと我慢しろよ！」

俺が酔った事で車内が軽くパニックに陥り、車が揺れる。その揺れがまた俺の気持ち悪さに拍車を掛けた。

「うえええええ……」

狭い路地裏で腰を低くして胃の中のを全部吐き出す。

まあ今日食べたものはお妙さんの卵焼きだけなのでむしろ大助かりなのかもしれない。

胃酸のキツイ匂いがまた俺に吐き気を誘う。

「お前、車に乗るのは初めてか？」

「あ、ああ。『黒月』があつた頃はタクシー乗ったら事故りそうだったし、電車に乗ったらなんか起きそうだったし……」

「な、なるほど……」

背中を摩る近藤さんは俺の言葉を聞いて納得する。妖刀『黒月』とはそれほど恐ろしいものなのだ。

「まだ結構距離があるけど大丈夫か？」

「たぶん大丈夫……」

近藤さんに心配させたくない一心でそう言ったのは良かったが、

結局また酔って迷惑をかけてしまった。

トラブルが起きてしまったものの、ようやく警察庁に到着した俺は近藤さんと一緒に警察庁長官が居る部屋にやって来た。

社長が座るような黒い革の回転椅子にどかっと座って目の前にある大きな机に足を乗つけると言う豪快でだらしない姿勢の、オールバックでサングラスをかけたこの人が警察庁長官、まつだいら松平 かたくりこ片栗虎さんだそうだ。ヤクザ……じゃないよね？

「あゝ、何しに来た近藤？」

「ちよ、ちよっと話があつてきたんだ、とつつあん」

「話イ？」

近藤さんが話を切り出すと俺に眼をやる。『お前が言え』と言う合図のようだ。

「お願いします！ 俺を真選組に入れてください！！」

俺は深く頭を下げてお願いする。

「近藤。誰だ、コイツは？」

「辻斬りで有名になったあの桜田 千兵衛だ」

「ああ、あの……」

「これからは気持ちを改め人の為に働きたいんです！！ お願いします！！」

「俺からも頼むよ、とつつあん。コイツは人を斬りたくて人を斬った訳じゃないんだ。」

コイツは罪も悔いているし、何よりそれ以上の苦しみを味わっている。だから頼むよとつつあん！！」

「そうは言つがよ、いったい何人コイツの被害に遭ったと思つてんだ」

本来刑務所行き、下手したら死刑のところを配下の組織である真選組に入れてくれとお願いするんだ。そう簡単に事が運ぶ訳が無い。

それだけの事をしたと覚悟はしていたが、いざそうになると少し心苦しいな……。

「……まあ良いけど」

「……え？」

「い、良いのか、とつつあん!？」

「構わねーよ。真選組に誰が入るうが変わらねーって。つつーかどうだって良いし」

「……え、ええええ!？」

「良かったな、千兵衛!」

「い、いや、本当に良いんですか？ すっごい適当でしたけど、本当に良いんですか？」

「とつつあんが言うんだ、大丈夫だって」

「いや、だから心配なんですけど……」

あまりに呆気無く許可が下りるので俺は少し心配になった。

「千兵衛、お前に一言忠告しておくがな、俺の部下となったからには妙な事するんじゃないぞ。」

妙な事をしてかしたその日にゃあ俺ア飛んで行ってお前のその頭にド弾ぶち込むぞい!」

松平さんが俺に一言忠告すると懐から拳銃を取り出し、言葉通り頭目掛けて銃弾をぶつ放した。

「だアアアアアアア!?!?!」

俺は慌ててその銃弾をかわす。

「なんで今撃つたの!？ 俺まだアンタの配下になってないだろ!？」

「俺が許可したその瞬間からお前は俺の部下だ」

「嬉しいような悲しいような……。俺前科はあるけど、まだ妙な事してないよ!？」

「警告だ、警告。とりあえず一発当たつとけ」

「おわアアアアアア!?!?!」

俺が不満を声高になつて叫ぶと松平さんは滅茶苦茶な事言つて自

分の行為を正当化し、ついでに一発撃ってきた。

「一発当たつとけて、当たつたら危ない位置に飛んで来るんですけど！」

「こんなの警告じゃねーよ！！ おかしい！！ この流れでの発砲は絶対おかしい！！」

近藤さん、この人本当に警察庁長官！？ ヤクザの間違いじゃないの！？ それとも俺の言っている事が何か間違ってますか！？」

俺は思っていた事全て叫んでさらけ出す。

「いや、千兵衛の言う通りだ。間違いは無エよ」

「じゃあ止めてよ！！」

しばらく、俺は松平のとつとつあんから逃げ回った。

無事……かどつかはともかく真選組に入る事になった俺は近藤さんに屯所を案内されている。

屯所に居る隊士達の凄い視線が体にぐさぐさと突き刺さる。早くなんとかせねば明日にでも襲いかかってきそうで恐い。

「ここがお前の部屋だ。さて、俺達真選組には一番隊から十番隊まで隊があるんだが……」

「そんなん何処でも良いよ。何処も同じだろ」

「そうか、じゃあ適当に割り当てておくよ」

近藤さんが俺の部屋に案内するとどの隊に所属するか訊くので俺は適当に答えた。

「で刀の事なんだが……どうする？」

真選組の仕事がどう言うものかよく分からんが大方攘夷志士とつ捕まえるみたいな感じだろう。

となれば戦う為の武器が、刀が必要になる。近藤さんも他の隊士達も腰に差してたしな。

先日忌々しいあの刀が折れたせいで今の俺の腰には何も無い。

あの刀を惜しんでいる訳では決してないが、今までであったものが無いとどうにも落ち着かない。

「すぐにでも買ってやるよ」

「だが金はあるのか？」

俺が刀を買ってくると言うことと近藤さんはお金の心配をする。

そりゃ今まで辻斬りしてたから金は無いだろうと思っっているんだろ。普通ならそうだ。

「こつ見えても金は結構あるぞ」

だが生憎、俺には金がある。それもそう簡単には使い切れないほどの金が、な。

「いやちよつと待て。なんでお前金があるんだ？」

「気まぐれに買った宝くじが当たった」

いやー、あん時はビビったよ、マジで。ゲームとか買っても使い切れなかったからまだ残ってるよ。

「あ、そう……。つーか、その宝くじを買った金は？」

「……斬った奴の財布から抜き取ったものです。」

で、でも！ 全部じゃねーぞ、ちよつとだけ！ 本当にちよつとだけだから！

近藤さんの質問を聞いて申し訳無さそうに返事する。

悪いとは思ったが、あの頃の俺が金を得るにはそれしかなかったんだよ。

近くのコンビニのATMで下ろしたお金を財布に入れ、とりあえずさっさと刀買ったちゃおうと街を散歩していると、ぐうぐうとお腹がご飯をおねだりする。

そう言えば朝はアレだったし、まともなもの食ってねーな……。

と言う事で急遽近くにあったラーメン屋で食事をする事にした。

店には先客が居たようでカウンターの椅子に黒い長髪の……男か

な、が一人と白い被り物を被った何とも言えない何かが座っていた。白い被り物はびっくりして思わず二度見してしまった。

「いらっしやいー!」

「うお! また結構な美人だ! 店主かな? ヤベーよ、目のやり場がねーよ。」

何処見れば良いんだよ、と思い壁にかかっているメニューに俺は視線を向けると店主と見られる女性はコップに入れた水を俺に出す。ラーメン、チャーシューメンといろんなラーメン屋らしいメニューが並ぶ中、『そば』の二文字を見つけ俺は眼を丸くした。

ラーメン屋で蕎麦って、変わってるな! ……。

「何にする?」

「あー……じゃあラーメンを一つ!」

俺の注文を聞いた店主と見られる女性は元気良く返事するとテキパキと調理を進めていき

「はい、ラーメン一丁!」

かなりの早さでラーメンが入った器を俺に差し出した。

朝はぬか喜びだったけど、今日の前にあるラーメンは真正銘のラーメンだ! うわー、懐かしい! ……。

パキと箸を割り、ずるると麺をすすり、ごくんと飲み込む。…

…うめエ。あ、なんか泣けてきた。

「……そんなに美味しかったかい?」

本当に涙が出てたのか、店主と見られる女性がちよつとだけ引いたような感じで俺に声をかける。

朝食が最悪だったからこの感動は仕方ない。

「ええ、まあ……。ちよつと俺にもいろいろ事情がありましたね…

…」

「ふん……」

「あ、おかわりしても良いですか?」

「はいよ!」

ラーメンは本当に美味しかったので俺はおかわりを頼んだ。店主

と見られる女性は嬉しそうに返事する。

その一方で、さつきから黒い長髪の男がじっと俺を見ているので……さつきから何をじろじろ見てるんだ？」

と俺は声をかけてみた。

「いや、何やら只者ではない雰囲気を感じたのでな」

「その白いのと一緒に居るアンタの方が只者ではないような気がするがな」

「白いのじゃないエリザベスだ」

「おおっと失敬、エリザベスさん」

『気にしてない』

俺とやりとりするこの男、なかなかに見える奴のようだ。あと若干うざそうな気がする。

そしてこの白い奴……もといエリザベスはプラカードで会話するようだ。絶対、あの白い被り物の中に誰が入ってるよね。

するとちようどラーメンの替え玉が出来上がったらしくラーメンがもう一度俺の前に置かれる。

「失礼だが名は？」

「桜田 千兵衛」

「ほう、『死神』とも謳われたあの……。千兵衛殿、ぜひその力を攘夷に役立ててもらえんか」

「その前にお前も名を名乗ったらどうだ？」

「お前じゃない、桂だ」

『桂』で有名な『攘夷』志士と言えば……。

「なるほど、貴殿が『狂乱の貴公子』と呼ばれる桂 小太郎殿が。御初にお目にかかる」

「ところで、千兵衛殿。刀はどうした？」

「ああ、あれね。ポツキリ折られまった。それで今は俺に相応しい刀求めて散歩中よ」

やはり『黒月』の方が有名なんだな……。ま、そりゃそうだよな。「それで桂さんよ。アンタの誘いなんだけど悪イが乗れねーや。生

憎俺には先客が居るんでね」

俺が桂の要求を断ると桂はしばらくじっと俺を見つめていたが

「……そうか。先客が居るのなら仕方ないな」

勝手に納得してすんなり諦めてくれた。

「幾松殿、勘定はここに置いておくぞ。じゃあ行くぞエリザベス」

桂はそう言っただけで先程まで座っていた席にお金を置いて白い被り物

……エリザベスと一緒に店から出ていった。

「『死神』なんて随分物騒な名前だね、アンタ。いったい何やってたんだい？」

彼等の背中を見届けた後、ちよつとのびかけていたラーメンをすすめる俺に店主と見られる、桂には幾松と呼ばれてた女性が声をかける。

話を聞かれていたみたいで彼女の声を聞く限りでは怖がっている様子は無さそうだが、俺が辻斬りやってた事バレたかな？ バレたよね？

「やりたくない事やってたら何時の間にかそんな物騒な名前が付けられてただけですよ。ホント、良い迷惑です」

彼女の質問に俺が悲しげにそう答えるとふん……、と鼻を鳴らしながら興味に満ちた眼で俺を見つめる。

み、見ないで！ そんな眼で俺を見ないで！ なんか恥ずかしい

！俺はなんとなく顔を逸らす。

「ま、店で暴れないなら別に良いけどさ。あ、そうそう私、幾松って言うの」

「俺は千兵衛って言います。よ、よろしく……」

「よろしく」

ラーメンを食べ終えた俺は刀匠を探してぶらり散歩を続ける。

そもそも、何故俺が妖刀『黒月』だけを扱っていたのかと言うと、

アイツ以外の刀はどう言う訳か一日ともたずに錆びて粉々になってしまう為長期間扱えなかったのが原因だ。

おそらくそれも『黒月』の呪いなのだろうが、今思えば俺は本当におっかない刀を腰に差していたのだと自覚する。

……そう言えばアイツはちゃんと消えたのだろうか。呪いが消えたから力は弱まったんだろが、ちゃんと『黒月』がこの世から消えたかどうかは俺にも分からない。

明日にでも探してみよう、と思いついてみると鍛冶屋らしい看板を見つけ中に入る。

そこには青い髪の女性の刀鍛冶が一人居た。

「……あ、いらっしやい」

刀鍛冶の女性が歓迎する。

また女性かよ。それも結構な別嬪。勘弁してくれよ。

って、いちいち異性だのなんだの意識するな！ 普通の人と同じように接すれば良いんだ！

……あれ、俺、普通の人といたいどうやって接していたっけ？

「あ、ども……」

とりあえず俺は一言挨拶して刀を一本ずつ見て回る。鞘から抜き角度を変えて、時には軽く振ってじっくりと観察する。

「……良い刀だな」

「……そ、そうかな？」

俺の口から正直な感想が零れる。鍛冶屋の女性は褒められて嬉しいの照れている。

……可愛い。って、いかんいかん。首を横にぶんぶん振って雑念を振り払う。

「たぶん……だけど、少なくとも俺はそう思うよ。」

アンタが打った刀からはなんっーかこっ、魂……とでも言うべきか？

なんかそう言うもんが込められてるように感じたんだよ。それこそ、アイツみてーな……な」

「アイツ……?」

「ああ、いや。こつちの話だ」

銀髪の侍を思い浮かべ、うっかり口にしてしまった言葉を無かった事のように訂正して

「よし! これにしよう。いくらだ?」

俺はこの人の刀を買う事にした。

「……お金は良いよ。持って行ってくれ」

「いやいや、そっちも商売でしょ? それにこのご時勢じゃ買ってくれる客とか少ないんじゃない?……」

「良いんだ。アンタみたいな人が私の刀を使ってくれるのならそれだけで嬉しいよ」

「そうは言われてもタダってのはね……。良い品にはそれ相応の代価を払わねーと」

「……じゃあ付け値で売るよ」

鍛冶屋の女性はタダだと言うが、それでは俺の気が済まない。

なので頑なに俺が払うと口にはしていると鍛冶屋の女性が折れて俺の希望の額で売ると告げる。

それを聞き、俺は懐から分厚い札束を鍛冶屋の女性に渡す。だいたい数十万はあると思う。あれ、百万だっけか? ま、いつか。

俺から金を受け取った鍛冶屋の女性は眼を丸くしていた。

刀を買って腰に差す俺が屯所に帰る頃にはすっかり夕方になっていた。

「おお、千兵衛!」

俺が屯所に帰って来ると近藤さんが声をかけてきた。あれ、昼間にもこんな流れ無かったっけ?

「これからお妙さんが働いているキャバクラに行くんだが一緒にどうだ!?」

「キャバクラ……?」

「今日は俺がおごつてやるからよ、どうだ!？」

キャバクラつてあれだろ、綺麗な女性がたくさん居るところだろ?

「……俺、大丈夫かな?」

「大丈夫大丈夫。じゃ、行くぞ!」

「え、ちよ、近藤さん!？」

行くと言った訳じゃないのに勝手に行く羽目になってしまった。

確かに用事とか予定とかそんなのは無いけど……。

そうして近藤さんに連れて来られたのはスナック『すまいる』。

店に入ると頭はちよんまげで服は洋装の店員さんが「お客様、誰をご指名ですか?」と尋ねるので「お妙さんで」近藤さんはそのように即答する。

「そちらのお客様は?」

ちよんまげの店員さんは今度は俺に訊いてきた。

「ここには初めて来ましたし、誰でも良いですよ」

適当に俺が返事するとちよんまげの店員さんは「かしこまりました」と言つて俺達を席へと案内する。

ヤベーよ、完全に別世界だよ。ちゃんと元の場所に帰れるのかな

……。俺、浮いてない?

俺達が席に着くと少ししてお妙さんと誰かがやって来た。

「お妙さアアアアアアアん!!!」

すると近藤さんが急に発狂してお妙さんに飛びかかった!

お妙さんは近藤さんの顔面に向けて渾身のストレートを放つ。お妙さんの拳をもろに顔面に受けた近藤さんはどうつと店の床に倒れた。何をしてるんだ、この人は……。

「あら、千兵衛さん。いらっしやい」

人を殴り倒した後だと言つのに満面の笑みで俺を歓迎するお妙さん。

「あ、ど、ども……」

俺はその笑顔に引きながらも素直に魅了されどんな反応をしたら良いのか迷った。

「え、なになに、妙の知り合い？」

「あ、いえ、ちよつといろいろあつたんですよ、いろいろと……」

短髪の美女が俺とお妙さんのやりとりを見て何か関係があると推測したらしく、興味津々の様子で質問する。

お妙さんの友人を斬りました、なんて馬鹿げた事は口が裂けても言えない。

「そう言えば初めてだね、お客さん。私おりようつて言うの、よろしく」

「さ、桜田 千兵衛つて言います。以後お見知りおきを……」

俺とおりようさんが自己紹介すると

「『桜田 千兵衛』つてあの辻斬りの？」

おりようさんは俺の事を尋ねる。やっぱり俺の名前イコール辻斬りと言うまつたくありがたくない式が成り立っているんだろう。仕方ないっちゃあ仕方ないかもしれないが。

「ええ、まあ……。でも、辻斬りからは足を洗ったので襲いませぬよ」

一瞬誤魔化そうかどうしようか迷ったがとりあえず正直に言うってみる事にした。

おりようさんは恐れる様子も無くふん、と

「警戒しないんですか？」

「凄いと斬りつて言うからかなり怖い人だつて思ってたんだけど、全然違うからね。」

と言うかお客さん、本当に辻斬りなんてしてたの？ 私はそうは思えないんだけど……」

警戒しなかったのは俺が辻斬りしてたとは思えないかららしい。

俺は正直に「一応本当です」と返答すると

「お客さん、優しそうなのにね」

とおりようさんが世辞を飛ばす。

「いろいろと都合があつたんですよ」

詳しい理由は言つと馬鹿にされそうなので適当に相槌を打った。

「そうなんだ。ところでさ、一つ聞いて良い？」

「何ですか？」

「千兵衛さんは辻斬りからは足を洗つたのになんで帯刀してるの？」

廃刀令のこのご時勢で刀を腰に差すのは幕府関係者が攘夷浪士などのならず者のどちらかだ。

「ああ、実は真選組に入隊する事になって、それで……」

真選組も幕府が関係する組織だ。俺はおりようさんの質問の答えとして真選組に入隊する事を伝える。

「へえ！ お客さん、真選組に入るの？ あ、だからあのゴリラと一緒にのね……」

「ゴリラって……。ひよつとして近藤さん、頻繁にここ来てる？」

「頻繁どころかほぼ毎日よ」

「そして、ああなると」

俺は普段の近藤さんとお妙さんの様子を思い描きながら呆れた目つきで近藤さんとお妙さんを交互に見つめる。

近藤さんも近藤さんだが、お妙さんもお妙さんだな。女性でグーは無いだらう。

「ま、あのお客さんもかなりしつこいからお妙の態度は仕方ないんだけどね」

「何やってんだ、近藤さん……」

俺は本当に近藤さんの部下になって良かったのだろうか。ちよっぴり不安になつてきた。

「で、何頼みます？ 私はドンペリが飲みたいなあ〜」

おりようさん、それ頼めって言ってるの？ ……まあ良いけどさ。

「どのくらい高いのか分からないけど、じゃあドンペリで」

「ありがとうお客さん！」

おりようさんのような美女に肩に寄り添われ、心臓の鼓動が一回停止する。

その後、すぐに心臓が活動を再開し高速で脈を打ち始め、興奮したのか頭に血が昇り意識が吹っ飛んだ。漫画的な表現で言うと頭部がドーン！と爆発したみたいな感じだと思う。

「ちょ、お客さん？」

「ど、どうした千兵衛！！」

「まあ大変！」

薄れゆく意識の奥でおりょうさんやお妙さん、近藤さんの声が聞こえてくる。

近藤さん、俺にはここは早過ぎたようです……。

辻斬りのその後 一日目（後書き）

どーも、白黒仮面です。

サデイストさん、面白い質問ありがとうございます。ぶっちゃけ書いてて武市先輩の気持ち悪さに吐きそうになりました。他の人も送ってね。質問によっては上手く答えられないかもしれないけど、めげずに送ってね。

千兵衛さん目線でお送りしたその後のお話、如何だったでしょうか？ 比較的常識人、でも何処か常人とズれているのが千兵衛さんです。『ケロロ軍曹』で言うなら小雪ちゃんに結構近いかも。

次回も千兵衛さん中心のお話です。次回にあたるお話はただいま加筆中でひょっとしたら遅くなるかもしれないです。

では、次回もお楽しみに！

辻斬りのその後 二日目

いろんな人に助けられ、いろんな人と出会った翌日。

「桜田 千兵衛と言います。」

今までいるんな方にご迷惑をおかけしたと思いますが、これから心改め頑張る所存ですので以後よろしくお願いします！」

真選組の隊士達がギロツと睨む中、俺は真選組の制服を着て一言挨拶してお辞儀する。

「千兵衛の所属は一番隊になるから一番隊のみんな、よろしく頼むぞ！」

続けて近藤さんが俺が所属する事になった部隊を発表する。

「それじゃ、解散！」

その後、細かい話があるいろいろあったがようやく話が終わった。

ふう。やっぱり慣れないな、こう言う雰囲気……。辻斬りは辻斬りで性に合ってたのかもしれない。

……勿論、そんな事金輪際やるつもりはないが。

俺が屯所をうろつろしている

「オイ、千兵衛！」

隊士数人が俺を呼び止めた。俺が振り返ると

「新入り。真選組に入ったらやる事があるんだよ」

その中でも偉そうな奴が偉そうに言う。近藤さんはそんな事言っ
てなかったから新人いびりの類だろう。

それに俺はこの仲間も以前手に掛けた事もある為その仕返しと
見ても良いだろう。

「何すれば良いんですか？」

とは言え、流石に殺しはしないだろう。それをやったら俺と同類、

もしくはそれ以下に値するからだ。

真選組の隊士なら分かって当然の話である。

……尤も、彼等に俺を殺せるだけの力量があるかどうかは別だが。

と言う訳で連れて来られたのは廁。つまりトイレだ。

「この掃除でもしろってか？ 廁も勿論だがコイツの心もきたねーな……。」

「近藤さんが認めるって事は何かあるんだろうが、仲間の手を掛けたお前を俺達はまだ認めたくねえ。と言う訳で、今日はこの掃除をしてもらう」

まあ、これくらいで済むと考えればまだマシなだろう。とりあえず俺は安堵してふうと溜め息を吐く。

「サボるんじゃねーぞ」

取り巻きの一人がそう言い残し廁から出て行く。

よし、俺の気持ちの本気だつて事を見せてやろう。誰が見ても驚くくらいピッカピカにしてやる。

とりあえずパツと廁の様子をしてみる。床はどこどころカビてるものの、基本的には綺麗だ。

便器はどれも結構汚れている。まあ男ばかりだからしょうがないのかもしれないが、ちゃんと掃除をしているのだろうか。気になるところだ。

そして意外にも煙草の吸殻が極端に少ない。喫煙者は一人か二人だろう。

……ま、そんな事はどうでも良いか。俺は宣言通りこの廁をピッカピカにするだけだ。

便器をこしこし、床をこしこし洗う。

……思えばこう言うところの掃除は初めてかもな。

まずこう言うところで用を足す事自体そんなに無かったからな

……。あ、なんかやる気が出て来た。

数時間後。

「済んだか、千兵衛　　なっ!!」

「あ……!!」

さつき厠を掃除するよう言い付けてきた連中がここを見て驚いた。開いた口が塞がらないとよく言うがまさにそいつ等はその状態だ。床も壁も便器も手洗い場も、天井までピッカピカになっている。まるで新品そのもの、いやそれ以上に今の厠はなっていた。

自分で掃除してなんてなんだが、もはやここで用を足すのは勿体無いと思う。

「どうだ、言われた通り掃除してやったぞ。これで文句ねーだろ」

「……ちょ、これマジ？　マジでやったの？」

「んだよ。やれって言ったのオメー等じゃねーか」

信じられない連中に俺は言ってる。勿論、代わりにやってもらったとかそんな事は無い。

何時の間にか俺のやる気スイッチがONになったんだと思う。

「じゃ、掃除も済んだし俺は適当に見回りにでも行ってくるわ」

そいつ等に手をひらひらと振りながら、俺は散歩に出かける。

「い、いつてらっしゃい……」

後ろから確かに、そう言っつのが聞こえた。

見回りとは言っても何をすれば良いんだか……。あ、そうだ、あそこ行こう。

そう思いやって来たのは俺の思い出の場所。先日、銀髪の侍に『黒月』が折られた場所だ。

そこには近藤さんと副長の土方さん、他にも隊士数名が居た。

「おっ、千兵衛！」

近藤さんに見つかり、俺は近藤さんの近くに駆け寄った。

「近藤さん。どうしたんスか、こんなに隊士集めて」

「ほら、先日の一件で『黒月』が折れたんだろ？ あれが他の人の手に渡らないようその残骸を回収しているところなんだよ」

「ふん……。って、ちよつと待てよ。」

『黒月』が折れたのは一昨日の夜、昨日も探したとして今日も探していると言う事は……

「ひよつとして、まだ見つかってないんですか？」

「ああ。万事屋達にも来てもらったんだが、それでも見つからなかった」

俺の質問に副長が懐から煙草を取り出し火を付けながら答える。

「アイツ等が来ても見つからなかったのはどうもおかしいな。」

「お前は何か覚えてないか？」

近藤さんが念の為に俺に尋ねる。

「そう言われてもなー……。あの時の俺は意識が朦朧としてたから覚えてる事なんて何も無いですよ」

「そうか……」

俺の返答に落ち込む近藤さん。

攘夷志士に拾われたとすれば一番悪用する可能性が高いのは『黒月』の事を知っていた高杉だが……。力の無い折れた刀などといった何に使うつもりだろうか？

用途なんて無いと思うけどな。いや、あまんと天人の技術を用いればひよつとして……。

「……。うん、やっぱりよく分からねーや。でも可能性としては否めないんだよな……。」

「攘夷志士達の間で『黒月』に関する話とかは無いんですか？」

「俺もそう思って監察の連中に動いてもらってるが、今のところ収獲は無しだ」

再び副長が煙草を口にくわえながら俺の質問に答える。

「そうですね……。なら問題無いかと思えます」

「なんでそう思う？」

副長が煙草の煙を吐き出してから俺がそう思う理由を尋ねる。

「どうやらこの副長さん、俺を疑っているようだ。そりゃ『黒月』の影響があるとは言え、俺がつい最近まで人を斬り殺していたのは紛れも無い事実だからな。」

自分を今まで苦しめていた元凶が見つからないと言っのに気にしてないような俺の素振りが、どうやら副長には俺が『黒月』が何かを起こすのを望んでいるように聞こえたらしい。

勿論、そんな気持ちは微塵も無い。

「『黒月』の力は大き過ぎます。アレが無事なら騒ぎが起きても何もおかしくない。俺が良い例です」

そこで俺はそう思った理由を説明する。

『黒月』の呪いはその持ち主の周囲の人物を事故や事件などに巻き込ませて死に至らしめる恐ろしい呪いだ。

その呪いは『黒月』の持ち主やその周囲の人物達からすれば非常に厄介なものだが、逆に言えば『黒月』があるところには必ず良くない事が起こる。

「……なるほど。それが無いから今のところは問題無い、って訳か」
俺の説明で副長は納得したようだ。

「今『黒月』が何処にあるのか分からないのは怖いですけど、『黒月』が誰かを傷付けてないのならそれで俺には充分ですから」

俺の今の気持ちを笑顔で正直に告げると……そうか、と近藤さんが俺の力になれなかった事が残念だったのか申し訳無さそうに口にした。

『黒月』は気長に探す事にしようと思った俺がのんびりかぶき町を『見回り』と言う名の散歩をしていると

「あ、千兵衛さん！」

紺色の髪の子と水色の髪の子と出くわした。確かこの男

の子はあの日銀髪の侍達と一緒に居たな。

「ああ、お前か。えーっと……」

「あ、初めまして。僕、日向 冬樹です」

「西澤 桃華です」

「桜田 千兵衛だ。改めて初めまして」

会ったのはあの晩が初めてだが、あの時は俺、完全にコイツ等の敵だったし自己紹介する暇など少しも無かったからな。

この機会に冬樹達が自己紹介すると俺は笑顔で自己紹介して返すと「千兵衛さんが九兵衛さんを斬ったんですね？」

「ああ、そうだが」

「……やっぱり、そんな酷い人には見えないです」

「それは褒め言葉として受け取っておくよ。ありがとうな」

桃華は俺が九兵衛さんを斬ったとは到底思えなかつたみたいで素直な感情を口にする。

おりょうさんも言ってたけど、そんなに見えないかな？

「で、お前等は何してんの。ひよっとしてデート？」

年頃の男女が二人一緒に居るので俺は面白半分でからかってみた。

「ち、違います！」

「で、デート……？ そ、そう見えたかな……？」

冬樹は必死になって否定し、桃華はその言葉がよほど嬉しかったのか顔を真っ赤にして小さい声でぶつぶつ呟いている。冬樹はともかく、桃華は確定だな。

「そう言えばお前等が助けてくれたんだよな」

「ええ、まあ、一応は……」

「ありがとうな」

「い、いえ……」

助けてくれた恩人に俺は一言お礼を告げる。俺にお礼を言われた冬樹は照れくさそうに申し訳無さそうに頭を掻く。

「その様子だと真選組に入れたみたいですね」

「まあな」

「ところで刀はどうしたんですか？」

「ああ、これか。真選組に入隊するにあたって新しいのを買ったんだよ」

「買ったって、刀って結構高いんじゃない？」

「その点においては心配はいらん」

あの晩の事、俺が着ていた真選組の制服、腰に差していた刀が気になった冬樹達と楽しく会話していると

「ところで、『黒月』はあれからどうなったんですか？」

銀さん達や冬樹君の話だと折れてからどうなったのかは分からないそうなんですけど……」

俺の刀の事が話題に上がったからか、桃華が『黒月』の事が気になったように話を変えた。

俺のみならずコイツ等までも巻き込んだ妖刀、何処にあるのか分からない現状では不安でしようがないんだろう。

「悪イがアレが何処行ったのか俺にも分からん」

呪いの力が弱まったから俺も銀髪の侍も九兵衛さんもこうして無事なんだろうが、『黒月』があれくらいで消えるものじゃねーってのは今まであれを腰に差していた俺が一番よく分かっている。消えたなら消えたで問題は無いんだが……。

「千兵衛さんは何も覚えてないんですか？」

冬樹があの日のを覚えてないのか尋ねる。

「あのな、俺はあそこで死ぬつもりで腹切ったんだぞ。おかげである時は意識朦朧としてオメー等と会話した事しか覚えてねーよ」
俺が髪をくしゃくしゃ搔きながらあの時の事を告げると、それもそうですよね……、と冬樹が苦笑する。

「にしては千兵衛さん、やけに落ち着いてますよね」

今まで散々苦しめていたモノが見つからないからもう少し慌てるのかと思っていたのか、桃華がなんで俺が落ち着いているのか尋ねる。

「確かに『黒月』の呪いは厄介だが、だからこそ何処かにまだ存在

するのなら必ず騒ぎになっている筈だろ。それが無いって事は……」
「心配するほどじゃないって事……ですか？」

「その通りよ」

さつき副長にしたのと同じ説明を冬樹達にもするとあゝ、と納得した。

「そついやよ、お前等って銀髪とどうやって知り合ったんだ？」

俺はなんとなく興味を持った事で話を変えてみる。

「え、えーっと……」

冬樹と桃華は目を合わせて話すべきかどうか迷い始めた。何か話しづらい事情でもあるのか？

「何、簡単には話せない内容なの？ なら遠慮しなくて良いぜ。」

こちらら『呪い』なんて馬鹿げたモンと一緒に生きてきたからな。柔な事じゃあ驚かぬーよ」

二人が話しやすいように俺は並大抵の事では驚かない人間だと告げる。

あ、驚かないとは言っても、昨日の松平のつつあんのような自分の生命の危機に瀕するような出来事は別だからね。と言うか、あれで驚かなかつたら人間じゃないよ。

「実は僕達、別の世界からこつちの世界に来たんです。」

家に来た宇宙人の赤ん坊の額にある水晶の力でこつちの世界に飛ばされてきて、飛ばされてきた場所がちょうど銀さんが居る万事屋の上で……」

「それで万事屋とやらに落つこちで、連中と知り合つたって訳ね。また御伽噺みてーな話だなあ……」

冬樹達が銀髪達と知り合つた経緯を説明を途中まで聞いていただいた分かつた俺はその先を予想して続ける。

「俺はともかく、他の連中に信用してもらつたの苦労したんじゃね？」

この話を銀髪とか近藤さんとかに説明した時の様子を想像する。

別の世界から来たなんて馬鹿げた話、普通は信じないよな。こつち言う事を言うのは大抵頭がおかしくなつた残念な奴がほとんどだろ

うし。

俺の予想を聞いた桃華がその時の様子を思い出しながらお察しの通りです……、と恥ずかしそうに答えた。

「ひよっとして、俺の治療した凄い力を持った天人あまんとの赤ん坊ってお前等をこっちの世界に飛ばした奴と同じ奴なのか？」

自分で腹切っつとして言うのもなんだか変な話だが、あの時の俺の怪我は普通の治療が間に合わないくらいの重傷だった。

冬樹達あまんとが言う天人の赤ん坊の力がどう言うものなのか分からないが、まったく異なる世界に飛ばすほどの力だ。あの時の俺の怪我を治癒させるのは簡単かもしれない。

俺の予想を聞いた冬樹がええ、と言って頷く。

「普通の治療じゃ間に合いそうになかったですし、それに偶然カオス君があそこに居たから……」

「……一つ良い？」

「何ですか？」

「なんで天人あまんとの赤ん坊が、あんな時間に、あんなところに居たの？」

『偶然あそこに居た』と言う冬樹の言葉から察するに、カオスとか言う赤ん坊は置いて来たんだろう。

あの戦いは赤ん坊が見て良いもんじゃねーから連れて行かないのが常識だ。

それなのにカオスとか言う赤ん坊はあそこに居たのだ。

赤ん坊とは言ってもハイハイができるくらいなのかどうかは分からないが、赤ん坊があその時間にあそこまで一人で来れるのか？ 普通無理だろ。

……まあ、コイツ等を別の世界に飛ばすような力を持つ赤ん坊だ別に不可能じゃないんだろうが……どうも腑に落ちん。

俺の疑問に冬樹もよく分かってないようでさ、さあ……？ と戸惑いながら首を傾げていた。

「……ま、良つか」

どうやらこの謎は気にするだけ無駄かもしれないな。と言う訳で

俺はこの謎はさっさと忘れる事にした。

「ところでカオスって奴は今はどうしてるんだ？　ちょっと挨拶したいんだけど」

真選組に入隊するとか刀を買うとかキャバクラに行くとかいろいろやる事が多過ぎてお礼をまだ言っていない。

一部どうだって良い事のように聞こえるかも知れないが、人との付き合いも大切なのだ。

まあともかく、瀕死の重傷を治療してくれた力を持つ赤ん坊にお礼を言わないと。

「今はお妙さんの家でタマちゃん達とお妙さんが面倒を見ていますよ」

「……タマちゃん？」

気になる名前に俺は反応する。

「僕達の世界で一緒に暮らしてる宇宙人の事です」

「そう言えば姿が見えない何かがお前等の仲間に住たな。その事か？」

「……わ、分かったんですか？」

姿を消して見えない筈の知り合いの事が分かったのが本当なのか、冬樹が驚きながら確認する。

「なんとなく、な」

一人で生きているうちにありとあらゆる感覚が敏感になった俺は何時の間にか気配でだいたい誰が何処に居るのか察知する事ができるようになった。

特に殺意や敵意を持つ輩の気配は察知しやすいのだが、それでもあの時は気配も敵意もかなり薄かったので正直ギリギリだった。

たぶんあれは忍者か何かだろう。特別な訓練をした結果、気配を消す技術を会得したんじゃないかな。そう俺が推測する一方で俺の特技に素直に驚かされたのか、冬樹と桃華は開いた口が塞がらない様子だった。

「それでどうやって姿消してたんだ？」

何の種も無しに姿は消せないだろう。冬樹達の知り合いが姿を消していた方法を探ねる。

「僕達の世界の、宇宙の技術です。他にももっと凄い技術がたくさんあるんですよ」

ほえ、技術で姿消せるんだ。コイツ等の世界の宇宙人は俺達の世界の宇宙人よりも高い技術を持っているんだな。

「そりゃスゲーな」

俺はまだ見ぬ冬樹達の知り合いの宇宙人達の底知れない技術を賞賛した。

そうして連れて来られたのはお妙さんの家。

俺達が玄関に入って冬樹と桃華がただいまー、と言った後に俺はおじやまします、と言うと

「あ、フッキー、モモッチ！」

「おかえりなさいであります！ お、千兵衛殿も一緒でありましたか」

黒色と緑色の小さな何かが家の中から出て来た。コイツ等が冬樹達の知り合いの宇宙人か？

どうやら俺の事を知っているようだ。まあ、姿は見えないだけで連中とは一緒に居たんだから知ってて当然か。

「え、この人があの辻斬りですかあ？」

俺の名前を聞いた黒色が緑色に質問する。昨日もこんなあったな。

「元な、元」

緑色の代わりに俺が辻斬りだと答えながら一言注意する。

「軍曹、タママ。千兵衛さんは初対面なんだから自己紹介しないと」

「おお、そうでありましたな。我輩、ケロ口軍曹であります！」

「僕はタママ二等ですう！」

冬樹に促され、ケロロとタママがビシッ！ と敬礼しながら自己紹介する。

「桜田 千兵衛だ。よろしく」

可愛らしく自己紹介する二人に俺は笑顔で自己紹介して返した。

「それで、本日はいつたいどのような用件で？」

ケロロがすりすりと手を擦りながら俺の用件を尋ねる。何処の店員さんだ、お前は。

「千兵衛さん、カオス君に挨拶したいんだって」

そんなケロロに一切ツツコまずに冬樹は用件を告げる。こう言うのは慣れてるんだろうか？

「カオス君でありますか。今はお妙殿と九兵衛殿が面倒を見てるでありますよ」

げ、九兵衛さんが居るのかよ。気まずいなあ。しかもよりにもよってカオスとやらの面倒見てるのか……。

「九兵衛さんが来てるんですか？」

桃華がタママに確認すると来てますよあ、とタママは頷いた。

「あの、千兵衛さん。大丈夫ですか？」

いくら九兵衛さんが俺の事情をしつかりと理解しているとは言え、辻斬りの時に斬った相手と会うのは背徳感とかあってどうも気が引ける。

俺のそう言う内心を察した冬樹が俺を励ます。なかなかデキた子だ。

「ああ、だいじょぶだいじょぶ」

ぶっっちゃけ全然大丈夫じゃないけど。声、震えてるけど。でも、こうでも言わないと何時までも心配するだろうからこうとしか言えなかった。

そうして俺は冬樹達に案内されるまま恒道館道場の中を歩いているとある部屋に到着した。

冬樹が襖を開けるとその部屋にはお妙さんと九兵衛さん、そして

赤くてトゲトゲしたケロ口達に似た何かが居た。

あの赤くてトゲトゲしたケロ口達に似た何かがカオスだろうか？

「あら、冬樹君に桃華ちゃん、帰ってたの？ それに千兵衛さん。いらっしやい」

お妙さんは冬樹と桃華に声を掛けてから俺に笑顔で挨拶する。この笑顔を見ると昨日の夜の事が嘘のようだ。

「ど、ども、おじゃましてます……」

一日じゃとても美女には慣れない俺はたどたどしい挨拶をして返す。

「その服を着てるって事は真選組に入れたのね？ いろいろ大変でしよう？」

お妙さんの優しい気遣いに照れて頬を掻きながらえ、ええ、まあ、と相槌を打つ。本当にいろいろ大変でした。

「だが、その制服は普通の隊士のものだろ？ 君ほどの腕なら隊長でもおかしくないと思うんだが……」

俺の剣の実力を知っている九兵衛さんが何故普通の隊士の制服を着ているのか質問する。

「剣の実力だけで隊長にされても困りますよ。真選組の隊士としてしつかりとした実績を出したのなら話は別ですけどね」

剣の腕を高く評価してくれるのは正直嬉しいが、だからと言って特別扱いはして欲しくない。そもそも俺は地位なんてものに興味は無い。テレビゲームとかなら興味あるが。

「と、ところで、九兵衛さんはいつたい何しにここに？」

「え、あ、いや、その、あの、えっと、た、大した用事は無いよ。ただ妙ちゃんに会いに來ただけさ」

俺が九兵衛さんがここに來た用件を尋ねると九兵衛さんは凄い戸惑いながら返事する。

ただお妙さんに会いに來ただけなら取り乱さない筈だ。なのになんでこんなに戸惑うの？ 怪しい……。

「そ、そう言う千兵衛は何をしにここに來たんだ？」

「俺はそのカオスとか言う子どもにお礼を言いに来ただけだよ。昨日はいろいろあって結局お礼を言う暇が無かったからな」

九兵衛さんがなんで戸惑ったのかちょっと気になるが、九兵衛さんが俺がここに来た用件を尋ねて話を変えたので俺もそれに合わせる事にした。

よくよく考えてみると昨日でもお礼を言う暇あったような気がするけどまあいいや。

「あら、そうなの？ だったら……」

話を聞いたお妙さんはカオスを俺に近づける。

畳の上にちよこんと赤くてトゲトゲした小さな宇宙人が座る。

コイツが俺を助けてくれたんだよな。他にもいろいろ信じられねー話聞かされたけど、ふつーの天人あまんとの赤ん坊じゃねーか。

「……ありがとな」

でも関係無い。助けてもらったお礼を言わないと。

俺はカオスの頭の上に優しく手を乗せて礼を言ってからカオスを抱き上げた。

「おー」

「つて痛い！ 痛い痛い痛い！」

比較的大人しい赤ん坊だと思つて油断しているとカオスが俺の頬を引っ張り始めやがった。

「キヤハハハハ！」

「あら、千兵衛さんが気に入ったのかしら」

無邪気に笑うカオスを見てお妙さんが嬉しそうに呟く。ちよ、笑つてないで取つて！ 意外と力あるんだよこの子！

あ、ちよ、髪は引っ張らないで！ 痛い！ ぬ、抜けそう！ ちよ、マジで止めて！

おー、いったー……。カオスに頬を引っ張られ、髪を引っ張られ、もう散々だ。用件も済んだ事だし帰ろうかな。

「あー！ うーおー！」

「あらあら、たくさん遊んでもらって嬉しいのね」

嬉しそうな力オスを見たお妙さんが呟く。遊んだ本人は嬉しいだろうが、遊ばれた本人は嬉しくもなんとも無い。痛いだけだもん。

「んじゃ、俺はこれで失礼します」

そう言っただけで俺はこの部屋の天袋に向かってゆっくりと歩く。

「あの、千兵衛殿……？」

俺の妙な行動にケロロが心配になったのか、声をかける。

この部屋に入った時から気にはなっていたんだが……この気配。

誰か居るな。

「ここに隠れている変態を捕まえて、ね」

俺は眼にも留まらぬ速度で剣を鞘から解き放ち天袋を大きく縦に切り裂いた。変態を脅す為の行為でもあるから多少の損害は仕方ない。

天袋の小さな戸と戸の上下が真つ二つになり、中に隠れていた変態が姿を現す。

「おお、千兵衛。どうした？　こんなところで」

それは何処かで見たゴリラ似の人間、今や俺の上司である真選組局長、近藤 勲その人だった。

「こつちの台詞だアアアアア！」

それを見たお妙さんが凶暴化したゴリラのような顔で近藤さんに襲いかかった。

お妙さんは近藤さんを蹴り倒し、仰向けになった近藤さんの上に跨りグーで何度も顔をボコる。

「……俺、この仕事選んだの間違えたかな」

こんな人が俺の上司で真選組の局長とは、世も末だ。まだこの仕事始めてから一日も経ってないけど、俺は本気で転職を考えた。

その後、俺は真選組屯所にストーカーゴリラを強制連行した。

近藤さんがお妙さんをストーカーキングしてるのは隊士達の間でも有名な話のようで隊士達は全員呆れていた。

その日の夜。逮捕しても懲りない近藤さんにキャバクラ行くぞ！と誘われたが昨日の事もあって遠慮した俺は私服で夜の街をぶらぶらする。

そんな俺の眼に入つて来たのは『スナックお登勢』と書かれた看板。俺は気まぐれにスナックお登勢の中に入る事にした。

「いらつしゃい」

カウンターに居たなんか凄い老婆が歓迎してくれた。この人がスナックのママのお登勢さんかな？

「……今失礼な事考えてなかつたかい？」

「気のせいですよ」

この人、勘が良いな。ま、長生きしてりやそれ相応に鋭くなるか。「すみません、お酒一杯お願いします」

俺はカウンターの空いている席に着いて適当に酒を頼む。

なかなか繁盛しているらしく席はほぼ満席で全員が嬉しそうな顔で酒飲んで騒いでいる。

店員と見られるカウンターに猫耳のブサイクなオバサンが一人と冬樹達と同じ歳くらいの間違いなく可愛い部類に入る女の子が三人、緑色の髪の綺麗な女性……の姿をした何かが一人は休む間も無くせつせと働いている。

最後に言つた何かを緑色の髪の綺麗な女性だと断定しなかつた理由としては、まず耳が明らかに人とは違い機械からくりのアンテナみたいだったし、肌の色は血が通つてないみたいに真っ白だったから。

いや、もしかしたら本当にあれは機械からくりで血が通つてないのかもしれない。

前に江戸で機械家政婦からくりのクーデターがあつたくらいだし。

あれ、でももしそうだったらこれ違法じゃね？ その騒動があつてから機械家政婦は全部廃棄処分になつたらしいし。

……ま、そんな事どうでもいつか。

「……随分と賑やかですね」

「いつもの事だよ」

俺が零した言葉に老婆が呆れながら答える。

こつちお酒ー！ はーい！ 小雪ちゃん、今日も可愛いね！ それほどもないですよー。

小娘共！ 煙草切レタゾ、早く買ッテキヤガレ！ つーか真面目に働いて下さいキヤサリンさん。

こんな具合に、わいわいがやがや。どいつもこいつも本当に楽しそうだ。

その様子を浮かべながらぼんやり眺めて、ゴクリと一杯の酒を飲み干す。

「何処かの馬鹿が辻斬りなんてやったから少し前までは閑古鳥が鳴いてただけどねえ」

老婆が愚痴を零す。目の前に居るのがその何処かの馬鹿とは夢にも思つまい。

「……でしょうね。すみません……」

「なーんでアンタが謝るんだい？」

「あ、いえ、つい……」

「変わった客だよ」

辻斬りなんて馬鹿な事をした何処かの馬鹿だと明かすつもりは無いものの、つい俺の口から謝罪の言葉が漏れてしまった。

今まで高嶺の花だった賑やかなこの場所に俺が居るなんて。まだ信じられない。

まるで夢みたいだ。だからと言って夢オチは勘弁して欲しいな。

「お酒、美味しかったです。お金はここに置いておきますので……」
長く居ると忘れてはいけない事を忘れてしまいそうだった俺はそう言っつて早々と店を後にした。

……母さんの言う通りだったよ。

銀髪の侍が呪いを断ち切って、あのガキの力が、いやあのガキが俺に命をくれて、近藤さんが居場所をくれて、九兵衛さんが許してくれて。

全て捨てた俺に、何も無かった俺に、何もかも与えてくれた。

どんなに感謝の言葉を並べても足りない。どんなに頭を下げても足りない。

この恩はでか過ぎて返せそうにねエ。でも、決して忘れねエ。

以前は奪う事しかできなかった剣だけど、今持つこの剣で俺が以前奪った分だけアイツ等からもらったもの護ってみせるよ。

俺は夜空を見上げ、この街に、この剣に誓う。

辻斬りのその後 二日目（後書き）

あの時の九ちゃんの気持ち。

「妙ちゃんと結婚したいがゆえに、カオス君に僕を男にしてもらう為に来た、だなんて妙ちゃんの前では言えない……」

どーもー、白黒仮面でーす。

リメイク前とは違い、千兵衛さんは真選組の普通の隊士になりました。

よくよく考えてみたんですが、あの伊東さんも一年余りであろうやく参謀になれたのに、千兵衛さんがいきなり参謀はマズイですよ。まあ、規格外の強さを持っているのは事実ですけど。

ネタバレになるかもしれませんが、千兵衛さんの地位に関しては後々変動するかも。

今回は銀さん達のお話の予定です。
では、次回もお楽しみに！

意外と辛い主人公

ケロロ達が『銀魂』の世界に来て十五日目。

「ちよつとちよつとちよつと！ 何、前回までのお話！ 何柿ピーが目立つ話作ってんの作者！？」

初っ端から万事屋のリビングで銀さんが叫ぶ。どうやら前回までのお話が気に食わないらしい。

「……いきなり何よ？ って言うか、柿ピーって何？」

夏美が呆れながらツツコミを入れる。

「一つ聞こう！ ケロロ君、『銀魂』の主人公は？」

「銀時殿であります」

「そうだよ！ 俺、主人公！ なのに、なんでオリキャラ如き柿ピーが目立ってたんだよ！ おかしくなーい？」

「ちよ、ちよつと銀時殿！ この小説は『ケロロ軍曹&銀魂』つしよ！？ 我輩は！？ 『ケロロ軍曹』の主人公の我輩は主人公じゃないの！？」

「お前なんてなあ『端役』で良いんだよ！

ちよーつとアニメが長く続いただけのマイナーな作品の主人公と、今もアニメが続く人気作の主人公じゃレベルが違うんだよ！」

「確かに、我輩、大した事できないよ！？」

エネルギー弾とか口から撃てないし、銃とかヘタクソだし、機械弄りはそこそこだし、忍術だつて使えないでありますよ！

でも、そう言う銀時殿だつて大した事できないでしょーが！」

「言ったな、お前！ 俺がひそかに気にしてた事言ったな！

そうだよ、他のジャンプ作品の主人公達と比べると俺は地味だよ！ 体は伸びないし、卍解も使えないし、死ぬ気の炎とか全然出せねーよ！

でもなア、地味は地味なりに頑張ってるんです！ かめはめ波出そうと必死に練習してるんです！

けどな、オメーよりは絶対上だつて自信もある！」

「なにをう！ 『ケロ口軍曹』は五回も映画化されたんでありますよー！」

「『銀魂』だつて最近映画化されましたー！」

「あんな下ネタだらけのアニメなんてどうせPTAとか条例とかですぐ終わるであります！」

「やんのかコラア！？」

「やるんでありますか！？」

ひよんな事からケロ口と銀さんでどっちが主人公に相應しいのか口論する。

もはや子どももの口喧嘩である。

そう言うくだらない事は別の場所にして欲しいな、と思いながらこの大きな子ども達には何を言っても無駄だと察していた他の皆は彼等の醜い言葉を全て受け流していた。

「よーし、ここは公正に端役共の意見を聞いてみようじゃねーか？」

「上等であります。みんなー、どっちが主人公に相應しいと思うでありますかー！？」

自分達だけでは埒が明かない。と言う事で二人は公正に他のみんなの意見を聞いてみる事にした。

「ぶっっちゃけどっちが主人公でも同じですう」

「どっちもダメ人間の鑑アル」

「いざと言う時はカツコイイのかもしれないけど、普段の生活態度が最悪よね」

「だいたいそう言う口論する時点で主人公失格ですし」

「それは確かに言ってるでござるな」

「派手な芸が一つでもあればまだ納得できるかもしれないが」

「んー……どっちでも良いかな……」

「てゆーか、主役失格？」

万事屋に居合わせた端役……タママ、神楽、夏美、新八、ドロ口、ギロ口、小雪、モアの順に主人公に関する嘘偽りの無い正直な己の

気持ち露にする。

そりゃ普段から仕事もろくにせずだらだらとだらしない生活をしてれば周囲の人間はそう認識するだろう。

加えて、普段の彼等からやる気と言うものが微塵も感じられない点も問題だろう。

「夏美殿達ならまだしも、まさか新八殿や神楽殿にまで我輩の事そう思ってたんだ……」

「薄々予想していたよ？ 味方してくれる奴なんて居ないんじゃないかなーって。だが、まさかその予想通りなんてよ……」

「なんかもうどうでも良くなかったであります。今回我輩達の愚痴で埋めちゃわね？」

「じゃあそうしょっか。作者がこの小説始めたきっかけ知ってる、ケロロ君？」

「カオス君が書きたくなつたからじゃないんですか？ 主人公よりも目立つカオス君が」

「それも確かにあるけどさ、『ケロロ軍曹』も『銀魂』も同じ制作会社で作ってるのよ。

それに作風も結構似てるし、声優も結構繋がってるし面白くね？
みたいな感じで作ったんだよ。

作者軽率だよな？ 『ワピース』と『トコ』をコラボした翌週、コイツ等も同じ時期にアニメ始まるからって『銀魂』と『スツトダス』をコラボさせたジャンプの編集部と同じくらい軽率だよな？」

「できる事はそこそこ派手かもしれないですが、あんまりありませんよな。

『銀魂』で他の作品とコラボしている小説と比べても地味なようだし、完結してないとは言えお気に入り小説登録件数も週間アクセスも微妙な位置であります。

まあそう言うのがあるだけまだマシかもしれないですが「端役の意見を聞いた銀さんとケロロは相当シヨックを受けたよう

で部屋の隅で体育座りしていじけながら愚痴を零す。

「どんな愚痴？」

夏美が銀さんとケロコの愚痴に一言ツツコミを入れ

「これから頑張ればきつとお気に入り小説登録件数も週間アクセスも増えますよきつと！」

流星に言い過ぎたと思った新八が慌てて落ち込む二人を励まそうとするものの

「どのくらい頑張れば良いの？ 俺、侍王になるくらい？ ケロコ君、地球侵略完了するくらい？」

「どんだけ先の話なんですか。我輩達の世界の地球侵略するのどんだけ難しいと思ってるんですか」

「良いよ良いよ、そんな先の見えない努力なんてする気になれねーよ」

「千兵衛殿の気持ちがよく分かるでありますな、銀時殿」

「そうだな、これなら辻斬りする気になるわ」

ネガティブスパイラルに陥った二人はなかなか元気を出そうとはしなかった。むしろ言うだけ病状が悪化し眼が空ろになっていく。

「あ、そうだ。いつその事全部ぶっ壊しちゃおっか」

「それも良いでありますな！。モア殿、いっちょ派手にハルマゲやつちゃって」

最終的に全てぶっ壊すところにまで至ってしまった銀さん達はモアに地球を壊すよう依頼する。

「ちよつと待つて待つて待つて待つて！！！！ 二人とも落ち着いて！！」

「別良いだろ、主人公に相応しくない端役が言ってんだから」

「二人とも充分主人公に相応しいですよ！！」

「どの辺りが？」

「え、えーつと……」

「ほら見る！ 俺達、主人公に相応しくねーんだろ！ モアちゃん！ 派手にやつちゃって！ グラグラパークーツてやつちゃって！

！
新八が銀さん達に止めるように説得するが一向に彼等の機嫌が戻る様子は無い。

「ってモアちゃん、何時の間に準備してるの!？」

「え、おじさまや銀さんがやって良いって言ったからその言葉通りに……」

「ダメダメダメ!! やっちゃダメ!!!!」

そんな事されたら自分達も死んでしまう。

何時の間にか擬態を解除し、ルシファースピアを持って地球を壊す準備万端のモアを夏美が注意する。

「ケロロ君、今日は一緒に寝よう! 主人公に相応しくない者同士語り合おうじゃねーか!」

「賛成であります、銀時殿! どうすれば地球侵略できるか、地球人側からご教授お願いするであります!」

「つつー訳で神楽! オメーは新八んちで泊めてもらえ!」
すっかり捻くれたケロロと銀さんは二人で万事屋に寝食共にする事にした。

「大丈夫ですかね、あの二人……」

「大丈夫アルヨ、明日になったらケロツと忘れてるアル。ケロロなだけに」

「……そうだと良いけど」

あの二人が何時に無く不機嫌なので少し気になったが、彼等はそのままケロロ達を放置して新八の家である恒道館道場でその日は過ぎました。

その日の翌日。ケロロ達が『銀魂』の世界に来て十六日目。

「おはようございます」

「おはようございます」

「何処がおかしいんですか？」

「銀ちゃんがおかしいのは元からアル」

「軍曹さんも同じですう」

新八、神楽、タママは彼等の異変なんてどうだって良いような態度を見せるのに対し

「あれ、僕は普通におかしいと思ったんだけどな……」

冬樹は今までのやりとりからしっぴかりと違和感を感じ取ったようにこう言い

「私はどうも言えませんが……」

桃華だけはどっちにつくべきか悩んで苦笑する。

「冬樹殿オオオオオオオオ！！！！！」

「冬うううううう！！！！！！！」

冬樹の言葉を聞き、銀さんとケロロがそう叫びながら冬樹に飛びついてきた。

「う、うわぁ！」

自分より大きな体の大人に飛びつかれ、支えきれぬほどしっぴかりした体ではない冬樹は床に倒れた。

「冬樹殿なら、冬樹殿ならきつと分かってくれと信じていたであります！」

「やっぱお前良い奴だわ冬！ 親友よ、心の友よオオオオオオ！！！！！」

よほど嬉しかったのか、上から順に銀さん、ケロロが口を開く。

「お、重い……。重いよ軍曹……」

「オウ、ソーリー……」

自分の重さに潰されかける冬樹に気付いた銀さん……の姿をしたケロロは慌てて冬樹から離れた。

「話から察すると、要は二人が入れ替わっているだけの話でしょ？」

「なら問題無いアルヨ」

「大有りだわボケエエ！！！」

「今日一日、どうすんのよ!？」

「いつも何もしてないんだから何もなくて良いネ」

いろいろと問題は山積みだがとりあえずこの場に居た全員が現在の状況を理解したところで

「お前等のせいだかな! お前等が主人公なんてどっちでも良いとかそう言う事言うからア!」

ケロロ……の姿をした銀さんが神楽達に緑色の指を向けながら注意する。

主人公とかどっちでも良い。どっちが銀さんだろうとケロロだろうと関係無い。

結果力オスの水晶の力で入れ替わってしまったのだろう。

「それは紛れも無い事実だからしょうがないアル。な、タマツチ」

「できれば否定してあげたいですけど、全くもってその通りなのでここは頷くですう」

神楽とタママは昨日と大して変わらない辛辣な言葉を吐き続けるので

「だー!! もう良い! もう良いです! お前等の事見損ないました! 俺、もう好き勝手生きるわ!

緑、冷蔵庫にあるいちご牛乳とコーヒー牛乳全部処分しといて!

飲んでも良いよ!」

「じゃあ銀時殿、我輩のガンブラも全部処分しといて。その後で地球侵略会議ボグしようであります、冬樹殿も含めて三人で」

「良いね。じゃ、そう言う事で」

すっかりすねた銀さんはそう言ってケロロの姿のまま何処かに出て行ってしまった。

同じくすねているケロロは銀さんを引き止めようとせずに銀さんのやりたいようにやらせる。

あの三度の飯よりガンブラが好きなケロロや甘い物大好き銀さんがガンブラ捨てるとか甘い物捨てるとは、それほど他のみんなの態度が効いているようだ。

かぶき町某所。

「ったく、なんだっつーんだよアイツ等」

出て行った銀さんと言うとプンスカプンスカ怒りながら道をズンズン歩いていった。

大の大人にプンスカは似合わないかもしれないが生憎、今の銀さんはケロロの姿なのでそれが妙に似合っていた。

さーて、これからどうすつかない。ああ言う事を言った手前、万事屋には帰れねエ。帰りたくねエ。

だがこの姿じゃ行くあても無エしな……。

何処に行こうか歩きながら悩んでいると彼の頭にある言葉が蘇る。

『銀さん。……子ども達の事、お願いしますね』

それは冬樹と夏美の母の言葉。彼女と交わしたたった一つの約束。「……どうすつかない……」

ケロロの体の銀さんが緑色の頭を掻いているといきなりケロロの体の銀さんが網に包まれた。

「え、ちよ、何!? 何これ!？」

慌てて銀さんは網を引き千切ろうと必死になるがこれがまた頑丈らしくなかなか千切れない。

「おーいじい、珍しい生き物を捕まえたぞ! これ連れて帰ろう! 虫取り網を大きくしたものでケロロの体の銀さんを捕まえた、頭に触覚が生えた太った天人あまんとが『じい』に声をかける。

中央星のバカ王子……ではなく八塔王子である。

「ええ〜。止めてくださいよ、そんな気持ち悪い生き物」

豪華な車にもたれながらじいが王子に対し素直な感情を隠そうとせず正直に言うつと

「クビにするぞクソジジー」

八塔王子はじいに注意する。

「はいはい、分かりましたー」

じいはいしぶしぶ如何にも硬そうな檻を車のトランクから取り出す。

「ちよ、ちよ待てエエエエー!!」

網にもまねながらケロロの声で銀さんが叫ぶ。

「……大変でござる!」

その一部始終を屋根の上から見ていたドロロは急いで万事屋に向かった。

そして万事屋。

「神楽ちゃんもタママも言い過ぎだよ。銀さんも軍曹も人なんだからあんなに言われたら流石に傷付くよ」

「大丈夫アル。むしろあれだけ言わないと銀ちゃん達には分からないネ」

「ぶはー! やっぱりこれ甘くて美味しいですう!」

一番銀さんとケロロを傷付けている神楽とタママに冬樹が注意するが神楽は考えを変えようとはしないし、タママに至っては冷蔵庫に冷やしてあったいちご牛乳を飲む事に夢中で話を聞いてない。

「いつ、一大事でござる!」

そんな万事屋リビングに慌てて入って来たドロロ兵長。

「どうしたんですかドロロさん?」

「たっ、隊長殿が、隊長殿が何者かに捕まったのでござる!」

あまりにもドロロが慌てているのが気になり新八は用件を尋ねるとドロロは先程見てきた衝撃真実を語る。

「なっ、なんですとオオオオオオオ!!!」

銀さんの声で驚く隊長殿。

「然様。拙者が動く訳にもいかず、銀時殿達の力を借りよう……」

ドロロが片足を立てて姿勢を低くしながら現状を報告していると隊長殿、我輩イイイイイ!!!」

ケロロは銀さんの右手でドロロの丸い頭をむんずと掴むと力の限り放り投げた。投げられたドロロは抵抗する間も無く壁に顔が埋まってしまった。

驚くところこー!? ケロロの反応に冬樹と新八が驚きながら心の中でツッコむ。

「捕まったってドロッチ言ってたけど、ケロッチ達って姿消してるんじゃないかったっけ?」

「そう言えばそうですね」

ケロロ達は普段アンチバリアの力で普通の人には見えない為、そう簡単に捕まる筈は無い。

ケロロの体になった銀さんも同じではないのか、と神楽がふと気になった事を呟くと新八もその通りだと口にする。

「……軍曹、銀さんにアンチバリアの使い方、教えた?」

「教えるの忘れてた!……」

若干怒っているような冬樹の問い掛けに甘えるような銀さんの声でケロロは答えると

「ってこんな事してる場合ではありません! 銀時殿オオオオオオオ!」

それを誤魔化すかのように銀さんを追うべく慌てて玄関から出て行った。

「行っちゃいましたね……」

まだ銀さんが何処に居るのか分かってないのに……。

「ぎ、銀時殿が隊長殿とは、いったい何事でござるか?」

「今、銀さんとケロロさんは入れ替わってるんですよ」

「銀さんがケロロさんで、ケロロさんが銀さんなんです」

「ああ、ナルホド……」

壁に顔が埋まっていたドロロがなんとか脱出し現在の状況を理解する。

普通ならどうして入れ替わったのかも気になるだろうが、もうすでに何度も信じられない現象を目の当たりにしてきた彼等には『何

が』起こったのかだけ理解できればそれで充分だった。

「とにかく銀さんを追おう！」

「どっちの銀ちゃんを追えば良いアルか？ 外見が銀ちゃんアルか？ それとも中身が銀ちゃんアルか？」

「どっちもだよ、どっちも！」

冬樹達も銀さんとケロロを追う事にした。

かぶき町某所。

「オイ、俺を何処に連れて行くつもりだ！」

「余の家じゃ。広いぞー、そちの為にも家を造ってもらおうかのー」
「勘弁しろよ、どうせ飽きて捨てられるのが眼に見えるんだよ！」

「余はペットを捨てるような真似は絶対せんから安心しろ」

「その前に俺はペットとかそう言うもんじゃねーんだよ！」

「おお、怖がっておるのじゃな。よしよし、家に着けばすぐ馴染むぞー」

「誰かアアアア！！！！ 俺を解放してくれエエエエ！！！！」

「少し静かにしろ。うるさいぞよ」

硬そうな檻の中に閉じ込められたケロロ……の姿をした銀さんの叫びが豪華な車の中に響く。

このハタ王子、動物なら猛獣だろうと何だろうと飼うと言うのはた迷惑な飼い主で、これまで彼が持ち込んできたペットが何度も騒ぎを引き起こした事だつてあるほどだ。

だが、逆に言うつと珍獣なら手厚く保護される可能性が高い。

ただし、今の銀さんのこの姿はおそらく一時的なもので元の姿に戻つたらもう一巻の終わりだろう。

「こちらスカルワン、ターゲットを見つけた。タイヤを狙撃して足止めできるが……どうする？」

冬樹が協力を要請したギロロが飛行ユニットを背中に取り付けて

空を飛んでその車を追いながら帽子の耳のような部分を手で押さえ、無線で他の隊員に報告する。

一方かぶき町の別の場所でケロロはスピード違反だろうとノーヘルだろうと構わず猛スピードで銀さんの原チャリをとばす。ケロロの、今は銀さんの銀髪が風でなびく。

ちなみに、免許は銀さんのもので誤魔化すつもりだ。

「こちらクロスワン、銀時殿の姿の隊長殿との合流に成功したでござる」

銀さんの姿のケロロと合流したドロロがケロロと一緒に銀さんの原チャリに乗って無線で報告する。

「ダメだつてばギロロ伍長！ そんな事して事故つて銀時殿が怪我したらどうするの！？」

銀時殿には怪我一つ負わせてはなりません！！」

『りよ、了解。追跡を続行する。ちなみに現在地は……』

ドロロが中継役となってギロロとケロロが通信していると

「その原付！ スピード違反だ、止まりなさい！」

後ろから走ってきたパトカーから拡声器により大きくなった声で注意する声が聞こえてきた。

「今それどころじゃねーの！ 急がないとヤベー事になるの！」

ケロロはパトカーの中に居る連中に聞こえるよう大きな声で反論する。

「と思つたらなんだ、銀髪の侍じゃねーか。どうしたよ、そんなに急いで？」

「せ、千兵衛殿！？」

パトカーの窓から顔を出して、拡声器片手に呑気な声をかける千兵衛さんに驚くドロロ。

「ん、そう言えばこうして面会させるのは初めてだな。ども、桜田千兵衛です。その節は迷惑をおかけしました」

「あ、いえいえ、気にしてないでござるよ。拙者はドロロでござる」

「あ、ども、よろしく」

「何呑気に自己紹介してるんでありますか!？」

ケロロが千兵衛さんとドロロに注意する。

「ところでさ、そいつ本当に銀髪の侍か？ なーんか雰囲気が違うんだけど。っつーか口調がケロロそっくりなんだけど」

「ああ、実はかくかくしかじか、そう言う訳なのでござるよ」

「なるほど、また妙な事に巻き込まれてるな……。っつー訳だ、ここは引こうぜー」

ドロロから銀さんとケロロの現状を聞いた千兵衛さんは一緒に乗り合わせている隊士達に引こうと提案する。

「し、しばし待たれよ千兵衛殿！」

この問題から引こうとする千兵衛さん等真選組をドロロは引き止める。

「んだよ。これから帰ってみんなで親睦も兼ねてゲームして遊ぼうと思っただのに」

「我輩達の問題ゲーム以下!？」

千兵衛さんが吐いた言葉を聞いてケロロはツツコミを入れる。

「千兵衛殿、真選組の力を貸してもらえぬか!？」

「無理だな。近藤さんや副長、隊長格ならまだしも、俺はただの隊士だ。そんな権限は無エ。」

一応近藤さんに話してはみるけど……その前に、銀髪攫ったのってどんな奴だった？」

「高貴そうな服を着て頭部に触角が一本生えた太った天人あまんとでござる」

「あ、じゃあ無理だわ。頑張って」

「決断早っ!! 大恩人の危機を放って置くつもりでありますか!」

ドロロの目撃した犯人の情報を聞いてあっさりこの件から手を引く事にした千兵衛さんにケロロが注意する。

「銀髪が捕まったの、たぶんそれ珍獣好きで知られる八タ王子だわ。今まで聞いてきた噂や真選組の資料を元にした情報によると、何

度も江戸に来ては飼ってる珍獣でいろいろ騒ぎを引き起こすはた迷惑な央国星の王子様よ。

問題は、その王子様の星から幕府が金とかいろいろ借りてるって点だ。

ハタ王子が幕府と関わりがある以上、幕府の配下である真選組は手が出せん。

要するに、助けたくても立場上無理って訳。下手したら俺、松平のとつつぁんに銃弾ぶち込まれちまう」

ケロロの言葉に対し千兵衛さんは調べた事と自分の今の立場を語って納得させようとすると

「それに、若干気持ち悪くなってきたしな……。おかしいな、酔い止めはちゃんと飲んでた筈なんだが……」

顔を悪くしながら口を手で押さえる。

「ゲツ！ ヤバツ！！ 今すぐ止まって！ どこでも良いから止まって！」

パトカーに同乗していた山崎さんがその様を見て慌てて運転手に指示を出す。

「どつやら拙者達だけでなんとかするしかなさそうでございますな……」
ドロロは遠ざかっていくパトカーを黙って見ていた。

そうして数分後。

「隊長殿、あの車でござる！」

「その車、止まってエエエエ！！！！」

目的の車を見つけさらに原チャリの速度を上げるケロロ。

「ん、なんじゃ騒々しいの……ゲツ、銀髪！！」

車の後方がやかましいので後部座席に座っていたハタ王子が振り返るとそこには幾度と無く自分達を苦しめたあの銀髪の姿があった。

「銀髪……って緑か！？ 緑イイイイイイ！！！！ お前ならきつと来てくれるって信じてたぞー！！！！」

ハタ王子の口から漏れた情報で誰が来たのか分かった銀さんが檻

の中で騒ぐ。

「オイじい、スピード出せ!!」

「いや、赤信号なんで止まります」

ハタ王子が車のハンドルを握るじいに催促するが赤信号を理由にじいはブレーキペダルを踏む。

「え……!!」

彼等が全速力で追っていた車が速度を落として止まったしまった。そこは赤信号無視するんじゃないの!?

ケロロは慌てて急ブレーキをかけるが速度はなかなか遅くならない。目的の車がどんどん近付き大きくなる。

ケロロが運転する銀さんの原動機付き自転車も軽車両とは言え立派な車である。車は急に止まらない。

ガンツ！ と何かが勢い良くぶつかる音と共に激しい揺れがケロロの体の銀さんが乗っていた車を襲う。

「……今の音、何？ まさかとは思うけど、何？」
そのまさかである。

ぶつかった衝撃で大きく変形した銀さんの原チャリが宙を舞い、地面に叩き付けられ粉々になった。

「おお、ナイスじゃじい！」

追って来ていた邪魔者が消えた事にハタ王子が喜んでいると
「銀時殿を……返せエエエエ!!!!」

あの事故の瞬間、咄嗟に車の屋根に飛び乗ったケロロがフロントガラスにへばり付いて銀さんの姿で運転手を脅す。

「ぎゃあああああ!!!!」

じいはびっくりして思わずアクセルを踏んでしまった。

豪華な車が赤信号にも拘らず発進する。そこに大型トラックが信号を守って直進してきた。

プアーン！ と大型トラックのクラクションの音が鳴る。

「あ……」

車の中に乗っていたケロロの姿の銀さん、じい、ハタ王子、車の

外にへばり付いていた銀さんの姿のケロロが大型トラックを見て眩く。

キキー、と言うブレーキの音の後に響くドカアアアン！！と言う一際うるさい衝突音。

その一部始終を原チャリから屋根の上に避難して眺めていたドロロは言葉を失った。

「お前さ、俺助けに来たんじゃなかったの？」

「助けに来た……つもりだったんですが」

「じゃあさ、なんで俺等こんな重傷なの？」

「事故に巻き込まれたからでありますな」

「お前何してんの！？これだったら助けに来なかった方がマシだわ！！」

「なにをう！！助けに来てやったつてのに、それはあんまりであります！！」

あれから無事(?)救出された銀さんはケロロと一緒に恒道館道場の一室で包帯ぐるぐる巻きにされ寝かされていた。勿論入れ替わったままである。

「懲りないですねえ」

「全くアル」

隣の部屋で繰り返られる二人の口論を聞いてタママと神楽が素直な感情を口にする。

「でも……あの二人、なんだかんだで主人公だよな」

「……そうですね！」

この前の辻斬りの時と言い、今日と言い。

普段はああでも、いざと言う時はなんか頼れる主人公ふたり。

意外と辛い主人公（後書き）

はいつ、どーもー、白黒仮面でーす。

今回は前に一度言っていた銀さんとケロロの精神交代のお話でした。
あとついでにバカ王子登場。

最近遊び過ぎて執筆が進んでない。
もうそろそろ欲しいゲームが発売されると言うのに、何やってんの。
ゲームが発売されたらそっちに頭傾くの分かってんに、何やってん
の。
まだストックは少しあるけど、何やってんの俺。
とりあえず頑張って執筆します。

では次回をお楽しみに！

強運の男（前書き）

『ちよこつと銀八先生！』

銀八「mega12さんからの質問。

『タママに質問です。強くなりたいという目標があるのはわかりませんが、神威のように家族にまで殺そうとする非情な強さを手に入れたいと思つてたりします？』

じゃあタママ、よろしくー」

タママ「さ、流石にそこまで非情にはなりたくないですう……」

銀八「あとmega12さん、この質問の『ひじょう』ですが文脈から考えると『常』より『情』の方が正しいと思うので以後気を付けるように。

と言う事で次。閻コロさんの質問。

『いつか、クルルがカオスくんの事を調べた時、身体能力は神楽レベルだ、とか言ってたけど、神楽じゃなく星海坊主だったらどうなりますか？（あくまで身体能力のみで）

カオスくんは今（新訳）の状態です』。

今作のお話の傾向から言いますと、カオス君の身体能力の高さが原因で起こる騒動は少ないのであまり大した変化は無いと思います。せいぜい『辻斬りのその後 二日目』で千兵衛さんの髪が抜けるくらいです。

あと閻コロさん、この質問にある『じょうたい』ですが文脈から考えると『常』より『状』の方が良いような気がします。

では次、百鬼丸さんからの質問。

『もしも「空気の読めない電波な人・乱暴ですぐキレる人・あとついでにオカマは、お断りします」という店があったら、桂とお妙と神楽と西郷とアゴ美はどうしますか?』

この質問には作者のコメントが来てるのでそれで答えたいと思います。

『その人達はいったいそのお店で何をしたんですか?』

つつー訳でmega12さん、閻コロさん、百鬼丸さん、廊下に立ってなさい!」

強運の男

ケロ口達が『銀魂』の世界に来て十七日目。かぶき町某所にあるパチンコ店。

「なあ、長谷川さん。なんか楽しんで稼げるような良い話無い？」

「あつたらこんなところには居ねーだろ」

「それもそうだな」

店内やそれぞれのパチンコ台から流れる音楽、パチンコ玉が弾ける音。

そんな音達で満ちた空間で隣に座った相手と会話する銀さんと長谷川さん。

どうやら銀さんは一日で元に戻れたようです。

「……なあ、銀さん。今日はもう止めにしね？」

ここに座って早数十分。一向に当たる気配が無い。

「っつーか本当に当たりつてあるの？ と言つても過言じゃないくらい当たらない。」

これ以上はお金の無駄だと感じた長谷川さんが銀さんに一つ提案する。

「そうだな、今日は諦めるか」

銀さんも長谷川さんの考えに同意のようで席を立て店の出口へと向かう。

その途中でパチンコ玉がたっぷり入った箱がこれでもかと積み重ねられている席を見つける。

「うわあ、当てる人は当てるんだな」

「みたいだねえ」

長谷川さんの言葉に銀さんは適当に相槌を打つと何故か急にピタと立ち止まった。

さっき長谷川さんが言っていた席の男、どっかで見なかったか？ ふと気になった銀さんが振り返ると、その席の男も徐に銀さん達

が居る方向に顔を向けた。

男の顔には左目と鼻を横切る斜めに付いた大きな傷があった。

パチンコ店ではうるさくて話ができそうになかったので、彼等は近くにあつたファミレスに場所を変える。

「あんな場所で会うなんて奇遇だな、銀髪」

緑色の地味な着流しに身を包んだ顔に傷がある男、千兵衛さんが
呟く。

対する銀さんと長谷川さんは食べたいものをガンガン注文してど
んどん胃の中にしてしまつていく。

勿論、そのお金は千兵衛さんがパチンコで稼いだお金だ。

「いやー、まさかあの兄ちゃんが銀さんの知り合いだったとは驚き
だけ。あ、俺長谷川 泰三な。よろしく」

お金を払わずに食べたいもの食べ放題のこの状況を満喫し上機嫌
の長谷川さんが自己紹介すると

「桜田 千兵衛です、よろしく。そう言えば銀髪、お前の名前は？」

千兵衛さんも笑みを浮かべながら自己紹介して返し、銀さんの名
前を尋ねる。

昨日も千兵衛さんは銀さんに会つたのだが、あくまであれは外見
だけであつて銀さんの中身と会うのはあの時以来、今日が久しぶり
なのである。

「坂田 銀時です。よろしく柿ピー」

「……柿ピーって誰よ？」

「あれ、そんな名前じゃなかったっけ？」

「今さつき千兵衛って言つただろーが！！ つつーかそんな名前の
奴居るなら見てみたいわ！！」

銀さんのボケに名前を間違われた千兵衛さんは不機嫌そうにツツ
コミを入れる。

「銀さん、この兄ちゃんとはいつたかどうかどう言う知り合いなの？」

「柿ピーが元辻斬りで俺がやつつけた奴」

長谷川さんの質問に銀さんが包み隠さず正直に白状すると

「お前、もうちょっと言葉を選ぶ事はできねーのか？」

聞きたくない言葉を簡単に言つてのける銀さんに千兵衛さんが怒りを堪えながら注意する。

「紛れも無工事実だろーが」

「そりゃそうだけど……」

銀さんにそう言われ、全くもつてその通りなので千兵衛さんも最初は言い返せなかったが

「俺の心は常人以上に傷付きやすいんだよ。もっとデリケートに扱つて」

「いろんな人傷付けたもんな。いや殺したと言つべきか？」

「いい加減にしるよ銀髪！！ 楽しい！？ 人の傷口いじつて楽しい！？」

流石に銀さんのは言い過ぎだと思ひ顔に青筋を浮かべて反抗した。「へえ、辻斬りか……。それつてもしかしてこの前まで有名だったあれの事？」

「ええつと、まあそれですね。……怖がらないんですか？」

「今の俺に怖いなんて事はねーよ。むしろウエルカムだよ、なんで来なかったの？」

「いやあの……大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫、無くなるものなんて何も無いから。何時でも死ぬ覚悟はできてるから」

「それ大丈夫じゃねーよ」

辻斬りだった頃の千兵衛さんと会つと言う事はそれ即ち死ぬと同義だ。

目の前に居るサングラスをかける男の言葉がどうも冗談に感じられない千兵衛さんは長谷川さんを心配した。

「つつーか柿ピー、仕事どうしたよ？」

「ああ、そこそこ上手くいってるよ。今日も本当は仕事だったんだけど、面倒だったんでサボった」

「お前元辻斬りだろ、真面目に働かねーとマズインじゃねーか？」
「それもそうなんだけどよ。」

毎日毎日見回り、掃除、見回り、剣の稽古、見回り、ゲーム、見回りじゃあ流石に飽きるだろ？」

「飽きたからサボるたあ、良い度胸してんじゃねーの」

「攘夷志士達とチャンバラとか巨大なえいりあん相手に喧嘩とか、
そう言う派手な仕事を期待してたんだよ、俺」

「随分と派手な喧嘩が好きなんだね、お前。やっぱ辻斬り続けとけば良かったんじゃない？」

「冗談。派手でも前みたいな地獄の毎日よりは今の方が遥かにマシだから高望みはしねーよ。」

それに、警察が暇って事はある程度平和って意味なんだし良い事だろ」

千兵衛さんが真選組でうまくやってるのか、なんだかんだでちょっと気になっていた銀さんが彼に現状を尋ねると若干嬉しそうな千兵衛さんからはこんな言葉達が返ってくる。

「それにしてもパチンコで随分稼いでたな。何時間居たよ？」

ある程度それぞれの生活に関する話題で盛り上がる中、長谷川さんが話題を変える。

「何時間って……一時間も居なかったと思うけど」

「一時間足らずであそこまで稼いだってのかよ!？」

「冗談キツイぜ。っつーか元金はどうしたよ？　ゴリラから借りたのか？」

「あれは元から持ってた金だ」

「あれ、兄ちゃん辻斬りやってたんじゃなかったっけ？」

「ひよっとして追い剥ぎもしてたの、お前？」

「ずっと人斬ってたら頭がおかしくなりそうだったから、気分転換できるものが欲しいなーって思ってたよ。」

あ、でも少しだけだからね？　財布の中身全部奪うような事はしてねーよ。これだけは神に誓っても良い、うん」

千兵衛さんがどうやってお金を手に入れたのかで話が盛り上がっている

「で、その金で気まぐれに宝くじ買ったなら特等当たって、その金でゲームとか買って……」

彼の口から驚愕の言葉が飛び出した。

その言葉を聞き、次から次に甘い物を注文して食していた銀さんやだいが食べ終えてのんびり会話を楽しんでいた長谷川さんが全ての動きを止めた。

「え、ちよつと待って。今なんて？」

「だから気まぐれに買った宝くじが当たったって言ったの」

銀さんが恐る恐る目の前に居るこの男に確認するが彼が嘘を吐いている様子は一切無い。

「じ、じゃあなんでパチンコなんかしてたんだ？」

宝くじの特等が当たったのなら相当な量のお金を所有している筈。そんなにお金があるなら、パチンコなどする必要無かったのではないか？

長谷川さんは驚くのを堪えつつ千兵衛さんに問うと

「今の俺にはこの剣とゲームとか本とかの娯楽と居場所があればそれで充分なんだよ。過ぎた大金などいらん。」

とは言つものの、必要だと思つものはすでに全部買っちゃったから、後は適当に遊んで減らそうと思つて適当にパチンコをしてたんだが……逆に増えちゃったよ」

千兵衛さんはなんで今日パチンコしていたのかを告げた。要するにこの男、金の使い方知らないのだ。

なのにやたら運が良いせいで予想以上のお金が集まって困っていたのだから。

「そんなに金使いたかつたら一緒にキャバクラ行かね？」

「ドンペリとか頼みまくつたらスツゲー減るぜ」

千兵衛さんの金を減らすと言つ名目でド派手に遊ぶ為に、ここぞとばかりに銀さんと長谷川さんが金の使い方を教える。

「キャバクラは却下!!」

しかし女性に、特に美女に慣れてない千兵衛さんは先日気絶した事もあって必死になって彼等の意見を退けた。

「じゃあ俺等に金くれや」

「随分図々しいな、お前……」

「良いじゃねーか、俺達は楽しんで儲かるしお前は金が減る。一石二鳥だぜ」

「お前等仕事しろ。って、仕事サボってパチンコ行ってた奴が言える台詞じゃねーか……」

「恩を仇で返す気がオラア!？」

「今のお前恩人じゃなくてただのチンピラだぞ」

ならばと銀さんは千兵衛さんに金をくれと頼む、と言うより脅すと言った方が的確かもしれない、がその度に千兵衛さんは呆れながら注意するが

「ま、助けてもらったのは事実だし別に良いけどな」

お金をあげるのは構わないようだ。

「それならさ、兄ちゃんも一緒に賭場行かね？」

「……なんで？」

「なんでってお前のその強運を俺達にも分けてもらおっかなーと思つてよ」

働く気は無いくせに何処までも強欲な銀さんと長谷川さんにすっかり呆れた千兵衛さんだった。

かぶき町某所にある賭場。

スロット、ルーレット、ポーカー、丁半など様々な種類のゲームで遊べるあたり賭場としてはそこそこ整っているようだ。

「丁か半か、さあ、張った張った!!」

煌びやかな内装の中で彼等が選んだのは丁半のようだ。

「丁半とは二個のサイコロを振って、そのサイコロの目の合計が『丁』か『半』かを勝負する賭博の事を指す。『丁』は偶数、『半』は奇数である。」

二個のサイコロとツボと言う手で持てるぐらいの大きさの籠を持ったツボ振りと呼ばれる男がサイコロを入れたツボをバンと地面に押さえながら大きな声で問う。

「先生、どつちだと思つ？」

「いや先生って……」

「早くしろ柿ピー。怪しまれちまう」

「……んじゃ丁で」

「……ちよおオオオオオ!!」

過去に宝くじで特等を当て、パチンコで大儲けする強運の持ち主の思つた方に賭ける銀さんと長谷川さん。

サイコロが隠されたツボを持つツボ振りがツボを持ち上げ、サイコロの目が露になる。

「グニの半だ!!」

それぞれのサイコロの出目は二と五。足し合わせると七で奇数で半、つまり二人の賭けは外れたのだ。

「ちよつとちよつと先生! しつかりしてよ!」

「落ち着け長谷川さん。先生の勘が常に当たるとは限らねエ。もう少し様子を見ようじゃねーか」

「そ、そうだな」

外れた事を千兵衛さんのせいにする長谷川さんを銀さんは制止させる。

まだ賭けは始まったばかりだ。それに彼は貴重なお金を提供してくれるスポンサー、無下には扱えない。

がしかし、やる毎にお金は減る一方で増える兆しは全く無い。

サンゾロの丁! シソウの半! グニの半! シロクの丁!

自分が賭けたものが出るよう必死に願いながら、その期待を裏切

るようなツボ振りのこの声を聞いた時の脱力感はもう最悪である。
「オイ柿ピー！ もうちよつと本気出せ！ こっちは生活がかかっ
てるんだぞ！」

丁半賭場から離れたバーっぽいところで当たらない事を千兵衛さ
んのせいにして銀さんが文句を言う。

「いや、本気出せって言われても……。っつかこんなので生活かけ
るなよ」

こんなものは完全な運だ。本気を出そうが出すまいが、当たらな
いものは当たらないのだ。

「そつだそつだ、金返せ！」

「それ、俺の台詞なんだけど」

長谷川さんも銀さんと同じように文句を言うが、彼等が使う金は
元々は千兵衛さんのものである。

文句は言つても、文句を言われる筋合など無い。千兵衛さんは怒
りを堪えつつ注意する。

「あ、そつだ長谷川さん。今度は柿ピーが選んだものとは違うもの
を選ぶつてのはどうだ？」

「いや、それじゃあ今までと変わらないと思う」

ここで作戦変更を思いついた銀さんだが、それでは今までと同じ
だと長谷川さんは冷静に判断する。

「だったら、どっちかが半でどっちかが丁にするつてのはどうよ？
これなら確実にどっちかが当たるだろ」

博打をしているのは銀さんと長谷川さんのちようど二人。二人で
丁と半の両方を押さえる方法はどうかと千兵衛さんが進言する。

「馬鹿言つな柿ピー。それじゃああんま稼げねーだろーが」

あくまで金儲けが目的の銀さんは千兵衛さんに不服を申し立てると
「当たらないよりは数倍マシだろ。……。っつかさ、俺が稼いだ方
が良くね？」

千兵衛さんは銀さんに一言告げてからふと思いついた案を述べる。
「なんで金持つててるためーが金稼がないといけねーんだよ。金の無

い俺達に対するあてつけか、コノヤロー！」

「金を減らしたいと言ったのも事実だが、金を捨てたいだなんて言
った記憶は無いんでな」

「ちよつと待てコラア！ それって何、俺達が金を使うのは捨てる
事と同じってか！？」

「そう聞こえなかつたか銀髪？ 俺は素直に結果を述べたまでだ」

銀さんが宛らチンピラのように凄い表情で千兵衛さんに言い寄り、
千兵衛さんは涼しい表情で銀さんの言葉を受け流すと

「これ以上お前等に金を捨てられたらたまらねエ。

何処まで稼げるかは分からねーが、俺が稼いだ金でキャバクラで
ドンペリでも何でも好きに頼みやがれ。

とりあえず金渡しておくから適当に時間潰して、頃合見計らって
店の前で待っててくれ」

ム力つく言葉を吐いて彼等に背を向けながら手をひらひら振って
一人賭場へ乗り出した。

数時間後。言われた通り店の前で千兵衛さんを待つ銀さんと長谷
川さん。

「……遅エ。あいつ、まさか金持って逃げたんじゃ……」

銀さんが愚痴を零していると

「悪イ悪イ、ちよつとのめり込んじゃってよ……」

話題の人物が賭場から出て来た。

「遅エぞコノヤロー！ で、儲かったの？」

「まあな」

銀さんの質問に千兵衛さんが短い返事をしてると

「俺はキャバクラにはいかねーしドンペリがいくら高いのか分から
ねーけど、これくらいあれば足りるか？」

千兵衛さんは手元にあつた小切手に適当な金額を書いて銀さんと
長谷川さんに渡すと

「一、十、百、千、万、十万、百万、千万、一億……」

二人は落ち着いて数字の後に続くゼロの数を一つ一つ数える。

お……億うううううう！？ とんでもない単位に驚きを隠せない銀さんと長谷川さん。

「お、おとおおおお、億ってオイ！ 柿ピー！ これ全部使って良いの！？」

「良いよ」

「『良いよ』って！ 億だよ兄ちゃん！ 本当に良いの！？」

「良いつつつてんだろ。この件に関しては二言なんて無エよ」

「の、残ったらどうすりゃ良いの、これ！？」

「二人で仲良く分けて借金返済なり何なり好きに使ってくれや。返さなくて良いよ、じゃあな」

なかなかお目にかかれない大金を前にして動転する二人に対し、千兵衛さんは特に動じる様子も無く平然に受け答えするとまた彼等に手をひらひらと振ってさっさと屯所に帰ってしまった。

「ギャンブルの女神様ってああ言う奴を好むのか……」

長谷川さんがその場を去った千兵衛さん感嘆してそんな言葉を吐いた後、彼等は予定通りキャバクラと言う名のぼったくりバーに向かった。

ちなみにその数日後、彼が行った賭場は潰れたらしい。

その日の夜。

「ふわあ……。あー、眠てー……」

大きな欠伸をしながら街の中を見回りする千兵衛さん。

「適当に終わらせてとつとと帰りやしょうぜい」

「それもそうですね……。ん？」

一緒に同行する沖田隊長と一緒に彼がのんびり見回りしていると、一人の良い歳した男が何か思い詰めた表情でふらふらと道を歩いて

いるのを見つける。

「……どうかしやしたか？」

「いや……ちょっと気になる事があるので別行動させてもらって良いですか？」

「好きにしるイ」

「了解」

その男が気になった千兵衛さんは沖田さんと別れ一人で彼を追った。

良い歳した男が千兵衛さんに尾行されているにも気付かずふらふらと街を歩いていると、道の向こうから豪華な車が真っ直ぐこっちに向かって進んできた。

豪華な車がある程度近付いてくるのを確認した男は突然車の前に飛び出した。自殺するつもりなのだろう。

「お、オイ……！！」

間に合わない……。そう思いつつも自分も巻き込まれるのを覚悟して男に近づく千兵衛さん。

その車の運転手も目の前に突如出現した障害物にぶつからないよう慌ててブレーキを深く踏むが、車と男の距離があまりにも近過ぎる。

ぶつかる　　！！

千兵衛さんが、車の運転手が、そう思ったその時、青緑色の髪を一本結びにして黒の忍び装束を着た可愛い女の子が車に轢かれかけた男を救い出した。

「だ、大丈夫ですか!？」

無事に車を止めてから男を心配し車から降りた運転手が男に駆け寄ると

「大丈夫ですよ!」

一瞬のうちに男を助け出した女の子がそう返事する。

「あやうく事故になりそうなところをどうもありがとうございます

た。

では、仕事があるのでこれで失礼させて頂きます。本当に申し訳ありませんでした」

「いえいえ……」

豪華な車の運転手は頭を深々と下げて丁寧に謝罪すると車に乗って何処かへ向かっていった。

（この子は確かスナックお登勢で働いていた……。ま、今はどうでも良いか）

「その娘。手を煩わせてしまつてすまなかつたな」

「そんな、当然の事をしたままです」

「後はお兄さんに任せてとつと帰りな。子どもが一人で出歩く時間じゃないぜ」

「分かりました、後の事はお願いします！」

千兵衛さんは男を救つた娘の事を気にしつつも警察と言う立場でお礼の言葉を告げると、娘は千兵衛さんの言葉を聞き入れ一瞬のうちに消えてしまった。

「……場所を変えるか」

依然として覇気の無い男を見て頭を千兵衛さんは掻いて溜め息を吐きながら呟く。

自殺未遂の男を連れて千兵衛さんがやって来たのはスナックお登勢。

「いらつしやい」

「あ、千兵衛さん！」

千兵衛さん達が店の中に入るとお登勢さんが柔らかい笑顔で客を歓迎し、店で手伝っていた冬樹が見覚えのある男に声をかけて駆け寄る。

「なんだい、アンタ、この子の知り合いだったのかい？」

名前を知っていて親しそうな冬樹の様子を見てお登勢さんはカウンターの向こう側から話しかける。

自分が元辻斬りだと言う事は断じて言えないので「ええまあ、そんな感じですよ」と千兵衛さんは少しだけ戸惑いながら適当に相槌を打ってから

「……しっかし、なんでお前等がここに居るんだ？」

空いている席に自分と連れて来た男を座らせながら冬樹達が何故ここに居るのかを尋ねる。

「お登勢さんのお店で働かせてもらっているんです。ここに來てから行くあてもお金も無かったので……」

「オメー等も大変だな」

「それじゃあ、前来た時に居たお前と同じくらいの歳の女の子達もそうなのか？」

「ええ、まあ……」

「ホラホラ、いつまでもくっちゃべってないで客から注文とってきな。給料減らすよ」

冬樹と千兵衛さんが何時までも楽しそうに話しているのを見たお登勢さんからそのような注意が飛んで來たので、冬樹は「は、はい！」と言って慌てて店に來ていた客の下に走っていった。

「アイツの仕事の邪魔をしちまったみたいだな」

「気にしなくて良いよ」

千兵衛さんの言葉を聞いてお登勢さんはまんざらでもない表情で返す。

「あ、名乗るのが遅れましたね。俺、桜田 千兵衛と言います」

「ああ、あたし、このスナックのママのお登勢。よろしく、元辻斬りさん？」

さつき冬樹に名前を呼ばれた時にピンと來たのか、お登勢さんが千兵衛さんの素性を見抜きそう告げると千兵衛さんは「あらー、バレちったよ」と言っただけで惚けた。

「ま、アンタが元辻斬りだろうがどうだろうが、今となってはどうかって良いけどねエ。」

ところで、アンタと一緒に居るその男はいったい誰だい？」

「ああ、この人？ この人はさつき偶然会った自殺未遂の男ですよ。ある程度リラックスした状態で事情聴取しようと思ってここに連れて来た次第です。」

今の俺は見ての通り真選組の隊士なので」

「なるほど」

「つつー訳でお登勢さん、お酒頼みます」

あらかた話が済んだところで千兵衛さんがここに来た本来の用件を告げると「はいよ」とお登勢さんは返事し、二人の客の前に氷とお酒の入ったグラスが出した。

グラスの中の氷がグラスに当たりカランと音を立てる。

「さて、おっさん。なんであんな馬鹿げた真似をしたんだ？」

千兵衛さんが男を問い詰める。

「……あれしかなかったんです。私にできる事と言ったら、あれしかなかったんです。」

私、ある会社の社長なんですよ。そんなに大きい会社じゃないんですが、大勢の社員が居る楽しい会社で……。」

それが最近、取引先との商売が上手くいかなくて、さらには銀行からの援助も断たれ、多額の借金を負ってしまったんです……。」

「自分を慕う社員を路頭に迷わせる訳にはいかない、自分の愛する家族を苦しめる訳にはいかない。」

その為に自分に多額の保険金をかけて自殺しようとした、と」

男の事情を聞いたお登勢さんは自殺をしようとした理由を推測して語ると「……はい」と男は弱弱しい小さな声で返事をした。

似ているな、あの頃の俺に。」

誰にも頼る事のできない絶望的な状況の中、たった一人で様々なものを背負う目の前の男に元辻斬りは少し前の己の姿を照らし合わせる。

「お登勢さん、どうにかなりませんか？」

「どうにかって言われてもねエ……。いくら必要なんだい？」

「しめて二千万です」

「何時まで？」

「明日です……」

お登勢さんと千兵衛さんは男から何時までにくら用意する必要があるのかを聞き出す。

「明日までに二十万はちと無理だね」

お登勢さんも予想以上の高額の借金にお手上げのようだ。

話を振った千兵衛さんと言うと控えめな声量で他人事みたいに「ですよー……、と受け答える。

「そう言うアンタはどうなんだい？」

「元辻斬りの俺なんかそんな大金、ある訳無いでしょ？」

無いとは思うものの一応念の為にお登勢さんが千兵衛さんにお金はないのかと尋ねると、千兵衛さんは苦笑しながらごく当たり前の事を言っ返すのでそれもそうだね、とお登勢さんは諦めたように呟いた。

「本当は自殺なんて馬鹿げた真似させたくねーんだが、事情も事情だし、これ以上できる事も無さそうなんでそろそろおいとまさせていただきますね。」

一応俺にも仕事があるんで。お登勢さん、ここに俺とそいつの分の勘定置いときますねー」

冷たい言葉を吐き捨て、千兵衛さんはカウンターの上に紙切れを置いて立ち上がると

「おつりはどうするんだい？」

「そいつに回して好きなだけ飲ませてやってくれや。元辻斬りからの、ささやかなプレゼントよ」

お登勢さんの問い掛けにそう返して手をひらひらと振りながらさつさと店から出て行ってしまった。

一人残された男を黙って見守るお登勢さんが徐に彼が置いて行った紙切れを手元に寄せてそれが何なのか確認してから男にその紙切れを渡す。

「はいよ。さっきのお客さんが言っていたようにそれで飲みたけり

「や飲みな」

男はお登勢さんからその紙切れを受け取ると目を大きく見開いた。その紙切れ……小切手には三の後に七つゼロが並んでいるのだ。

「……飲めませんよ。こんなお金じゃ……」

これだけあれば借金が無くなるどころかさらにおつりが来る。

先程の人物にそれだけのお金が本当にあつたのかは不明だが、これ以外に頼れるものなんて男にはもう無い。

男の歪んだ視界には、その紙切れに書かれている数よりさらに多くゼロが並んでいるように見えた。

恩返しとして、その男から十倍になったお金が帰って来て千兵衛さんが四つん這いになって落ち込む事になるのは数ヶ月先の話。

強運の男（後書き）

どーも、白黒仮面です。

前書きでは誤字の注意をしましたが、作中にもし誤字・脱字ありましたら遠慮無く指摘して下さい。
なるべく注意してはいますが、作者も人間なんで当然ミスしますから。

今回は千兵衛さんのお金に関するお話。

人とは関われなかった筈の千兵衛さんがいったいどうやってお金を手に入れて、ゲームを購入したのか？

よくよく考えたらおかしいその部分に今回はスポットを当てました。

千兵衛さんはかなりツイている人なのです。

それでは次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5804r/>

ケロロ軍曹&銀魂 新訳 世界を超えた大騒動 であります！

2011年11月10日03時16分発行